

舊幕府御秘藏碁戦

795.
H633k2
W



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

名人本因坊秀哉謹評

雀巢幕府御秘藏碁戰

東京大阪屋號發行
斯文館

795
H633k2

天保十四年癸卯
閏九月二十七日
首將 秀策
先着 左一郎

舊幕府御秘藏基戰 縮寫

第二號



寄贈
瀨越田基文庫殿

617194

795
H633k2

舊幕府御秘藏碁戰 縮寫

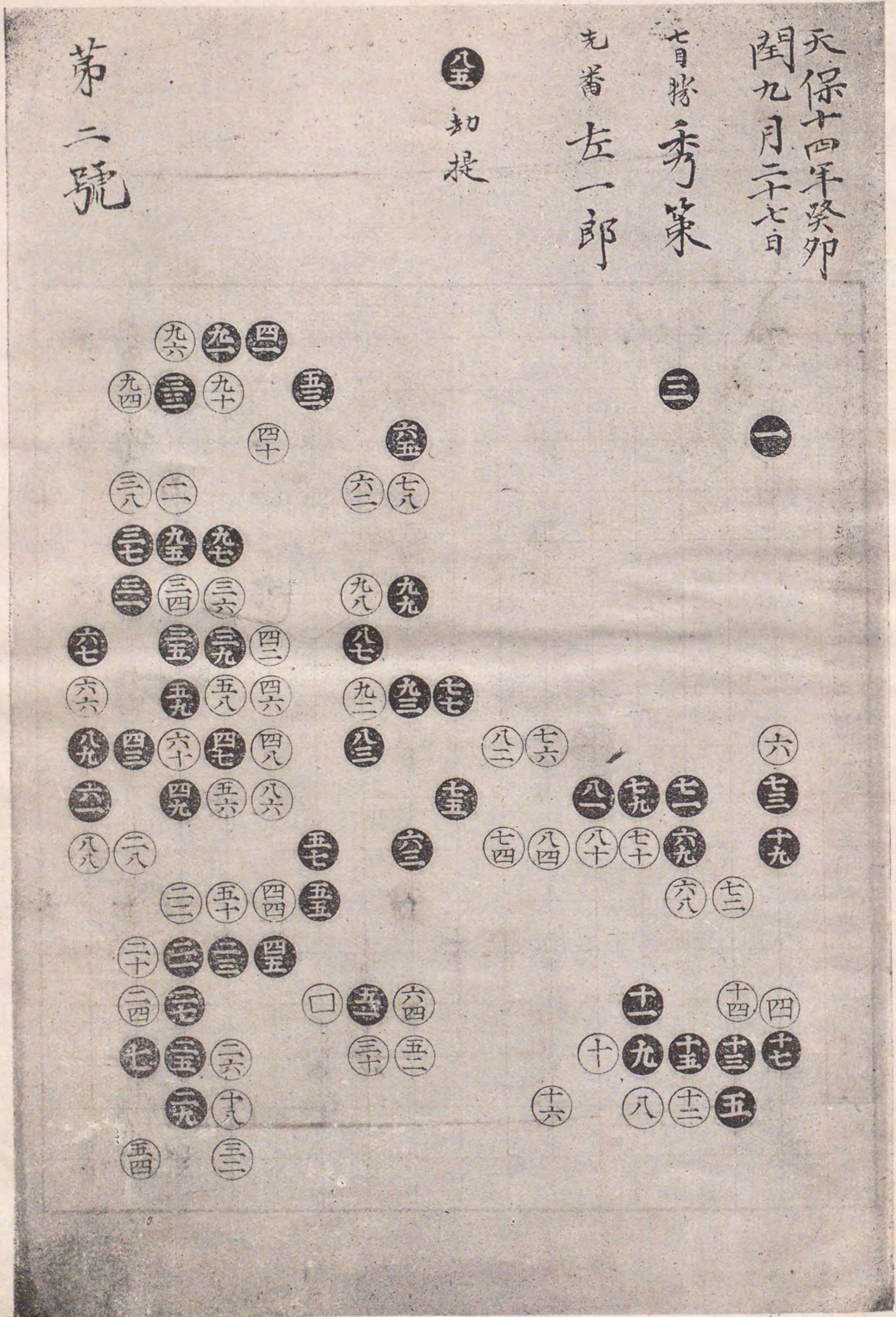
天保十四年癸卯
閏九月二十七日

首將 秀策

先番 左一郎

八五 劫提

第二號



贈
瀨越田基文庫

617194



人名因坊秀哉

はしがき

本書は敢て古人打碁の是非得失を批評するを以て目的としたるに非ずして、専ら布陣及戰略の變遷進化の迹を尋ぬるを以て主眼とせるものなり。其收輯せる所のものは夫の有名なる本因坊丈和對服部因徹の名人爭碁を始めとして、某貴顯の秘藏に係る碁聖秀策(始め桑原と稱し後安田の本姓に復す)約百七十局の打碁中、其の幾十局に過ぎずと雖も、名人本因坊秀哉先生が該博富瞻の識見と眼光、帷幄に徹する靈力とを以て、一手苟くもせず、最も謹嚴に最も緻密に多年研究の結果を公にせるものにして、一部の圍碁進化史とも謂ふべく、閑餘之を盤上に展開して、徐に翫味したらむには、嘗に舊幕府時代御城碁の如何に各名手が苦心慘愴、機略縱橫、畢世の全力を傾注せるかを知ると同時に如何に其の布陣及戰略の變遷

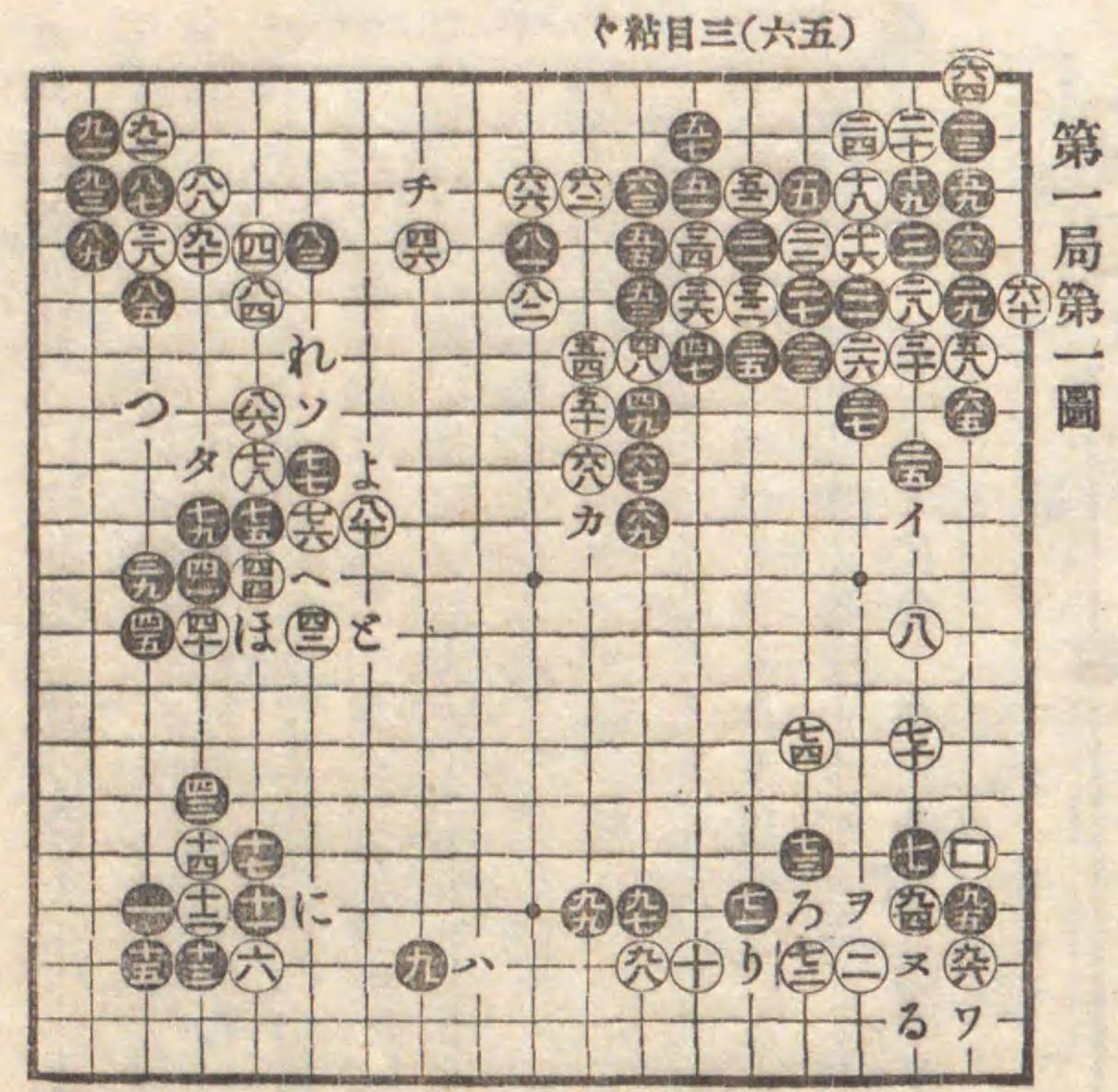
(弘化二年 二月廿四日)	準名人 十四世 上手	本因坊秀和 策	四六
(天保十四癸卯 九月廿七日)	中押勝 五先 四段	安田秀策 策	四七
(天保十四癸卯 八月廿三日)	七目勝 四段 五先 四段	中川順節 河喜田耕之助	四八
(天保十四癸卯 五月廿三日)	中押勝 五先 四段	安田秀策 岸本左一郎	四九
(天保十四癸卯 十月六日)	六目勝 四段 五先 四段	安田秀策 鶴岡三郎助	五〇
(弘化元年 二月五日)	五先 四段 中押勝 四段	安田秀策 真井徳次郎	五一
(天保十四癸卯 閏九月十一日)	二目勝 五先 四段	葛野忠左衛門 安田秀策	五二
(天保元年甲辰 三月十三日)	十五目勝 六段 先番 六段	水谷順策 安田秀策	五三
(天保十四癸卯 九月十四日)	三目勝 七段 先番 七段	太田秀藏 安田秀藏	五四
(弘化元年 五月八日)	中押勝 七段 先番 七段	安田秀策 安田秀策	五五
(天保十四癸卯 九月十四日)	中押勝 七段 先番 七段	安田秀策 安田秀策	五六
(弘化元年 五月八日)	中押勝 七段 先番 七段	安田秀策 安田秀策	五七

(弘化元年 二月十九日)	市 八段 先番 八段	本因坊秀和 策	六九
(弘化三年 十月廿一日)	中押勝 八段 先番 八段	本因坊秀和 安田秀策	七〇
(弘化三年 十月廿三日)	六目勝 八段 先番 八段	本因坊秀和 安田秀策	七一
(弘化三年 十月廿九日)	四目勝 八段 先番 八段	本因坊秀和 本因坊秀和	七二
(弘化三年 十月十七日)	三目勝 八段 先番 八段	本因坊秀和 本因坊秀和	七三
(弘化三年 十月廿九日)	十一目勝 六段 先番 六段	井上秀徹 井上秀徹	七四
(弘化三年 十二月晦日)	十目勝 六段 先番 六段	井上秀徹 井上秀徹	七五

舊幕府御秘藏碁戦

名人 本因坊秀哉謹評
二目勝 本因坊丈和
先番 井上立徹

▲第一圖黒心の變化 黒心と二間に挟んだからとて敢て悪いといふ譯ではないが、此場合黒(イ)に詰め、白(ろ)にこすむたるとき黒(ハ)に挟むも亦一策である▲白二三の趣向 白二三「してう」が利かぬのだから普通二三へのびるか、(一)へはねるのが、當り前であるが、譜の如く(二)へはね込んだのは所謂白の趣向で斯く打つたのである



▲黒(セ)の變化 黒(セ)は先づ一本(三三)におし、白が(三七)にはねた時黒(二七)におし、白が(二八)へ下

つて断ち切つたらば黒も亦(三)の處を切つて戦ふ手段もあるが譜の如く黒(三)と(五)の縁を絶たれたのは随分殿しい▲白(三)は捨石、振變る手段 白(三)とつけたのは即ち捨石で譜の如く(三)(三)(三)の三子を犠牲に供して自分の方を厚くしたのは洵に巧妙な手段で頗る面白い

▲黒(三)と(五) 扱て黒(三)へはね、而して白が(四)へふくられたとき黒が(五)へ曲つたのはドウ云ふものであらうか、大分白に働かれた姿ではあるまいか。黒(四)へはねる手で普通の如く(四)へのびて居ると自ら白の大模様が消える譯で、其時白若し(は)につげば黒向は(へ)におし、白(と)にのびたとき黒(チ)に打込む趣向もある。然るに譜の如く白に(四)へ孕れられ次いで(四)に圍はるゝに至つては白の形勢は頗る雄大ななるもので、此上(四七)の處を約へらるゝやうになつては白の模様は愈々厚壯になる譯であるからドウしても此處は最早や捨置くことは出来ない。ソコで黒が(四七)とおしたのでは是れは勢ひ止むことを得ぬのである▲白(五〇)の二段ばね面白し 白(五〇)の二段ばねも亦面白い。苦し白が(五〇)へ二段ばねせずして普通の如く(五)へのびると黒より(五〇)におされるからモウ一本のびねばならぬ。ソコで黒に先手で(五)の一子を攻めらるゝ結果を豫想して斯くの如く(五)へ二段ばねの手段に出たのであらう。斯くて黒白相交換して白が遂に先手を取つて(七〇)に先鞭を着けたのは如何にも巧妙なる打方である。扱て白(五〇)から黒(五)までの白兵戦中黒(五)のはねは蓋し見損じではあるまいか。譜の如く白に(六)へ並ばれては結局兩劫になつて圍中の黒は擒にされて了ふ。黒(五)の手で單に(六)へのび、白尙ほ(六)へ押しした時黒は(六)にのびて敵の動靜を窺ふ方が宜くはあるまいか。

てられるのが苦しい。左りとて此場合△印に受け次いで(あ)にかけついで居れば碁が遅れて了ふ。ソコで白が敵の思ひも寄らぬ地中に(六八)と一着を下して黒の動靜を窺つたのである。其結果、白が(七〇)と打つたのも亦妙手と謂はざるを得ぬ。事茲に至つては黒(七〇)のかけつぎは止むを得ぬ譯で、白は左上隅の一團がイザ危いといふ時には(△)と(△)此の二ツのあてを利かせる手段があつて十分に外部へ通出す血路が開けてあるから隅の白は樂々と生きて居るのである。乃ち先手を取つて(七二)と他の大場を打込みたる其手段の妙、到底尋常棋家の思ひも寄らざる所で古今の妙手と稱へらるゝ所以である。

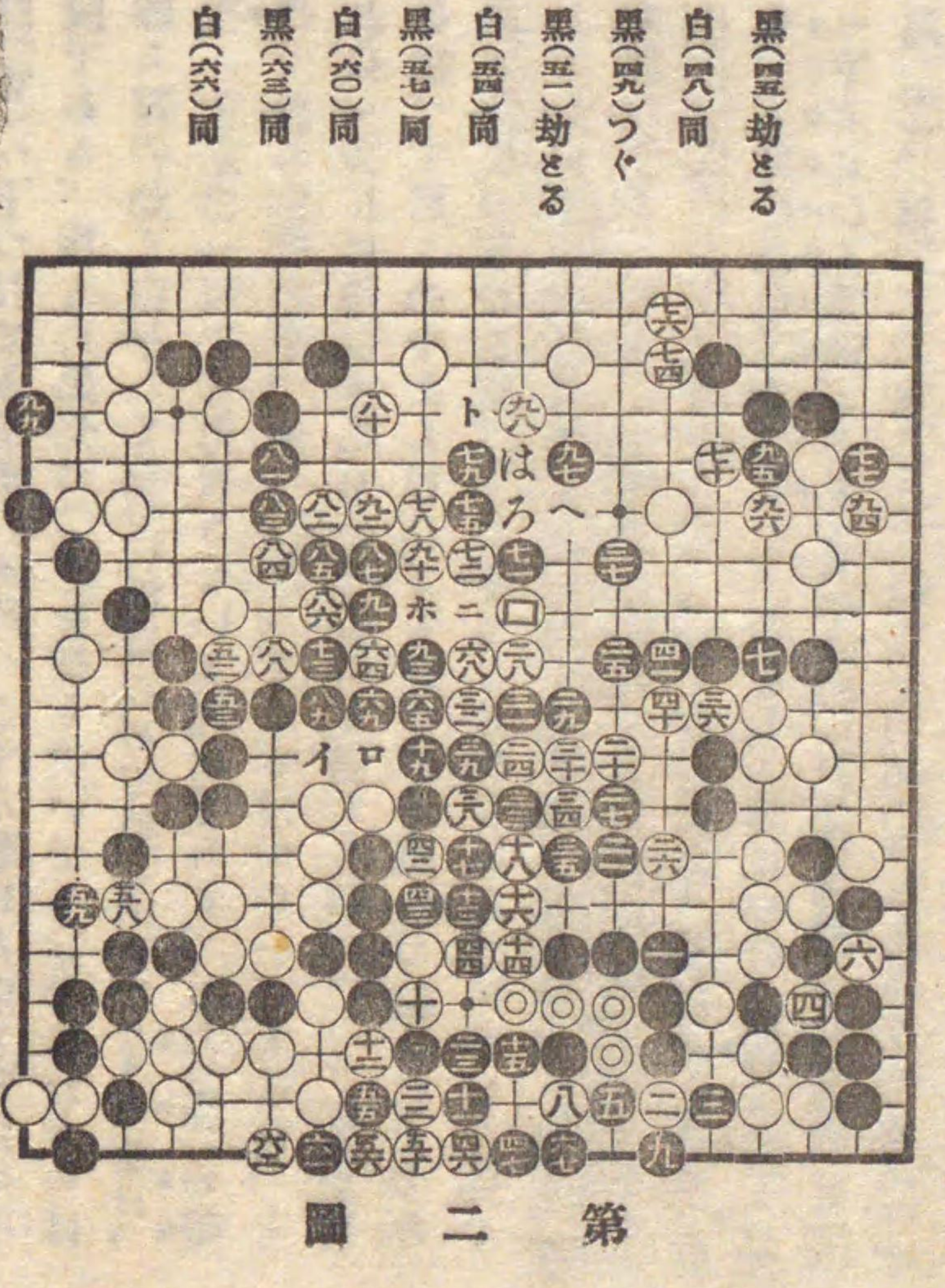
▲黒(七二)のかけつぎ 黒が若し(七二)のかけつぎをしなければドウなるかといふと白は先づ(一)につけて様子を見るだらう。其時黒(ト)へはね出せば白(ハ)、黒(ホ)、白(ニ)、黒(チ)に一子を取りたるとき白△印を切り、黒(ヲ)に突出し、白(セ)にのび、黒(ツ)におしたとき白(リ)を切る手順となる。ソコで黒が△印へはね込めば劫となるが、黒(ア)へ出る手で直ぐに△印へはね込んで攻め合へば(三)以下の白を擒にすることが出来る代りに先手で外側からビシ／＼と締めつけられて了ふ。さうなるをアベコベに(五)以下の黒が弱くなつて攻めらるゝことになるから(七)のかけつぎを閑却する譯には行かぬ。

▲白(八〇)も亦面白い 手である。黒が若し(カ)につげば(よ)に突出し、黒(タ)におさへた時白(れ)を切る手段である。これは黒が(七七)へ飛んだから斯うなつたのであるが、併し黒が(七七)へ飛んだのも大いに意味がある。といふのは若し白がすて置けば黒先づ(八二)へはね、白(三)に約へ、黒(六)にかけつぎたるべき白(三)の邊に應ずれば(三)の處を切らうといふ

趣向であつて白が(七)へ突當つたとき黒が(九)へのびたのも矢張り其意味を含んで居るのである、ソコで白が隅に頓著せず不斷は好まぬ手であるが此場合(八〇)へ曲つたのは臨機の處置と謂はざるを得ぬのである。

▲白(九六)の突出しは厳し 白(九三)のぞき次いで黒が(九五)へ突出したとき白も亦(九六)へ突出したのは随分殿しい手で、ドノ位先きが見えるのか、逆も尋常棋家の企て及ぶ所でない。其戰略如何は次の圖に就て説明しやう。

▲第二圖白、見合ひの戰略 白が(九三)のぞき次いで(九六)へ突出(第一圖参照)したのは詰り本圖に於ける如く悉に劫を打抜かうといふ意味を含んだ手であつて、黒が若し(七)につぐ手で、モウ一手を費やして白◎四子を擒にすれば(三)へ突出すべく、又黒が譜の如く(七)につがば◎◎四子を遁げ出さうとい



第二圖

を取り白(九)へのび、ソコで(三)の劫争となる手もあるが黒には之れに優る劫がないから結局右邊中間の白と振變る位のものだらう。夫れから又白が(七)へはねる手で(九)へのび、黒(は)へのび、白(七)へはねて三目を捨てても十分である。孰れにしても白の優勢たるを疑はぬ。

ふ所謂見合ひの趣向で、黒が(七)とついだから豫定の通り白は(一)と切り次いで(一〇)へあて、譜の如く打つたのである。何ぞ其手段の巧妙なるや白(三〇)と打ち尋いで(三)へ飛ばれるに至つては黒は大分働かれたと謂はねばならぬ。茲に注意すべきは白(四)(二六)(二八)とおしたのは黒の應手如何によつては白(三)へ劫に打込み黒が其一目を取つたとき白(四)について上下を駄目詰りにするといふ意味を含んで居ることである。併し既に白(三〇)と打ち(四)へ劫仕掛けに行く必要がないから(三)をあて、了つたことと了解するが宜い。

▲黒(七三)のふくれ 黒(七三)のふくれは此場合黒(七)一聯隊が餘程忙しい形勢に在るのだから一見甚だ閑手なるが如く思ふ者もあるかも知れぬけれども、併し此手を打たないと、白から(八九)へはね込まれ、黒(イ)、白(七)、黒(ロ)のつぎとなつたとき締められて了ふ恐れがある。ソコで止むことを得ず斯くの如く孕れたのであらう。尤も(七)へ孕れる手で黒(七)へはねて白の(六)のはね込みを凌ぐ手段がないでもない。それで白は(八六)へはね込む手がある。其結果は黒(七三)に切り、白亦(ろ)を切つたとき黒、假に(九三)へ突出すとせば白(七六)へはね、黒(七)へのび、白(は)におしたとき黒は(九〇)若くは(三)どちらを切つても(ホ)にあて、兩王手を喰ふから惜い哉切る手がない、先づ(へ)にふくれる位のものだらう。ソコで白(ト)へはねて二目を擒にしても十分の形勢である。其時黒が右邊に於ける中間の白にかよつて見た所が容易に取ることが出来るのみか左上方面の黒四子が薄弱であるから機を見て(イ)につがれる手筋になつて居るからドウも黒の方が具合が悪い。夫れから又黒が(五)へ突出さずして(は)へはねれば白(イ)につぎ、黒(九三)へ突出し、白(七六)へはね、黒(へ)に一子

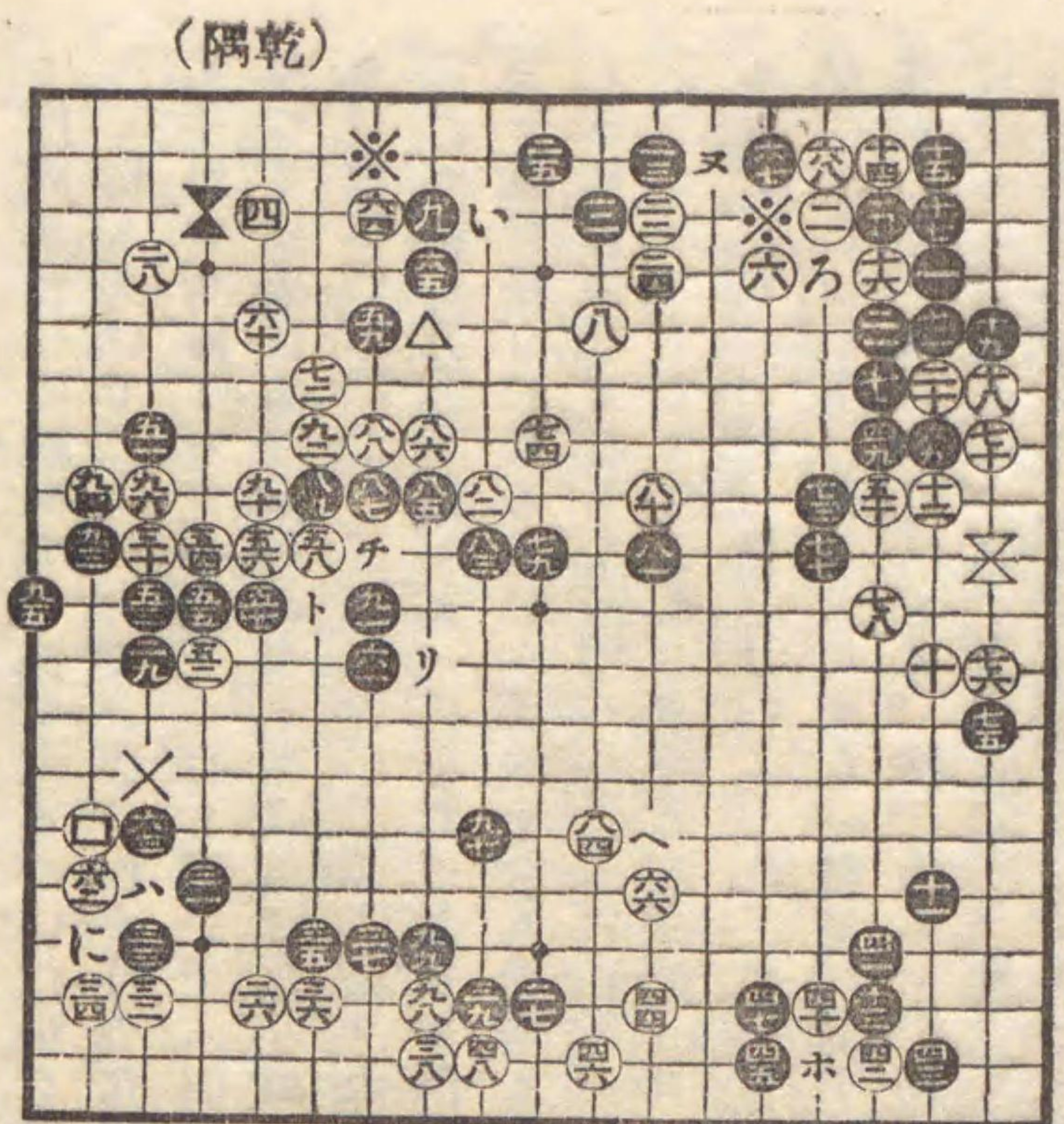
名人の對局

互 三代目日本因坊道悅
先 番山崎道策

(延寶八庚申五月五日より十日打切)

▲黑白の着手細評 黒(三)は所謂趣向で今日でも人に由つて打つこともあるがマア(四)の處へ打つて居るのが普通である。左すれば黒(三)と白(三)は同じ位地を占めた形で、(二)の黒は全然先着の利を獲て居ると斯う云ふ好い割合になるからである。白(一)は如何であらうか。後に(一)に詰めた時分に譜の如く「もくわき」に

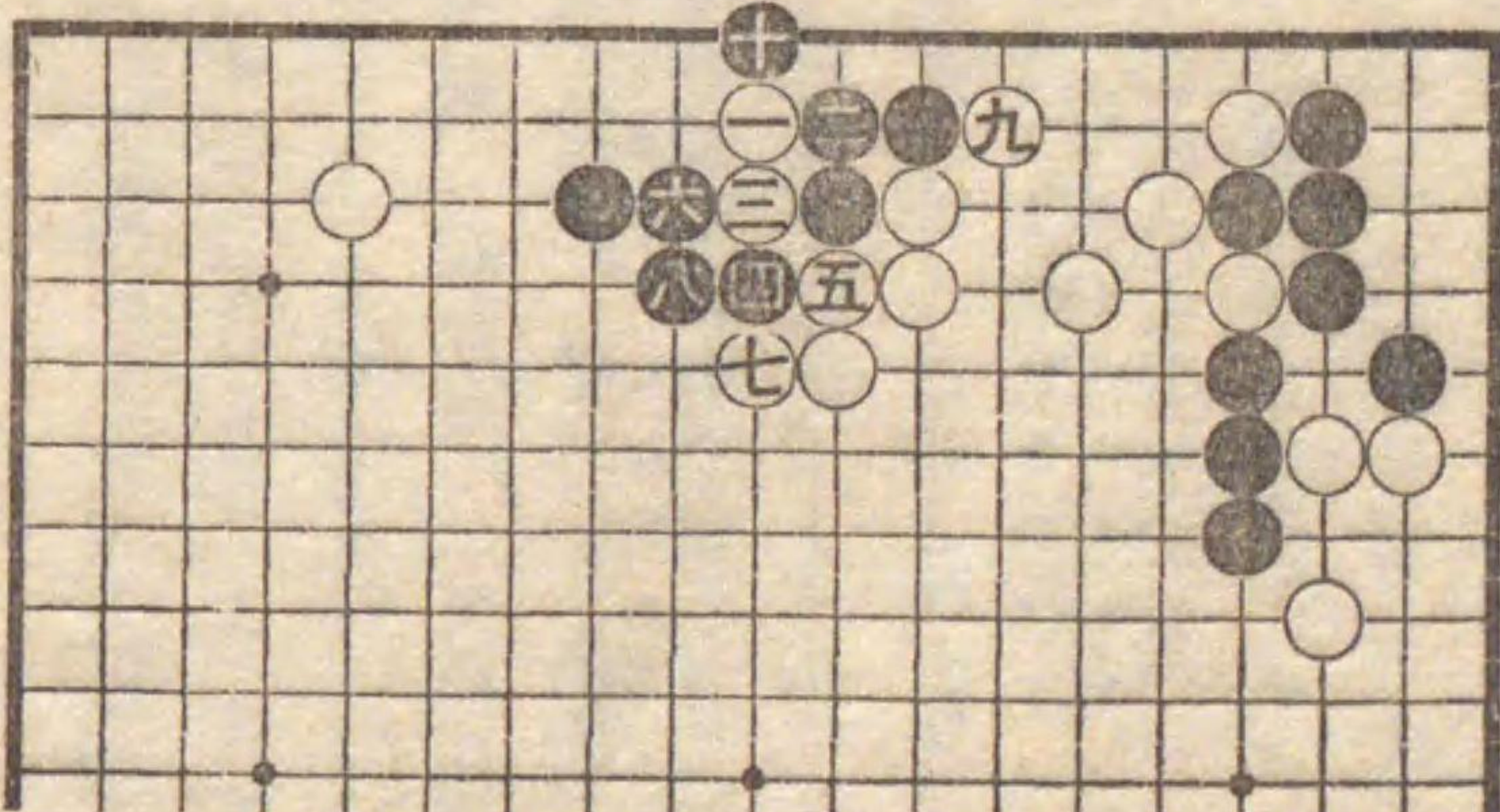
第三局(第一圖)



(偶坤)

あるより
は△印の
「もくし
た」に在
る方が間
合ひの廣
い丈け割
り合ひが
好いと云
ふのは今
日の定論
である▲
白(七)尖
みは即ち

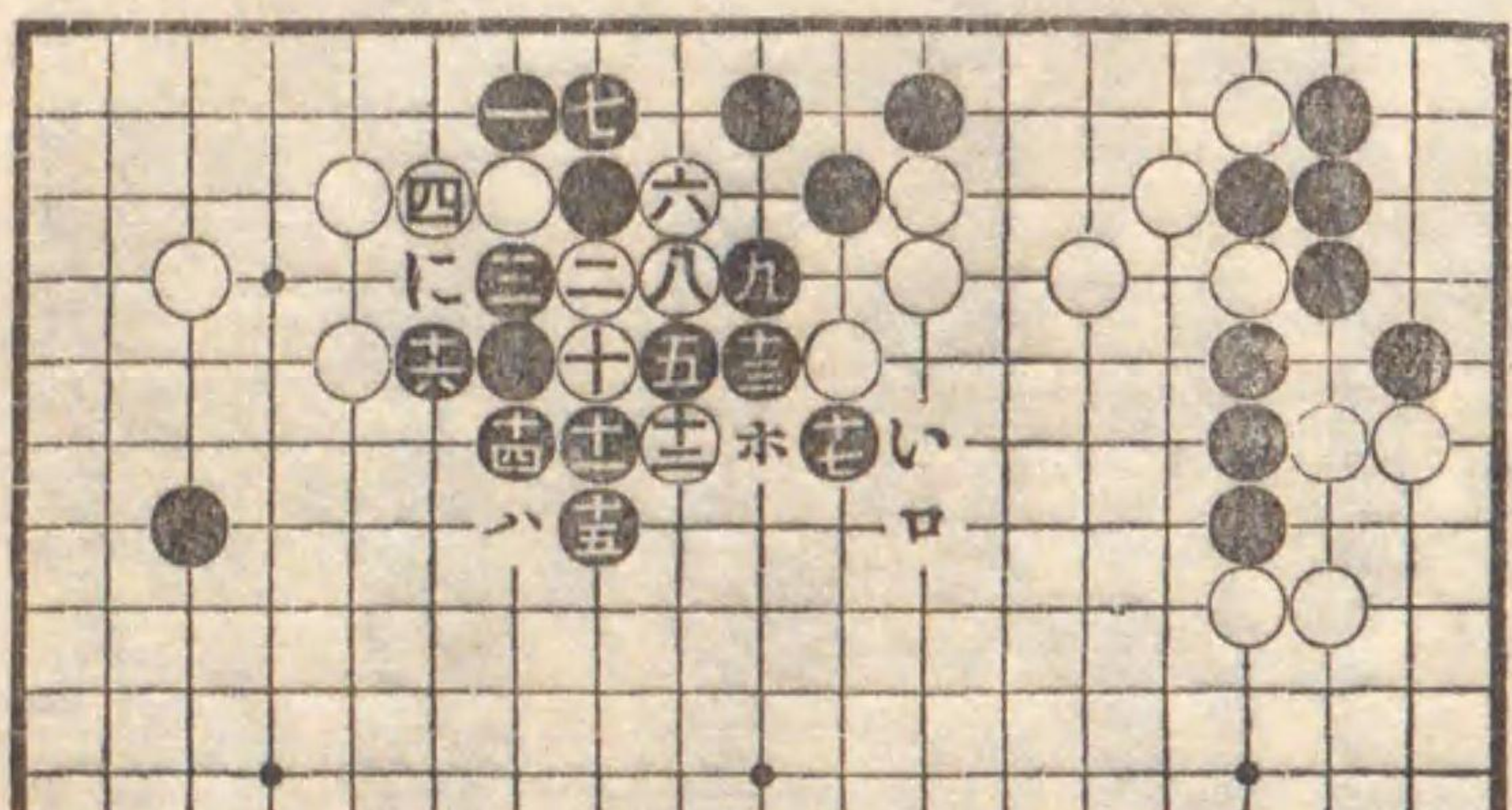
(甲) 圖一第



古風の定石で、今日では(ろ)に立つ方が宜いと云ふことになつて居る。それは(七)へ附越しの狙ひが利くからである▲白(二)は如何であらうか。是れも趣向で打つたのであらうけれども、當今に於ては明隅へ打つのが普通で、又一番大きい手であると云ふ定論になつて居る▲黒(五)は堅い手ではあるが甚だ緩いやうに思はれる。此に於て前へ戻つて説明する必要があると云ふのは前に白(六)の尖みは古風で(ろ)に立つが宜いと云つた。それは

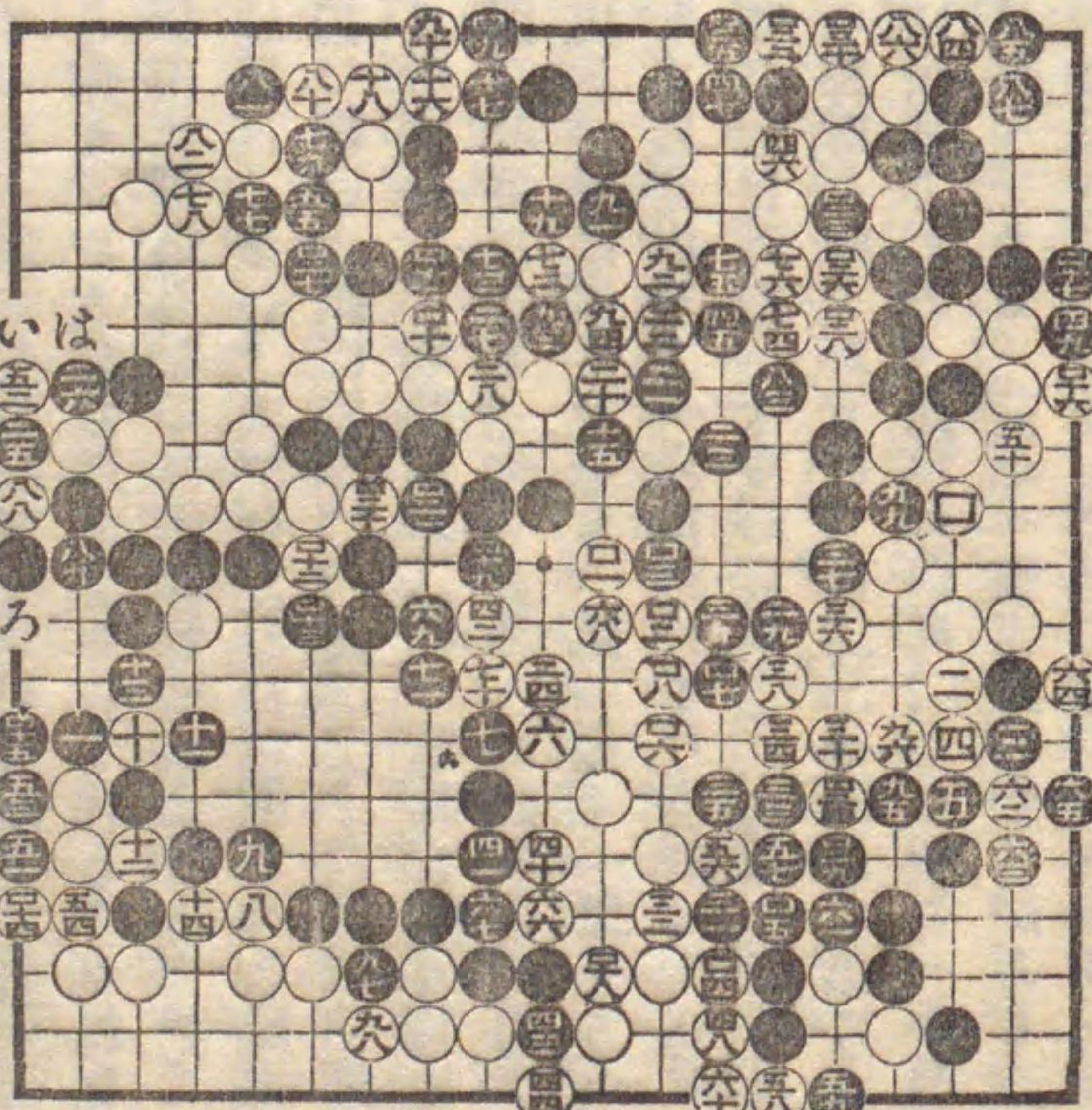
單に(七)へ附越が利く許りでなく、白(三)につけ、尋いで(三)に引いた時、白(六)に尖んで居るよりは(ろ)に在る方が格好が宜いではないか。扱て黒が(三五)へ掛粘いたのは若し此手を抜けば白から甲圖の如く(二)の捨石を打たれて外から締めつけられるのを嫌つて斯くの如く堅實に守つて居たのであらうけれども、併し白が締めつけて見た所が外部の石立が愚形になつて居るのが一番宜いのである。但し白が△印へ冠せて來た時には無論黒は(三五)へ掛粘いで居なければならぬ。黒(三七)も大場が良い處には違ひないが今日では(三)か(三八)、何れでも掛りが大きいと云ふことになつて居る▲白(三)は普通、(三)に應じ、黒(八)に押え、白(二)となるのが通形であるが、殊更に白が(三)に控えたのは詰り△印の打込を狙つたのである。ソコ

(乙) 圖一第



で黒も亦(三)へ尖みつけ、白(三)のとき其儘棄て置くこと×印へ打込まれる恐れがあるから其打込を凌ぎ(五)へ掛けたのである▲黒(三)は緩くはあるまいか、(五)へ煽る方が面白からん▲黒(五)の手で(ホ)に切るは俗手で、譜の如く打つ方が働いて居る譯である▲ハテナ白が(六)へ尖んで(六)へ打つたのはドウモ變な手だナ。位が低くて面白くない。此場合は先づ(四六)の手で(ハ)に飛ぶも一策である▲黒(五)へ打込み尋いで黒(五)に衝當り(五)へ突抜いて振變つたのは黒の方が利益である。と云ふのは坤隅の外部は鐵壁で寄りも付けん外勢を張つて居るが、(三)の白に對する防備としては僅に(三九)の一子あるのみで甚だ手薄い。が圖の如くなるると兩々相對して頗る嚴重の固めとなつて領域も出来るからである。但し黒(六)は緩い氣味がある。(ト)に押すと今度(チ)の跳ねが厳しくなるから白は矢張り(チ)へ延びて居なければなるまい。ソコで黒(リ)へ桂馬に打つ方が働きではあるまいか▲黒(六)は堅い手ではあるが左うすると(五九)の尖みが變になるナ。此手で×印へ跳ねたらドウか。尤も白には(六五)へ跳出す手がある。併し跳ね出した所が結局乙圖の如く黒が(七)へ跳ねる手になる。白が(一)に跳ねりやア黒は(ロ)へ二段跳ねをする。斯うなると白は随分窘められる。夫れから一方に黒は(ハ)の曲りを見て居ると

第二圖



云ふ利益もある。又黒が(七)へ跳ねる手で先づ(ハ)へ曲つて白が(二)に二目を取つた時に黒(ホ)へ突出して居ても悪くはないが、夫れよりは暫く(ハ)の曲りを保留して(二七)へ跳ねる方が面白い ▲黒(六七)

は旨い手だナ。それは白から(ヌ)に約へられると白には眼が出来て黒の方が却て攻められるから何とか應手をしなければならぬ。ソコで黒が(六七)に飛んで白の眼を奪つたのは旨い手だ。夫れから黒が(六九)へ突出し尋いで(七)に粘いたのは既に(六七)に飛ぶ時から豫定した手である。而して黒が既に(六七)へ飛んだ以上はアベコベに白から(七)の處へ突込まれると黒(ろ)に取り白×印の粘ぎとなつて(七)の取りが残る一方に隅の黒が眼を缺れる。夫を見越して居るから黒(六七)と打つたのは極く堅固で良い手である。黒が(七)へ跳ねたからは(七五)の手で×印へ置く筋はあるが夫は面白くないと見たナ。
▲第二圖、平穩の局 此碁は誠に無事な碁唯(五二)のつけは面白、要するに此碁は道策先生が壯年時代の碁で其後先生の技倆益々上達したのであると云ふことを附言して置く。

日連上人の激戦

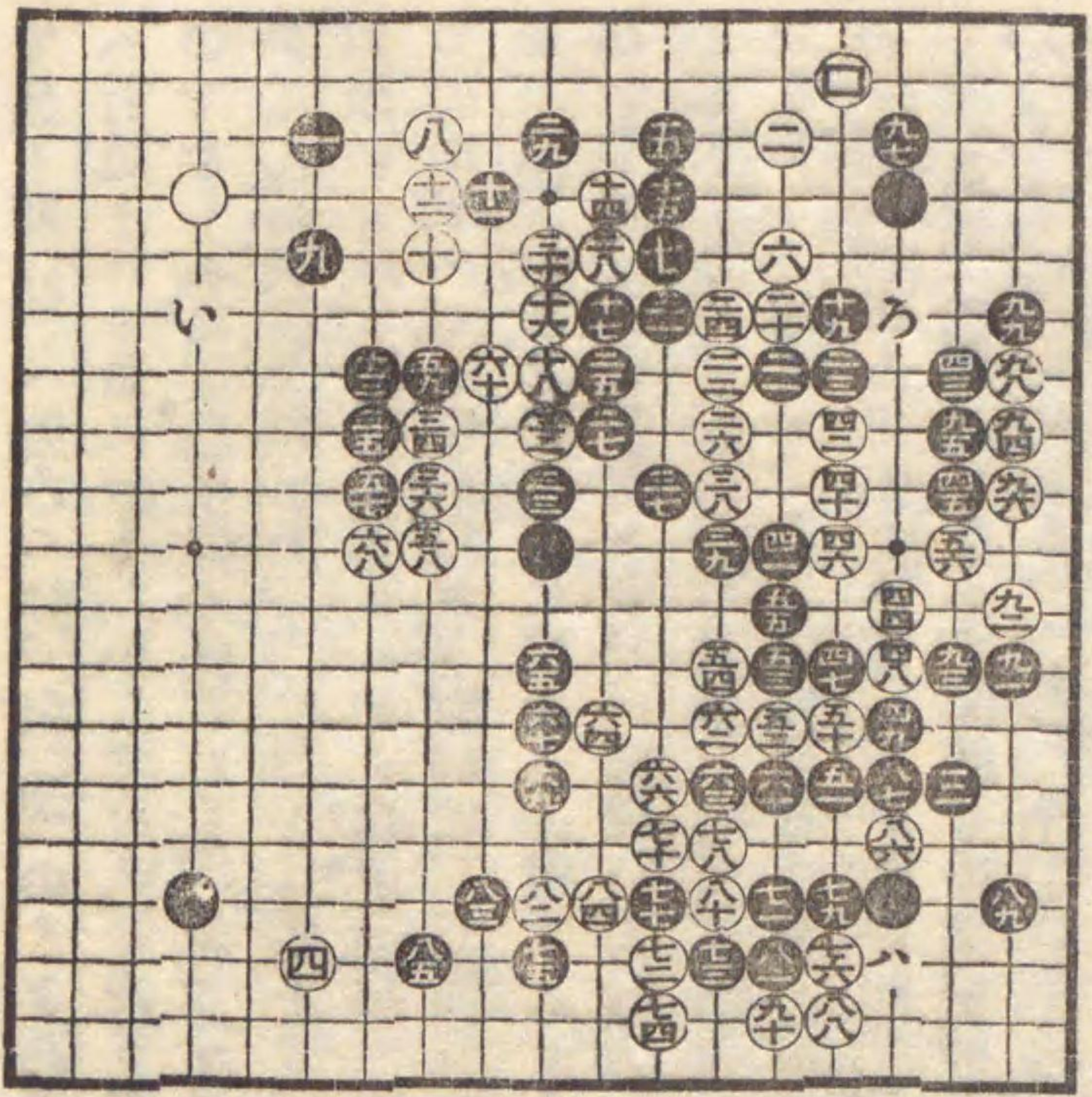
(三十二歳)

吉祥丸の奮闘

(十一歳、後、日期と改む)

(建長五年癸丑正月於松葉谷草庵)

▲第一圖 黑白の布石、法に適はず、黒が三子を置き、白が二子を敷き而して黒が先を以て打つたのは先づ二目の格で、ドウ云ふ譯で斯ふ云ふ碁を打つたものか、蓋し支那に於ては昔から斯う云ふ式で打つて居るから支那式に則つたのかも知れない。白が

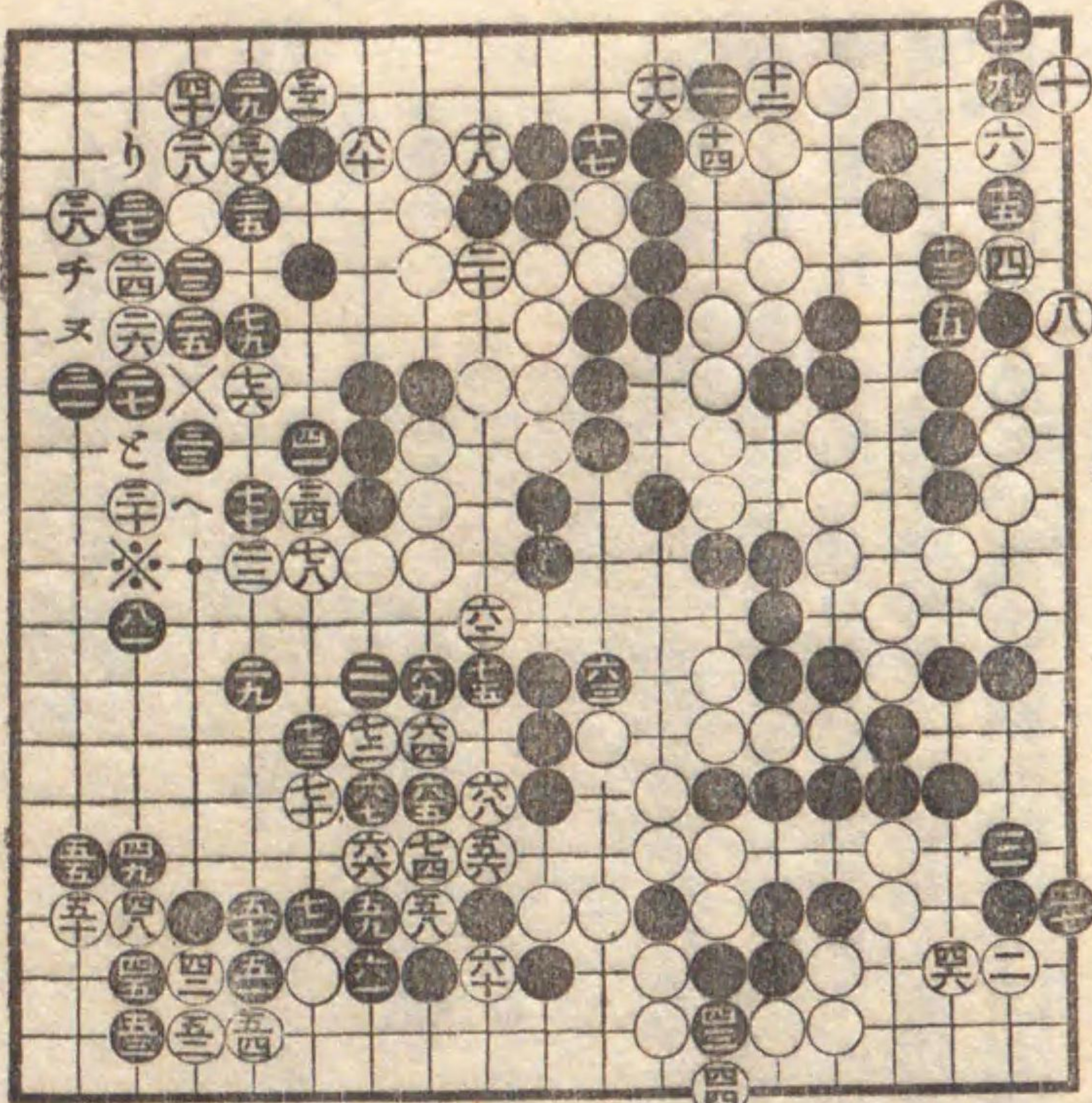


(三)と懸つたのは布石上甚だ其當を得ない。ナセかと云ふに目下即ち(二九)へ三間に挟まれたらドウカ。黒の(二)と(三九)との間合ひが釣合好くなると同時に白は挾撃される事になるのは面白く

ない。夫れよりは(い)に一間高に飛んで居るのが普通の布石である。黒(三)是れも又宜しくない。白が常軌を守らず(三)と懸つたるこそ幸ひなれ。何故に(二九)へ打つて自己の發展を謀りながら敵を挾撃する態度に出でなだらうか。白(四)是れ又無意味の着手である。(二九)の「もくした」に挟まれるのは白の最も苦痛を感すべき筈の處であるから黒が此好處を等閑に附して(三)と懸つたからは(三九)の處へ三間に開くか、左もなくば(ろ)の方面へ掛つて敵を攻める手段に出づべきである。黒(五)の一間挟みは(二)との間合ひが離れ過ぎるのみか、甚だ急に過ぎて宜しくない。矢張り(三九)へ三間に挟むが宜い。白(六)これは黒が(五)へ一間に挟んだから其釣合を取る爲めに打つたかドウかは知らないが、随分冒險の着手と謂はざるを得ない。ナセかと云ふに白は先づ(ろ)に冠せて自己の發展を謀りながら敵を攻むる好着點があるにも拘らずそれを捨置いて敵の繩張内に打込んだのは随分冒險的の打方である。黒(三)の煽りは面白くない。此場合(い)に包圍すべき處である。白(六)は甚だ緩い。試に黒(二)、白(三)、白(四)、黒(五)を無いものと假定せよ。其時白が(二六)へ桂馬に飛んだとすれば如何にも變な格好になる。先づ(五九)へつづけるのが筋である。黒(二七)の尖みつけは悪手である。圖の如く一路先きへ(二八)に延びられると自分が却て一步出遅れとなる許りではない。(二九)と(三)の味方が自然弱くなるから只(ロ)に飛んで自己を守りながら敵の動靜を窺ふが宜い。白(三三)へ跳ねて黒に(三三)へ粘られたのは失策である。此場合白は(三三)に切るべき筋である。白(三六)は俗手である。(五九)へ飛ぶ方が働きがある。白(四四)又悪し斯かる場合に一間飛んで黒に(四二)へ利かされるのは甚だ白の不利である。寧ろ(四二)へ跳ねるが宜しい。白(四四)も亦筋違ひで

ある。ナセかと云ふに譜の如く(四二)へ利かされて儲けられたのは白の爲めに甚だ不利であるからである。此場合は先づ(五九)へつづけるが宜い。黒(四九)は随分急激な手である。黒が好んで戦ひを求むるは怪我の基であるから斯様な處は穩に(五九)へ一間飛んで居る方が趣きもあり下の白にも響く譯である。黒(五九)の掛粘ぎは此場合(ハ)に切つて居なければならぬ。然るに白が(八六)に覗いて尋いで(八八)へ下つたのは何たる緩手ぞ。(八六)へ覗く手で(ハ)に粘りで攻合へば無論白の方が手数が多いから黒軍一隊を塵じにすることが出来る。之を逸したのは白の爲めに甚だ惜むべきである。

(第二圖)



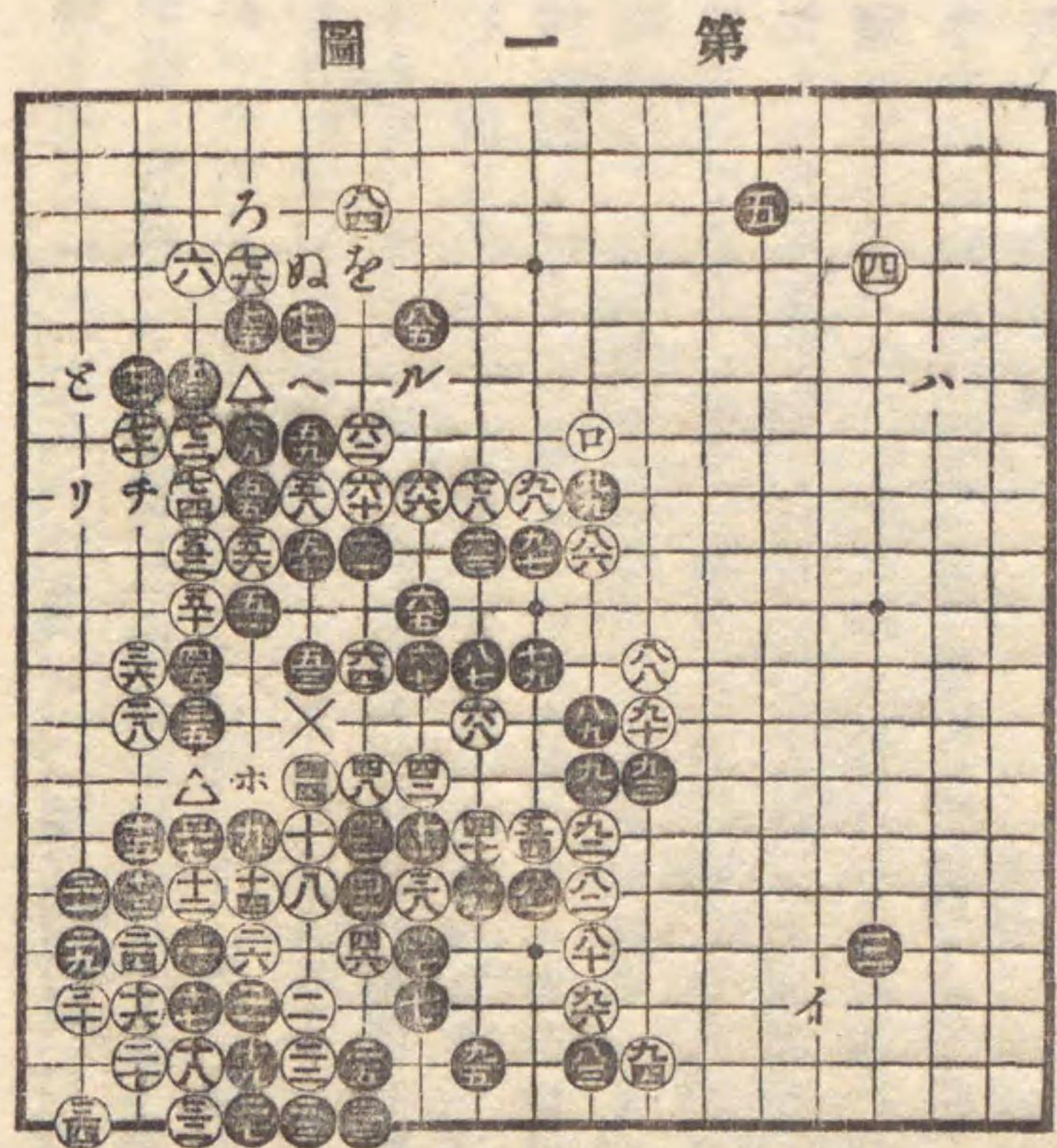
▲第二圖 黒(三)は(五九)の跳出しを防ぎ旁々打つた手では是非のない手である。黒(三九)は自分が一方に弱い味方を控えて居ながら斯くの如く敵を攻むる手段に出たのは所謂打ち過ぎである。此場合黒は(三三)に下つて居る方が宜い。其時白が若し×印を切らば黒(七六)へ跳ね、白(三三)に延びた時黒(ハ)につける筋がある。初

心者の爲めに其成行を示さんにソコで白が萬一(と)に曲らば黒(三七)の處を切り、白(三九)に跳ね、黒(チ)を切り、白(リ)に切り、黒(ぬ)に絞る白(三七)に粘いたとき黒(三三)に押へて白を絞る手段がある。斯くの如く白は(三七)の處を切られて絞られる手があるから×印を切る手はない。だから(三三)へ下つて居るが宜いと云ふのである。然るに黒が(三三)と打たれてから(三二)へ下つたのは甚だ危険である。此時白が(三三)へ亘つたのは是れ又極めて緩い。×印を切らば黒は應手に窮するであらう。次の黒が(四二)の手で×印へつづけるのが即ち働きである。然るに譜の如く黒が(四二)と押へたのは甚だ遠慮に過ぎたりと申さざるを得ぬ。之を要するに黒白共に緩手はあるが全體を通じて見ると中々の激戦奮闘でア、云ふ方々の碁としては洵に上出来で確に後世に傳はる丈の價値がある。

勝 武田信玄
兩雄車懸りの戦略
先 高阪彈正

(永祿九年丙子春於長遠寺)

▲第一 黑白概評 白(三)へ掛つたのは損の手で無論明隅へ打たねばならぬ。黒(三)も亦損である。(イ)に打つ方が宜い。黒(五)も不可である左上隅即ち明隅へ打つか或は(三七)へ一間飛ぶか何れか其一を擇ぶべきである。白(六)も宜しくない。斯くては全く黒と同じ形になつて先を譲つて居る丈け負けて居る割合である。白を持つては此邊で何とか趣向しなければならぬ。先づ

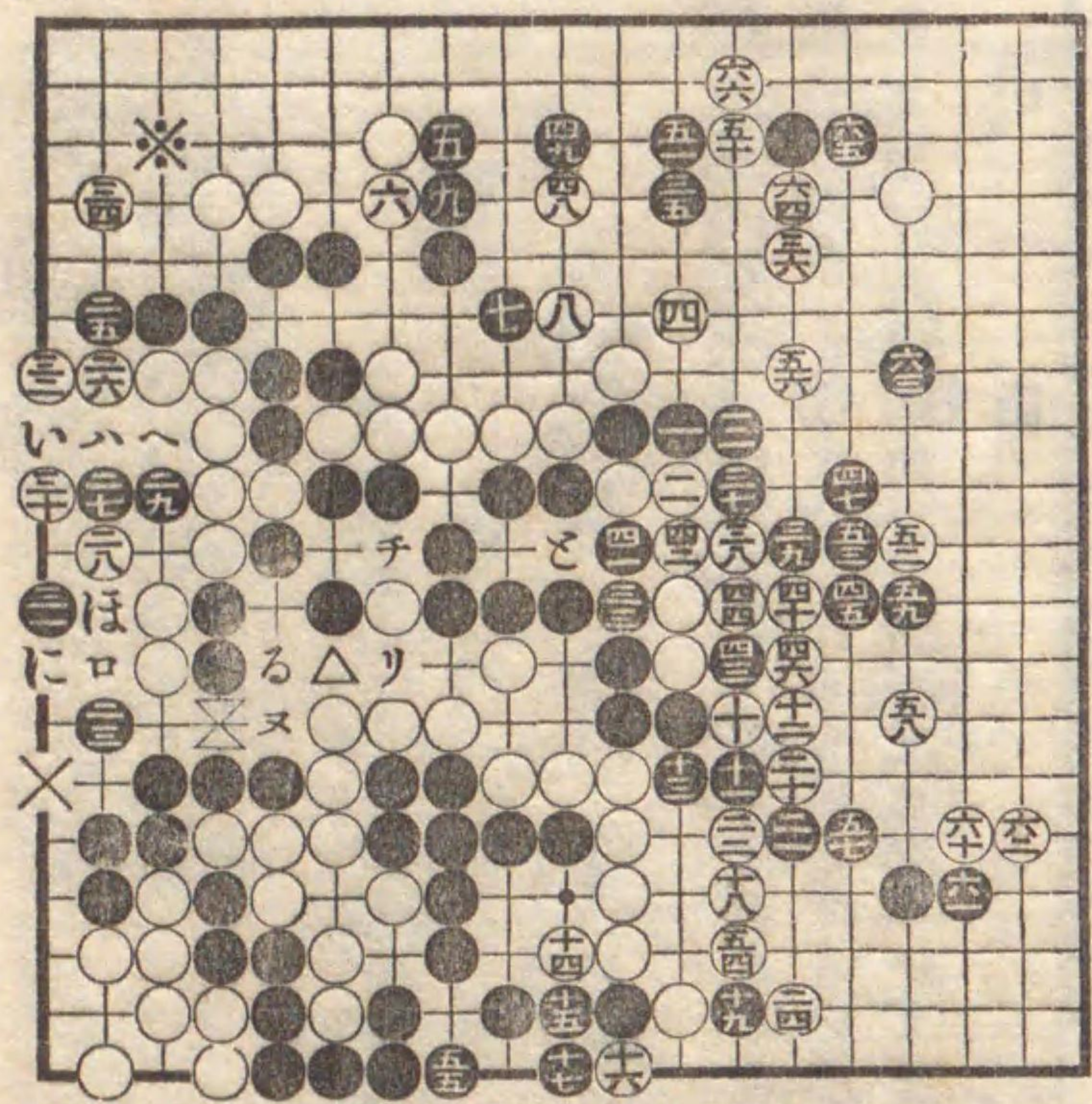


黒三目目三ダツ

(ろ)へ打つが宜い。黒(七)は甚だ急なり右上隅に攻むべき好處があるから先づ(ハ)に掛つて敵の動靜を窺ふが宜い。

い。即ち黒(ハ)へ掛るは(五)の一子を援くる所以である。黒(七)は悪手である。黒(二)が一段低く(三)に在り白の掛りも亦(三)に在つて白(十四)へ一間に飛んだ時なれば(三七)へ「げいま」に打つは普通の定石であるが、此場合に於ては黒(七)は(三七)へ一間飛ぶが宜いのである。黒(十)是れ又大悪手である。白(十)を押し下つた趣意が立たない。黒(三)の粘りは悪手である。圖の如く白(四六)へあて、黒(四七)に取り、白(四八)の押えとなつて黒(三)目を絞らるゝに至つては白の外形が厚壯になるから黒が悪い。(四三)へ粘ぐ手で單に(四七)に一目を取つて居るが宜い。白(四四)の延びも亦緩い、手順上直ぐに(四六)へあて、絞る方が宜い。其時黒(四八)へ延びれば白(四四)の筋をドコまでも押し行つて行く、左すれば自然左側の黒が急になるのみならず(四七)の粘りが利くことになるから黒は單に(四七)へ一子を取る外はあるまい。其時白(四八)に絞るとすれば次いで(四四)に粘るか或は(四八)へ掛粘るか何れかを擇むことになる。黒(五)は宜しくない、ワザ／＼(五)の穴を明けて(五)の切創を作る打方は其意を得ない。先づ黒(五)へ押す位のものであらう。黒(五)のはねも亦悪手である。かう云ふ處は單に(六)へ延びて居る方が宜いのである。白(六)は究めて俗手である。試に(六)の一子を取除けて見よ。(五)、(六)、(六)と三目並びあるからはマサカ白(六)と(六)に打ちますまじ、(六)へ延びる手で(六)にはねて居るが宜い。白(七)も亦俗手である。單に(七)へはねべき筋である。其時黒(七)に附け越さば白(七)へ跳ねて凌ぐ手があるではないか、然るに白(七)へ突當り黒(七)に押へた時白(七)に粘りだのは更に俗手を重ねたものである。既に白(三)へ突當つた以上は(七)に粘ぐ手でナゼ△印を切らないのであらう

第 二 圖 [手六十六百]



黒(ロ)に遮り白(ほ)に押へ、黒(へ)に置きて四目「なかで」にしたる時、白(と)へ跳ね込んで眼を缺いたらドウか。黒(り)に一目を抱へて眼を作らうとする

か。其結果は黒(へ)、白(五)、黒(七)の押しとなるせんか、コ、に於て白には兩様の打方がある。單に(と)へ跳ねるも可なり或は又白(ぬ)へ跳ね、黒(ル)へ飛び、白(を)に延び、黒(八五)に並びたる時白(と)へ跳ねて外部の四目と振變る手段もある。然るに白(七)に押へたのは如何にも俗手たるを免かれぬのである。

▲第二 黒の敗因 (三) 白(十四)の曲りは悪手である。單に(十六)へ飛んで居るが宜い。それでも黒は手を抜くことが出来ぬ。黒(三)はドウ云ふ意味か譯が分らぬ。此手で黒(三)へ跳ねたらドウか、白(い)に押へる外なかるべく、其時黒(ロ)に出れば白は死となるではないか。然るに黒(三)へ打ち、白(三)へ下られては最早や白を擒にすることは出来ない。強ひて黒(ハ)に打つて取掛けに行かんか。白(に)へ附け越し、

と白△印へあて、黒(チ)に取つたとき白△印へはねこみ、黒(又)に押え、白(る)の曲りとなつて断ち切られて了ふ手があるから詰り黒はドウチカラ取られて仕舞ふ。夫故に(り)へ跳ね込まずして攻合ひにすれば無論黒の方が手が足りないからアベコベに全滅して仕舞ふ。だから容易に黒(ハ)へ曲つて取掛けに行けるものでない、黒(三)は閑手である。若し白(と)へ跳ね込んで眼を奪はうとすれば黒は先づ(チ)へあて、白(こ)に粘れば黒は△印置いて生きて居る手があるではないか。此場合黒は(三)の手で△印へ打たばドウか、蓋し白は應手に窮するであらう。加之ならず(三)の白と隅との聯絡が断ゆれば白(三六)、(三三)の一隊に死味が残る。然るに惜い哉黒(三三)と遊びて白に(三三)と固めらるゝに至つては隅に地が出るのみならず(三三)の白は隅と聯絡を保ちて完全の生きとなつた譯である。黒(五)の引出しは無謀である。ナゼかと云ふに白(三三)、(十六)の大部隊は完全に生きを保てるに反し黒(四五)の一隊は究めて薄弱の姿勢に在るにも拘らず(五七)へ引出したものは禍を招く基である。穩に黒(五)へ打たんに勝敗は兎も角、細い碁に收まるだらう。然るに(五七)の悪手を重ね白(五)と打たるゝに至つては黒、上を助けんと欲すれば下、下を救はんを欲すれば上と所謂からみ攻めの苦境に陥り到底凌ぎ切れぬ形勢である。要するに本局黒の敗因は主として(三三)の遊手に在りと謂はねばならぬ。

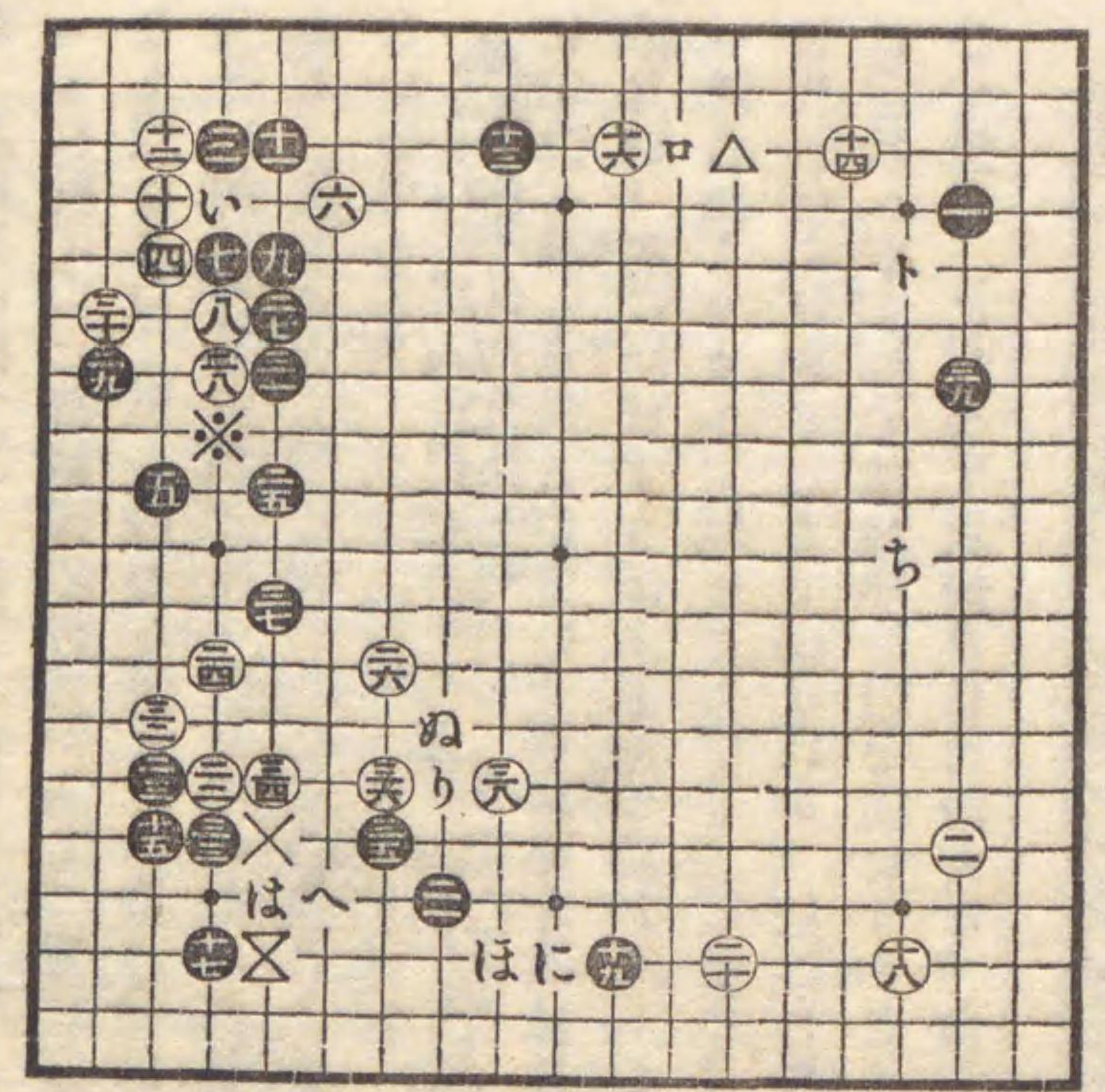
御城碁 將軍の御好み

(萬延元年申十二月八日於御城)
阪口仙得

先番 聖秀策
中押勝碁

第一 黑白著子概評

▲圖一 黒(五)と挟んだからと云ふて敢て悪いと云ふことはないけれども黒(五)と明隅を占める趣向もある白(六)は所謂趣向で、若し之を棄置して他の大場を占めると黒から直



に(十)へ尖みつけられ、白(七)に延びた時(六)に煽られるのを嫌つて圖の如く掛けたので是れ又一策である。白(八)は(一)にはね込むが普通であるが、圖の如く白(八)へはねるのも亦一策で、黒(十三)

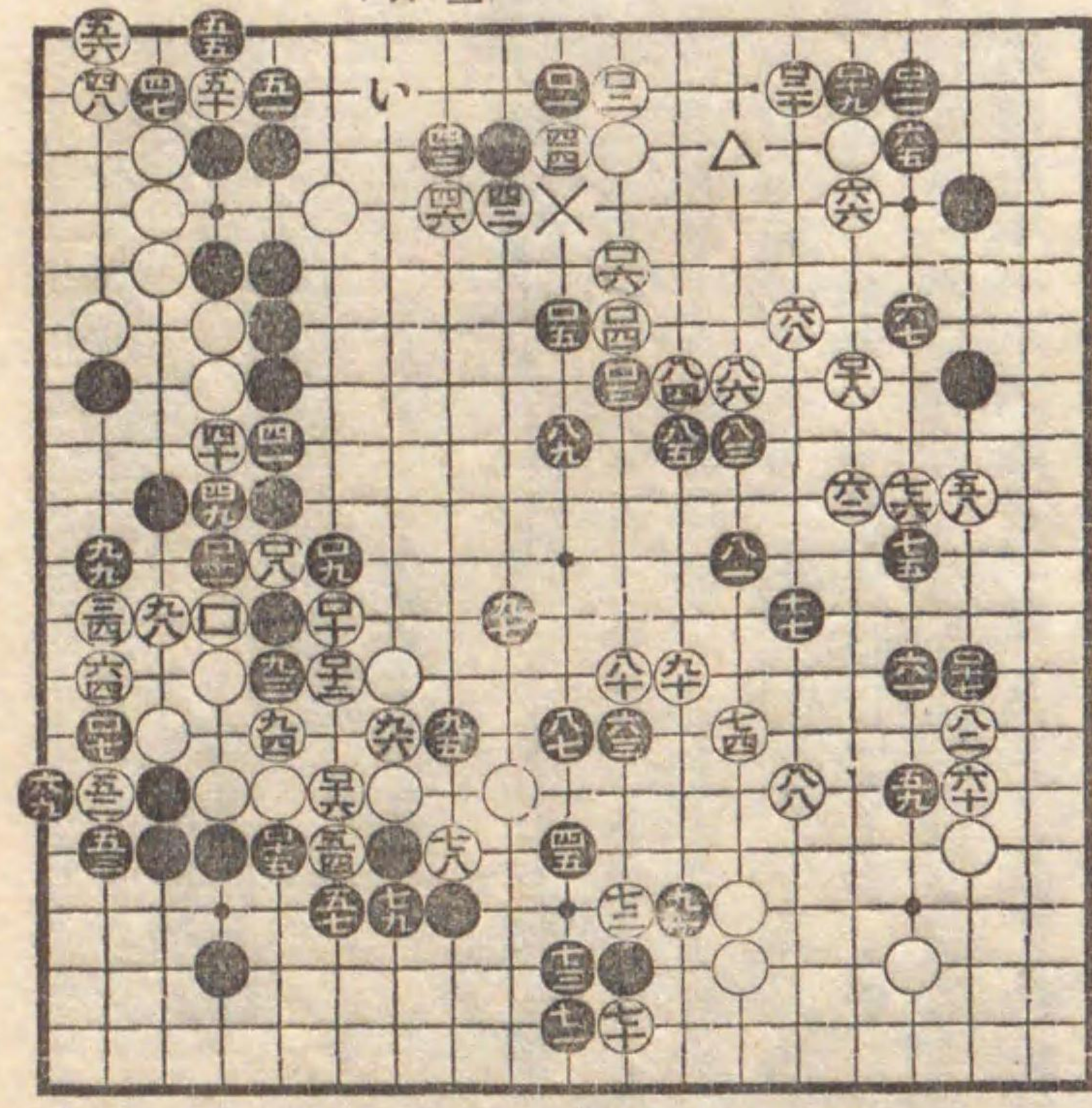
迄は古來の定石である。先づ互角の別れと云つて宜い。白(十六)は如何であらうか。と云ふのは假に黒がモウ一手を費やして(十六)に詰めるとせばドウか、(十三)との釣合上、甚だ位の低い姿となるではないか。よしんば棄て置く位だからとて黒から急に(十六)若しくは△印へ挟んで来る氣遣ひのない處である。勿論好い處には違ひないが、白(十六)に詰めたからとて敢て黒に響く譯ではなし、謂はゞ氣のない手だから急ぐに及ばぬのである。先づ此場合では白(八)に掛るか或は(十六)に締る方が利益である。假に白が(十六)に締るとすれば黒も亦(十七)に締る外あるまい。其時白が(一)若しくは(八)の大場を占める手順になる。然るに白が(十六)に詰めた爲めに黒に(十七)に締られ、白(十九)に締つた時アベコベに黒に(十九)の大場へ先鞭を着けられて仕舞つた。換言すれば白(十六)の詰めと(一)若しくは(八)の處を占領するとは何れが大きい手であるかと云へば無論(一)若しくは(八)の方が大場である。故に曰く白(十六)の手で(八)に掛るか或は(十六)に締る方が利益なりと。白(十三)は黒の模様を消す手段であるが、此手で×へ打つのも亦一手段である。それは黒(一)に圍へば白は(十三)につけるし又黒が(十三)へ尖めば白は×印につけて打たうと云ふ趣向である。黒(十七)以下(三)までは詰り白の出路を止めると同時に(五)の黒を結束しやうと云ふに外ならぬ。然るに白が(三)に押へたのは自己を収めながら暗に×の出切りを狙つたのであらうけれども夫れが爲めに後手となつて黒に(三)の大場を打たれては最早や碁が狭くなつて妙味が無くなつて仕舞ふ。故に白は(三)に押へる手で(五)へ挟み黒(ト)尖んだ時(ち)に守つて居る方が碁は廣くなるのである。白(三)のつけも亦自分を収めて而して暗に×印の出切りを狙つたのであらうが、此手で矢張り(三)に挟んで居る

方が面白い。然るに白(三)へつけた爲めに黒は(三)に自己の切りを防ぎ乍ら白を攻むる手段に出でた。サア斯うなつてから其儘棄置くと今度は(り)に跳ねられる。白(四)に跳ねると黒は(三)に延びる。さうなると黒の方が益々厚くなる其反對に白の方が愈々薄くなるから此處ではイヤとも圖の如く(三)に飛んで居なければならぬ。ソコで先手を取られて(三)に打たれては先きに云つた通り碁が極つて仕舞ふ。詰り白(三)の膨れが面白くないと云ふ譯になる。

第二 白の敗因

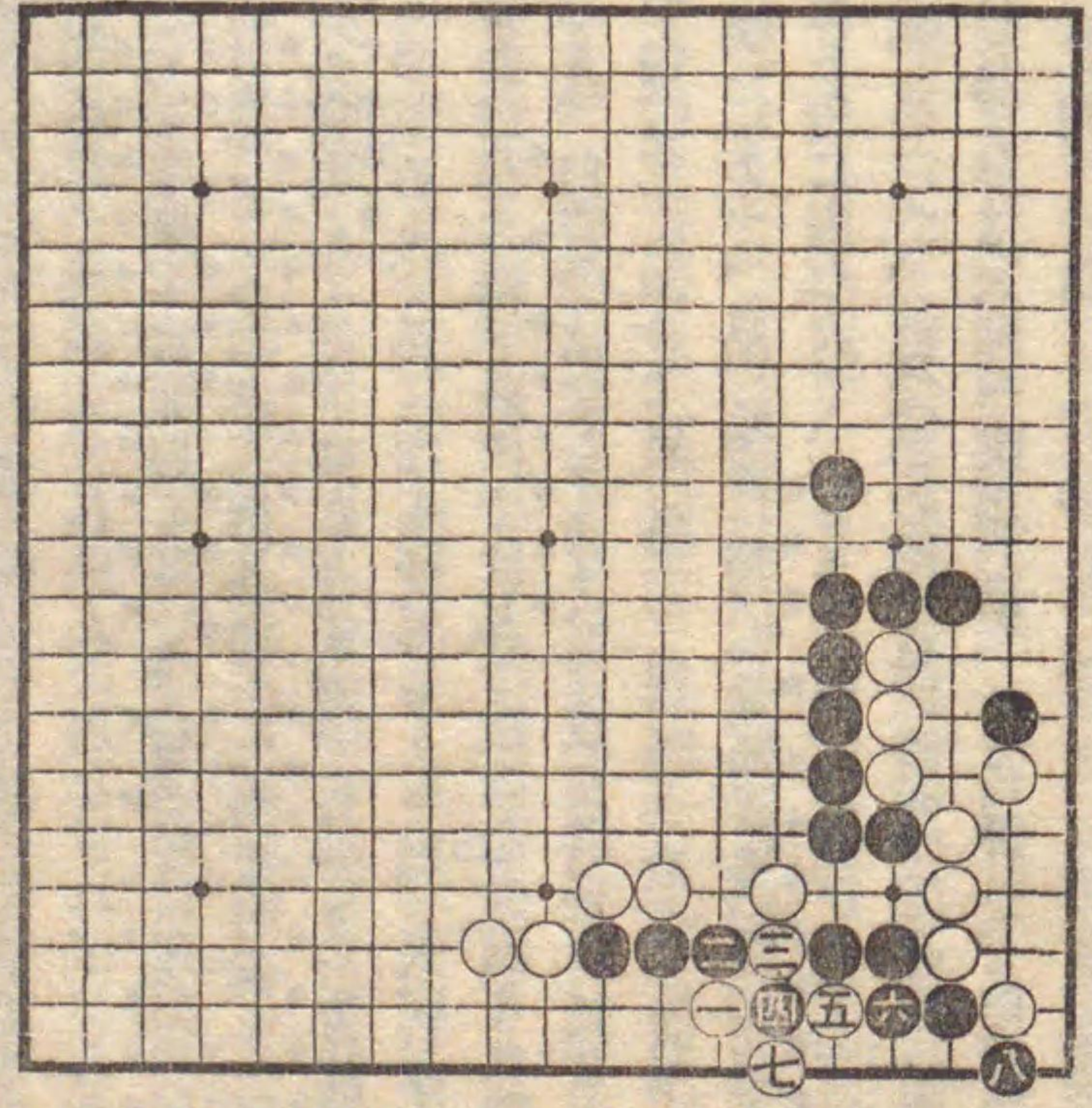
▲圖二 此場合白が(四)へつけ黒(五)に引いた時白(四)に突當つたのは詰り黒の厚みを消しながら八印の打込を凌いだ手で機宜の處置であるけれども此に於て黒に(四)に圍はれるに至つては最早や黒の動かぬ碁になつた形勢である。黒が(四)へはね白(四)に押へた時黒(四)にキツテリ

第二圖 (三)目



粘いだのは(十三)の二目を助ける爲である。然るに白が(一)に飛んで強ひて(十三)の二目を取らうとすると甲圖の如く黒(五)の跳ねとなつて振變られて仕

九 九



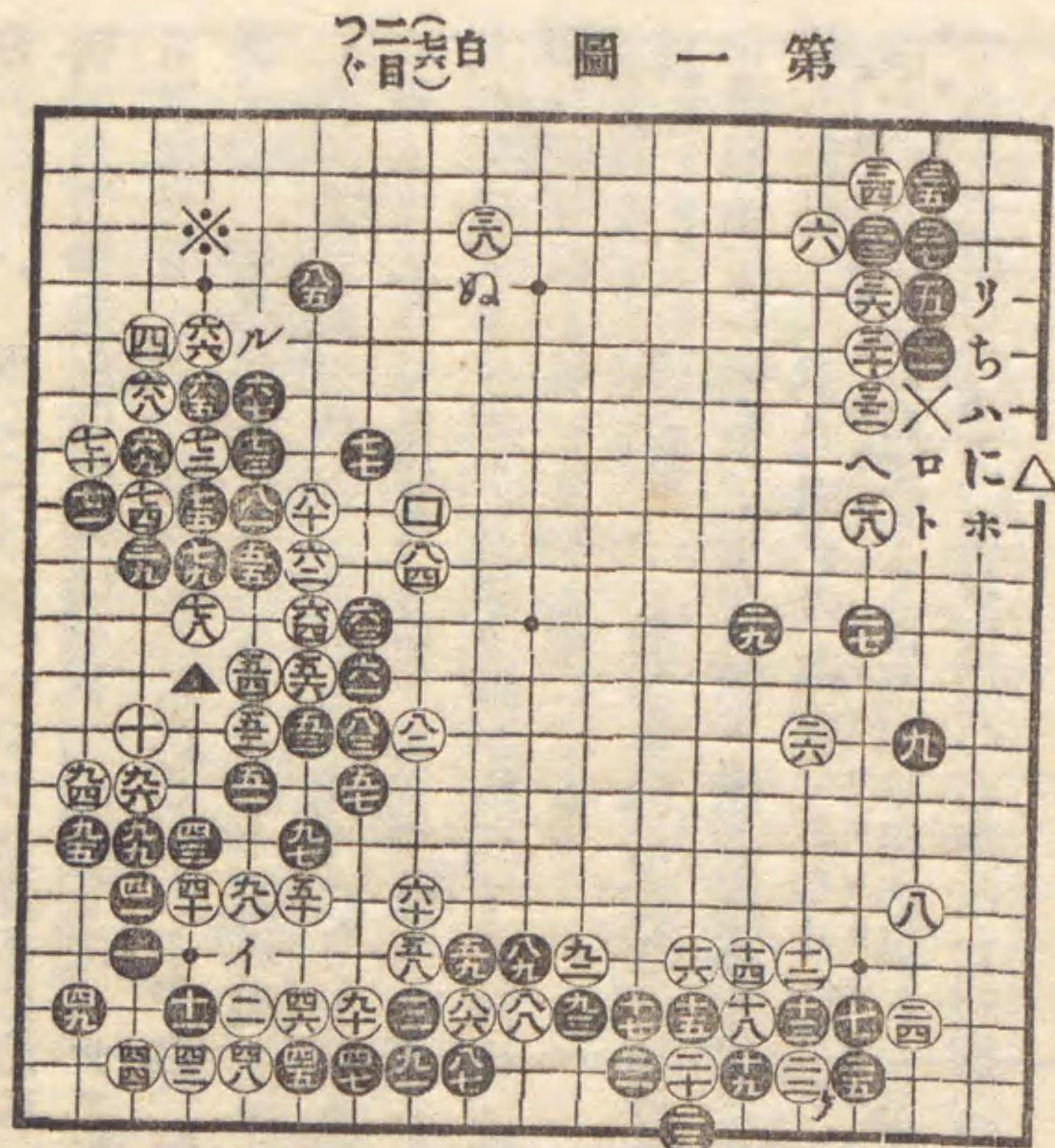
舞ふと云ふ危険があるから(四)に粘がれた以上は(十三)の二目を取ることが出来ない。來ないのである。黒(五)へ尖みつけ白(六)に立つた時黒(六)に尖んだのは如何にも堅固の打方で、最早や外に好い處がないから斯う打つ外はない。今度黒に(六)へ飛ばれることになると(五)の白が薄弱になるのみならず×印の切りを狙はれるから白は是非とも(六)に守つて居なければならぬ。ソコで黒に(六)へ跳ねらるゝに至つては大勢既に決す又如何とも挽回の策なしと云ふて宜い。之を要するに白の敗因は(十六)の詰めと(三)の押へに胚胎したので黒地は約六十目以上白地は五十何目と云ふ見當であるから結局十目以上の負け即ち黒の中押勝に歸着したのである。

中押勝 碁聖道策
の決戦

(元祿六年某日)

▲第一 黑白著子概評

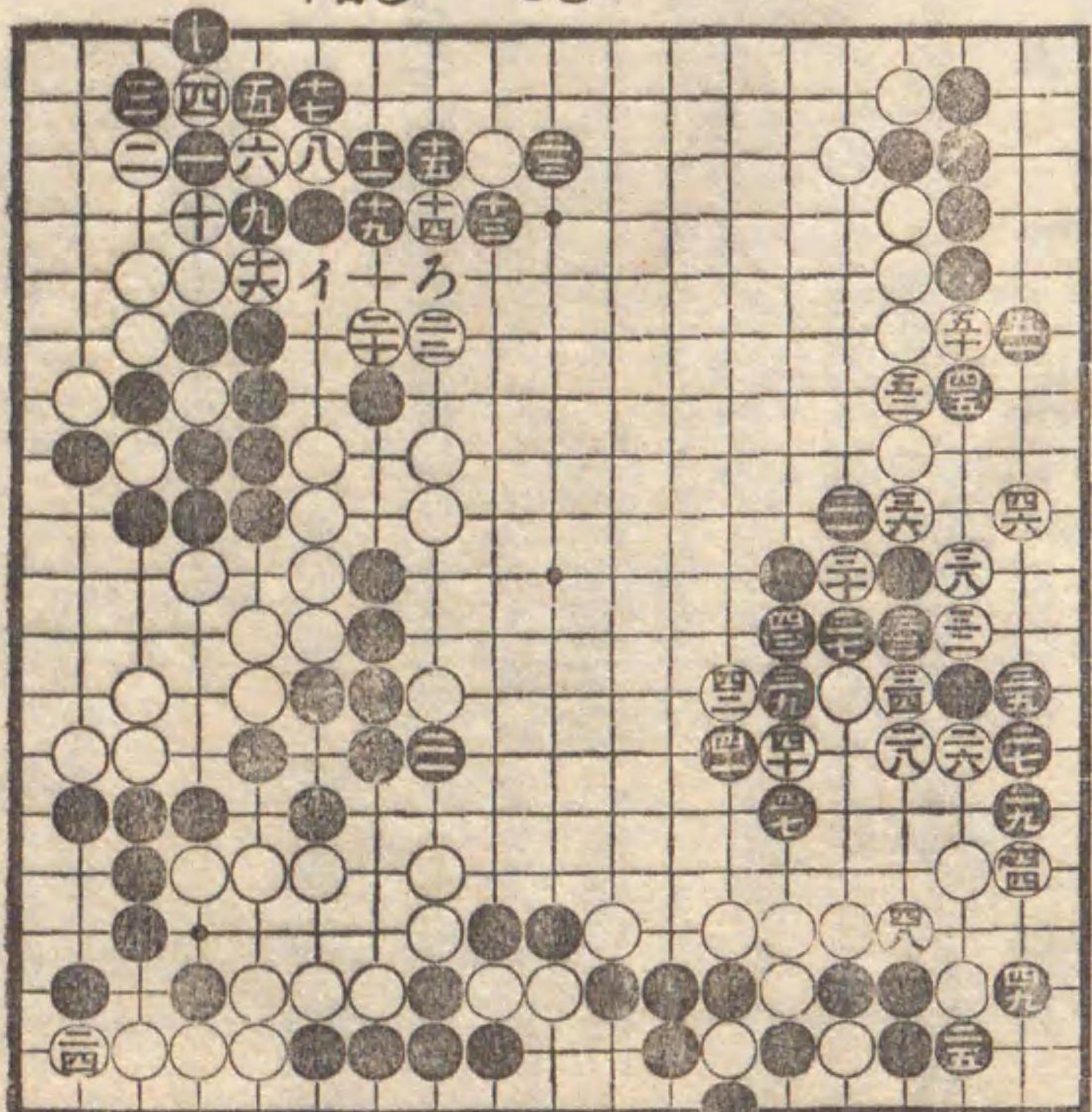
黒△は別に悪いと云ふことはないが一言にして云へば古風の手である。云ふ外はない。黒△は大悪手であると断言するを憚らぬ。無論(十三)に尖まなければならぬ處である。其譯は白から(十三)へ掛けられると位が低くなつて黒△の一子が凝形になるから宜しくないと云ふことは今日一般の定論である。抑も棋家が能く言ふ「コリ」と云ふのは詰り一手の効力が無くなると云ふ意味である。試に



本圖の如く
白(十二)、黒
(十三)、白(十四)、
黒(十五)、白
(十六)、黒(十七)、
白(十八)、黒
(十九)、白(二十)、
黒(二十一)、白
(二十二)、黒(二十三)、
白(二十四)、黒
(二十五)となつ
た曉に今度
黒が此方面
に打つ必要

ありとしてもヨモヤ△へ三間に開きはすまい。即ち知るべし
黒△は打たなくても宜い處へ態々一子を費やした結果になる
ではないか。換言すれば黒△は一子の効力を殺される譯にな
るのである。加之ならず尙ほ此上に白から(十三)へ掛けて右下
側の如く押付けられると黒△も亦た△と同じ運命に陥り双方
共に位が低くなるに反し白に外勢を張られることになる。以
て黒△の挟みの大悪手たる所以を了解するに足るであらう。
然るに白が直ちに(十三)へ掛けずして轉じて(十)に挟んだのは
益々黒をして一方に凝らせやうと云ふ趣向である。實は夫程
策を弄するにも及ばず直ちに白(十二)へ掛けても宜い處である
が蓋し相手を見て打つた手であらう。然るに黒が(十一)へ尖
みつけたのは即ち白の術中に陥つたのである。此場合では
マダ(イ)につける方が宜い。黒(五)は事甚だ小である。斯
くの如く一々白の意向に服従して居つては逆もたまらない。
黒(五)の手で無論(言)に尖んで居なければならぬ處である。
併し白の手順も亦面白くない。白(十八)に突出す前に先づ(十三)
へ掛け黒(十三)へ延び、白又(十三)に延び黒(十四)に飛んだ時白が
(十六)へ突出して打てば兩方を邊隅に凝らして仕舞ふことが出
来るのである。黒(十七)も亦宜しくない。矢張(十三)に尖んで居
なければならぬ。是れでは九で敵の趣向通りに動いて居る譯
になる。白(十八)は宜しくない。試に其手ほどきを言はんか。
先づ白(十三)にかけ、黒(十三)、白(十三)、黒(十三)、白(十三)、
白(十三)にあて、黒(十三)に粘いだ時白は△印に曲るか或は上か
ら塗る策に出づべく、ヨモヤ(十三)に飛びはすまい。或は又白
(三〇)、黒(三三)、白(三三)の時、黒(三三)へ尖み着けずに(ロ)へ飛
んだらば白は△印へ突出し黒(ハ)に押し、白(ニ)を切り、黒
(ホ)に抱へ、白(ハ)に押し、黒(ト)に粘ぎ、白(チ)を切り、

第二 圖二



云ふに右側
の黒は非常
に堅くなつ
て居る。其
處へ持つて
来て(三九)へ
打込まれて
居る處であ
るから譜の
如く黒に
(四三)へはね
られて上下
聯絡を斷た
れては白は

黒△印に一目取り白(七)へつけ、黒(八)の曲りとなるべく
斯うなると黒は非常の凝りではないか、白(三六)黒(三七)の交換
がなくてすら凝形となるのに更に(三六)に打たれた時黒が(三七)
に圍つたと云ふ譯になるから一層「コリ」が酷くなる譯であ
る。然るに白が(三六)に掛けずして(三八)へ打ち黒(三九)と交換し
たのは白が非常の損である。と云ふのは黒(三九)の飛びは局面
一體に響いて居るに反し白(三六)の手は何處にも響かぬ日蔭に
居るからで、斯うなつては前の如く或は塗付け若くは十分凝
らすことの出来る黒をして其形を立直らしめた譯である。白
(三六)は△印へ締るのが普通のやうであるが此場合に△印へ締
ると黒に(三八)へ割打ちをされるのは見えて居るからソコで白
が(三六)の大場を占めたのである。或は此手で(九)へ打つ趣向
もないではない。白(四三)は少し無理の格好である。ナゼかと

苦境に陥らざるを得ぬ。先づ(四三)に引くが穩當の手である。
其時縦しや黒に(四八)へ跳ねて互られたからと云つて一方の黒
は凝つて居る處だから腹の立たぬ處である。黒(四五)の覗きは
打たないで只△印へ掛ける方が面白い。黒(四五)の尖みは時機
尙早しと云はざるを得ない。矢張り△印へ掛けて白の動靜を
窺ふが宜くはないか。黒(五)の尖みは一寸形のやうであるが
併し白に(五)へつけられると勢ひ黒(五)に跳ねなければなら
ぬ。自然白に調子を與へて(五)へ延びられるのは面白くない。
單に(五)へつける方が面白からう。黒(六)以下(五)に絞つた
のは此場合では面白くない。損をした上に自分の眼が無くな
つたのみならず中腹の白に向つては俗に謂ふ「アマリ」の姿で
止めることが出来ない。先づ黒は此場合(六)へはねる手で(ル)
へ曲る位のものであらう。

▲第二 手嚴しい趣向

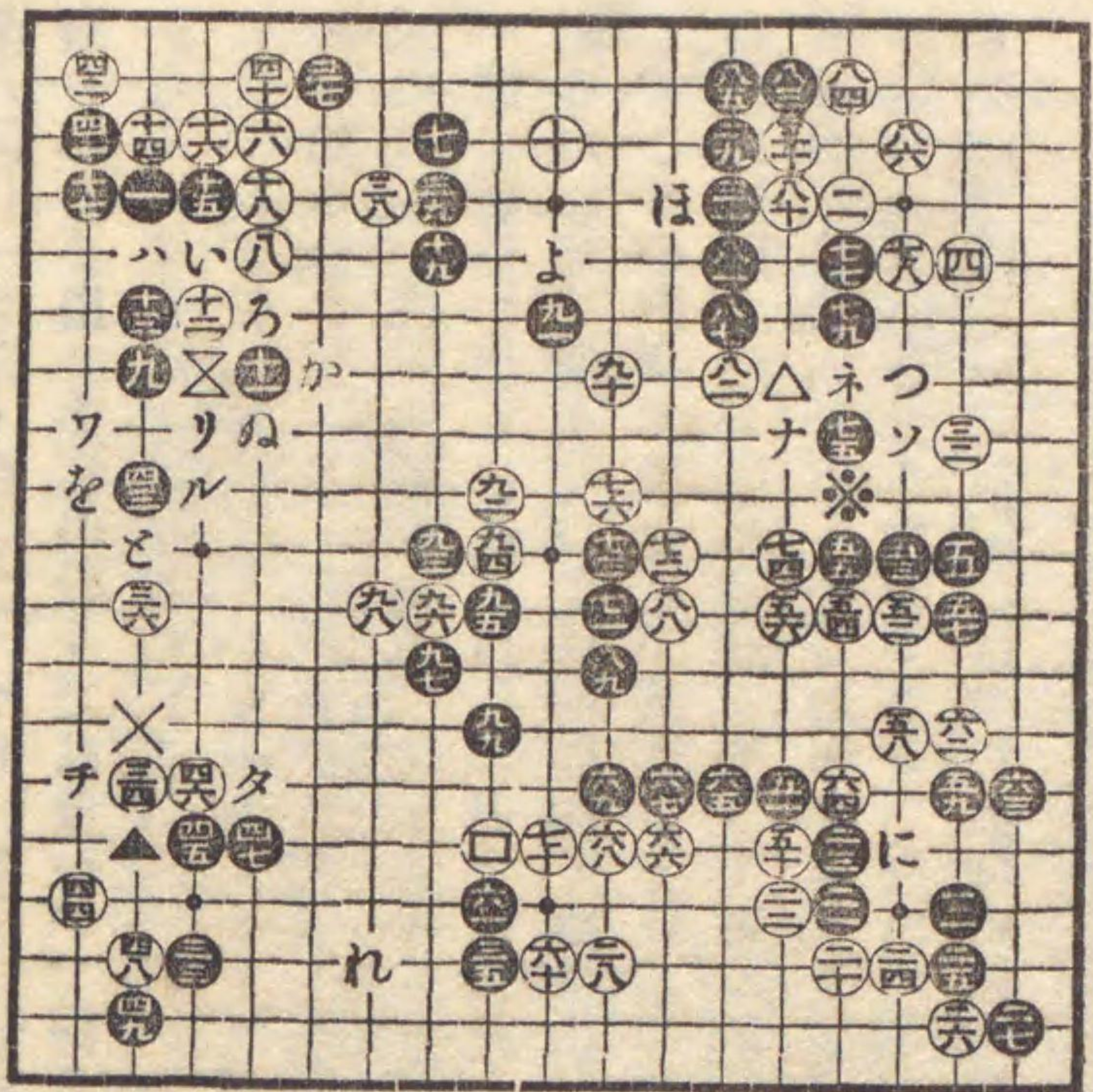
白(三)へつけ黒(三)にはねた時白(四)
と切たのは嚴しく面白い趣向である。黒(十七)に引いたのは何
の意が飄ばり意味が分らない。斯うなると三目を粘るか或は
(イ)に出で、上の黒を取るかは全く白の自由である。若し黒
が上を棄てる積りならば單に(十七)へ引く手で劫を取らなけれ
ばならぬ。又上の黒を活る積りならば矢張り(十七)へ引く手で
キチンと(二九)に粘らなければならぬ。それでも下は矢張り劫
である。然るに單に黒(十七)に引き白に三目を粘られ、黒(十九)
に粘いた時、白に(三十)へつけられるに至つては損も亦甚だし
い。或は白(十)に突出した時黒が若し(イ)に押へたならば白
は(ろ)に延びて居ても十分打てる形である。それは暫く措い
て白に(三三)に取切られ次いで(三三)に押へて左下隅の白を活き
らるゝに至つては最早や勝敗は確定した。

元祖本因坊算砂法印 對鹿鹽利玄

八段 本因坊秀哉謹評

算砂師は京都日蓮宗十六本寺の一ツ、寂光寺住職二世日海上人と云ひし人にて幼より碁を善くし閑居後碁所を創め本因坊算砂と稱す。實に本因坊家の鼻祖なり。本局は鹿鹽利玄先にて對局せしものなり

▲第一 天正時代の碁風 黒は不急の場所なれば左下隅の明隅に打つ方が利益である。白は先づ(三〇)か(三三)にかかり先手を取て夫れから(三)の處へ懸る方が割合が宜い。従つて黒(七)は圖の



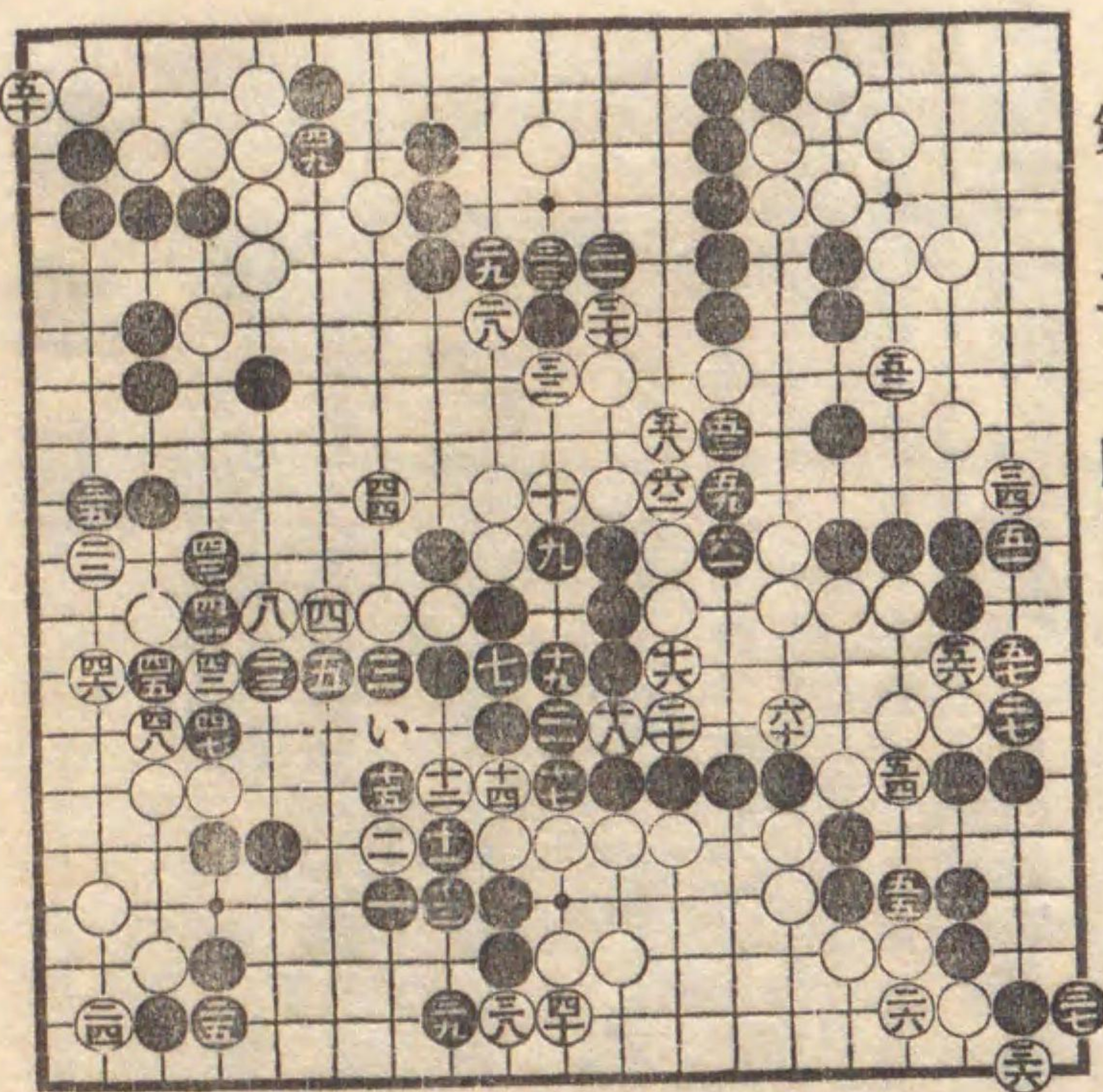
如く二間に挟まずして(三)の黒の締りを打つべき筈である。其の締り方は一間高締り小けいま大けいまの三通りである。何れに締るかは趣向に由るのである。白(一)の間飛びは當時は打たぬ

ことになつて居る。若し黒から(一)とつけられるを嫌ふならば(一)へけいまに懸けるか、(ろ)へ二間飛ぶのが今日普通の打方である。黒(ろ)の交換は引合つて居るが夫れよりは(三)へけいいます方が優つて居る。黒(十)これも宜しくない。此手で黒(三)の締りをするか、明隅へ打つか、左もなくば(一九)へ飛ぶ方が宜い。黒(二五)は(四一)へはねるが普通で、其時白(二五)へふくれ(二六)につぐのである。黒(三三)は宜くない、(二)へこすむが普通である。白(三〇)へこすみつけ黒を(三三)に延ばして白(三三)を開いたのは如何にも呑氣な打方である。先づ此場合は(は)に懸ける位のものであらう。白(三三)へこすみつけ黒を(三三)へ延ばした結果。左上隅の白が未だ全く收まつて居らぬ爲めに(二〇)の白を捌くことが困難になつて來た。因つて黒(三三)は(五)との調子を取つて△印へ大けいまに打つ方が面白からう。是れは白(二〇)の逃げ出しに備へる一方に(七)へつける杯様々の手段もあり又△印へ打つて一手で白の出路を塞ぐ手段もある。然るに白(三三)と低く構へて居るのに黒(三三)と低く打つたのは宜しくない。此處へ打つならば(四五)と高く打つ方が宜い。白(三三)の懸りは此場合甚だ面白い、若し△印へ懸かると黒に×印へ一間に挟まれる手があるので圖の如く懸かつて黒に打ちやうならしめたのは誠に巧みな打方である。黒(三五)の詰めは甚だ宜しくない。白の備へてある處へアトから行く手であるから敵に利かぬ手である。此場合でも矢張△印へ大けいまに備へる方が確かである。白(三五)は(三)の印の出切を狙つて(と)へ三間に詰める方が宜い。黒(三七)のけいまは時機尚早し。黒(四一)に打ち白(四一)に押せば黒△印に押へ白(四七)へはねれば黒(チ)にはねるが宜い。白も亦(三三)と覗き後(四〇)と押へたのは如何にも緩過ぎる。(三)の手で×印へ突出し黒(り)、

白(ぬ)、黒(ル)、白(を)、黒(ワ)にかけついで時白(か)に一目を抱へて居るが宜い。さうすると今度(よ)の飛びが嚴しくなつて來る。黒(四)はいらぬ手だ、矢張(四)の處へ一間飛んで居るが宜い。白(四)も緩い。此場合(よ)に飛出す方が面白からう。黒(四七)も緩い、(タ)にはねるが宜い。黒(五)のはねもいらぬ。矢張△印に備へて置くが宜い。白(六)の突當りは悪手である。圖の如く黒に(六)へ延びられると黒の方が固まる許りではない(れ)の打込がなくつて了ふ。黒(七)は緩い。(七)にあはる方が宜い、随分白は應手に困るだらう。黒(五)も亦緩い。此場合は黒(ソ)、白(ツ)、黒(ネ)、白(五)、黒(ナ)、と打つべき處である。黒(空)もいかない。(空)へ飛んで居る方が軽い。

第二 芾

第二圖



黒(五)の切は悪い。夫れが爲めに白に(六)へ押されて眼を失ひ而して(い)にはね込まれるやうな味が出来て來た。此手で(二六)へ曲つて居る方が安全である。白(三三)のこすみは(三四)に押へて(い)のはね込を狙つて居る方が宜しい。此碁

は百六十二、手止りとしてあるが結局芾になつたと云ふ。

碁の歌(元和三年三月吉日)

本因坊算砂

石立は相手によりてうちかへよ
さて劫つもり時の見合
番數を勝つほど後をこめて打て
少も心ゆるじはしすな
他義法度かたく守らは其外も
勘忍するは道のみちなり
作物ありとをり入り案すれば
心にそまぬ手をや打らん
上手とて餘りの氣過恐るなよ
又恐れぬも悪きなりけり
圍碁は只下手と打とも大事也
少事と思ふ道のあじさよ
我藝を見かへる事は打忘れ
人の曇りをいふををかじさ
身の上の負に成をは知すして
向はかりを見るぞ下手也
荷めも諸道の非難無益なり
手前の義理を詮さくは良し
嗜はかけにて絶す勉むれば
面白き手を見分けうつなり
智案先早きは悪しくこまやかに
始末目算手打たてすな

御城碁

將軍御好み

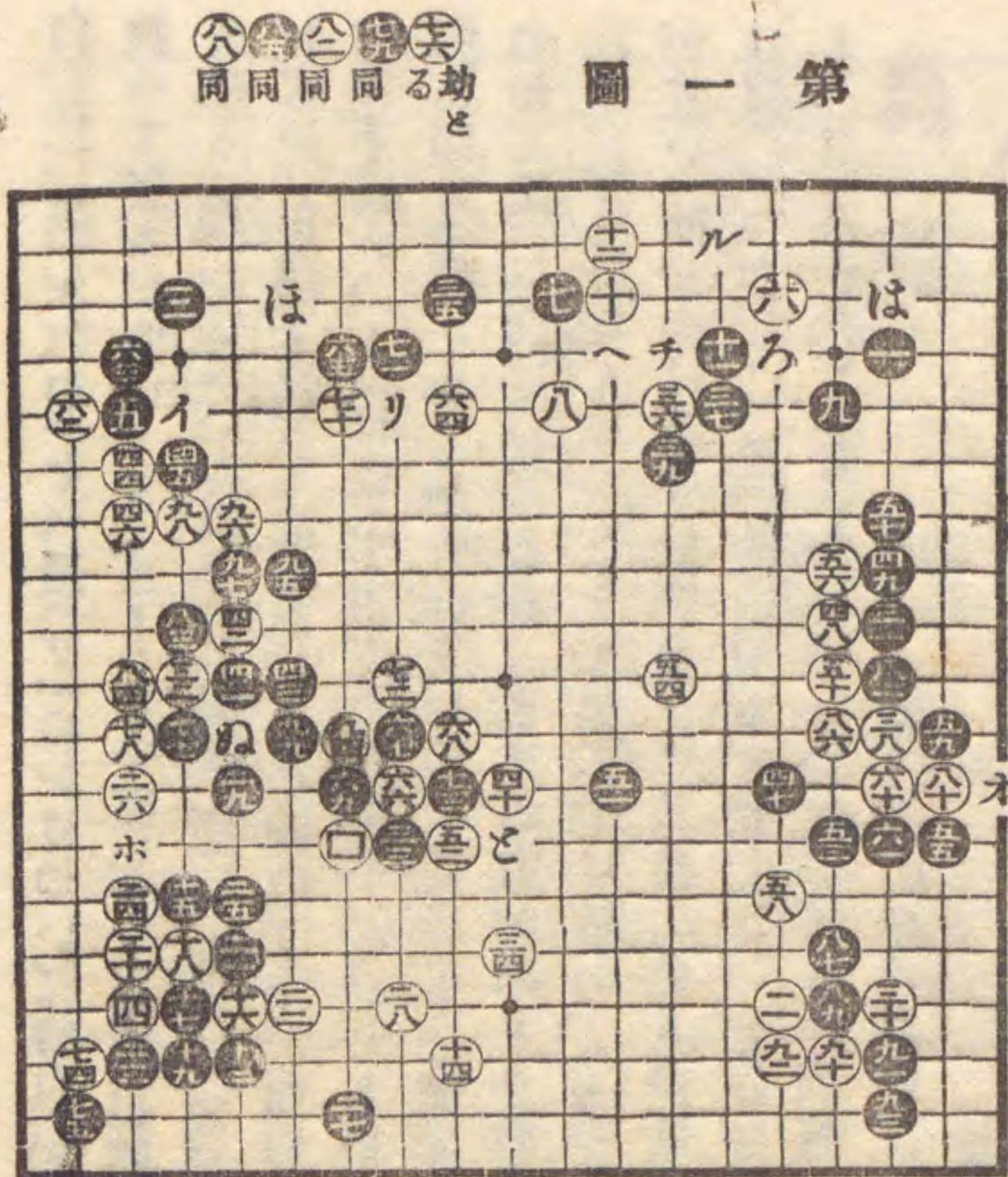
(嘉永三年庚戌於御城御前)

先番碁 聖秀策
三目勝碁 伊藤松和

坊間に散在する古碁の棋書中には同一人にして彼れと此れと打方を異にせるあり或は手順を誤り甚だしきは白と黒とを取違ひたる物もありとか。御城碁五百有餘番の對局に就ては目下本因坊秀哉氏専心調査中に屬す。本譜は徳川公書家秘藏の棋譜に據れるものにて最も正確のものと思われども萬々一誤寫あるを發見せらるゝこともあらば謹んで訂正すべし(編者識)

▲松和獨得の筆鋒

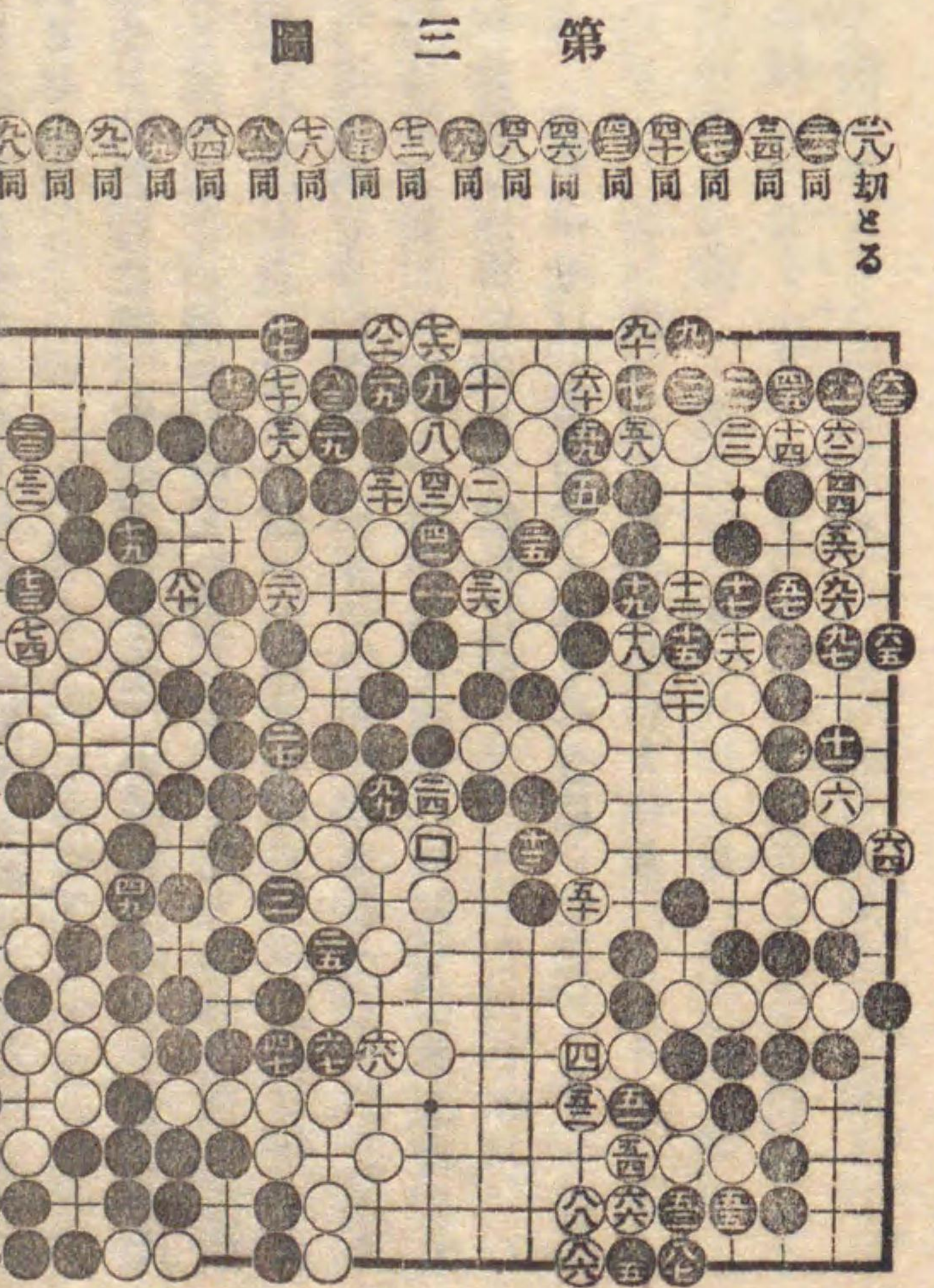
白(四)は所謂趣向であらうけれ共



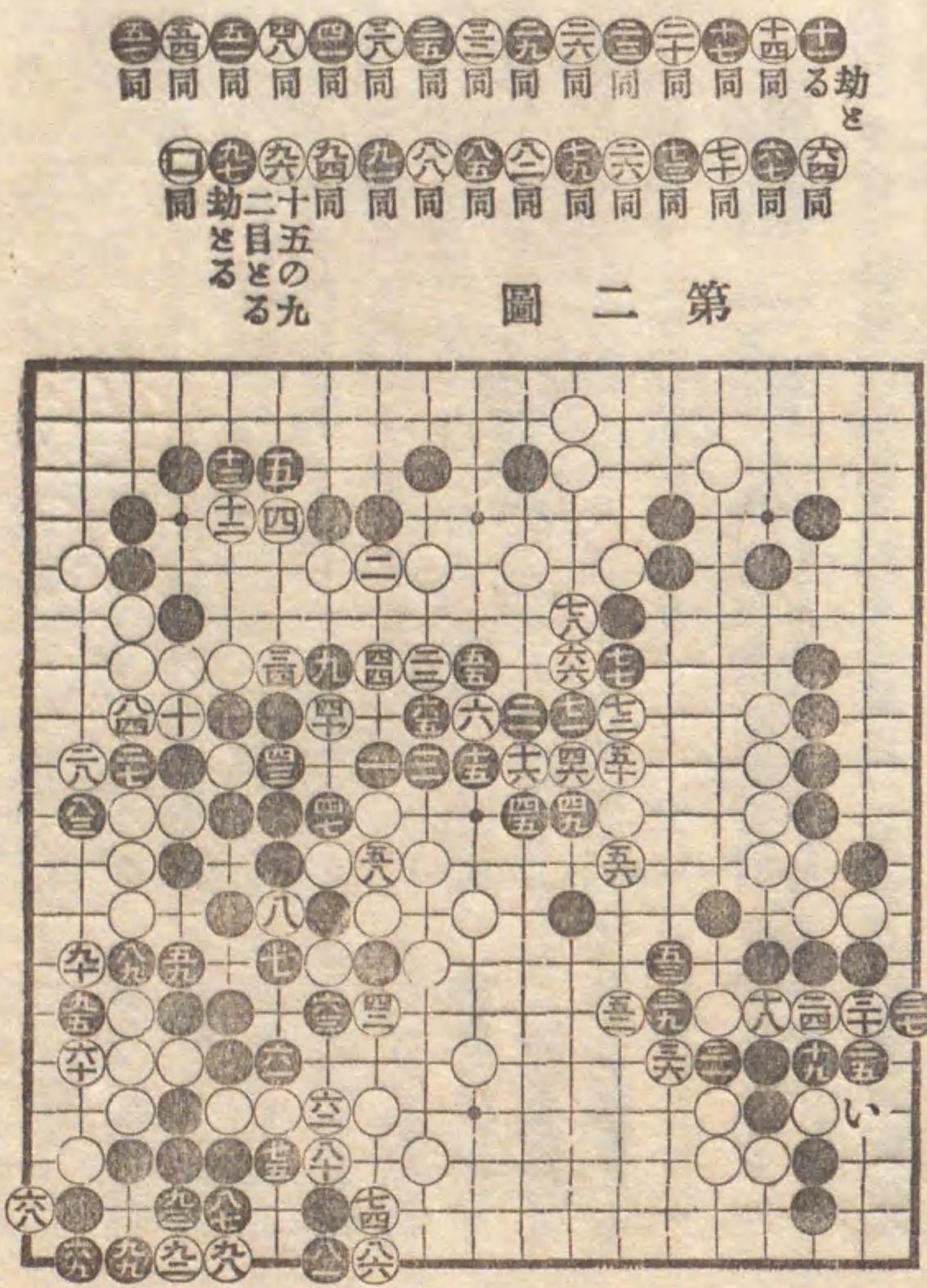
當時は(五)か(六)へ懸るのが普通の通となつて居る。黒(五)是れも當時は(イ)に締る方が宜いと居つて居

る。それは白が(六)へ懸つた時(七)の處へ三間に挟む手が厚くなるからである。白(八)のボウシは(九)と懸る時から黒(七)と挟んだならば斯く打たうと云ふ趣向で打つたものと推測されるが蓋し損であると云ふことも承知の上で打つたのであらう。黒(十二)是れは當時の定石であるが今日では打たぬ方が宜いとなつて居る。それは圖の如く黒(十二)と白(十三)と交換した爲めに一は白(九)の出切と(は)につけて打たれる禍が残るのみならず白の傷みをなほして丁ふ結果を生ずるからである。黒(五)も亦趣向であらうけれども黒としては(ホ)へ二間に挟み返し白(二)に尖んだ時高く(三)に備へる方が無事である。然るに黒が圖の如く(五)と掛けたのは蓋し黒(三)までの手を運び白が普通の如く(三)に應じ黒(三)に打ち白(四)に打つた時黒(五)を轉じて(九)へ這入らうと云ふ趣向であつたらう。然るに白に(三)の手を抜かれて(三)と締られたのは蓋し案外であつたらう。黒(三)は(十二)の掛けに鑑みて餘程考へた手であらうが、如何にも位が低い。當時では星下即ち(八)に打つのが普通となつて居る。黒(五)の飛びは(は)の詰めを凌ぎながら(八)のはね出しを狙つた手らしい。(四)は(と)へ一間に飛ぶのが普通である。ドウも二間に飛んでは何となく薄弱になるが、併し是れは松和先生獨得の筆鋒であらう。白(四)とはねたのは蓋し黒が(四)に延びた時(六)の切り凌ぎ旁々(四)へつけやうと云ふ心算であることは讀めて居るが、黒に(四)へ延びられると左側の方では大分得をして居るが、左なきだに何となく薄弱な(四)の白が益々薄弱になる。夫故に白(四)へ飛び趣意から謂へば此場合(四)にはねずして單に(八)へ延びて居れば自ら黒の形は薄くなりもし、又(は)の打込を狙ふ手段も生ずる。然るに圖の如く打つて黒に(四)に跳ねらるゝに至つては最早

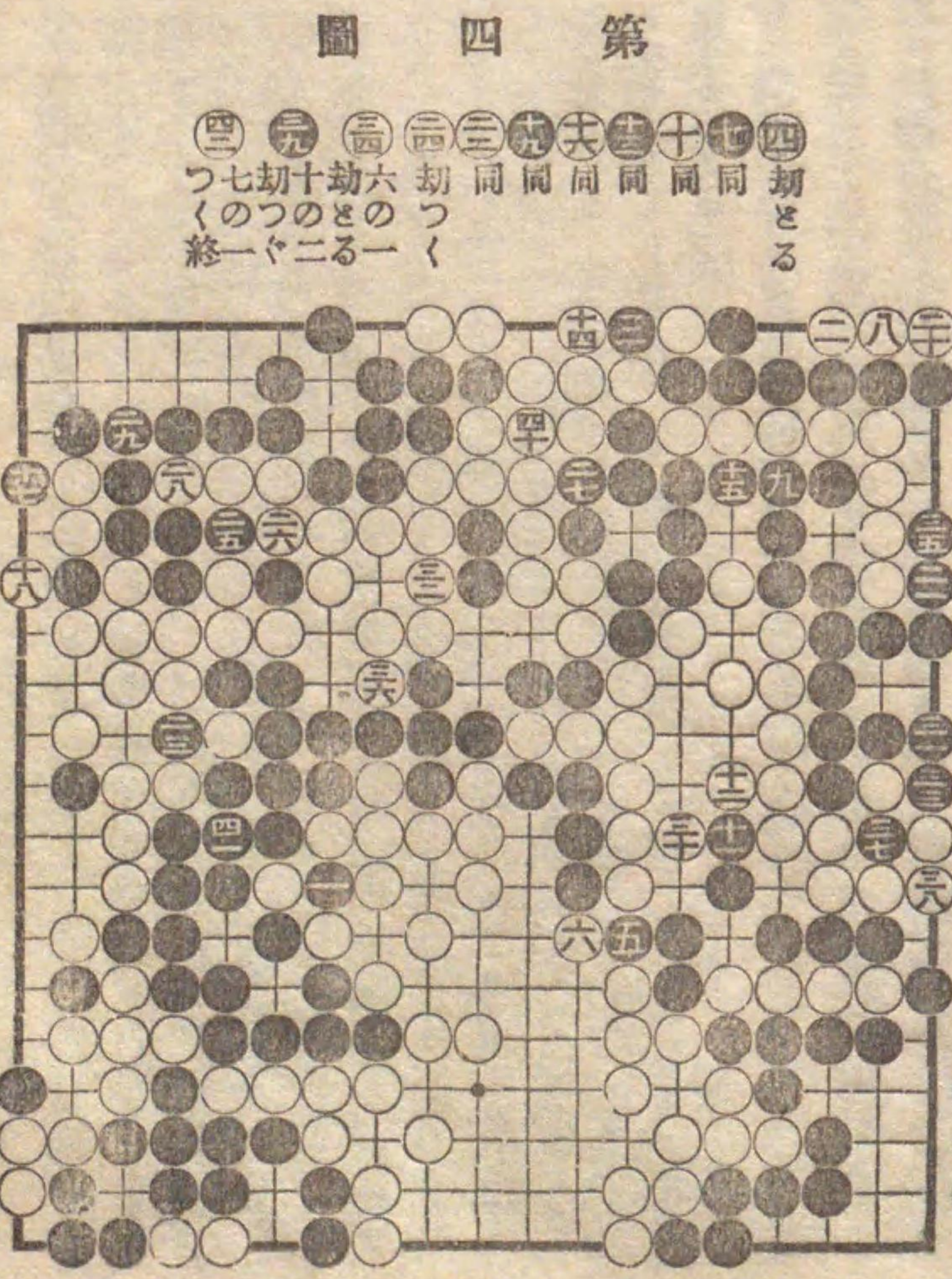
や(は)に打込む筋がなくなつて了ふ。黒(八)は(オ)に互つて居るのは緩いから一寸白の挨拶を聞く爲めに斯う打つたのである。ソコで白が(九)に粘れば黒も亦(六)の處に切を粘ぐ趣向である。夫れから又黒が(五)へ飛んだ真意は其時若し白が(九)へ突込で切つた時黒(ル)に打つて棄てて打つ趣向であらうと思はれる。さうなると(五)(六)以下の一團と(八)以下の白が未だ收まつて居らぬから黒の方が優勢になる。黒が(三)と切つ取つたのは蓋し白に(い)に劫立に出られたるのが辛い處からすつかり劫の始末を讀み切つて打つた手だらうと思はれる。



圖三第



圖二第



圖四第

あるが白(二四)は黒から(二五)とつけ越されぬ前に(二七)へ突出し黒(五)に押へた時白(五)へ突出して打つ杯此處にはいろ／＼手段があるやうであるけれども此碁は非常に劫關係が多いから其得失は中々六ヶしくて當局者に非ざる限りは容易に斷定は出来ない。殊に打つた當時より此邊のイキサツに就て何にも話の傳つて居らぬ所を見ると白が單に(二四)とつけたのが過ちである云ふ推斷を下すことは出来ない。兎に角秀策師の配置に妙な處があつたにせよ、秀策師の末年、御城碁に於て黑白共に**十九番勝通**の負けなし、後年碁聖と謠はれた秀策師を斯くまで惱ました松和師の手腕も亦偉なる哉と嘆美せざるを得ぬのである。

●第一世本因坊算砂畧歴

我朝の碁道千餘年間幾多光輝ある歴史は足利氏の末造應仁の亂に由りて殆ど其跡を絶たんとするの秋に方り兀焉靈妙の技を揮つて斯道を中興し徳川氏碁所三百年の碁を開きたる偉人を本因坊一世算砂とす。算砂は俗姓加納、幼名與三郎、父を與祐と云ふ。永祿元巳歲五月京都長者町に生る。幼にして穎悟、永祿八年八歳にして父に請うて寂光寺の碩學一世日淵の門に入り永祿九年四月九歳にして落飾し法名を日海と稱し本行院と云ふ。

日海未だ壯ならずして宗法の蘊奥を究めざるはなく一宗仰望して吾山の法燈と尊崇し其名大に揚る。又常に想を碁將碁に馳せ切瑳琢磨海内又敵を見ざるに至る。初て織田信長の知遇を受けて碁道中興の端を啓き、次で豊臣秀吉に仕へて碁所を創め徳川家康の關東に下るに從うて創業全く成れり。左に掲ぐる一章は往年寂光寺より頒布したる一世算砂の小傳なりとす。

す。

日海大僧都は寂光寺日淵上人の法弟なり本行院と云ふ。學徳兼備の師也。傍ら碁道に達して天下類なし。依つて右大臣信長公も師を召して於御前爲軍法屢々圍碁を爲し豊公又軍事の爲めに召され、尙ほ家康公も師を召して南光坊天海僧正本因坊日海僧都を神君の兩軍備となし置かれしなり。神君御一統後、明國より碁道の達人來朝して雌雄を決せんと請へり。依つて日海僧都台命に則り之と闘て勝を得たり。於之乎其の名稱世に顯はる。而後彼明人歸國し大いに感じて云ふ、吾れ碁 於て未だ敗を取りし事非ず、唯日本にあるのみぞ、感嘆之餘、依て彼の國に於て製したる碁器を贈り來る。時の天皇も是れを聞召し又師を召して圍碁を觀覽あり。時に大僧都法印に叙せらる。嗣白近衛公より唐桑の碁盤を下賜せらる。僧都又將棋も大橋宗桂と平手也。而後神君有台命、寂光寺を辭し關東に下向し名を算砂と改め祿三百石を賜ふ。是則ち本朝碁の達人本因坊元祖なり、云云。

前に掲げたる碁歌は算砂の直筆を以て認めたるものにて現時之を裝具し寂光寺の實什として藏せらる。又此歌の始三首の別に算砂直筆を以て認められたるもの本因坊家に傳へられ、同家之を軸物となし毎月十六日の圍碁會席上に展覽するを恒例とせり。

是より先算砂は門下算碩(上手格)の技倆優秀なるを見て跡目と定め未だ相續せしむるに至らずして歿したれば更に算悅(法名日傳)を以て跡目と定め元和九年卯月二十三日病薨中に在りて碁所を中村道碩に譲りて二世算悅を督せしめ同五月十六日東都に於て入寂す、享年六十五歳、法諡を日海上人と云ふ。京都寂光寺に葬る。辭世に曰く

碁なりせば劫を打ても活くべきに
死る途には手もなかりけり

御城爭碁

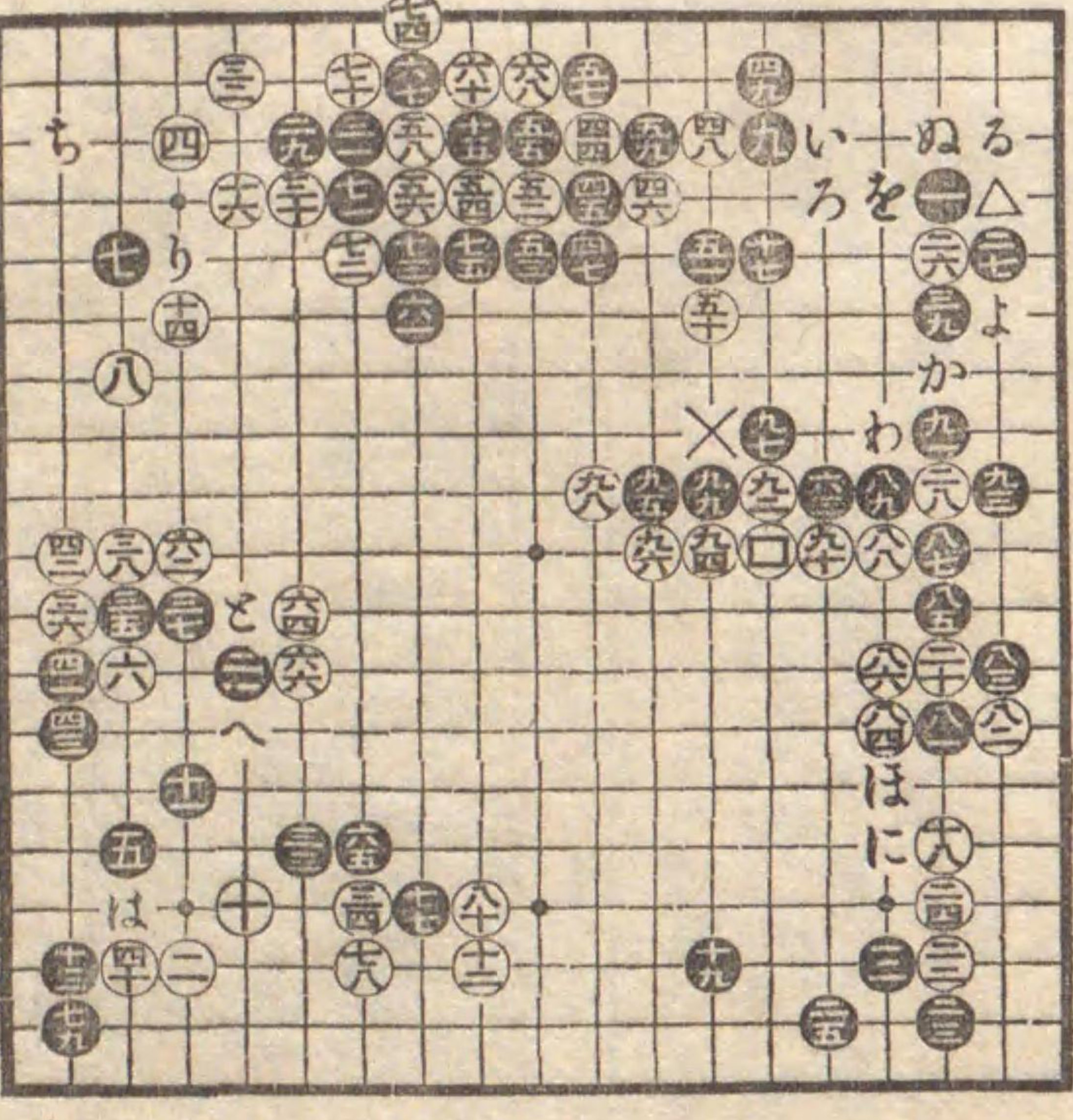
先番二 本因坊算悅(十一目勝)

世二 安井算知

(正保三年丙戌十一月二日於御城)

▲第一 黑白古風の陣立

第一圖 黒(六九)ツク 白(七九)ツク



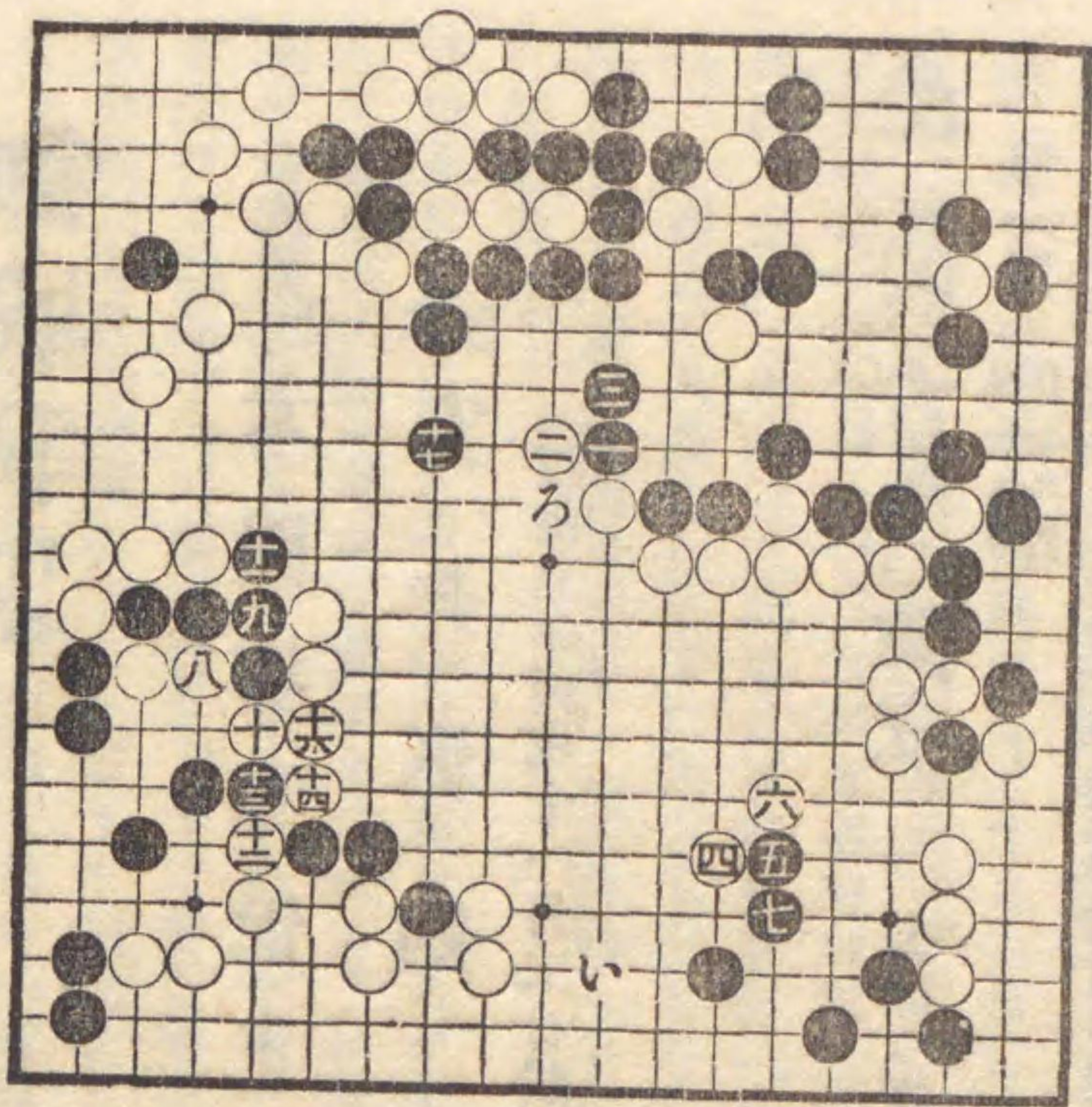
白(四)は所謂古風の陣立

る。今日では研究の結果白(い)か(十八)に掛る方が宜いと云ふことになつて居る。それは圖の如く白(四)と打つと黒に(ろ)へ縮られて仕舞ふ。黒(ろ)の縮りは白が(十八)の處へ懸つて來たらば黒は(五)の處

へ三間に挟まうと云ふ手段で、黒の陣立が最上の姿勢となつて仕舞ふからである。然るに黒が(五)の手で最上の要處即ち(ろ)の縮りを棄て、圖の如く掛つたのは是れ又古風を評する外はない。既に黒が(ろ)に縮らずして(五)と掛つたことを幸ひなれ、白(五)の手で(い)に掛るか(十八)に掛つて成べく戦局を廣くする趣向に出づべきである。然るに石(五)と二間に挟んだのは敢て悪いと云ふではないが、謂はゞ黒のお供をした姿である。黒(七)も亦た既に述べた通りの理由で(ろ)に縮るが宜いのである。白(五)また黒のお供、一言唯當時の碁風と云ふ外はない。黒(五)漸く今日の理想通り縮つたのは至極宜いが、白(五)の尖みは甚だぬるい。蓋し此處で白が(は)へ尖みつけると黒は手を抜いて(に)へ縮つて仕舞ふ。故に此の場合白は(三)の黒に對して何とか趣向をしなければならぬけれども、左りとて白(十八)に掛れば(五)の處へ三間に挟まれるのは眼に見えて居るから高く(に)へ掛るとか(は)に掛るとかソコは所謂趣向で、何とか其の邊に著手すべきである。黒(十二)今度は黒の方で白のお供をした形である。手を抜いて黒(に)へ縮ると即ち兩縮りと事ふ好い姿になるのである。白(十三)は少しも黒に響かず何だか氣のない手である。此の場合黒(十二)の尖みがあつて重くなつて居るから(ろ)を棄て(三)の黒に掛る趣向は考慮を要する。先づ(は)に尖みつけて窘めるが宜からう。ソコで黒が(へ)に尖めば白は(こ)に煽るべきである。白(十五)の尖みも亦ぬるい。是れでは(七)の黒一子を取切つたと云ふ譯にはいかない。(ち)に斜走されると所謂地中、手を生ずるから取切る積りならば(り)に押へて居なければならぬ。然らずんば(三)へ二間に開くも亦一の趣向で、黒(七)を取切ることが出来ぬ代り白(五)の打込みが嚴しくなつて來る。黒(十七)は(五)の打込を

凌ぐ手段であらうけれども此の場合時機尚ほ早し。なぜかと云ふに縦じや白が(五)へ打込んで来た所が(六)の白が緩んで居るから黒は(二九)へ開く餘地があつて(五)の黒は一向苦まぬではないか。だからコ、は手を抜いて黒(三)の締りを爲すが宜い。黒(九)は緩も亦甚だしと謂はざるを得ない。此場合は無論白(二)の挾撃を加ふべきである。白(三)も亦餘り挾ま過ぎる。(八七)か(二八)へ展開するが宜い。白(三二)のつけは一向詰らぬ。且つ黒(三三)とはねた時白が(四)と粘いだのは甚だ重い手で、夫れが爲めに後に黒から(八二)とつけられて上下何れか一方を搔取られるやうな結果を生じたのである。夫れよりは此の場合白は△印へつくべき筋である。其の時黒若し(二七)に押へれば白は(九)に跳るか(三六)の處を切るか二つの手筋がある。又

第二圖



黒が(九)に受ければ白(三六)へはね、黒(三)へ延びた時白(わ)に圍るを云ふ洒落れた手がある。或は黒(三七)にも押へず(三)にも受けずして(九)に引けば白(三六)へはねる筋を見つゝ(か)に詰めるが宜い。然る

に白此の手段に出でずして先づ(三三)へつけ(四)と粘いで其の形を重くし、而して(三六)へつけたのは宜いが黒(三七)へはねた時手を抜いて(三三)と二間に開いたのは賑ばり働きのない手で、一向其の意味が解らない。既に白(三六)とつけた以上は黒(三七)へはねた時△印を切るか、(三)へはねるか但しは(一)に押へるか此の三策中その一を擇ぶべきである。白(四)と打込んだ結果白(三六)へはねて振替つたのは一向利益がない、寧ろ無謀である。夫れよりは白(四)の手で(五二)の肩を衝く方が穩當である。黒(五)の押しは一向詰らない。此の手で(九)へ下つて實利を占めるが宜い。黒(八二)へつけた時白(八三)へはねて結局(三六)の一子を搔取られたの前に言ふた通り白(三三)(三四)と粘いで重くなつて居るから白(六)の方を助けなければならぬ爲めにコナナ不利の結果を來たしたのである。若し(三六)の一子を助けようとする(三六)(三三)(三三)の三目を取られて仕舞ふ。白(六)の押へは妙味がない、△印へ尖んで居る方が面白くないか。

▲第三圖 以下の著子省畧

黒(五)のつけは面白くない。(八)に詰めるか、(八)に一子を取切るか或は(四二)に切つて一子を取込む位のものであらう。黒(七)はドノ譜を見ても斯うなつて居るが何かの間違ひであらうと思はれる。本局は百五十一手で終局となつて居るが(七七)以下には大分間違ひが多いやうに思はれるから黒(七七)の手で(五四)と切り一子を取込んだものとして概算すると黒地は九十目餘、白地は八十目見當であるから黒の勝ちたることは明かである。

寛永於禁裏

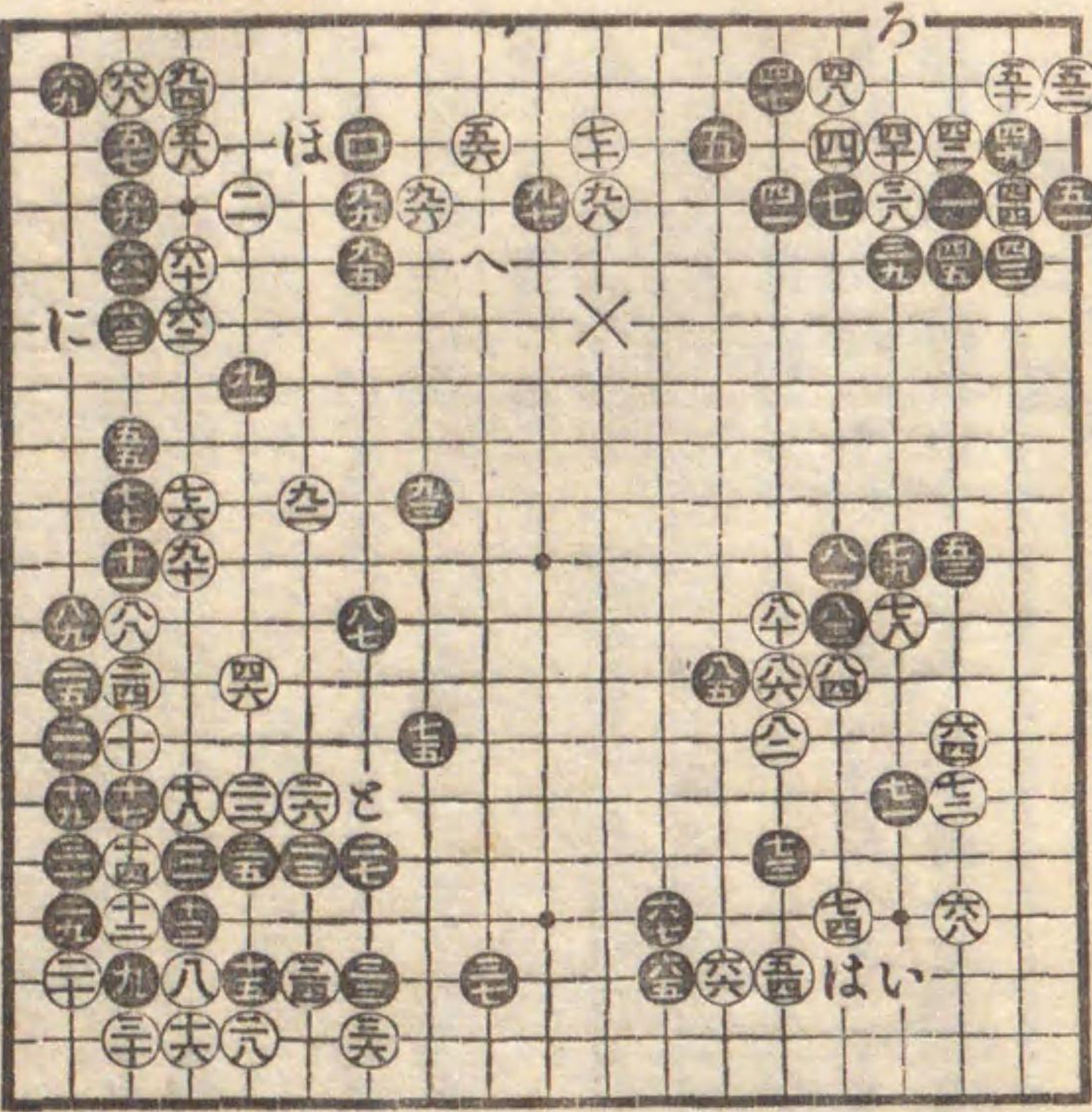
名人 井上 中村 道 碩

先 二世 井 上 因 碩 (一目勝)

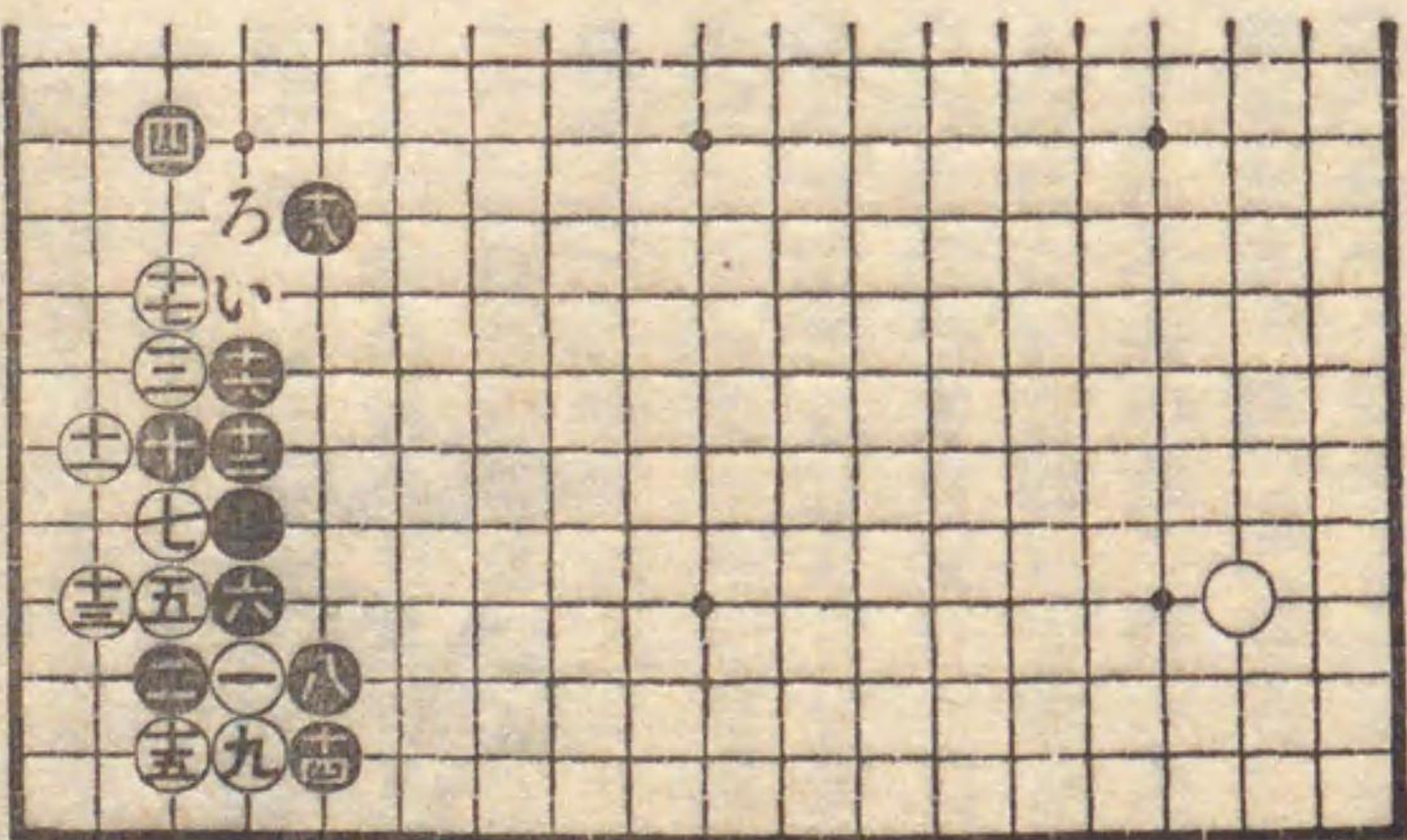
▲第一圖 白(三)つぐ

處へ三間に挟む方が宜い。併し此の場合黒(五)は明隅即ち(一)に打つ方が宜いのである。是は當時の碁風で大分流行した時代もあるが、併し此の手で黒(十三)へ衝當り白(十五)に延びた時黒(三九)に懸け粘ぐのが普通である。然るに黒(十二)即ち(四)の處に挟み返へ

第一圖 白(三)つぐ



すと他の模様によつては白に甲圖の如く打たれることがある是れは(四)の黒のない場合ならば無論白の方が悪いのであるけれども圖の如く黒が(四)と白に一向響かぬ堅い處へ詰めた結果となり



甲圖

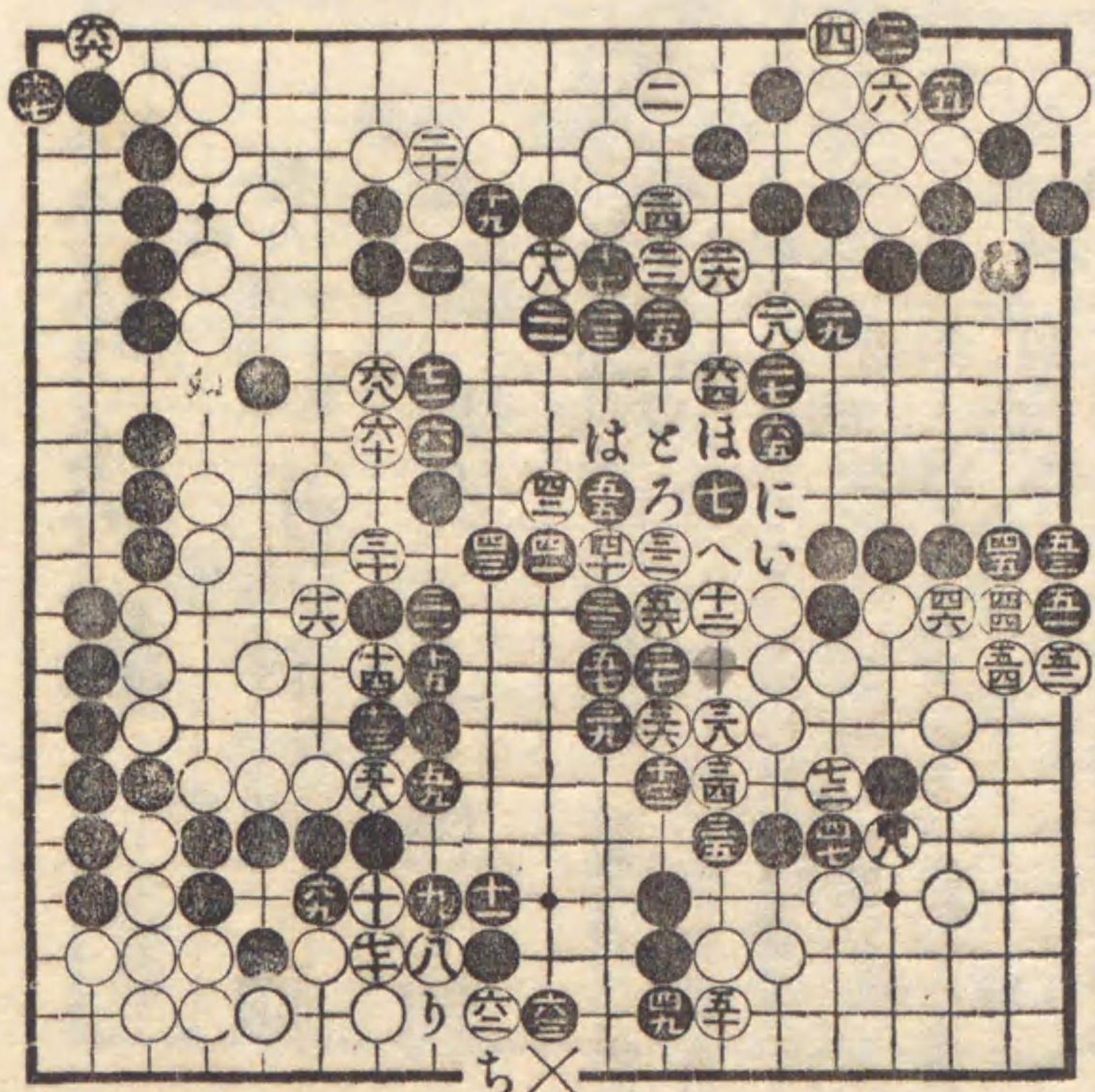
且つ後手となつては黒の方が悪いのである。或は黒(六)の手で(一)に押す手もあるがさうすると白は其の儘棄置いて後に(ろ)へはね出すと云ふ筋が残るのである。斯う云ふ打方もあるのだから黒(四)即ち本圖黒(十二)の挟みは考慮を要すべきである。黒(四七)の尖みは暫く見合せて唯(四九)に一目を切取つて居る方が利益である。と云ふのは後に外の關係で(ろ)に置く筋があるからである。黒(五)も好い

處には違ひないが此の場合隨一の好點は黒白ともに(五)の處である。然らずんば黒(三三)の手で(八)に掛るも亦一の趣向である。黒(五)は甚だぬるい。矢張り(七五)へ斜走するが宜い。白から反對に此處へ來られると白の姿勢が整ふに反して黒は受身になるではないか。然るに此の好點を閉却して黒(五)と一間飛んだのは何だか氣の抜けたやうの著子である。白(五)も誠に好い處ではあるが黒が手を抜いて居ることを幸なれ、何故に(五)へ煽らぬのであらうか。黒(六)の押しは敵の模様を厚くする結果を生ずから單に(一)へ斜走する方が軽くして宜い。黒(五)に詰めるよりは矢張り(五)へ煽る方が宜い。白(六)のはねは蓋し(八)へ打込まれる筋があるから之を防ぐ爲めであらうが、此の場合黒が(六)と受けたのは甚だぬるい手で詰り白に打込みの用心旁々打得をされた譯である。黒(六)の手

で(八)へ「ぼうし」に冠せたい。白(辛)も亦ぬるしと謂はざるを得ない。此の場合は(三)以下の黒は(五)(六)と一方に備へがあるから前の時とは大分形勢は違ふが白は自分の用心(五)(七)に斜走するか或は(七)に押すか此の二手の其一を擇むべきである。白(六)は如何あらうか。×印へ二間に飛ぶ方が自分の勢力範囲が厚くなる其の反對に黒の右側中腹の模様は薄くなる譯である。

▲第三 黒必勝に非ず 白(三)は筋違ひである。ナゼかと云ふに(八)に押し利く處であるから(十三)へ斜走する筋である。黒(四)へ下る手で(五)へはねる方が宜い。従つて白も亦(辛)に押へずして(五)へはねべきである。白(六)とはねたのは一寸面白いやうであるが是れは損である。ナゼかと云ふに此の手で先づ(ろ)に突出し黒(は)に延びたとき白(に)につける筋がある、さうすると、黒(い)、白(は)、黒(へ)、白(と)、黒(五)の切りとなるから圖の如く打つよりは餘程黒地が減る譯である。或

第二圖



先づ(ろ)に突出し黒(は)に延びたとき白(に)につける筋がある、さうすると、黒(い)、白(は)、黒(へ)、白(と)、黒(五)の切りとなるから圖の如く打つよりは餘程黒地が減る譯である。或

は黒最初(ろ)に突出さずして(に)へ附越す筋もあるが結果は矢張り同じ事である。白(三)の切りは後手四目の得に過ぎない。本局は黒が一目の勝ちと云ふのだから餘程大事の碁である。依つて白(七)の手で×印にはねて居れば斯う云ふ處は黒から(ち)へはねらるれば白は必ず(し)に粘がねばならぬ處であるから「ヨセ」勘定の場合に於ては白×印のはねは先手三目と見るべきである。ソコで黒が(七)の一子を粘れば白は(ぬ)に突出してヨセて行けば勝敗は分らぬ碁になつて仕舞ふのである。然るに結局白が一目の負けとなつたのは遺憾の極みである。



寶永の碁戰

名人五世 本因坊道智(二目勝)

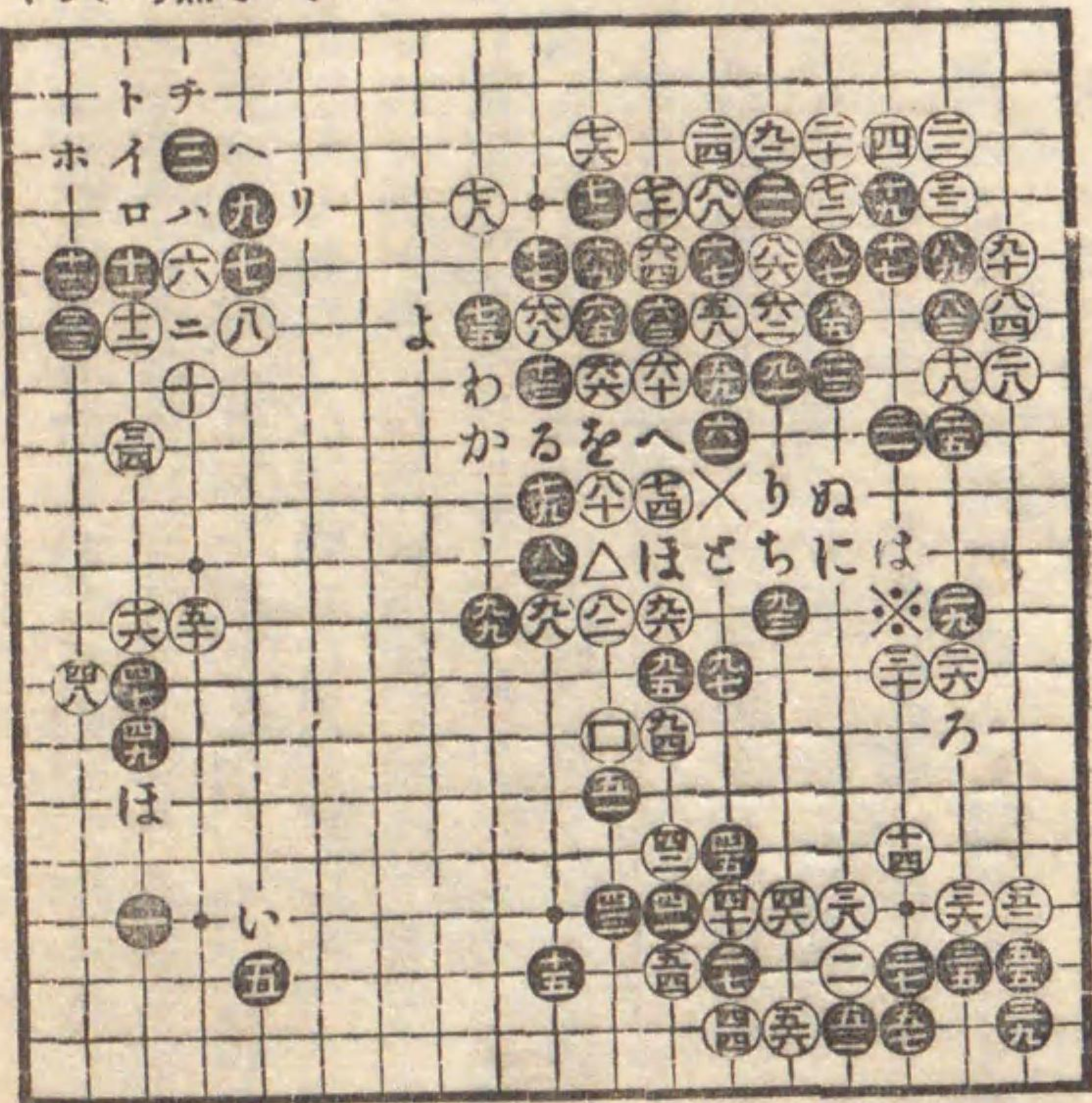
名人四世 井上因碩(先番)

▲黒、勝を逸す

白(四)と打つは如何であらうか。斯く打つと碁が一方に偏して白は割合に負けする譯である。(五)に掛かるか(十)に掛かるのが普通である。黒(五)と小桂馬に締つたからとて悪いと云ふことはないが、此の場合黒(三)の釣合を保つて(い)印に高く締る方が宜い。黒(十二)のつけは(五)の黒が(い)印

第一圖

白(チ)の時黒(イ)つ



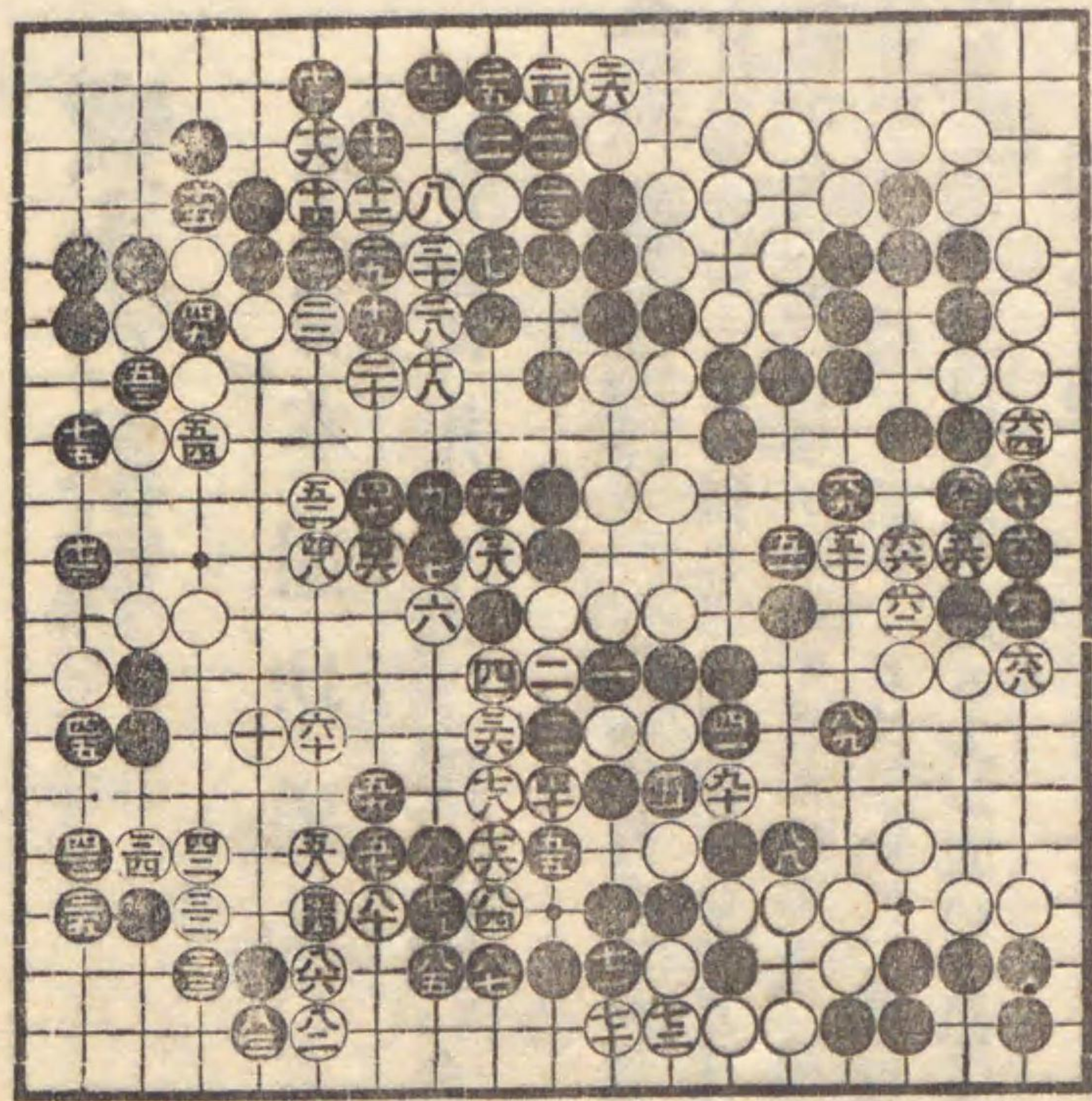
の黒が(い)印に一間高締りの時であれば黒(十六)と打つ趣向もある。其の結果は白(イ)、黒(ロ)、白(ハ)、黒(ニ)、白(三)、黒(ホ)、白(ヘ)、黒(ト)、白(チ)、黒(イ)につき、白(リ)となる。是れは黒が先づ隅で儲けて而して

(三)邊へつけて「シテウ」の當りを打つて厳しく戦ふと云ふ手段である。黒(十五)は急ぐ處でない。最も(五)の黒が(い)に締つてあれば圖の如く打つ方が宜いけれども、(五)と低く締つてある時は白から詰めて來られても一向響かぬから黒(十五)の手で(六)に打つ方が宜い。白(六)は稍々狭きに失する。モウ一路進んで(四)に打ちたい所である。黒(九)は所謂趣向であるが先づ(全)へ尖むのが普通である。其の時白(三)に斜走すれば黒は(三)に掛け白(八)へつけ黒(五)に約へ白(九)へ突當り黒(ろ)に打つのである。或は黒(五)へ尖む手で(三)へつける手もあるが此の場合では面白くない。黒(三)のつけは宜しくない。圖の如く(三)と延びられると隅が固まつて仕舞ふ、輕く(ぬ)へ飛ぶが普通であらう。次に黒が(三)と引いたのは重い姿で(三)へつけた以上は此場合矢張り輕く(に)へ斜走して居る方が宜い。白(三)は辛抱し過ぎた、(は)へ詰めて居たい處である、白(六)のはねは不可である。此の手で×印に押し居なければなるまい。然るに白(六)へ跳ね黒(七)に取つた時白(六)に煽つたのは騎虎の勢ひ已むを得ぬのであらうが、(コ)、に厳しい手がある。それは黒先づ(八)に曲り白(八)に突切つた時黒(八)とつける手である。(六)(六)の二目を取られては最早や白に勝算がない。因つて白(へ)に粘ぐとすれば黒は先づ(九)にあてる、白は(八)に取る外なかるべく、ソコで黒(は)、白(×)印、黒(と)、白(り)、黒(ち)、白(ぬ)となつた時、黒×印に沿ふて白を擒にして仕舞ふ手段がある。其の時白(る)へはね出せば黒(を)に切り、白(わ)にあて、黒(六)に粘ぎ、白(か)に粘いだ時黒は(よ)に延びて居る。ソコで白△印に切つた處が黒の二目は「シテウ」の當りがあるから取ることは出來ない。斯う云ふセドイ手があるにも拘らず白が(六)へ煽つたのは蓋し

名人 本因坊道智 (六目勝)
名人 井上因節 (先番)
(寶永六年)

(二八)

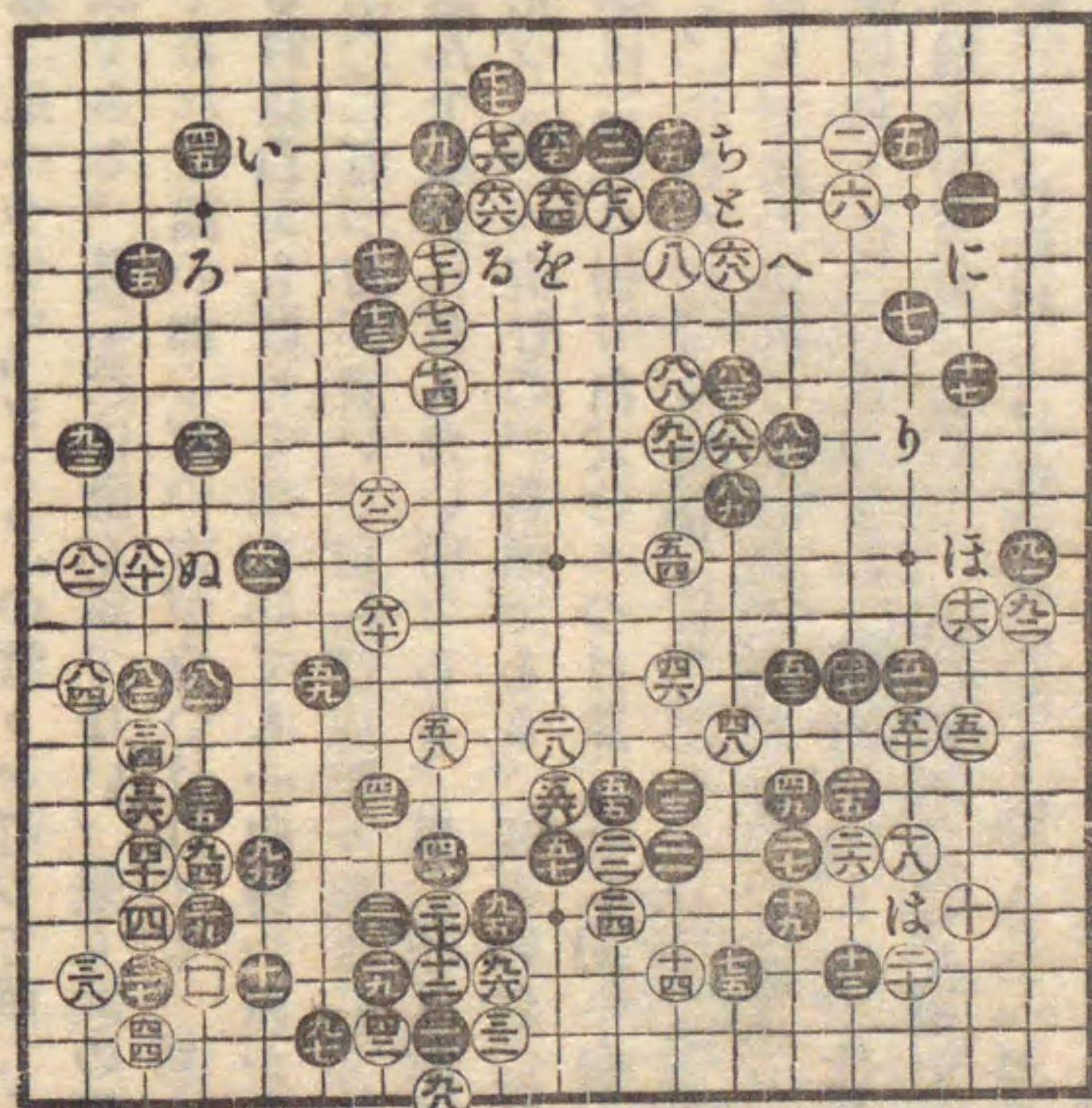
(六〇)(六六)の二目を取られても負け、さりとて二目を助けて下の方を打たれる手順になつても負けと見たから二目を取られたら百年目と斯う度胸を据えて先づ(七六)にはね次で(七六)に煽つたのかも知れない。然るに黒(九七)へ飛び白に(八〇)と並ばれて勝を逸したのは遺憾の極みである。黒(九五)のつけは悪い。此の手で※印に押へて居なければならぬ處である。然るに黒(九五)とつけた爲めに白に(六六)と押され第二圖の如く白に(六六)と跳ねられて模様を作る一方に黒が攻められる結果を來たしたのには不覺である。(第二圖)白(五八)の手にて先づ(六九)へ延びるが宜い、黒は何とか應手をせんければならぬ。ソコで白(五八)に延びるが宜い。左すれば第一圖に於ける黒(三九)の一子は北げることが出来ない。然るに白が(六九)の延びを打たなかつた爲めに終つた(六九)と延び出されて取ることが出来なくなつた。要するに此の碁は黒の勝に歸すべき機會があつたのに、其の機を逸して遂に二目の敗となつたのは惜むべきである。



第二圖

に(六九)と延び出されて取ることが出来なくなつた。要するに此の碁は黒の勝に歸すべき機會があつたのに、其の機を逸して遂に二目の敗となつたのは惜むべきである。

▲黒白の策戦 黒(三三)と挟むも一策であるが、當今は黒(一)に打つのが普通になつて居る。白(四)は敢て悪いと云ふ程の事はないが、布石上縁が離れて居るのは面白くない。先づ左上隅(ろ)か(翌)に陣取るのが普通の形である。白(十)は如何であらうか、此の局面では(は)に打つ方が面白くはないか、左すれば黒が(十)と掛つた時に二間若くは三間に挟む間合ひが好くなる。換言すれば圖の如く黒(十二)、白(十三)となるものとせんか、

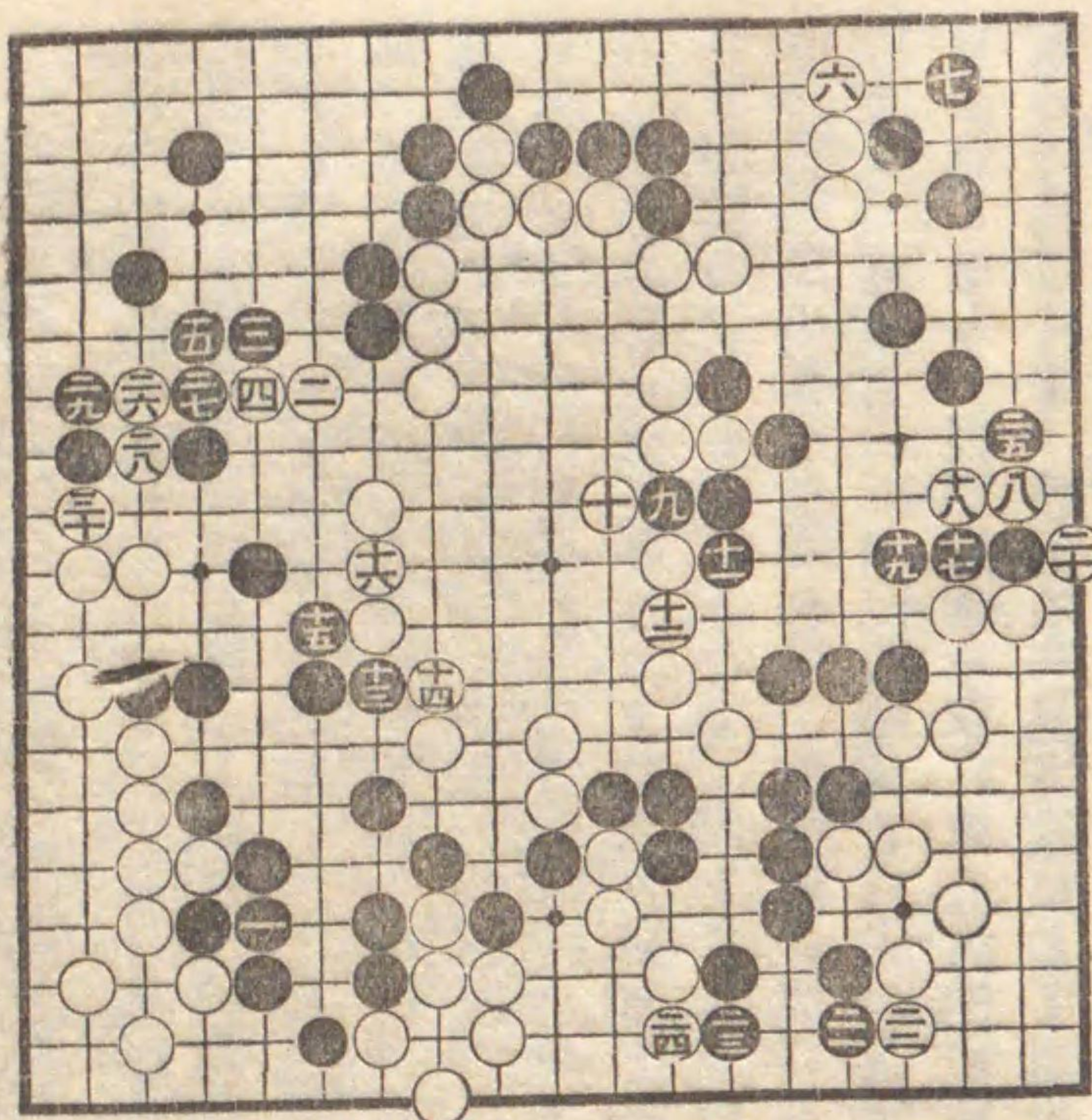


第一圖

白(十三)は何處に打つが宜いかと云ふと(十)の處に非ずして(は)の處である。黒(十五)も良い手であるが、此手で黒(五二)へ二間に挟み返し白(十八)に尖みたる時黒(は)へ開いて居る趣向もあ

る。是れは白を一方に凝らせやうと云ふ戦略である。白(十六)は即ち自己の發展かた(じ)の附越しを狙つたのであるが、其の時黒が(十七)と尖んだのは感心しない。黒先づ(八)に掛け白(と)に應じた時、古風であるが黒(五)の肩を衝くも亦一策である。若し一手で(二)の附越しを凌ぐ積りなれば後手ではあるが黒先づ(ち)に一間飛ぶが宜い。白は(へ)に尖む外なかるべく其の時黒(り)に一間飛ぶのである。左すれば(三)以下の白を攻める場合に餘程強味がある。黒(十九)の尖みは時機尙ほ早し。此の場合黒(蓋)に挟み返し、白(九)に尖みたる時黒(ぬ)に陣して雄大の形勢を張り而して(十)(十三)の黒は何れか一方を棄て、白を凝らして打つと云ふ方針を執るべきである。黒(二五)は面白くない。ドウも後手に甘んずる積りならば白が(三三)

第二圖



とつけた時黒(三三)に延びずして單に(三六)へ尖みつけ白(三五)へはねた時黒(四)へはねて居る方が形が好いではないか。白(三八)の煽り非なり。(十四)以下の白が薄弱の場合なれば圖の如く發展かた(敵を

攻むる意味に於て(三六)と斜走することもあるが(十三)以下の白が丈夫であるのに(三八)と煽るのは感心しない。此の場合白(四)に尖みつけるが宜い。黒(三三)は敵の鐵壁に沿ふた形で一向響かない。因つて此の手で黒(六)に打ち而して白(四)に尖みつけた時黒(ぬ)の肩に打つ趣向が面白からう。或は白(四)に尖みつけずして(九)へ尖まんには黒は(四)へ斜走して敵の根據を奪ふが宜い。黒(五)へ出で、而して(五七)と切つたのは蓋し(十三)以下の黒の用心に備へたのであらうけれども、殆どダメを切つた姿である。之に反して白の形勢を見ると大分模様は厚くなつて來たから之を利用して(十三)以下の黒を攻めつゝ自然に地を作られる結果を生ずる。故に黒は(五)の手で白の模様を消しながら自己の領域を擴げる趣向で(る)へ斜走するが宜からう。此の場合(を)に斜走するは面白くない。黒(六)の趣向は感服しない。(十一)以下の黒は決して死ぬ氣遣ひはないから今度(る)に斜走せずして單に(七)へ飛んで模様を消すべきである。黒(六)の時も矢張り(七)へ飛ぶ方が宜いのである。然るに圖の如くなつては最早や恢復の道がない。

名人五世本因坊道知

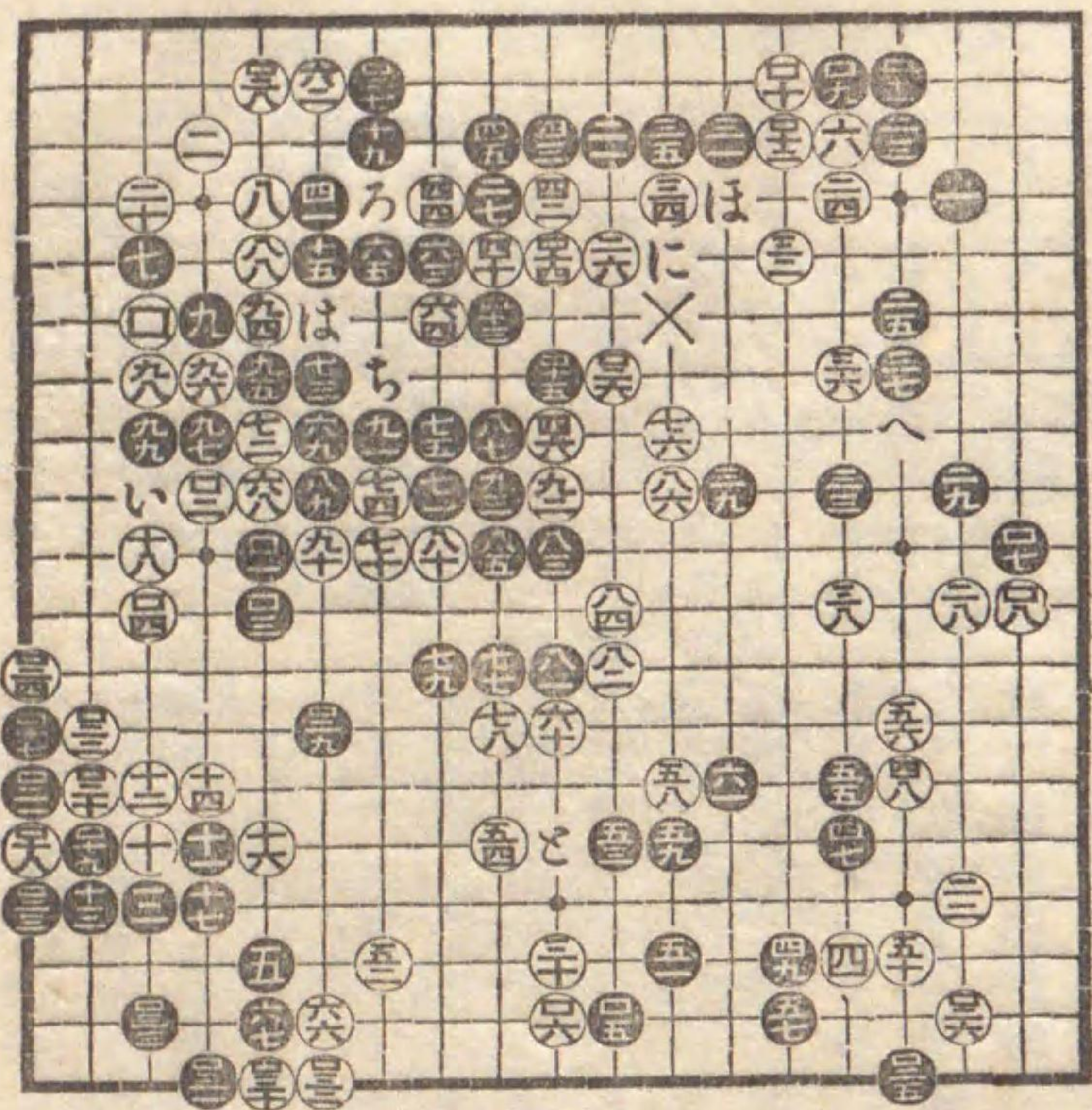
道知本姓神谷氏江戸の人なり、父を十郎右衛門と云ひ母は大野氏世々本郷元町に住し御小人目付小頭役を勤む。道知性温和にして沈毅、八歳甫めて碁に志し、十歳道策の門に入り、元禄十五年十三歳にして師家の箕裘を襲ひ五世本因坊となる。道知の始めて坊門に入るや道策一見池中のものに非ざるを知り深く鍾愛し常に左右を放たず教授せり。是れ道策の意、道策、策元天折し未だ跡目なきに依り道知を跡目に擬し只管碁品と年齢の進むを待てるなり。然るに人生の測る可からざる事浮雲朝露の譬喩に漏れず、道策齡耳順に達せず遽に歿するに臨み、道知を以て本因坊跡目と内定し高弟井上因碩(道節)を後見とせり。因碩遺命を奉じ専心道知の薫育に従ひしに道策の先見遠はず、道知の碁品秀抜にして進歩の速なる因碩も驚く許りなり。元禄十六年十一月二十日始めて御城碁を勤め安井仙角(四世)に對し定先(四段格)五目の勝を得たり。因碩之れを見て一層督勵の效空しからず碁品亦頗る進みたるを見今は仙角と互先六段となすも遜色なしと信じ書を仙角に送り今年の御城碁には道知互先たらん事を申し込みたりしに仙角之に應せず爭碁となりて實永二年の御城碁より翌年に亘り道知先互先の手合三局を連勝し遂に仙角より願下を爲し事済となり道知十七歳の時道策の弟子にして先互先位の手合を定先となし之を試るに一局として敗を取りたる事なし茲に於て多くの門下は益々道策の識見と道知の技倆の超凡に心服せざるはなし。此歳實永三年道知は後見因碩と定先十番の對局をなし正月より三月十五日に亘り終局せり。此勝負因碩六番勝、道知三番勝、一番市あり、井上四世因碩歿後道知は始めて享

御城碁

准名人 五世 安井 仙角
六段(先) 六世 本因坊 知伯
(享保十二年十一月十七日於御城御前)

▲白(九四)つけの變化

(い)に三間夾みをするのが普通である。黒△の尖みは秀甫以前までは相尖みと稱して流行したけれども割合ひが悪いので



第一圖

打つ者がない。白△は所謂趣向であらうが、コには種々の手段がある。(ロ)に割打をする手段もあり、又(△)に著ける策もある。参考の爲め白(九四)に著ける結果はドウなるかと云ふ

保六年六月五日三十二歳を以て碁所となれり。同十二月番牧野因幡守より知伯の親類書を差出すべき旨注意を受け直ちに提出して同十八日跡目願聴濟となる。同十二年二月四日京都より道悦死去の飛報來りしかば道知は其旨黒田豊後守に届出づ。同六月十八日晝八ツ時道知突然急病起り遂に逝く。依つて因碩朴入、長谷川知山等協議を遂げ翌十一日正午知仙は跡目知伯の代理人として月番寺社奉行小出信濃守役宅に出頭、本因坊道知死亡の届けを差出せり。役人原九郎右衛門知仙を呼びて本因坊末期の書付遺あるべく、入用に付取調べの上明五ツ時迄に差出すべしとの沙汰あり、翌日之を持參し始めて跡目知伯家督を許可せらる。道知享年三十八歳法諡を日深泉位と云ふ、本妙寺に葬る。道知は碁聖道策の先見に違はず其の進歩の迅速なる其奥秘に精通せる古來多く比を見ざる所にして當時苟くも道知の敵手たるべきもの三家の外に求むることを得ず、而も三家中にも亦道知に對し定先を支ふるものなかりしは明白の事實なりし。然れば古人道知を評して一生中全力を傾注して對局せしものは甚だ稀なるべしと蓋し空言に非ず寔に亞聖の大國手と謂つべきなり。

(三〇)

圖 甲

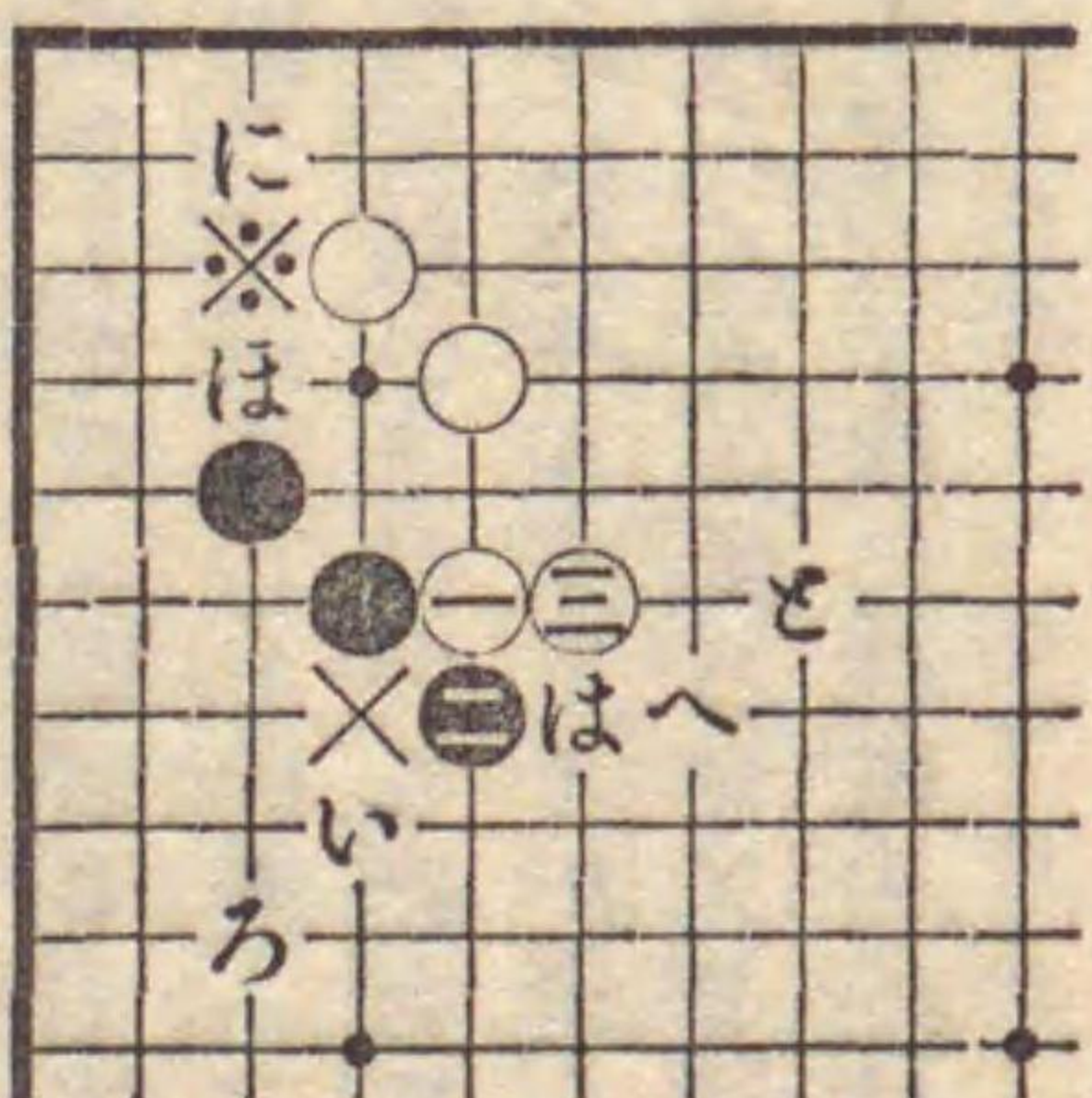


圖 乙

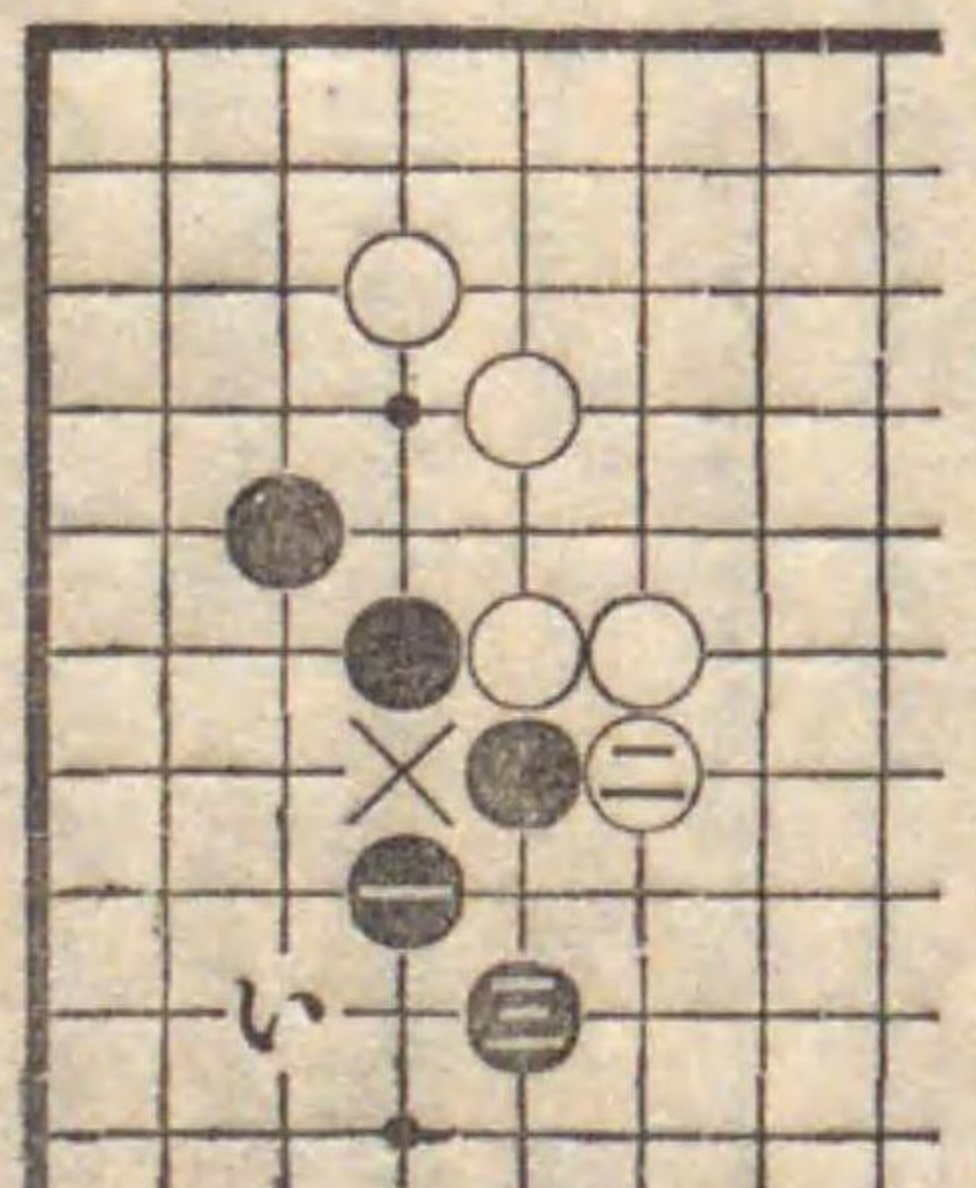


圖 丙

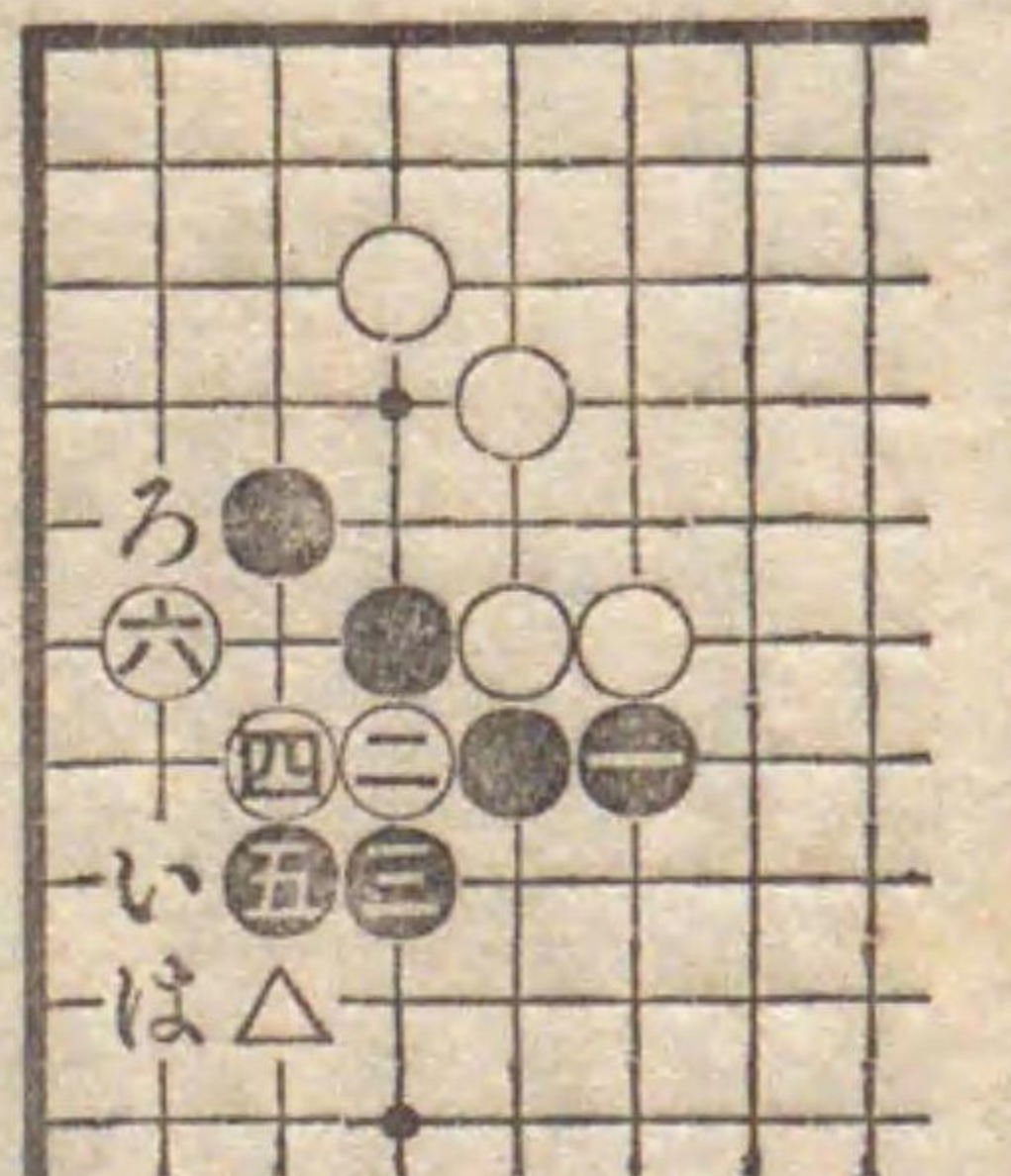
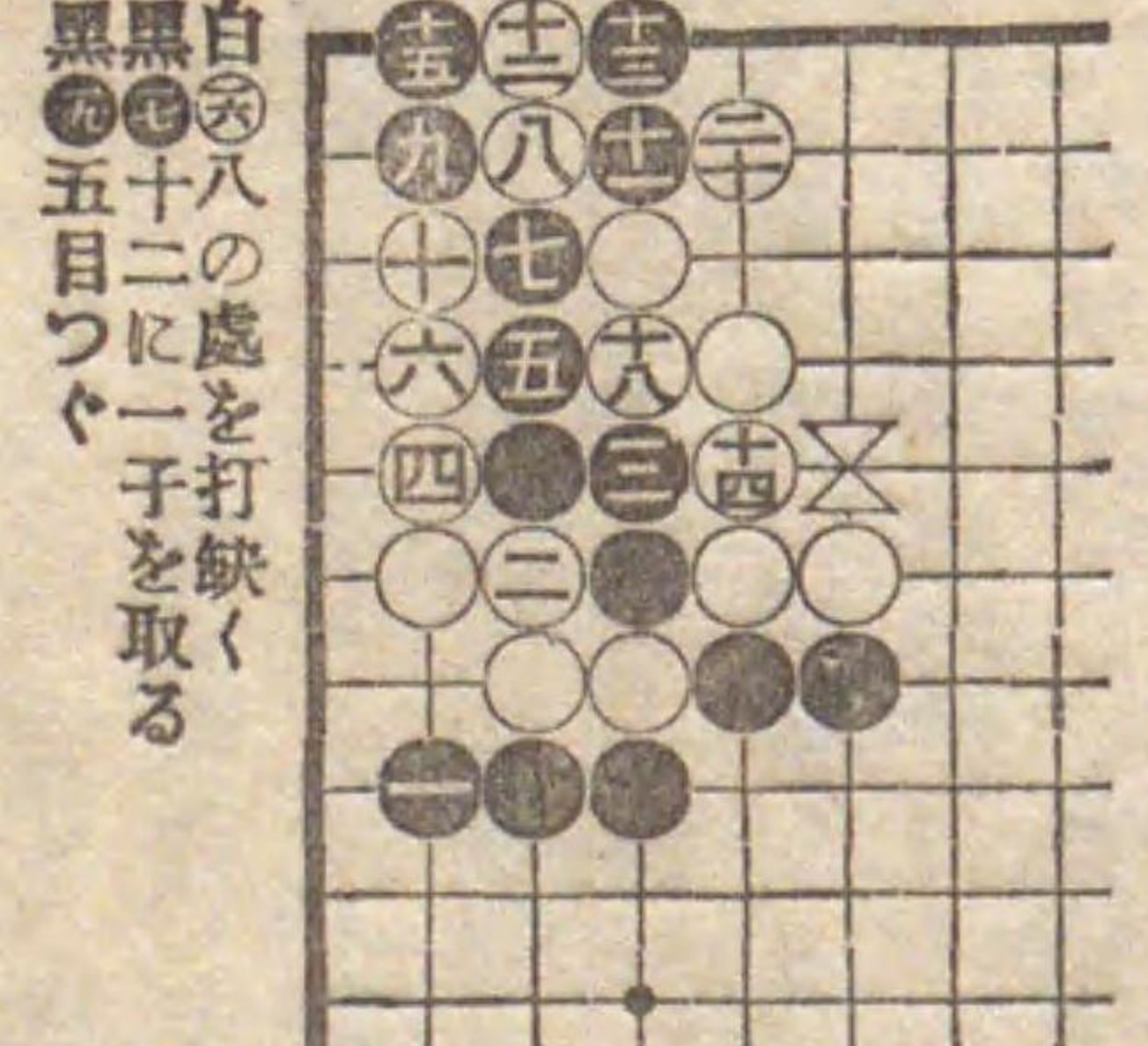


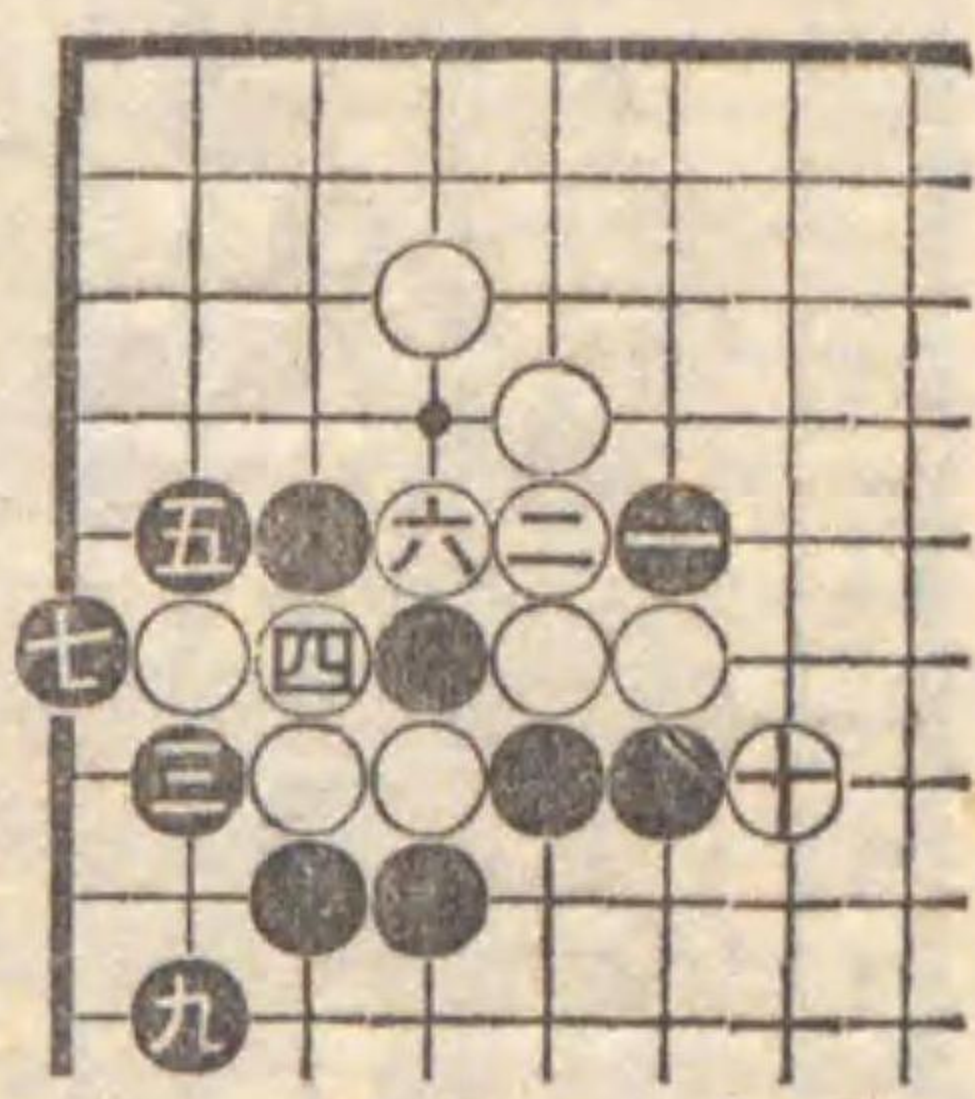
圖 丁



と、是れにも種々の變化がある。即ち甲圖の如く白△と伸びた時、黒に於ては(い)に掛粘ぐ手(ろ)に斜走する手(は)に押す手と三通りある。假に黒(い)に掛粘ぐとせんか、乙圖の如くなるのが普通である。若し黒が(い)の手を抜くと白から(ろ)の處へ懸けられるから圖の如く打つべきである。第二黒(×)乙圖に掛粘ぐすして(い)に斜走すれば白は手を抜いて他に轉ずるか、或は(ろ)へ曲るかである。第三、黒乙圖の如く(二)にも掛粘ぐす(い)にも斜走せずして(三)を押さば如何。白は×印を切るべく其結果丙圖の如く白△へ尖む手順になる。左すれば黒は(い)に下るか、(ろ)に押へる外はない。ソコで黒若し(ろ)に押ふれば白(い)、黒(は)、白△印の切りとなる。左すれば黒は上下何れか二子を取られて脱けられて仕舞ふ。左りとて黒(ろ)に押へずして(い)に下れば丁圖の如く隅の黒は全部擒にされて仕舞ふ。因つて黒は丁圖の如く(二)にも下らず又丙圖の如く

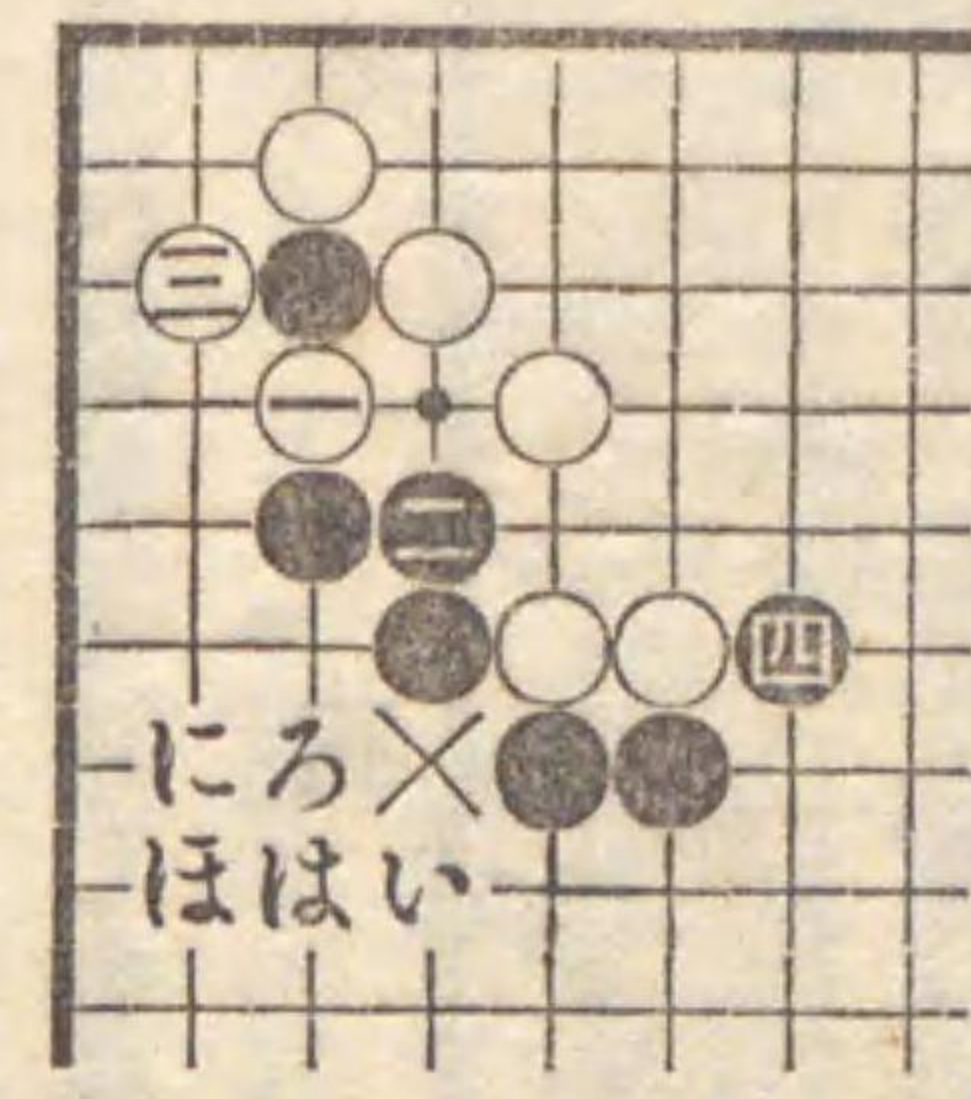
(三〇)

戊 圖 白 四 つ



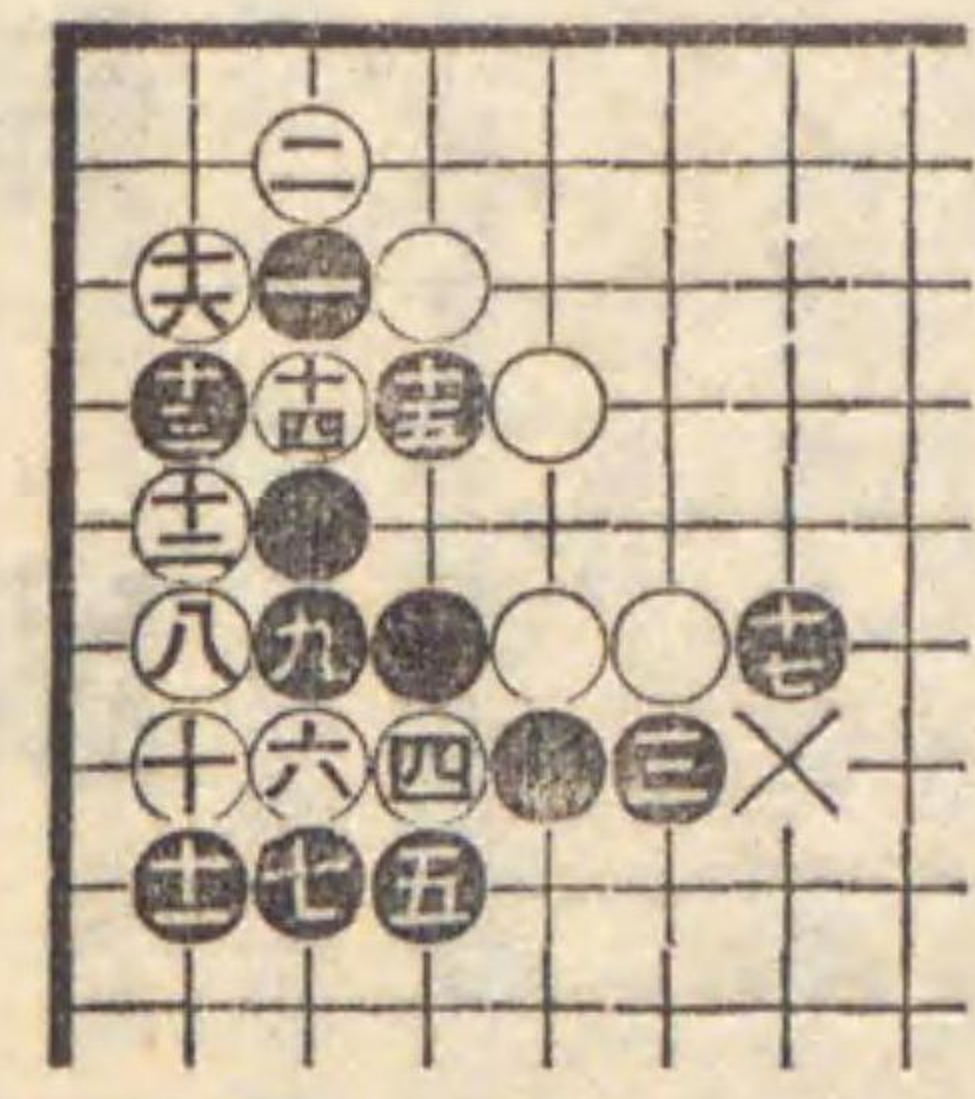
此の一局部だけでは黒の方が損であるから大抵の場合、丙圖のやうに黒(二)と押す手は考慮を要するのである。尙ほ變化がある。甲圖に戻りて説明せんに、黒(い)にも掛粘がす、(は)にも押さず、(ろ)にも斜走せずして、先づ※印へつける手もある。ソコで白(に)へ跳ねた時黒(は)に押すのである。其の時白には二様の手段がある。一は(は)に跳ね込む手、二は(へ)に跳ねる手である。假に白(へ)に跳ねるとせ

癸 圖



ぎとなるのが普通であるが、白(へ)に跳ねずして(は)へ跳ね込めば則ち癸圖の如くなる。ソコで白若し×印を切らば黒は(い)に跳ね、白(ろ)、黒(は)、白(に)、黒(ほ)と押切り三目を棄て先手を取るべきである。モ一ツ變化がある。夫れは庚圖の如く打つのである。斯うなつたらば黒は六目を棄てる方針で打つが宜い、併し劫の味が残つて居るから白は中々旨く取切ることが出来ない云ふのは黒(二)と白(三)の交換あるに拘らず、白が強引に(四)と切つたからである。白(四)の切りは考慮を要するのである。

庚 圖



前に言つた通り白(十)へ跳ね込むか×印へ跳ねべきである。扱て黒(十)の懸けは蓋し今説明した通り(九)の著けを嫌つて先づ斯く懸け白(ろ)に應じた時黒(十八)に詰めやうと云ふ心算であらう、然るに白に手を抜かれて、(十七)へ跳ねられたのは止むを得ないが、(十六)に開かれたのは黒の不利である。故に黒は單に(十五)に詰めて居るが宜い。其の時白先づ(十六)に跳ね、黒(十七)に粘り白(十八)に著ければ黒(十九)に跳ね白(二十)に伸びた時黒(二十一)に夾む趣向もあるから差支ないのである。黒(二十)は感心しない。或は(二)に印へつける手段がないでもないが、夫れは此の場合では面白くないから黒は單に(三)に掛け、白(四)に飛んだ時(五)に押へて(六)の出切りと(七)の打込を防いで居たい處である。黒(九)へ詰める手で先づ(三)に飛び白(三)に尖つた時(四)に一間飛んで居る手もある。邊側の方は損であるが斯く打方が(五)以下の白に厳しくコタへるのである。黒(七)は如何あらうか、先づ此手で一ツ×印に打つて白の應手を試みて居る方が面白からう。然るに黒單に(三)に飛び白(四)以下(六)に飛ばれるに至つては大分働かれた姿である。白(五)と堅い方へ詰めたのは面白くない、單に(七)に一間飛んで居る方が軽くもあり、右側の黒に對する響きも強い。白(八)の突出しは旨い手だ。黒(九)に押へれば白(九)に突出さうと云ふ趣向で、其の時黒(十)に切れば白(十)へ突出して兩斷して仕舞ふソコで黒は止むを得ず(六)に突出し(九)に粘りで振變る趣向に打つたのであらう、此處では大分損をしたやうであるが併し先手を取つて右上隅に於ける黒(七)の尖みと(六)の跳ね粘りを打ち尚ほ其他の先手廻りをして市に打上げた手腕は敬服の外はない。

六世伯元の出世碁

准名人 六世井上因碩

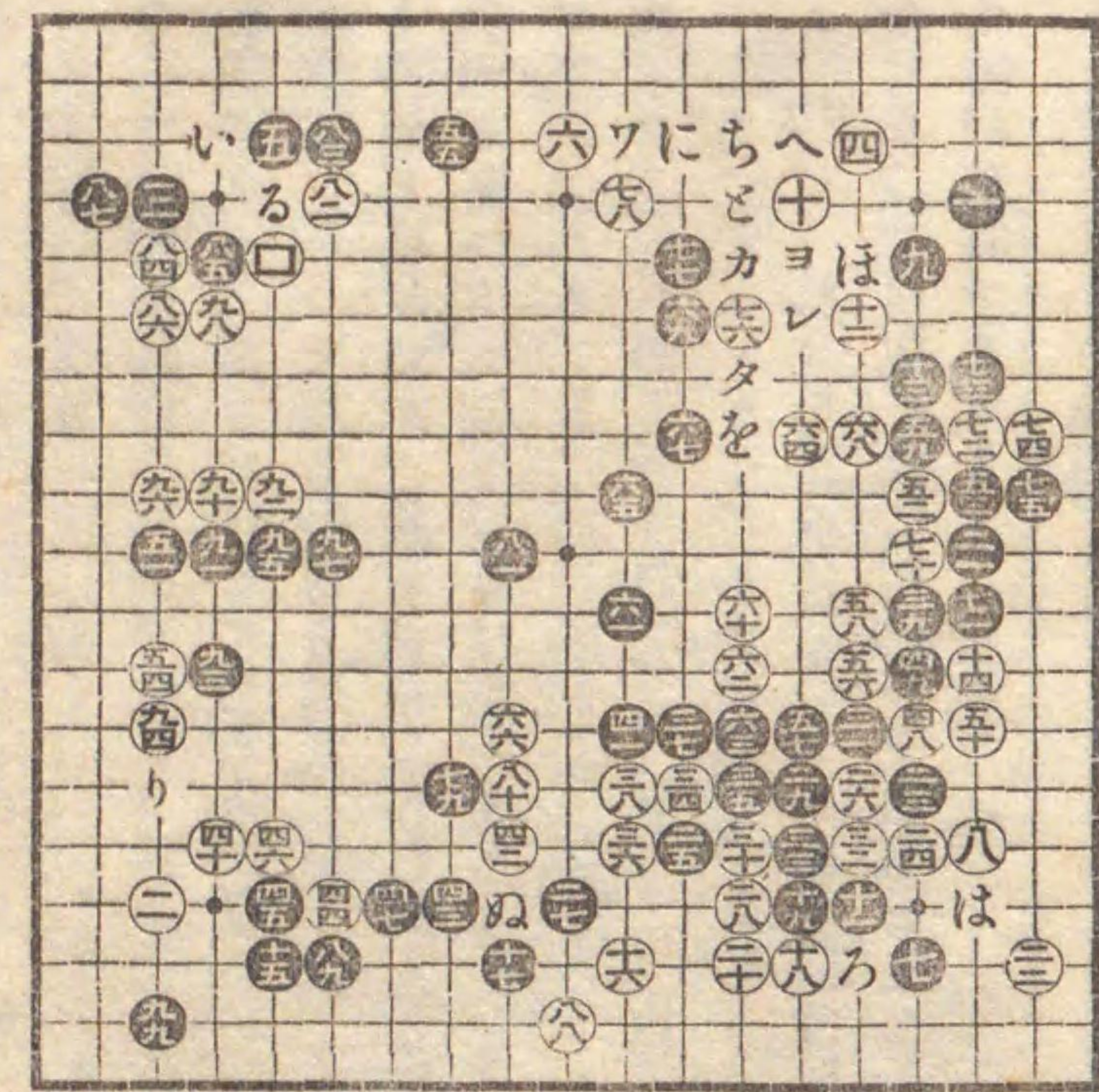
六段 八世本因坊伯元(三目勝)

(寶曆元年十二月十七日於御城)

▲伯元の出世碁

白(三)は一向響きのない著子である。謂はど敵が北地を占領するならば我れは南地に據ると云ふ一向敵對行

第一圖

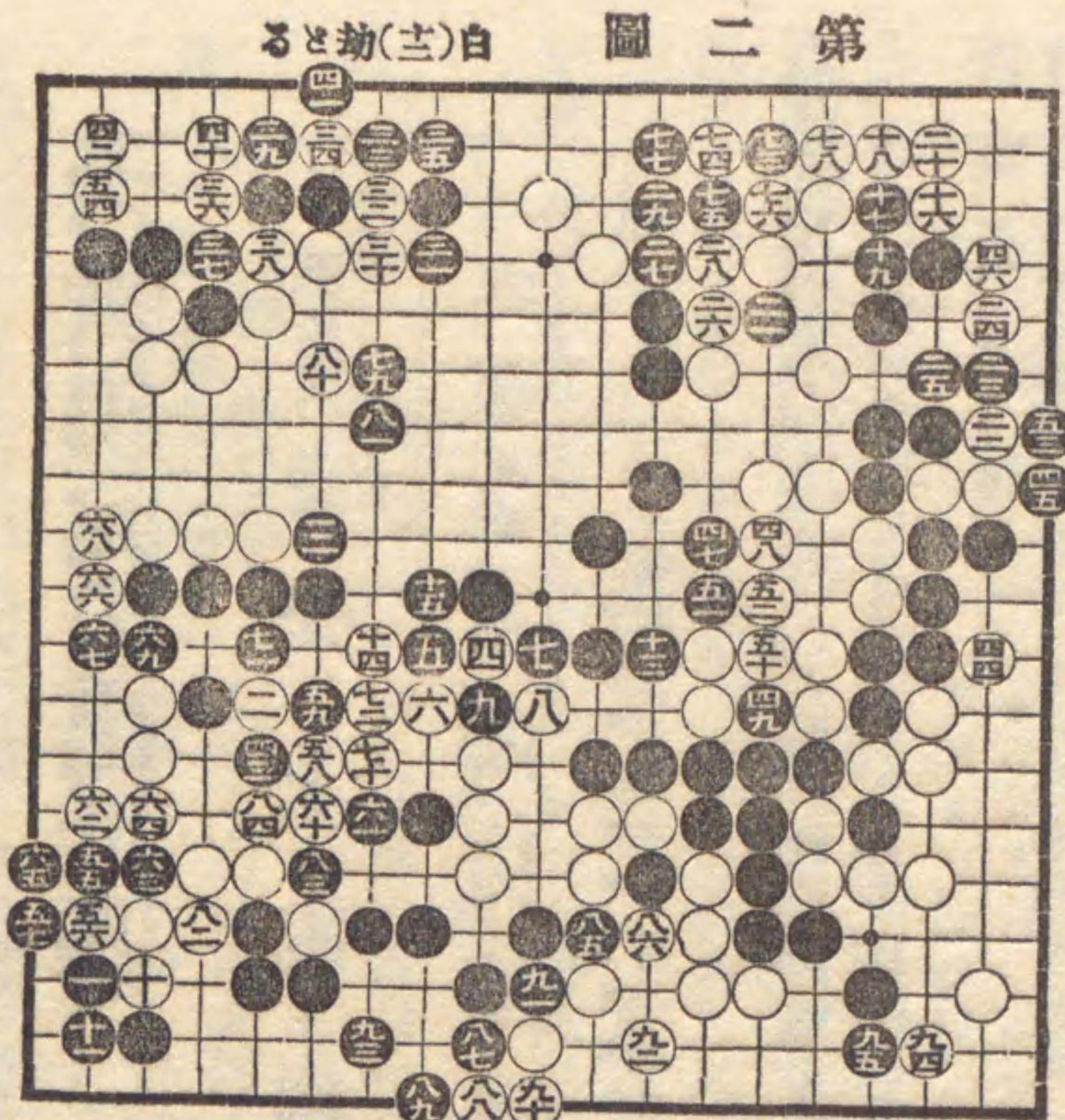


爲のない打方である。普通(い)か右下隅方面に打つべきである。黒(七)はヌルイ、此の場合(ろ)の目はづしが配置上の最要處である。若夫れ黒が(ろ)に據つて居らんに白は(は)に懸かる

ことは出来ないものである。ナゼかと云ふに(は)の白が若し右側面へ開くか(二)の黒を夾むかすれば忽ち(三)に懸けられて位を低くされて仕舞ふ。換言すれば(ろ)の黒は(は)の白を牽制して(二)の黒を攻むることの出来ぬやう暗に働いて居るのである。然らば白(三)へ懸ければ宜いではないかと謂はんか、左すれば黒に(は)に打たれて右下隅を占領さるゝ損あるを如何にせん。然るに策筈に出でずして圖の如く黒(七)と打ち白(八)と懸かるゝは黒の不利である。抑も此の(八)の白は右側面に發展し得る好地位に在り従つて(二)の黒が攻めらるゝ位地に陥るのである。白(十)は所謂相尖みで最早や今日に於ては廢れて仕舞つた。其の譯は假令黒が(九)へ打込で來た所が白(十)に著けて打つ趣向もあり、又黒(九)へ打込で來た所が白(十)へ懸けて來れば白(八)に匂ひ、黒(七)と白(十)と飽くまで匂つて差支ないのである。故に白は(十)の手で普通の如く(五)に開くべきである。其他趣向に由つては一路控へてモクシタ或は三間乃至(十八)へ夾む場合もある。黒(十一)はヌルイ。ナゼかと云ふに斯くて黒(三)に懸けても(五)に飛んで逃げられて仕舞ふし、又(七)へ三間に夾んでも白に如何やうにも應手の仕方があるのみならず、黒が(十二)と尖む前に(七)へ二間に夾みたりとせよ、黒はヨモヤ(十二)に尖みはすまじ、必ず(は)へ尖みつけるであらう。然るに圖の如く打ち(十)は詰り黒は後手で(十一)と尖んだ譯になる。斯う打つ位ならば最初黒(七)の手で(ろ)に打ち白(は)に懸つた時(十六)へ三間に開いて居る方がマダ利益である。白(十六)は三間に夾むのが普通である、圖の如く打つも亦趣向である。黒(三)と堅い處へ詰めて行くのはイカヌ、白の構へが低いから詰めて見た所で一向徹へぬではないか、此の場合左側(り)へ一間に夾撃すべきである、或は(六)へ二間に

夾んでも宜い。白(三六)は一考を要する、此の手で(四九)に著ける方が宜い。然るに圖の如く打つて白(三三)へハチ出す手順になつては聊か筋違ひの形である。黒(三五)は急いで打つに及ばぬ處である、(四二)に押し居る方が嚴しい。黒(五五)は(五七)に一間高に締つて居る時ならば宜いが、低く小桂馬締りでは餘り狭過ぎはせぬか。此の場合(五五)に飛んで居る方が宜い。白(六四)と堅い方へ接近するは如何あらうか(五七)へ二間に飛ぶ方が穩かである。黒(七七)は如何にも働きのない手である、先づ此手で(七九)の肩を衝き白(七七)、黒(カ)、白(ヨ)、黒(タ)、白(レ)黒(ニ)へハチで打つ方が働きであらう。

▲第二 黒(三五)は單に(四二)へハチで三目を取る方が宜い、次に黒(三三)は單に(三三)に粘いで隅地を全うして白二目を助け、黒(三五)は單に(四二)へハチで三目を取る方が宜い、



▲關山仙太夫曰 黒打方大に面白し伯元此基により六段になりしと聞く。

六世本因坊知伯略傳

享保七年四月知伯十三歳にして月番寺社奉行牧野因幡守に跡目願を差出し同六月大久保佐渡守役宅に於て開届の旨言渡さる。同十一年十二月より十人扶持を受け翌年六月十八歳の時道知の死去に依り同九月四日家督を相續して六世となる。此歳十一月十七日碁級六段を以て御城碁を勤む。

享保十八癸巳年八月二十日薄暮知伯卒倒す、家族大に驚き醫師正伯及び各碁院に急報したるも來集に先ちて瞑目せり、茲に於て仙角、因碩、門人及醫師正伯代理丹羽正因協議の上知伯の門人佐藤秀伯を以て家督と定めて願書を認め即時因碩をして月番寺社奉行松平玄蕃頭に差出し許可を得たり、知伯享年二十四歳、法名を日了呆位と云ふ、本妙寺に葬る。

五世安井仙角略傳

仙角は近江の人、父を小路權太夫と云ふ初め田中春哲と稱し後仙角と改む、古仙角門下にして手合准名人なり。

仙角は長谷川知仙の歿後古仙角の再跡目を襲いで安井家五世となり明和九辰年十一月十七日の御城碁に於て初めて門下より阪口仙徳を分家として推選し許可を得たり仙徳は碁品六段にして其の御城碁に列するを得たるは道策時代の八代の例に依るものなりと云ふ、蓋し外家の御城碁に列するは稀なるを以てなし。

仙角安永四年(烈元時代)家を原仙哲に譲り元丈の世寛政元酉年十二月十六日老歿す行年七十九歳、法名を高石院仙角日慰信士と云ふ江戸深川淨心寺に葬る。

於ける戦國時代の争碁

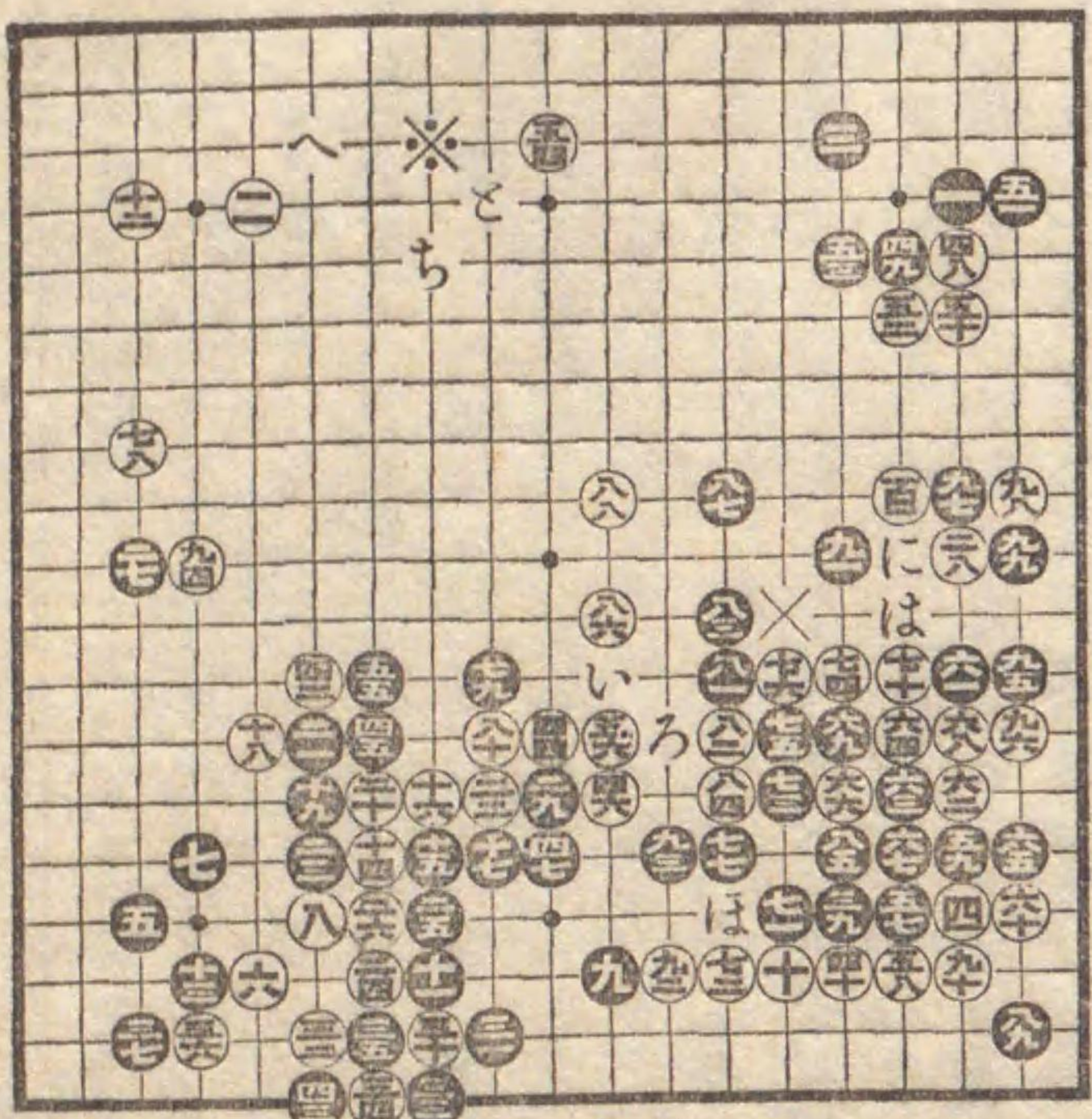
九世八段本因坊察元
六世八段井上因碩

(明和三戊年十一月十七日於御城)

▲古來本因坊察元と六世因碩の時代くらゐ纏れたことはない。本局は御城に於ける**兩雄**必死の争碁十局中の第一局である。

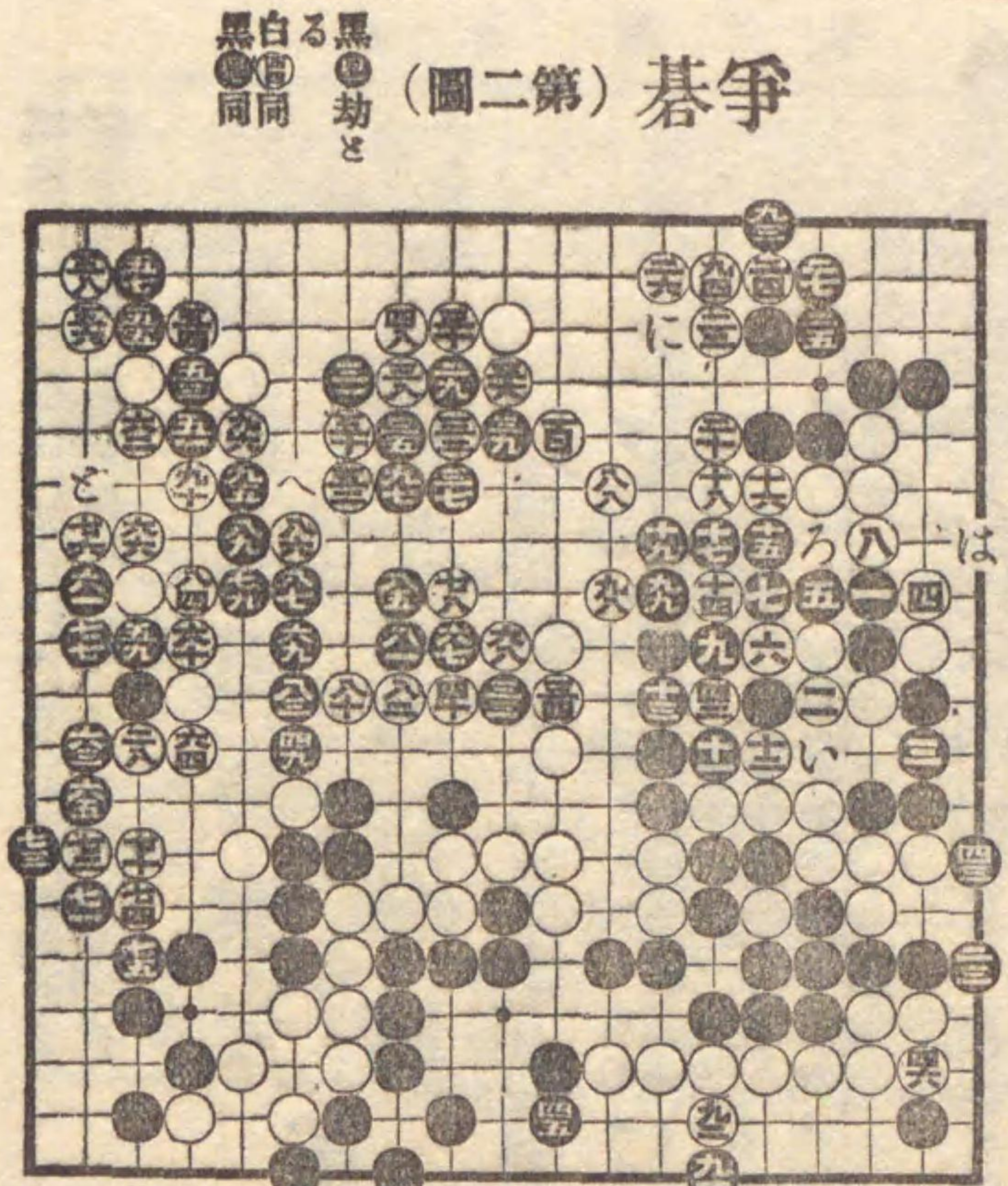
▲黒の悪手と白の兩締り 黒五と圖の如く白(四)と同地

碁争 (圖一第)



位に陣取り爲めに白に(六)と掛らるゝに至つては黒の不利や大なりである此の場合最上の打場は(六)の處か(十三)の處と知るべきである。白(八)は毎度言ふ通り相尖みと云つて昔時は専ら流行した定跡であるが、何分にも白の方が損であると云ふことが明白になつたので、最早や今日では殆ど打つ者がないと云つて宜い。黒(九)と割打をしたのは宜しくない。此の場合黒(三三)へつけ日(四)へ跳ねた時黒(五九)に伸びるも定跡であるが、併し夫れよりは(三九)へ一間高に掛るか左なくば(十三)へ這入るが宜い。然るに黒(九)と割打をした爲めに先づ白に(十)と締られ、黒(九)に開いた時白に(四)と兩締りの機會を與へたのは黒の不利である。黒(九)時期尙早し、此の場合(三三)の處が本局唯一の好點である。白(五五)は大場には違ひないが、尙ほ夫れより急なる處がある。或は(七九)の掛粘ぎも中々厚い手であるが、先づ(七九)に詰めて(七八)(四三)の散兵を利用する趣向に出づる方が宜い。又白(五五)の粘ぎは(七九)に掛粘ぎたい處である。黒若し(五五)を切らば白(一)に跳ね黒(一)に伸びた時白(七九)に詰める手段もある。然るに譜の如く白(五五)に粘いだ處が敢て右邊が地になる譯でもない。黒(五五)の突當りは俗手ではあるまいか、寧ろ(七九)の覗きを利かして白(八三)に粘いだ時(八)印に(三八)の肩を衝く方が趣きがある。黒(六三)の跳ねは即ち白の趣向に乗つた手である。夫れよりは先づ(一)へ著けて敵の應手を試みるが宜い。然るに圖の如く黒(六)の一子を犠牲に供したのには面白くない。白(三三)へ伸びる手で何故(七九)に(六)の一子を『して』に懸けて取らぬであらうか、左すれば黒は(一)は

に伸びる外なかるべく、白(七)に押し、黒(九)に突當つた時
 白(五)に一ツ覗きを利かせ然る後白(七)へ詰めて居る方が優
 勢ではないか、斯く謂はゞ或は言はん、左すれば「してう」の
 當りを打たるゝ不利があるではないかと、夫れは遠い話でソ
 ナ取越し苦勞をすべき場合でない。縦しんば後に黒が「して
 う」の當りを打つた時に手を抜くことが出来ずは應手をする
 も可なり。ソコで黒が「してう」の當りを利用して(六)の子
 を逃げ出したれば白はX印に懸けて絞つて而して復た先手を
 取る手段があるではないか、故に遠い後の「してう」の當り杯
 を氣遣ふに及ばぬと云ふのである。黒(八)の跳ね出しは時期
 尚ほ早し。ナゼかと云ふに白からは何とも打ちやうの無い處
 であるから棄てて置いて一向差支ない。此の場合※印に打
 込むべきである。然らば白は(八)に尖むか(七)に尖む外な
 いのである。



白若し(八)に尖まば黒は(七)に飛出すべく又白(七)に尖まば黒は甲圖の如く活きて仕舞ふ。是は常用の手であるか

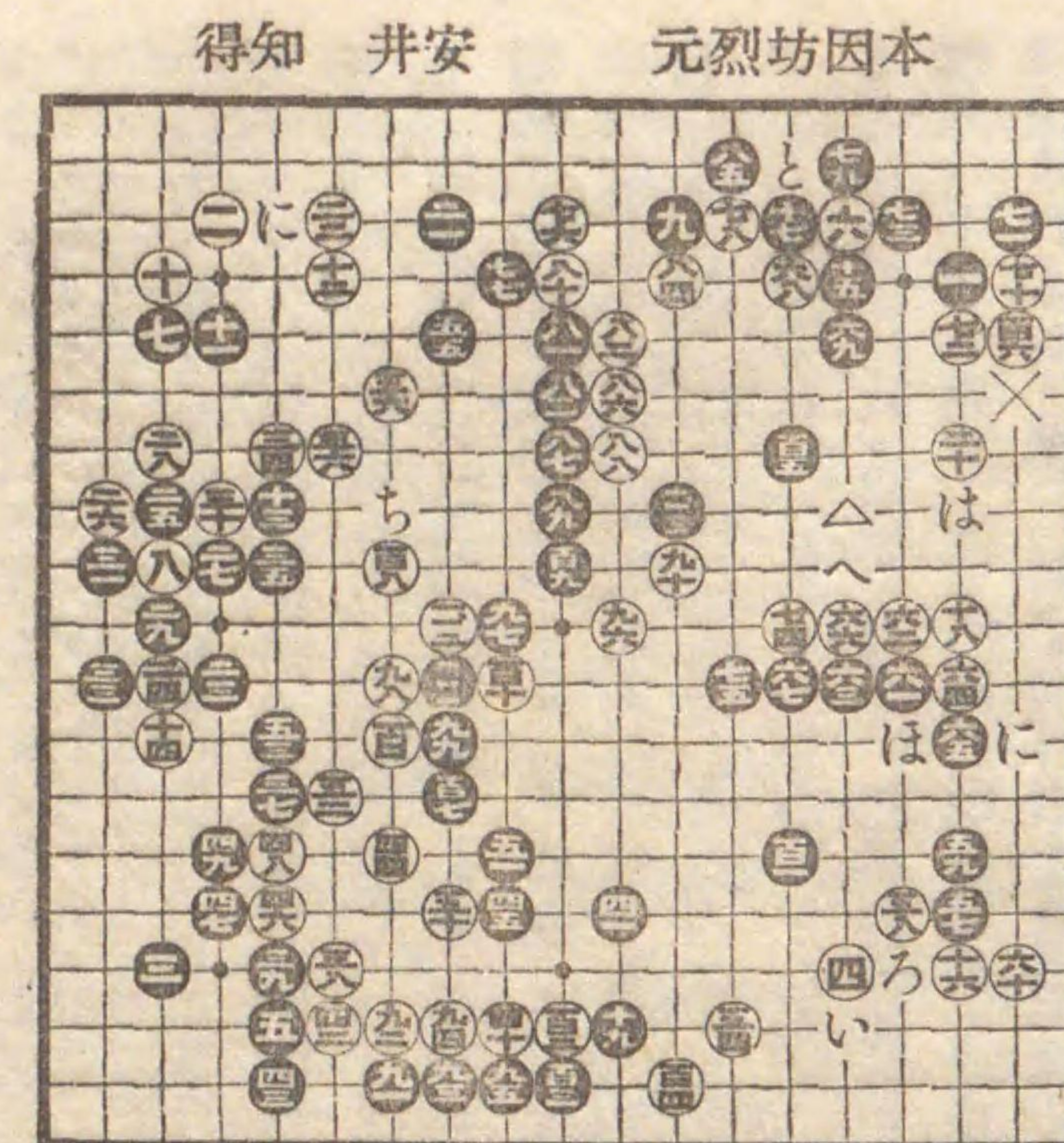
ら初心者は能く覺えて置く必要がある。
 ▲第三 黒の跳ねを逸す 白(六)へ曲る手で(七)に跳ねる手段もある。黒は無論(七)に跳ね込むべく白(九)に當て三目を擒にし黒(十三)に粘いだ時白左側に轉じて(三)に一子を抱へ込んでドウか、蓋し第一圖(六)以下即ち中央の白は未だ全く眼形を備ふるに至らず且つ黒三子を擒にした所で(八)に迂り込まれて眼を取られる恐れもあるから、譜の如く用心したのであらうけれども、双方共にマサカに死ぬ氣遣ひもあるまいとすれば今言ふた通り打つも亦た一策であらう。黒(三)の下りは宜しくない。矢張り(五)に跳ねべき所である。左すれば白は(四)に劫を取るであらう。其時黒(四)へ跳ねなば詰り白は手が戻つて(七)へ伸びて居すばなるまい。ソコで黒が(三)に下るのが手順で(五)に跳ねを利かした丈け得な譯ではあるまいか。然るに譜の如く白より反對に(三)へ跳ねられ次いで(二)に懸粘がれて儲けながら其の備へを丈夫にされた上に先手で(三)の要處へ跳ねられたのは非常に黒の不利である。黒(四)の跳ねはヌルイ。此の場合黒(八)に斜走して幾分白の模様を消しながら暗に中央の白を狙ふべきである。黒(七)は先づ(六)に押し白が(七)に押へた時黒(七)にモウ一本押し居れば(八)の切りが出来る丈け利益である。

寛政の碁戦

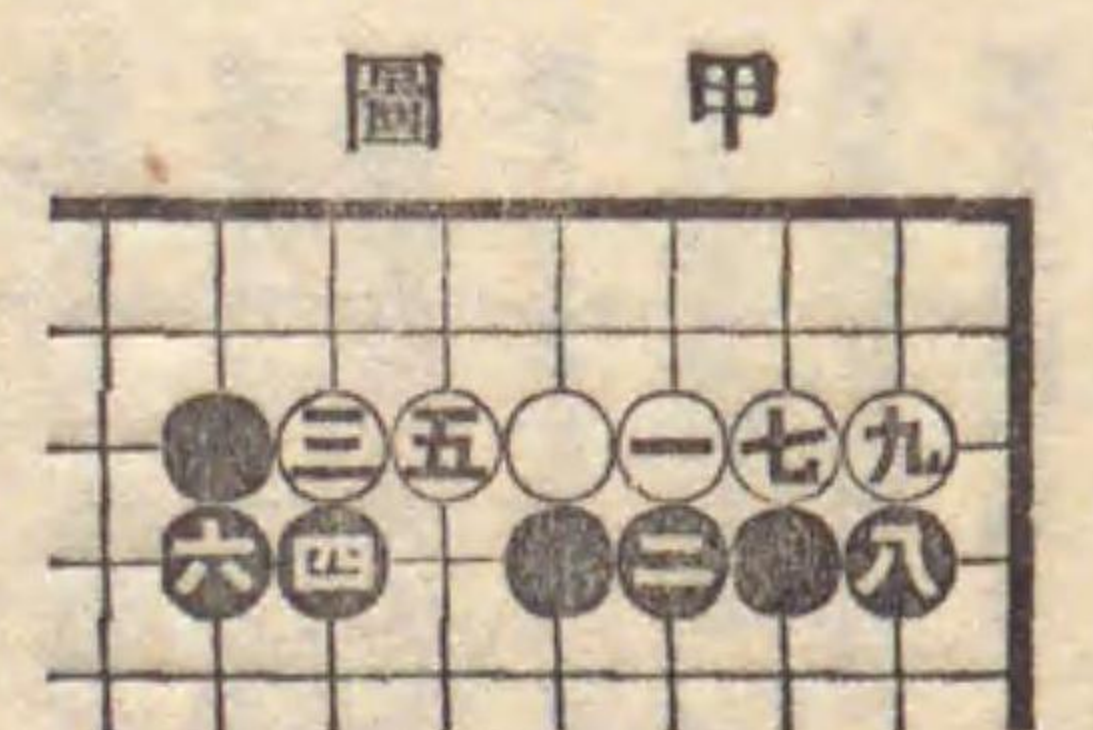
十世本因坊烈元(當時七段)
 九目勝安井知得(當時六段)

(寛政十一年五月二十五日)

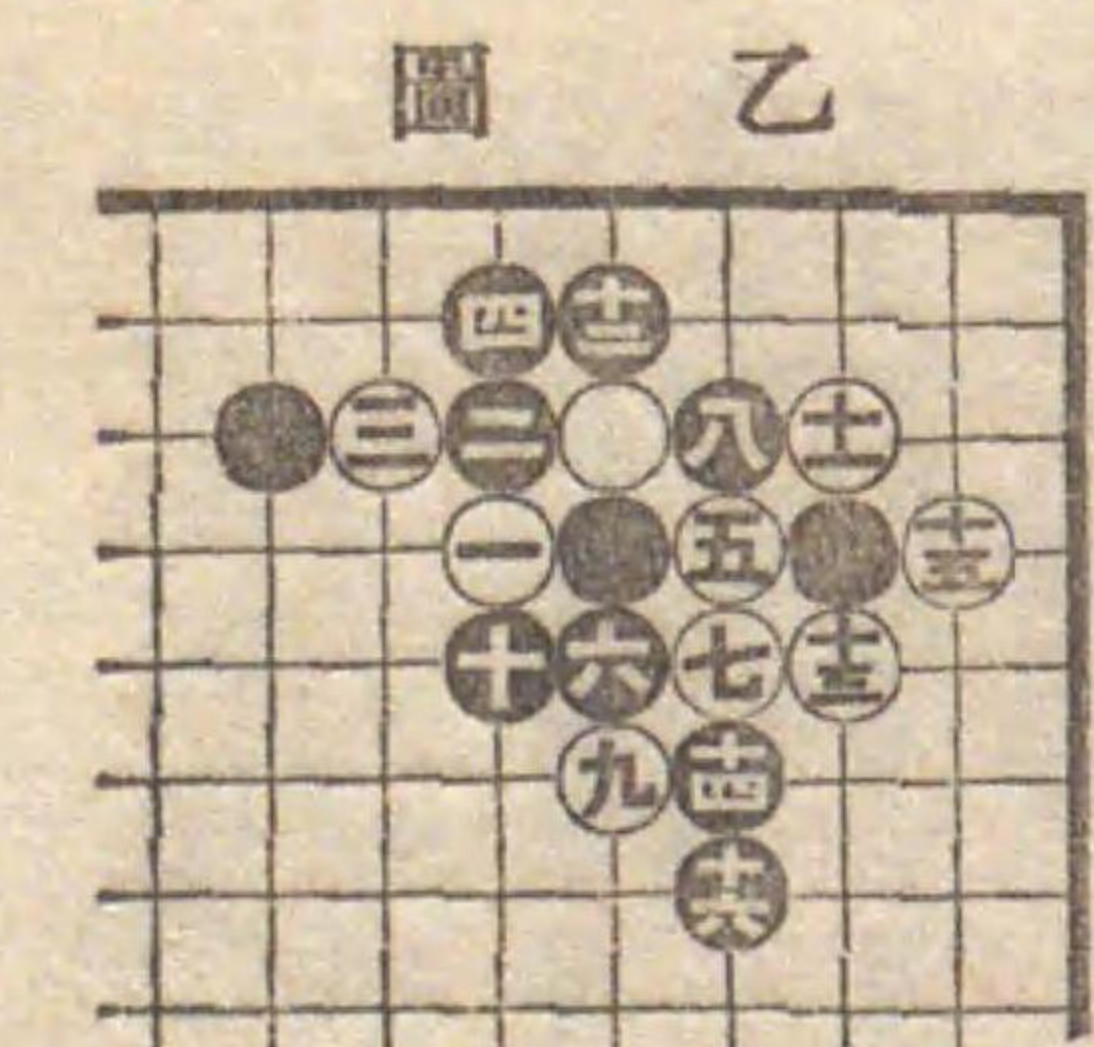
▲白の敗因 黒(五)に締るよりは(六)の處へ締る方が結局打ち易い。ソコで白(五)の處へ掛つたらば黒は(四)に三間夾みをすべきである。何故に爾う云ふ陣取をするが宜いかと云ふに、三間に夾まれると白(四)の位地がマヅクなるからである。若し此(四)の處に在れば則ち(一)に締ると云ふ好點がある、又星即ち(九)に在つても(五)に締ると云ふ釣合ひの好い手がある



けれども譜の如く(四)に位を詰めて居ては(五)に詰める手は誠に狭い。言葉を変えて言へばマア詰める手がないと云つても宜い。だから黒(五)に締るよりは(六)に締る方が戦略上得策

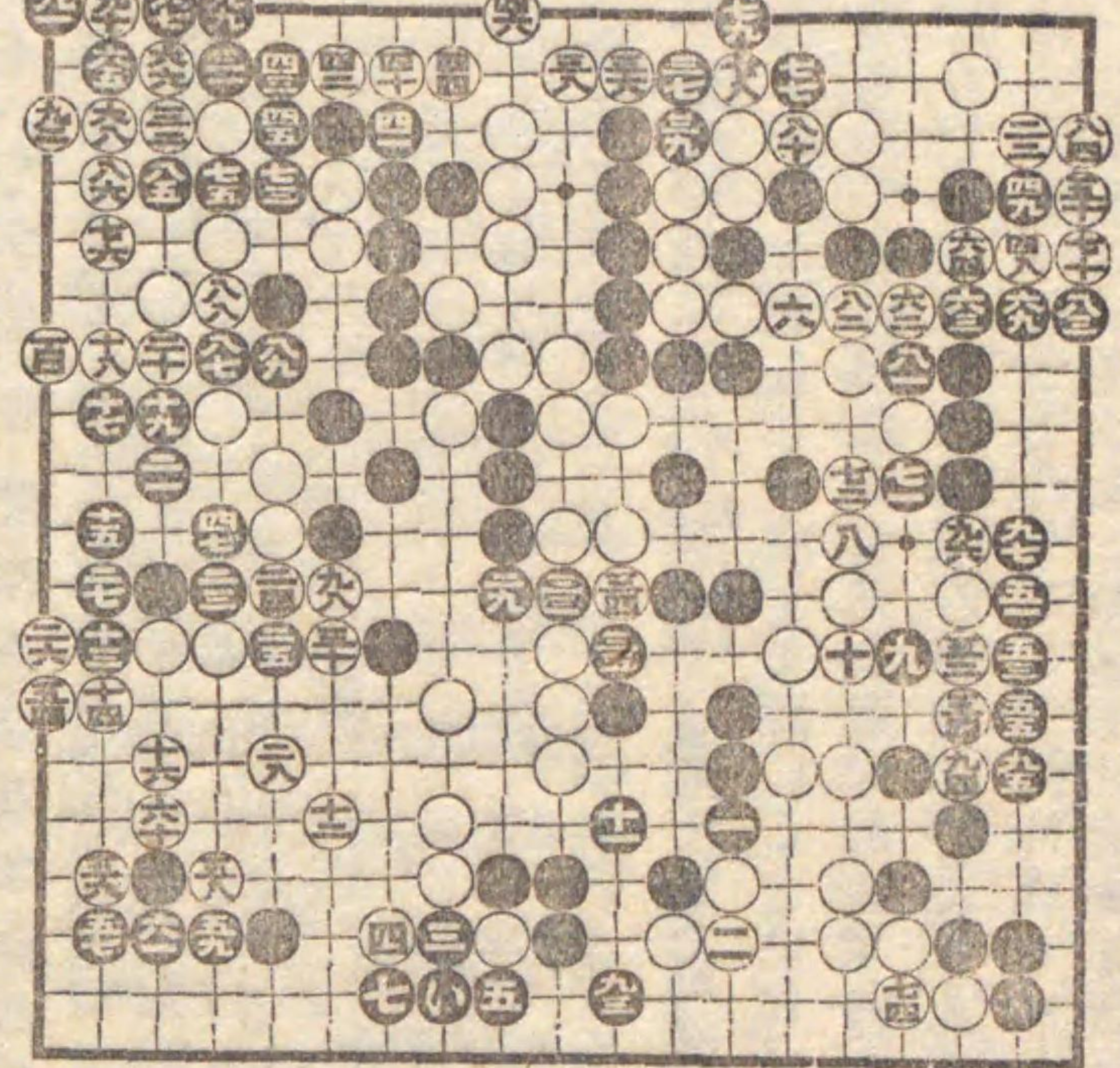


である云ふのである。併し(五)と締つたからとて悪いと云ふ程のこともない。黒(五)のつけの時白(六)に締るのは普通の陣立であるけれども此處には色々手段がある。假に右上隅に於ける一子の始末をする必要ありとせば則ち甲圖の如く隅地を占領して打つ手段もあり、又乙圖の如く白(一)と跳ね出して打つ趣向もある。其の幾變化は「手ぬきの巻」に詳しく説明してある。但し此の場合甲乙二圖の如く打つが宜いと云ふのではない。夫れは當局者の趣向に在る事で茲で斯う打つのが宜いと断定する譯にはイカない。唯参考までに一隅の成行を示すに過ぎない。



黒(五)も好い處であるが、此の場合に於ては(六)に對し(八)に詰めるも亦た一ツの趣向で、誠に恰好な手である。其時白が(七)邊に打てば黒は(六)に逆撃を加ふべきである。黒(一)は一方の自分の備へが堅い處であるから聊か狭きに失する嫌ひがある。而已ならず(二)へ附越しのある處だから、譜の如く打つて其の附越しの缺陷を癒やして了ふのは惜い。此の場合黒先づ(六)の肩を衝くが宜い。其の時白(五)に押せば黒(六)、白(七)に黒(八)の曲りとなるべく、又白(五)に押さずして(六)に押へなば黒(八)の飛びとなるのが普通である。然るに黒が敢て(二)に詰めたのは其後の成行から考ふるに譜の如く(三)までの運びをして振變らうと云ふ手段であつたことを知られる。斯うなつて見れば(六)の黒は大分働いた譯である。實は此場合は(六)に跳ねて振變りの手段に出でずして尋常に(五)に粘いで黒の趣向を挫く方が宜か

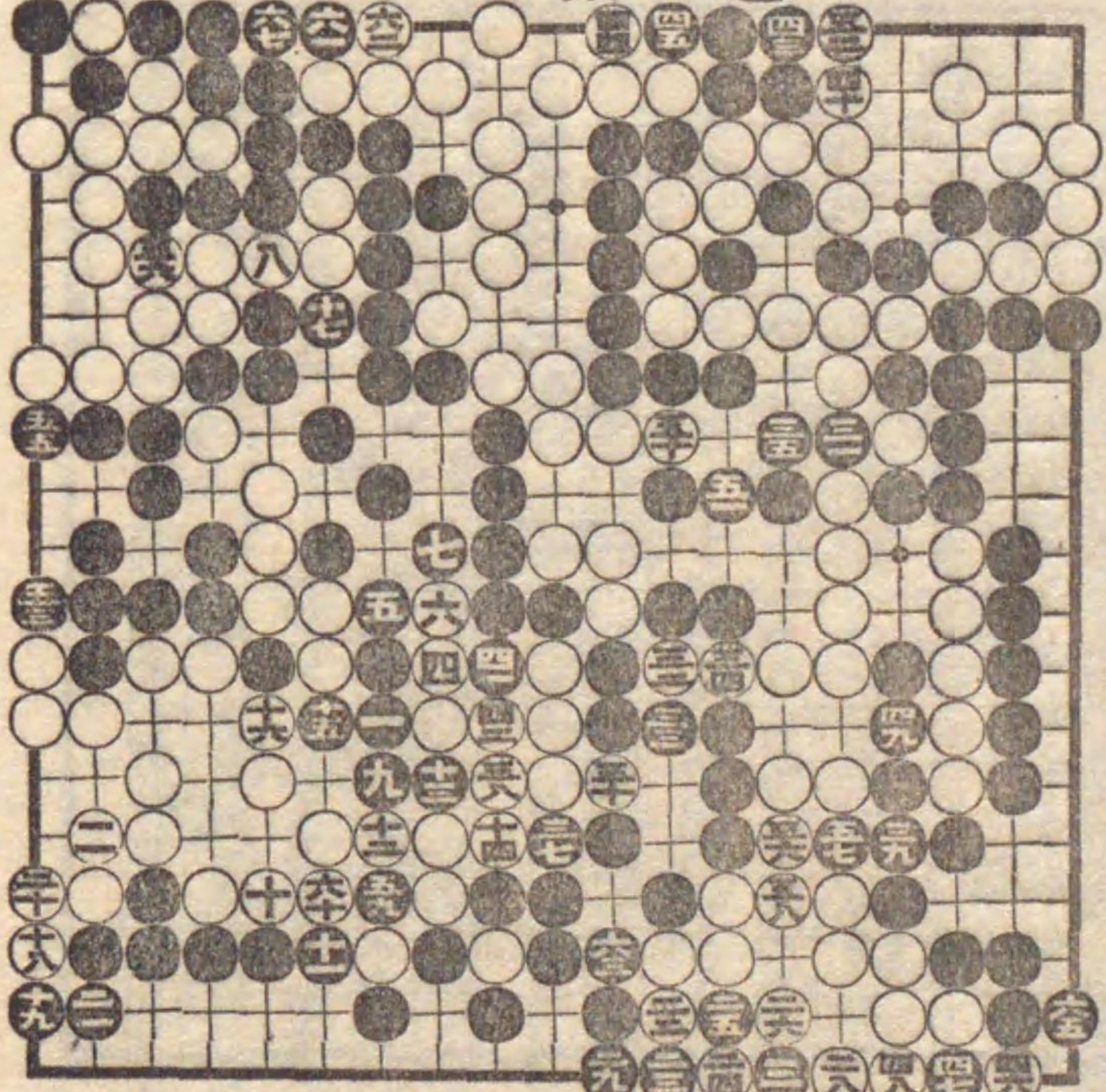
(圖二第) 碁 連



迫るべく、白に約へなば裏手に廻つて碁の脚下に殺到せよ、白に約へる外なかるべく、黒、白の時黒に飛びては如何。頗る面白い形勢ではないか。然るに白に一手(20)と用心されてから黒(21)と消しに行く位ならば寧ろ始めから(22)に打込むに若かずである。黒(23)は仙知さんか、極めて軽い手で、面白けれども併し白(24)と打たれては左右共に薄弱の姿勢になるから(25)に一間飛んで居る方が堅實ではあるまいか、其代り一步出足の遅れる嫌ひがある。孰れも一得一失、其善悪は容易に判断することが出来ない。白(26)は仙得さんで随分大きい手であるが、併し黒(27)と飛出された結果、(28)となつて(29)の一子を生擒らるゝに至つては(30)の黒を取込んだ賠償を取られた姿で、餘り儲けもなくなつた譯である。故に白(31)の手で兎も角も※印に包圍してはドンナものか、何か考へがあつて白(32)と約へたのであらうけれどもドウも包んで置きたい處で

で、此の飛びあるが爲めに、白(33)と(34)との間が大分手薄になつて来た、此の機に乗じて黒(35)の手で(36)に打込むも亦た面白い手段である。ソコで白(37)に飛び出さるか、黒(38)に

(圖三第) 碁 連



秀和さんで、是れは餘程考へた手だ。損得から云つても大きい許りではない。是れある以上は劫種が豊富になるから黒も悠々として居る譯に行かず劫争ひを防いだのであら

ある。白(39)は流石に秀策さん丈けあつて洵に面白い手筋である。黒は一寸挨拶に困る。
▲第二 敗着の原因は白(40) 黒(41)は仙得さんで餘り大事を取り過ぎた嫌ひがある。若し左邊に(42)へ跳ねられて劫になると思へば碁が危いと氣が付く筈であるから大事を取つて(43)と聯絡して居る譯には行かない。因つて白(44)の手で(45)に覗いて切る味を含んで(46)に當てるのは随分大きい手であるから兎に角さうやつて様子を見る方が面白からう思ふ。白(47)も亦た仙得さんで此手は儘に敗着の原因であつた。單に損得の上から云つても(48)に打つよりは(49)に打つ方が遙に利益である。況して劫の味があるのだから尙更ら(50)に打つて黒(51)と劫に打つ趣向を豫防せねばならぬ。左すれば(52)のコミがあるから決して負ける氣遣ひはない。然るに白(53)と關手を打ち爲め(54)へ跳ねらるゝに至つては勝負は判らない。白(55)は流石に

う。仙得さん、此頂け引きの活きは妙手だ。此處に斯う云ふ巧妙の活きがあるから猶更ら(56)の手で(57)に打つべきであるのに之を失したのは惜むべきであつた。併し白(58)の頂けは妙とは云ふものゝ黒に(59)と頂けられた時(60)に約へることが出来ずして(61)に忍んで(62)の頂け引きを保護せねばならぬ苦心は察せざるを得ない。是れでは白は颯ぱり儲かつて居らない。要するに黒に(63)と跳ねられて白の勢力範圍内に於て活きられ

われひとり得する事をねがひなば
やがて思はぬ損をまねかん。
敵石の中をへたつる我いしは
ひとつたりとも大切にせよ。
石すてもあとの味ひよろしきは
眼に見ぬ得のあるものとしれ。

化文 雙龍爭珠

文化三寅年十一月十七日於御城

十一世本因坊元丈

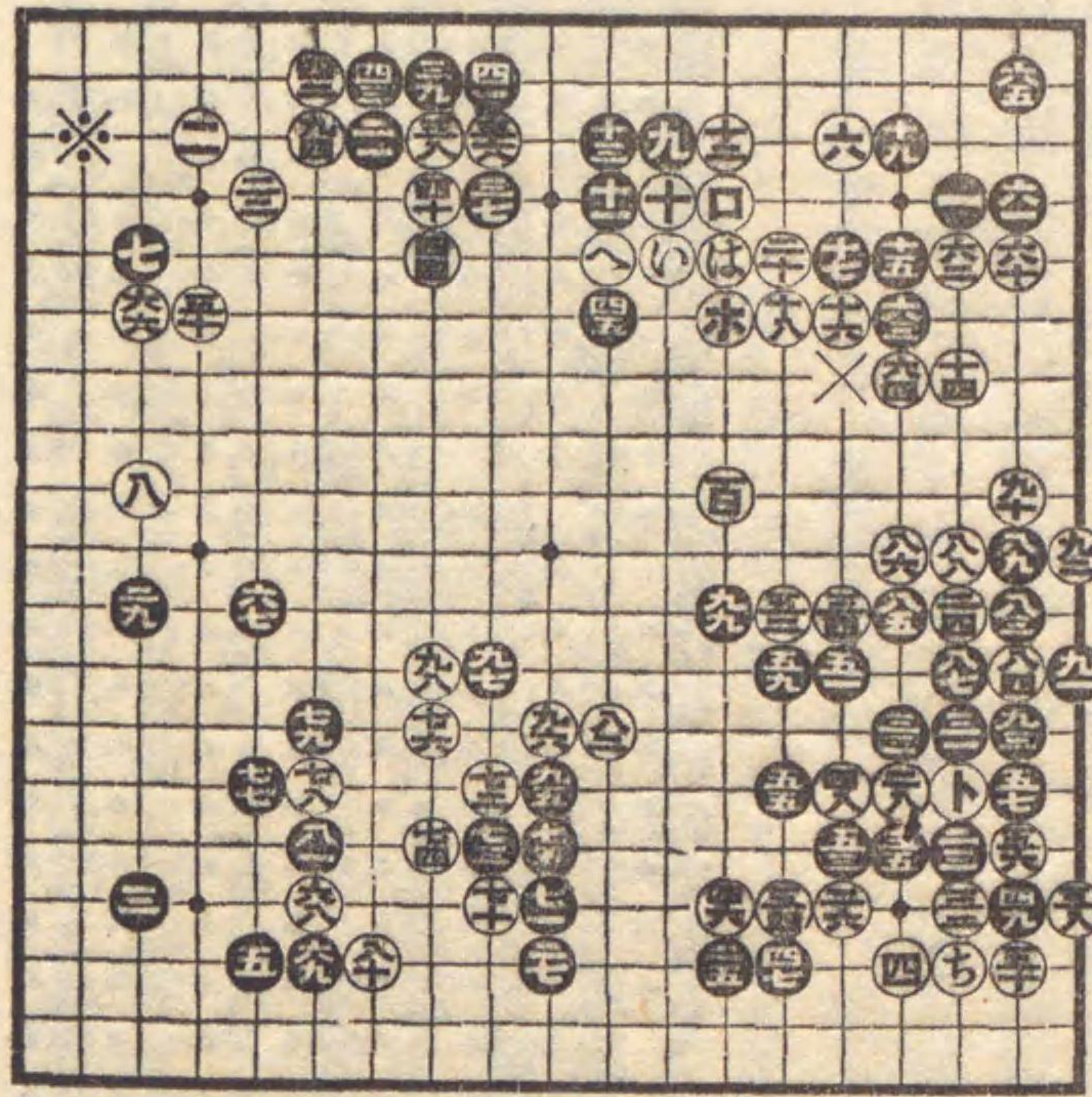
中野知得 芾

(仙大夫曰、此時元丈、知得共に既に名人の技あり白打方特に妙なり)

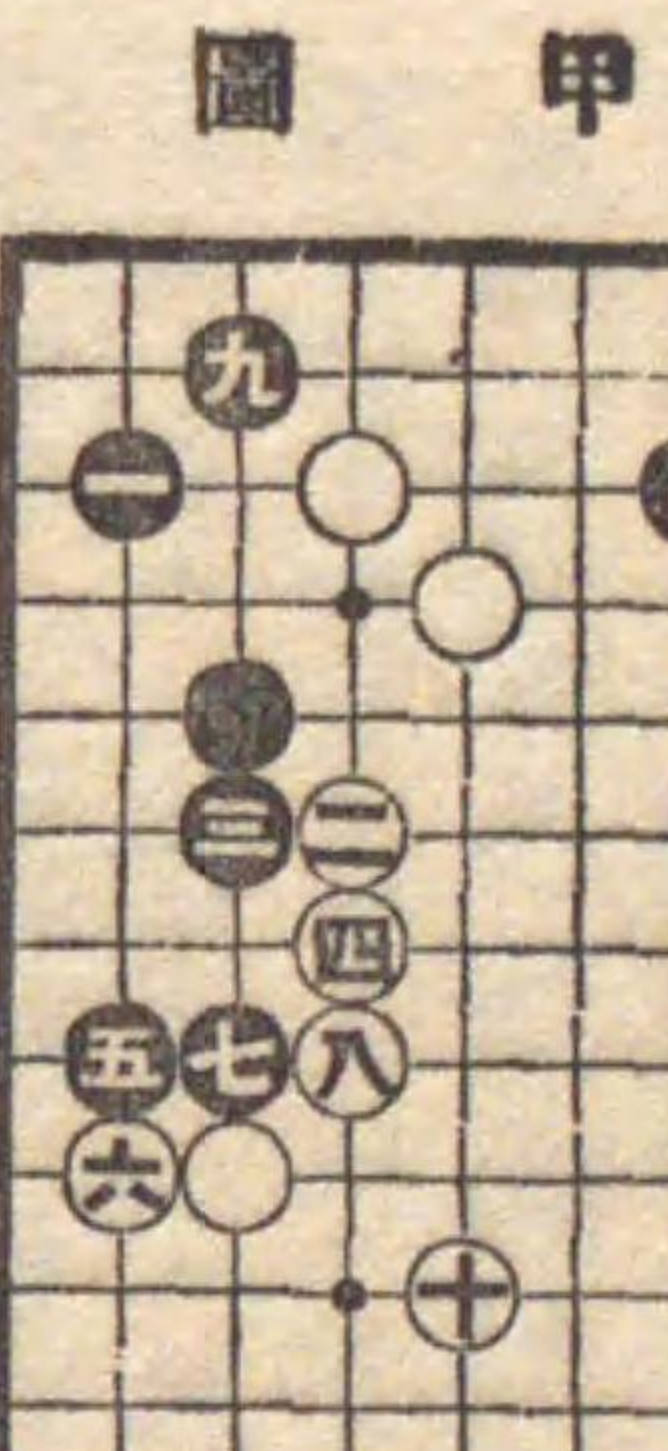
▲黒※印の斜走如何

九は別に申分のある譯ではないが、本局の如き石立に於ては彼此の釣合を計つて三處へ三間に夾む手段もあり、又二の白に對して三へ一間に夾むこともあり、又三へ三間に夾み返す趣向もある。其の何れを採るべきやは當局者の方寸に在る事、是非を言ふ限りでない。古來の定跡であるが、併し黒に先手を取られて三と夾まれた姿を見らると、如何にも三と二との間合が好く又二の白に對する三と二の黒も洵に釣合が好いから兵

圖一第



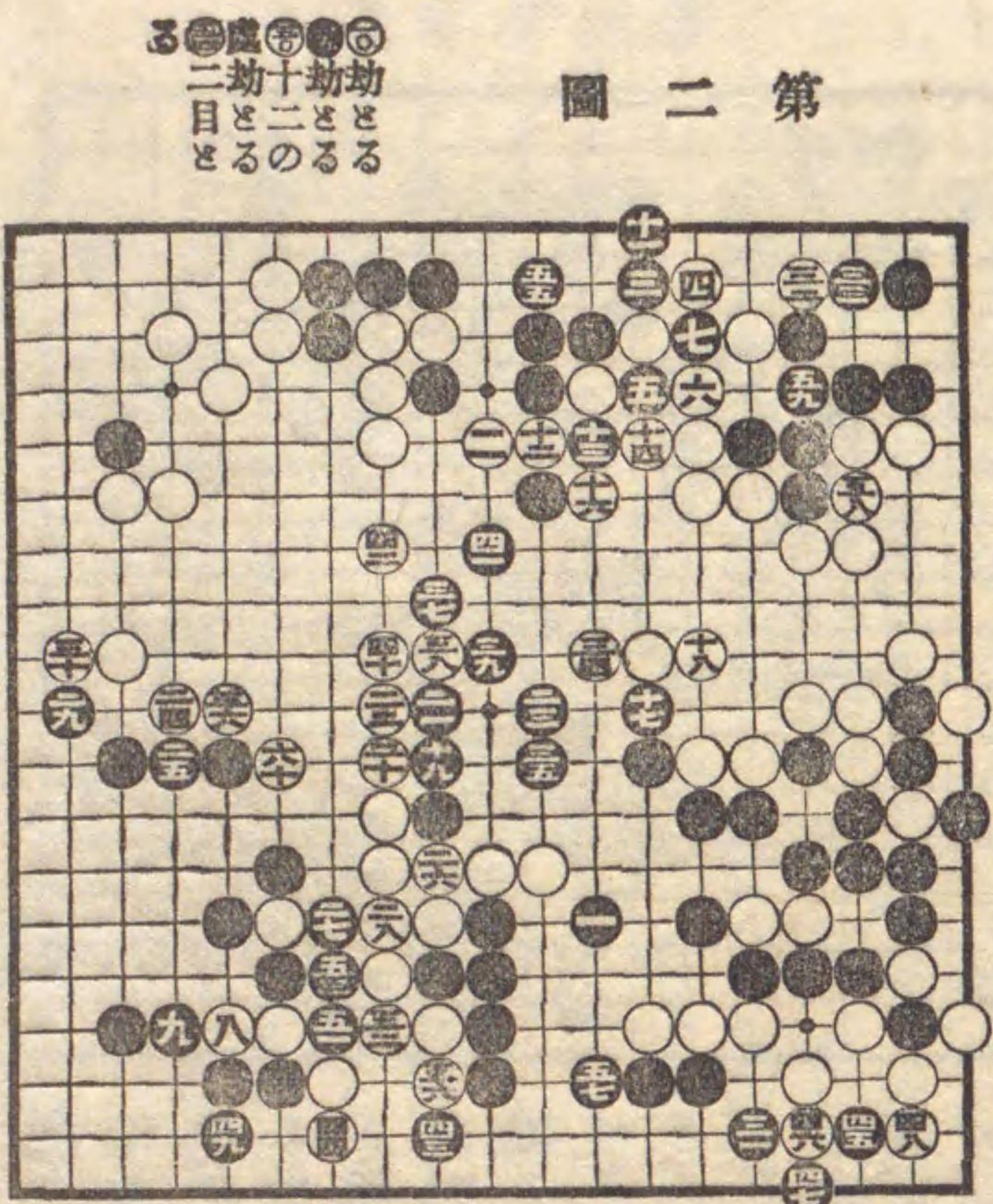
古來の定跡であるが、併し黒に先手を取られて三と夾まれた姿を見らると、如何にも三と二との間合が好く又二の白に對する三と二の黒も洵に釣合が好いから兵



の配置上に於ては幾分か白が割合ひ負けした形であると謂はねばならぬ。因つて白は常套に泥ます、黒に夾む手で、黒が將に展開旁々攻め掛らうと云ふ處へ開くはドンナものか、其時黒が二間に開くか或は三に斜開すれば白三に行びて居ると云ふ手段もある。尤も黒に於ては若くは三に打たずして劇く四に切る手段がないでもない。其時は又其時で、白にも三に頂ける杯、種々の手段もあるが、兎に角本圖の如くなるよりは三へ開いて居る方が甚だ廣くなりはせぬか。黒は是れ又古來定跡とする所であるけれども、是れは單に三へ尖みつけて居る方が宜いと云ふことは今日の定論である。ソコで白が黒から展開旁々三の白を夾まれるのを嫌つて三へ先鞭を着けたらば黒三にはね、白三に約へた時黒三に突出し白三に約へ黒×印を切ると云ふ筋がある、けれども圖の如く黒三と白三の交換があつては三に出切りの味がなくなる丈け不利益である。前述の手順中黒三にはねずして直ちに三へ出切りを試みても宜い。三の約へは此の場合甚だ閉着である。矢張り三に開いて居るべき處である。其時黒若し三に押出さば白三に約へ、黒三を切つた時白三にはねて居る杯は甚だ面白い形ではあるまいか。次に三に掛れば此の配置に於ては無論挾撃されるのは眼に見えて居るから此の場合一路控えて下印に打つ方が面白い。ソコで白が三の邊に打てば黒は例の通り三へ頂けるが宜い。三の夾みは少し緩みではあるまいか。三の鐵欄を利用して尙ほ一路進んで三へ夾みたい格好である。黒三は威服しない。何故に※印に斜走せぬのであらうか、其時白若

(四二)

圖二第



し普通の如く三に掛けるとすれば其結果甲圖の如くなるべく、ソコで黒轉じて三へ飛ばど如何、左すれば白は左上隅

に於ては殆ど中實を喰はれ、右下隅も亦三に飛んで活きらるゝ事になつては見渡す所、手を掛けた割合に地なしの姿になるのである。三と掛粘いで三と圍はれて了つたのは甚だ惜しい。此處は白として何とか黒地を消す趣向をしたい處である。勿論ドコに打つが宜いと云ふことは斷定の出來ぬ處であるが、趣向をすべき餘地ありと云ふこと丈けは言ひ得るのである。此れから先は流石仙大夫の評言通り黑白共に善く戦ひ善く防ぎて遂に芾にまで漕ぎ着けたのは白の手柄であると謂はねばならぬ。

算悅の遺訓

凡爾事をもとめんとらば、先づ定石立を能く習ひ得て、局に對し一手も粗略に打過ぐべからず。力を盡し專一位をとり、變に應じては定格をも離れ、つよくせり詰め、其所にて勝負を決する程の心にあらずんば、地に取後れ、位語の眞になる事あるべし。然れども本法の石立を以てあらしくしき手なり打にしくはなし。惣じて上手よりはつと勢を見せ、蓋にかたりて打ちたりとも少しも懸がず石の位を以て自然に敵の勢を消す事と當に心得べし。又彼よりうたんとするに、敵はずと洗んで手を待つ事有り、ますくつよく心許を以てうてば必ず過あるものなり。すべて勝負は十目勝つべきを八目に減じたりとも儘に危き事なきを勝の專一とす。勝なりとて心ゆるみ臆すれば思ひの外負を取るべし。尙々其所の緩急善惡を能く考へて出つべし。又石を置いて打たんに先上手の甚勢の淺薄なる方を伺ひて後其斯よりせり詰め、位をけし我石をかたくしまりて少しも動する心なく、紛れざるやう輕く勢を持つ車一切の甚同意なり。敵より筋を離れて打つときは紛らばしく打來る共打つべき本手を以てうてば其心同じき故に一局の位を得てつひに勝を取る事を志すべし。

(四三)

兩々對抗の姿勢

十三世 七段 本因坊丈策

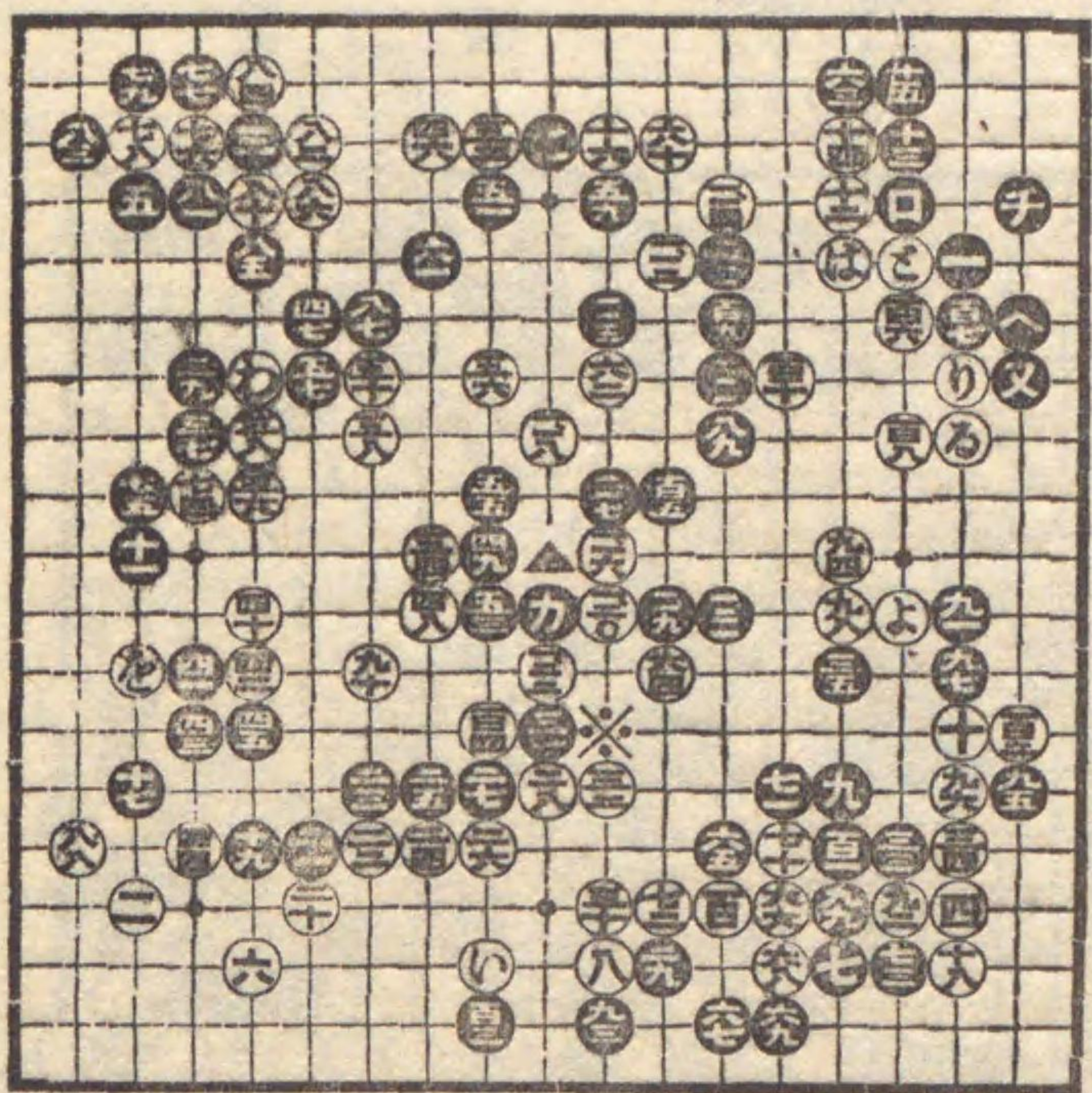
七段坂口 仙得 (先番) 中押勝

(弘化三年十一月十七日於御城)

▲根本的布石の理法

白④は普通に言へば右下隅に陣取るべきであるが、蓋し黒の構へは兩隅とも「もくはぶし」で、⑤若くは⑥、孰れに締つても、アトの權衡が悪いと示ふのを見越して、白も亦たソチラはソチラとして圖の如く④と左下隅と同位に構へたのであらうけれども、併し今言ふた通り⑤に陣取り、而して黒が⑥或は⑦ドチラに締つても

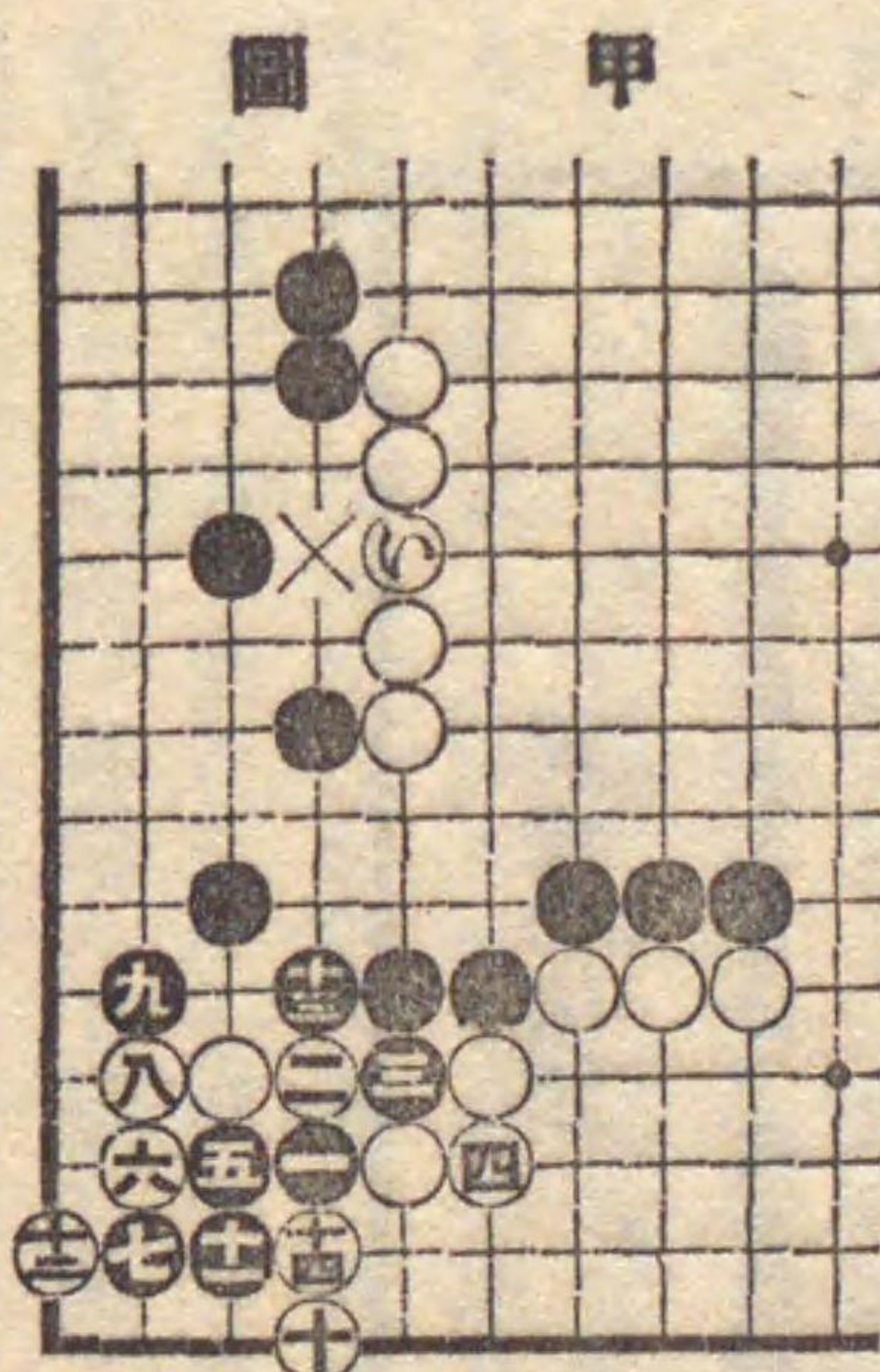
手三十二百



⑧と一間高に締る方が割合ひが宜い。然るに白先づ④と構へ黒⑤、白⑥の締り締りになつては黒の注文通りになつた譯である。更に何故に④の處より⑤が宜いかと云ふに、

〔四四〕

黒は成べく締り、の對勢になることを望むのであるから⑤或は⑥何れかに締るべく、其時白若し⑥或は⑦、ドチラに締つてもアトの夾み工合がマツクなるではないか。詳言すれば圖の如く⑧と掛られ⑨と夾む恰好は即ち⑥と⑧との對照が如何にも位、低く幅も亦た薄くなるからイカヌと斯う云ふ結論になる。其の反對に白先づ⑦に締り黒⑥に掛つた時白④に夾むも亦た同形である。茲に於て愈々④と同位線に陳取るの不可なる所以を知るに足るであらう。④の下りは此の場合に於ては面白くない。夫れよりは黒④に引め、白⑤の時黒⑥に打つが宜い。ソコで白⑥に頂くれれば黒⑦、白⑧、黒⑨、白⑩、黒⑪となるのが普通で、不斷は好まぬ形であるけれども④の位置が低いから此場合に於ては黒は斯く打つて先手を取るに若くはない。④は緩着である。④に補ふのが普通であるが、或は⑤に打込むも亦た一策である。然るに黒が⑥と煽らるゝに至つては黒の繩張りが厚くなるに反し白の構へが窮屈になつて了ふではないか。其結果遂に黒から⑥と利がされる結果を生じたのは白に取つては随分辛からう。けれども別に打ちやうもない。元々⑥と緩い手を打つた祟りか。④、⑤の黒三子は甚だ身輕で、白の側から云へば何とも捉へやうのない處だから寧ろ棄置くに若くはない。而して⑥邊へ雄大に構へる方が趣きがあるではないか。⑥緩し、此場合甲圖の如く①と頂け越して先手を取り、而して×印



に覗かんは如何、白は④に粘ぐ外なからう。ソコで右側に轉じて本圖④へ頂けるが宜いではないか。④はドウか、⑤に押したい處である。然るに圖の如く打つて⑥と好點を占められたのは白の爲めに甚だ惜むべきであつた。⑥も亦た如何であらうか、圖の如く黒に⑦と厳しく打たれた時白⑧に出で、黒⑨に約へ、白⑩印に切つて凌ぐ手がないとすれば則ち白⑪の手で何とか他に趣向せねば碁にならぬではないか。⑫の尖みはドウモ感心せぬナ。⑬へボウシに冠ぶせる方が面白くはないからうか。何故かと云ふに次に右側⑭の好點を占めると云ふ狙ひと相待つて形勝の地點であるからである。⑮は⑯印に打つて地を取りたいナ、左もなくチャア益々地が足らなくなつて了ふぢやないか。然るに圖の如く打つた爲めに黒に調子づかれて※印の出切を狙ひ旁々⑰と備へらるゝに至つては最早や大勢既に去つて又挽回の策なしと斷言して過りないのである。

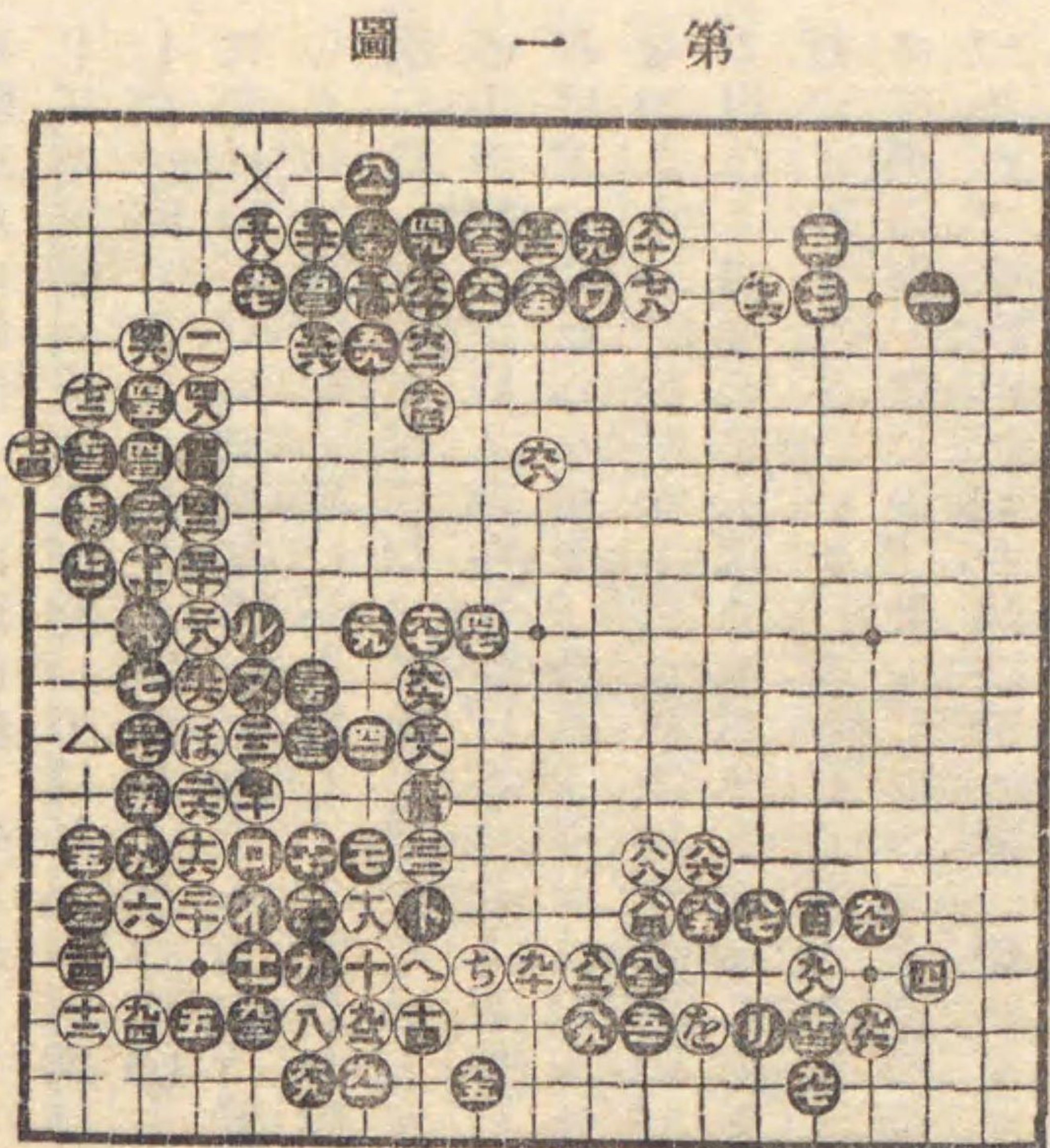
〔四五〕

碁聖爭珠

十四代 准名人 本因坊秀和

上手 安田秀策

▲第一雙龍、珠を争ふの勢。●は●に尖み、白●、黒●、白●、黒●となるのが普通である。ソコで白がドウ打つかは即ち趣向で、右側方面に打つこともあり、或は●の肩に打つこともあり、又更に一本●に押し黒が●に行びた時の挟間に打つともある。圖の如く●へ頂け●に引く手は昔から定跡としてあるが、併し白に●に掛粘されるのは黒の甚だ忌む所で、爲めに●に引かずして●に行びる手段もある。然るに白は何故に●に掛粘がぬのであらうか、黒の嫌ふ處であるから掛粘いで善かりさうに思はれるが、圖の如く

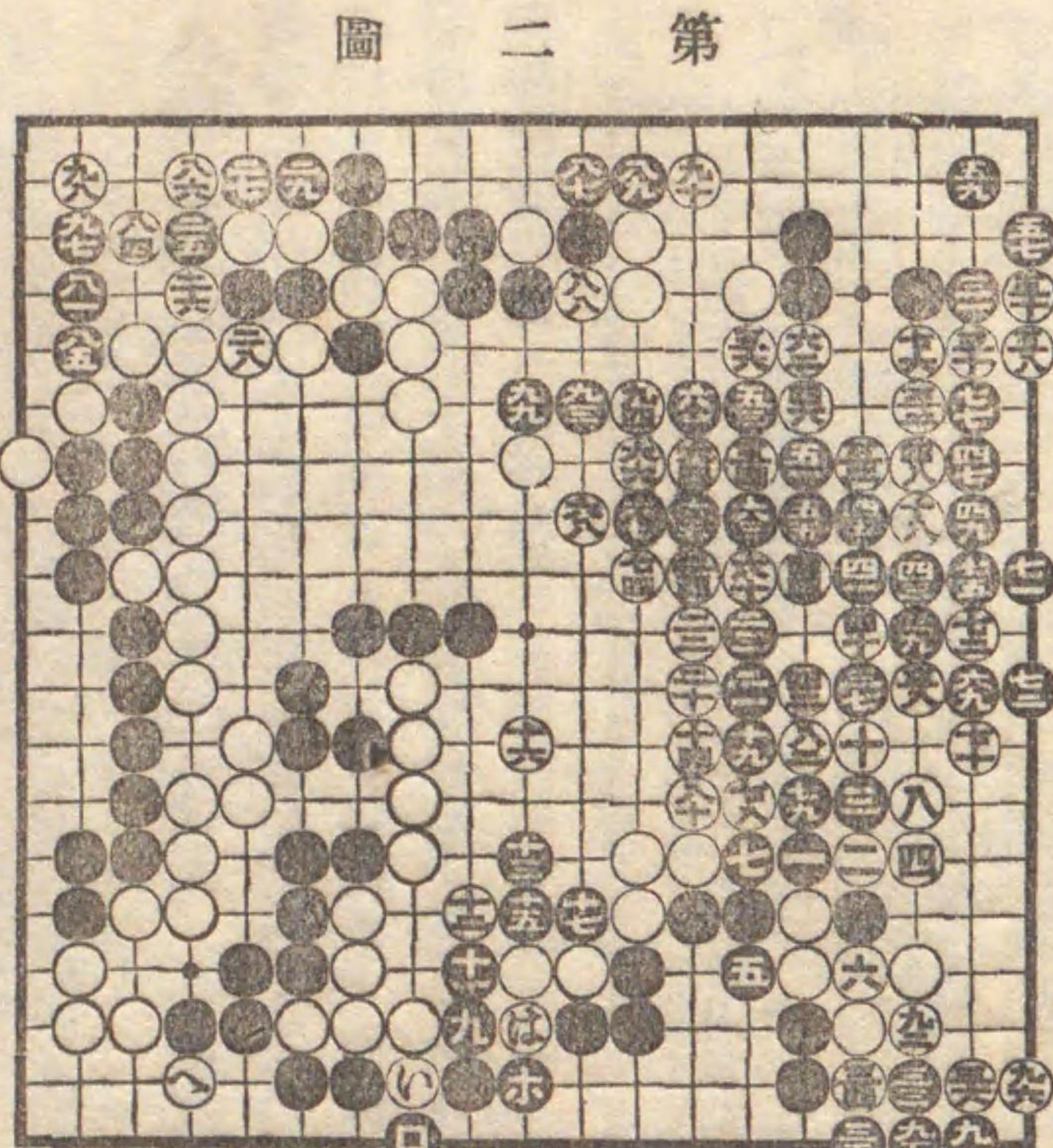


▲第二白約への得失。白が●に受けずして●へ跳ねたのは如何であらうか。假に白が●に約へるとすれば黒は無●の大場を占むるに違ひない。其時に白が●へ跳ねる姿は

●へ斜走したのは普通の手段に非ずして白の趣向と解釋する外はない。●は●へはね、白●、黒●、白●の時黒●に掛る方が面白くはあるまいか。●は●に飛び白●に飛んだ時●へ開いて居る趣向もある。斯うなれば至つて無事である。●にあてて而して●と粘いだのは甚だ面白い。然るに●の手で●に突當ると、夫れを機會に丁度よく●へ行び出されて了ふ。●は一寸●へ尖みさうな形であるが、斯くては出足が遅れる。ソコで●と飛んだのも面白い手だ。此時黒若し●に出で、白●に約へた時、黒●に切る姿は如何にもマツイ手で、●の一手が無駄になつて了ふ。要するに●以下●までの戦ひは頗る激戦で雙龍、珠を争ふの趣きがある。●は●の處へ詰めるも亦た一手段である。其時黒●に頂けなば白●にはね、黒●に行びた時●のあてを凌ぐ爲め白△印に置くべく、黒●●に粘ぐ外はない。ソコで●に掛粘いで居る手段もある。●は宜い處であるが此場合●に夾んではドウ云ふものか、此處も中々宜い處だ。左すれば黒は無●に侵して來るであらうが、其時白が何とか趣向をする方が碁が廣くなりはせぬか。白●へ跳ね出した結果●に曲つて振變られたのは甚だ不利益であつた。と云ふのは左邊は殆ど萬里の長城に類する堅壁で、其處へ餘り多く手数を掛けて凝つた姿ではあるまいか。此場合●に辛抱して居る方が得であらうと思ふ。黒が●と下つて活きたのは面白い。若し白が×印邊に打てば黒は●に粘いで活きつゝ敵を攻めやうと云ふ手段であらうと思はれる。

▲第二白約への得失。白が●に受けずして●へ跳ねたのは如何であらうか。假に白が●に約へるとすれば黒は無●の大場を占むるに違ひない。其時に白が●へ跳ねる姿は

一向詰らない。且つ後に圖の如く●●●と打つて二目を取られて眼を奪はれるやうな手もあり又白の側から言へば事に依ると●に突出し黒●、白●、黒●となつた時白●に跳ねる手順にならぬとも限らぬ。さう云ふ關係のある處だから白●の約へは中々大きな處である。●は時機尙早くはあるまいか、其儘棄て置いて●の處に開いて居る方が宜いと思ふ。●、斯くの如く跳ね出して寄せられる手が残つた結果に見ても第一圖



▲以下●に至るまで互に息も繼がせぬ競合ひ、頗る見應へのある激戦であつた。

に於て白●へ跳ね出して二目を取つた手が詰り損であつたと云ふことが分るだらうと思ふ。此碁はドウも白の負けと確定して了つたが、流石に秀和、秀策兩先生丈けあつて

白軍包圍計畫敗る

中押勝

五段 中川 順節

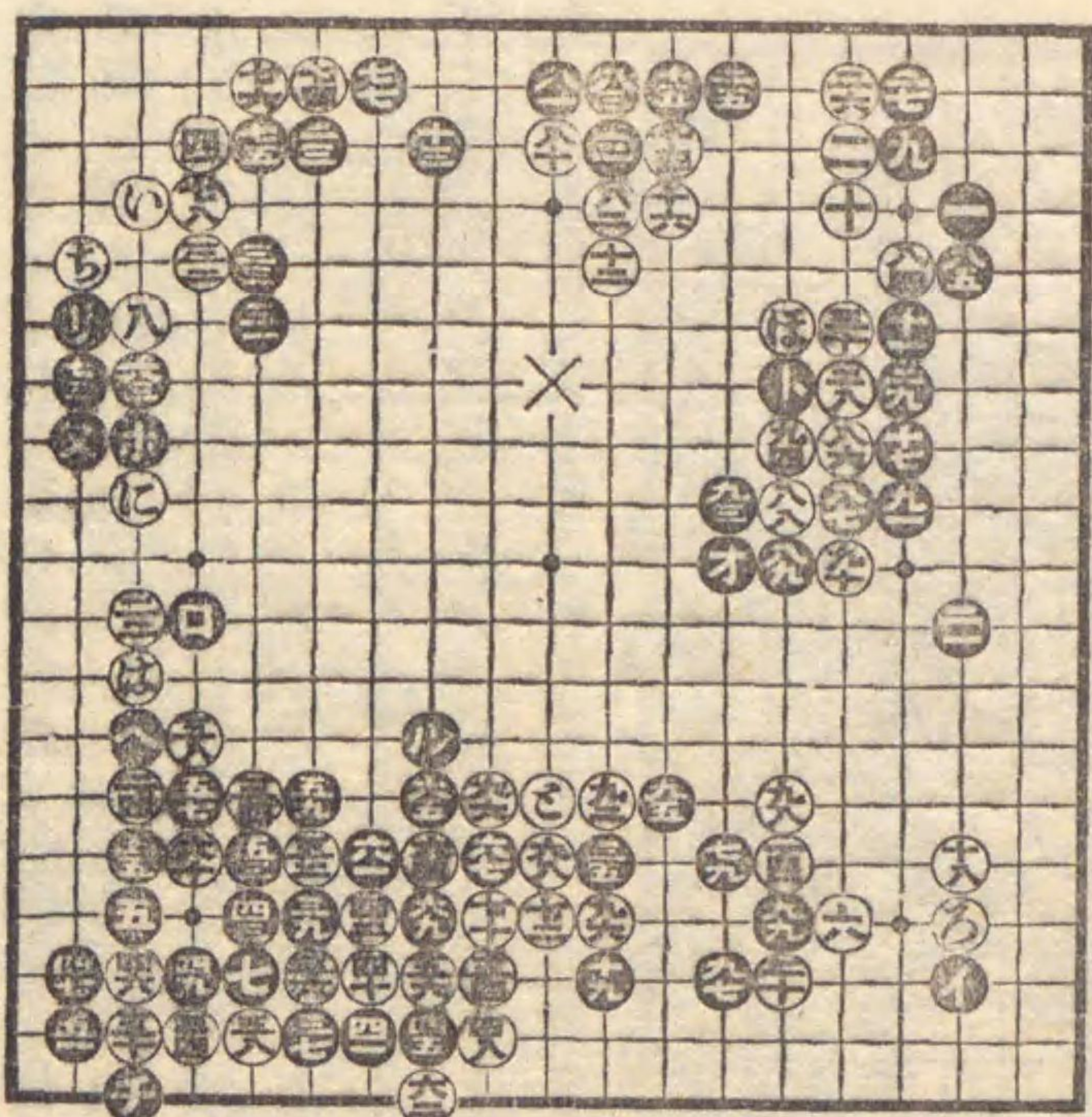
五段 河喜田 耕之助

弘化二年二月廿四日打掛二十五日打終

第一 手順の相違

打つた手で決して悪い事はないが、當今では(1)の處へ「もくはづし」に打つのが専ら流行して居る。夫れは白が(4)の手で(1)印に掛れば右上隅、左上隅共に同形になるのみならず黒(2)の手で(3)の處へ展開すると三間に夾むと云ふ恰好の位置を占め得らるゝからである。(4)の高締りは古來澤山打つてある手であるが、斯くては三々即ち(1)に打込まれる隙あるのみか、黒から(2)と詰められた時(3)の如く(1)と受けて居る譯で

第一圖



め得らるゝからである。(4)の高締りは古來澤山打つてある手であるが、斯くては三々即ち(1)に打込まれる隙あるのみか、黒から(2)と詰められた時(3)の如く(1)と受けて居る譯で

は逆も引合はない。(4)の手で尋常に(2)に締るに若くはない。又(1)にては(3)か或は(4)に軍を進むべき機会である。(2)は、是れ又要處には相違ないが、併し白が今や將さに占領せんと期待しつつある左側方面が最急の場所になつて居るから(2)の處へ高く陣取つて居たいのである。是れは詰り白が(2)の處へ詰めて來るのは低い手であるから、無論其儘棄て置くであらう、左すれば今度(1)印へ詰めて打込を狙はふと云ふ趣向である。(1)は可なり大きい處ではあるが、此の場合(1)に詰めて居る方が更に大きい。(2)と粘りたのは如何にも働かない。幻庵因碩先生の評の通り何故に(1)の處へ押出さぬのであらうか、ソコで白(1)印に約へなば黒(2)印を截るべきである。(2)及び(3)の趣向は甚だ悪い。左下隅から左邊に亘る白模様を消さうと云ふならば先づ自分の縄張りを擴張しながら徐々に敵壘に迫る行動に出づるを可とすべく、即ち(2)に打つに若くはない。(2)の泳ぎは無理である。尋常に(1)に抱へ、白(1)に切つた時黒(2)に粘るのが普通である。然るに(1)以下の三目を取られたのは黒の損である。併しながら白にも亦た手順を誤つて居る處がある。蓋し此の戦ひに於ける白の計畫は(1)以下の三子を棄て而して(2)の肩に迫つて(3)の二子を攻めやうと云ふ手段である。推測すべき理由がある。果して然らば(2)へ跳ねる前に(1)に粘りたならば是非とも(1)印に跳ねなければならぬ。其時白(1)に跳ねなば如何、白の趣向通り(2)に攻め懸かる手順になるではないか。然るに此の手順を違へて先きに(2)へ跳ねたればこそ反對に黒に(1)以下の三目を棄てられて其の作戦計畫を挫かれ、(2)と後手で三目を取らねばならぬ事になつたのである。けれども黒は唯白の作戦計畫を挫いたと云ふ迄で黒の損たるや一見明白である。(2)は是れ又洵に不働きの手である。

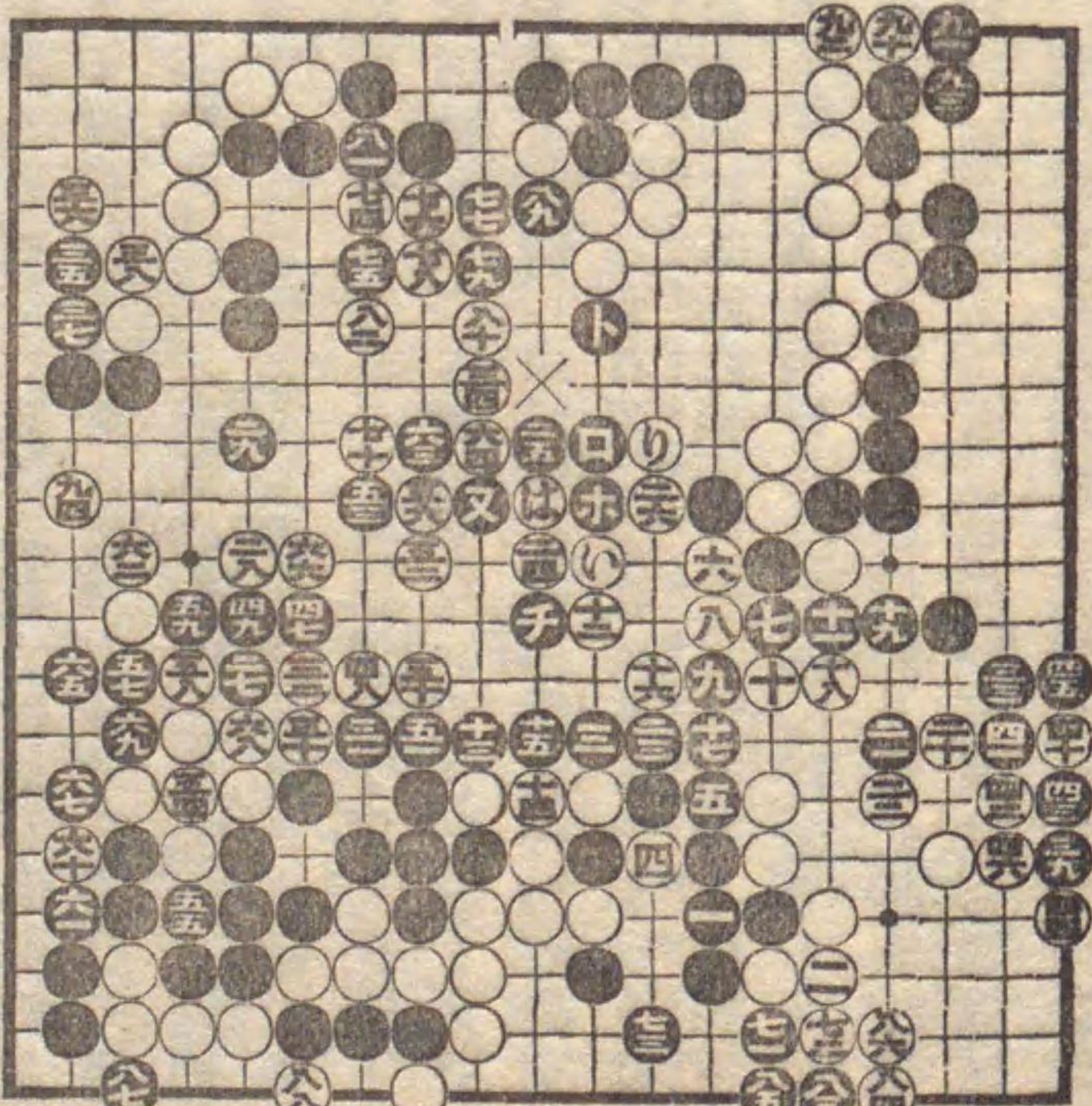
(四八)

斯くては(1)一隊の白に何の響きをも與へない。夫れよりは(1)に跳ね白(2)に約へた時黒(3)に掛粘がんに(4)の白にも響くのみならず後に(5)印に覗く筋も出来るではないか。夫れから(6)と飛びて半死(7)の復活を謀るは如何あらうか。最初黒が(8)と截つたのは即ち圖の如く(9)の一子を打拔て(10)以下一團の捌きを樂にする代りに(11)、(12)の二子は成行に任せやうと云ふ、謂はゞ半棄てに棄てたのである。若し之を逃げる積りならば(13)と切り(14)までの交換をせずして味方に障らぬやう(15)の手で單に(16)に行びるが宜い。是は取りも直さず(17)の二子を北へ出て居る手に當るのである。然るに(18)と半棄ての二子を北へ出すに於ては最初(19)と切つた手が悪化して了ふ譯である。夫れよりは徐に白軍の形勢を見るに左邊に於ける(20)以下の四子も未だ全く收まれるに非ず、又右上邊(21)以下の白も亦完全なる眼形を備へて居る譯でもない。且つ左上隅の白とても据明の状態に在るから此の場合(22)印邊に打つて三方睨みの攻勢を取るのが面白くはなからうか。(23)は穩かに(24)に行びて居る方が宜い。(25)は黒は何故に(26)に粘かぬのであらうか。斯くて兎も角も(27)以下の白を攻める方が宜い。(28)の時でも矢張り(29)に粘ぐべきである。然るに圖の如く何處までも(30)以下一隊の活路を求むるに執着した結果第二圖の如く白に(31)と打たるとに至つては最早や黒の敗勢を兆せりと云ふべきである。

第二 黒軍の敗因

(32)は餘り慾が深過ぎる。左邊にも弱い味方があり中央の大軍連も未だ充分に收まつて居る譯でもないから此際(33)に尖んで居て充分ではないか。左れば黒(34)と粘ぐ手で兎も角も(35)へ行びるが宜い。白は竹符に(36)に並ぶ位のものであらう。其時黒(37)に尖まば如何。假に白(38)に頂げんか、黒(39)印に跳ね、白(40)に行び、黒(41)にグズミ、白(42)に約

第二圖 四十九手以下



すれば白は(43)に跳ねる外なかるべく、黒(44)、白(45)、黒(46)、白(47)と斯くの如く三目を餌にして(48)の粘ぎを略し而して左邊に轉じて(49)の急處を衝く手段もある。斯うなつては何分にも中原に於ける黒軍の形勢が張つて居るから白は到底活くる途はあるまい。然るに白の命令に服従して(50)と粘ぎ(51)と打たるゝに至つては大勢既に決せり。黒の負けたることは明白である。之を要するに此の結果に徴すると(52)の趣向が餘程悪かつたやうに思はれる。

幻庵評

(53)は(54)に押すべし

(四九)

碁聖秀策百番碁(三)

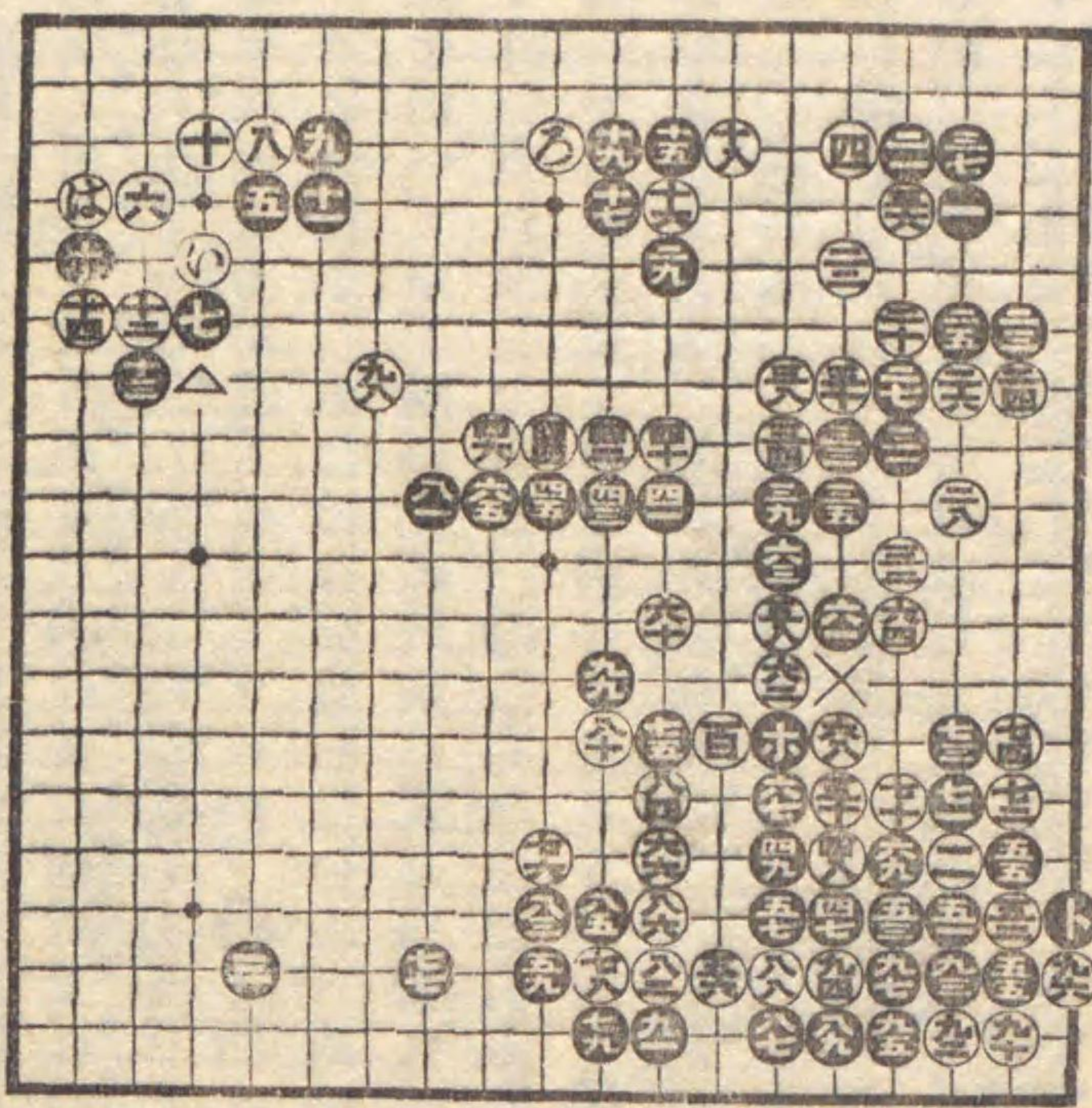
先番四段 安田秀策(中押勝)
互先

四段岸本左一郎

(天保十四癸卯十三日)

▲第一白敗因在布石
を占領しなければ權衡を取ることが出来ない。然るに(四)と掛り黒に(五)と打たれた配置を見れば三隅共に黒に先鞭を着けられて、白の兵

第一圖

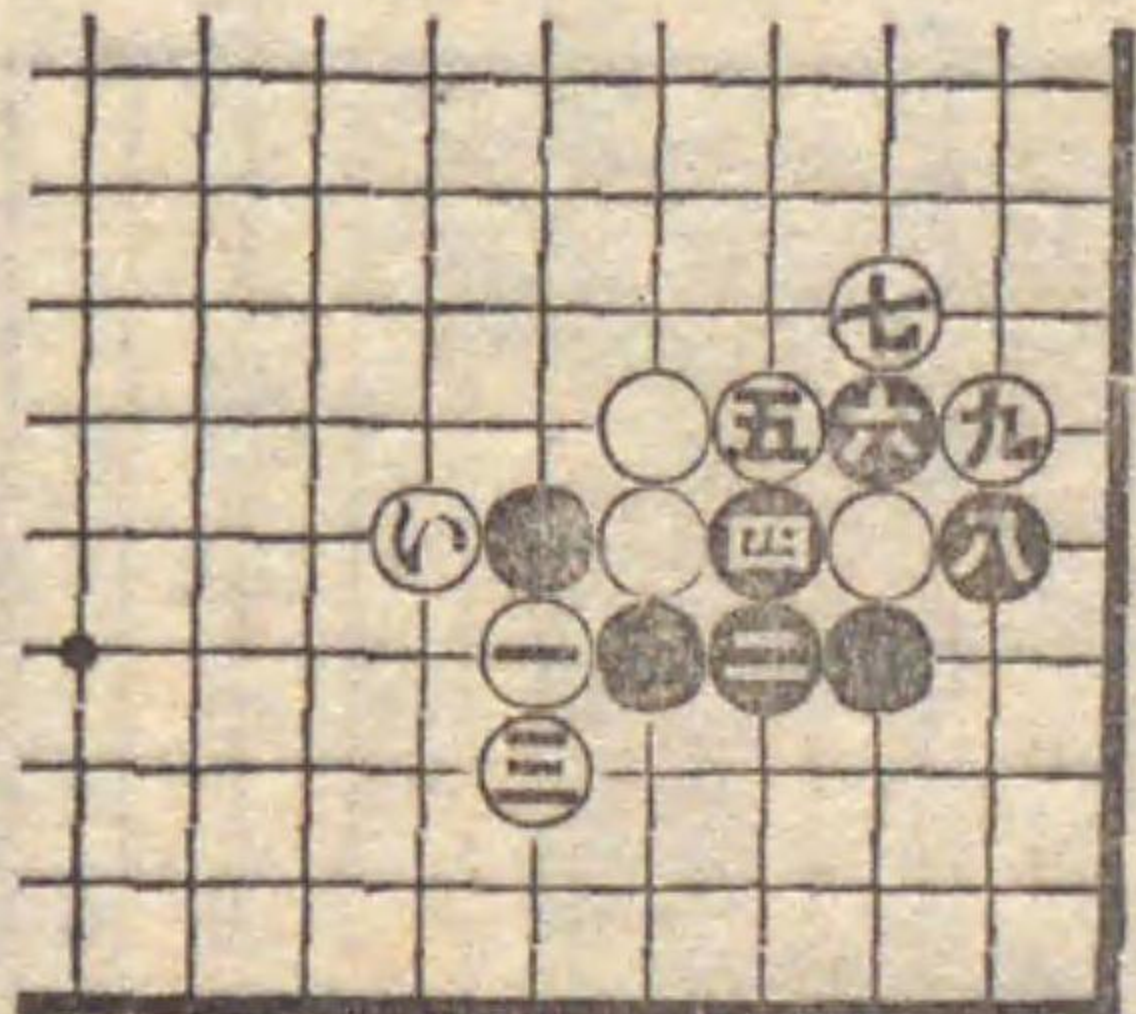


勢は一方に片寄つて居るから自ら局面が狭くなつて術策を施すの餘地が少なくなるのである。(五)は(八)の「もくはづし」へ打つのが普通である。夫れは白が(六)に掛

れば黒(六)と打つは無論であるが、若し(六)の處に掛れば(七)に展開旁々夾まうと云ふ趣向である。是れは謂ふまでもなく左右兩隅が對等の勢ひを成して居る場合に黒に(六)と打たれた恰好だから白の割合ひが悪いことは一見明白である。(七)は考慮を要す。矢張り(六)へ三間に夾むべきである。其の恰好は單に「もくはづし」に在ると一間高くあるとの相違に過ぎない。(八)と頂け(九)と後手を取つて(十)と詰められたのは白の不利や此の上もない。此の場合手を抜いて(十一)か或は一路進んで(十二)へ打つか、而して黒が(十三)に懸つて來た時(十四)に受けるのが當今流行の打方である。然るに圖の如く打つた爲めに却て(十五)の黒が活き反つて來たではないか。ソコで白若し△印を切れば則ち黒は又手を抜いて(十六)に頂くべきである。(十七)と頂け(十八)と跳ねたのは定跡であるが(十九)までの結果、兩翼既に堅實に中原雄飛の姿勢を備へられては白は如何にして此の頽勢を挽回するであらうか。左りとて(二十)の手でドウ打つた所で急に旨い仕事は出來ない。(二十一)は(二十二)へ跳ね出して(二十三)の一子を取る手がないでもないけれども、併し其の利害は容易に斷定することは出來ない。(二十四)は甚だ悪い。(二十五)と粘がれ(二十六)と粘いだのは非常の凹みで如何にも位が低い。(二十七)の手で(二十八)に跳込み、黒(二十九)の時白(三十)に粘るか、又は(三十一)へ跳込まずして(三十二)に截つて甲圖の如く打つも亦た一策である。圖中(三十三)と截らずして(三十四)の處に置かば白は(三十五)に一子を抱へて居るのが常用の手段である。(三十六)、單騎敵の牙營に迫るは無謀ではないか。夫れよりは中原に浮ける(三十七)以下の一聯隊を遠く望んで(三十八)に斜走して徐々に手段を施すに若くはない。(三十九)は如何

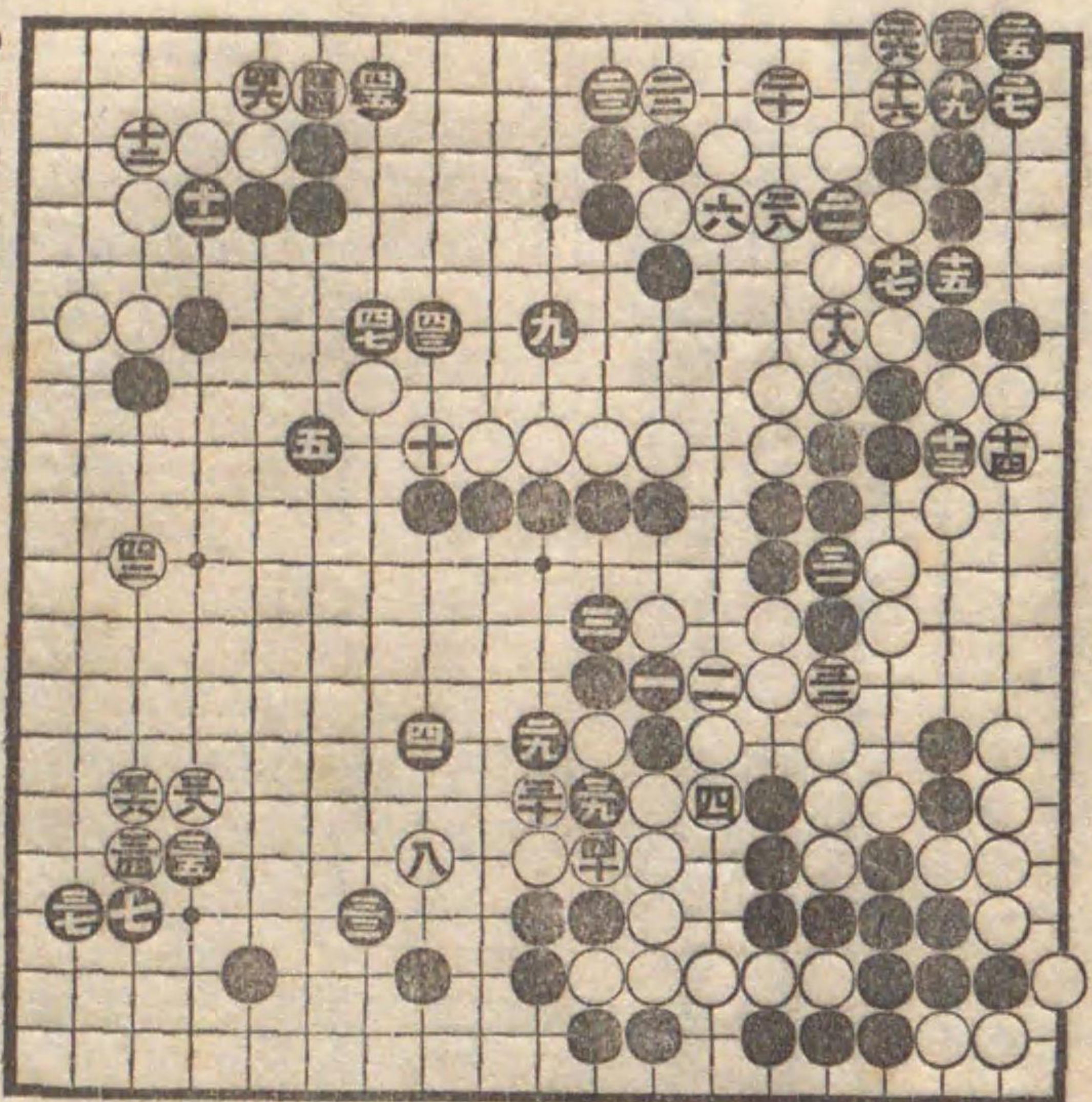
(五二)

甲圖



である。圖中(三十三)と截らずして(三十四)の處に置かば白は(三十五)に一子を抱へて居るのが常用の手段である。(三十六)、單騎敵の牙營に迫るは無謀ではないか。夫れよりは中原に浮ける(三十七)以下の一聯隊を遠く望んで(三十八)に斜走して徐々に手段を施すに若くはない。(三十九)は如何

第二圖



▲碁位の時打碁である。

にも氣の利かぬ手だ。之れが爲めに(四)の突出しを利かされ、尙ほ(五)の突當りをも利かされる創を残したのは随分酷い。故に(六)に引かずして(七)印に約へて居る方が味が宜い。(八)、是れは單に(九)に飛んで居る方が宜い。左すれば(十)の突當りは利かないのである。次に黒が(十一)と截つた目的は白が若し(十二)に跳ねて來たらば先手で(十三)の跳ねを利かさうと云ふ手段であるから白は夫れを嫌つて(十四)、(十五)と押したのである。孰れにしても白の方が宜しくない。第二必竟圖の如く黒に(十六)と聯絡されて而して白が(十七)と繋がつて居なければならぬ事になつたのは第一圖に於て白が(十八)と約へた結果で(十九)と打たるゝに至つては最早や何としても白に勝算はない。結局白が中押敗となつたは最

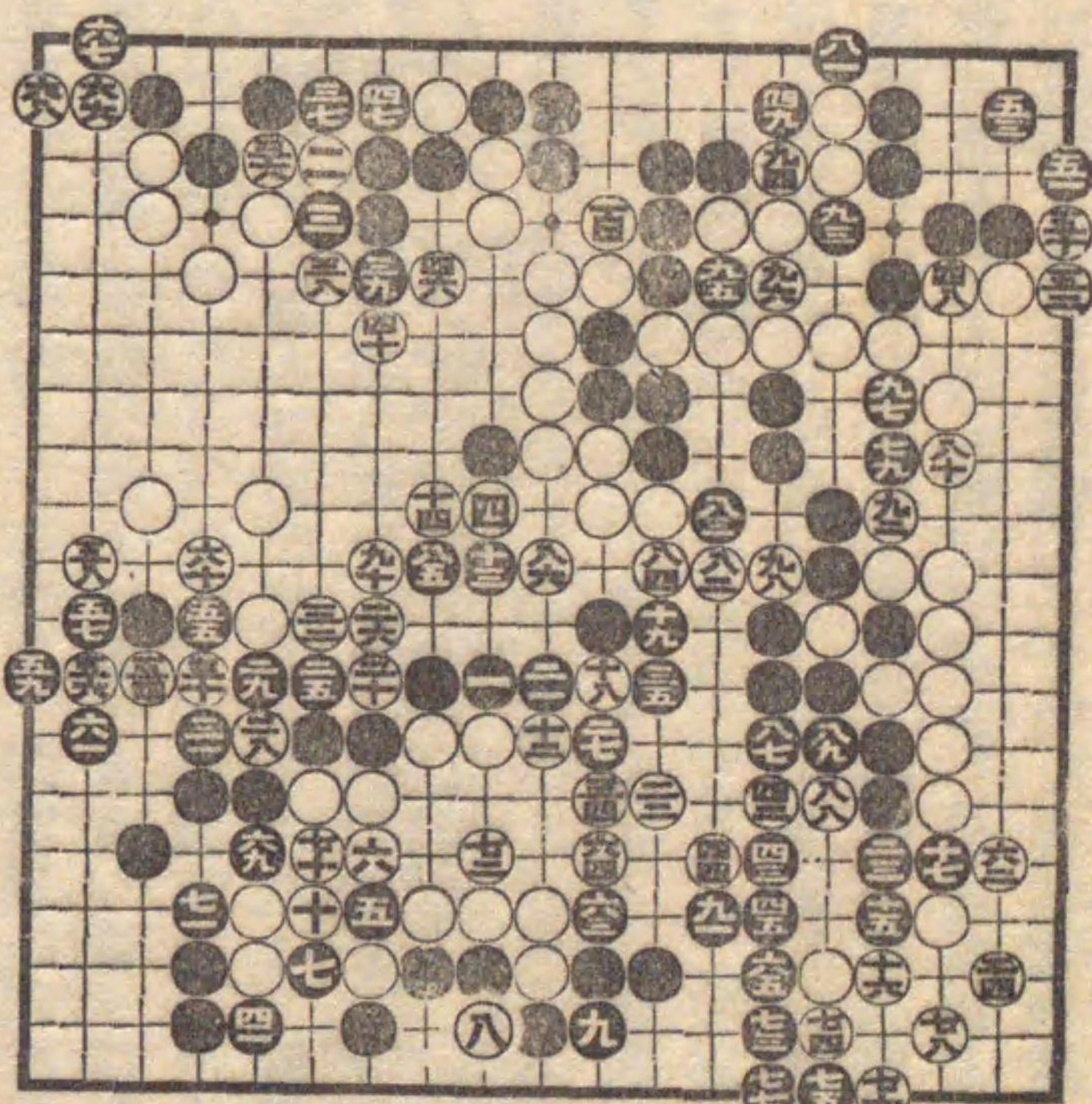
碁聖秀策百番碁(三)

四段安田秀策(六目勝)

互先 先番四段鶴岡三郎助

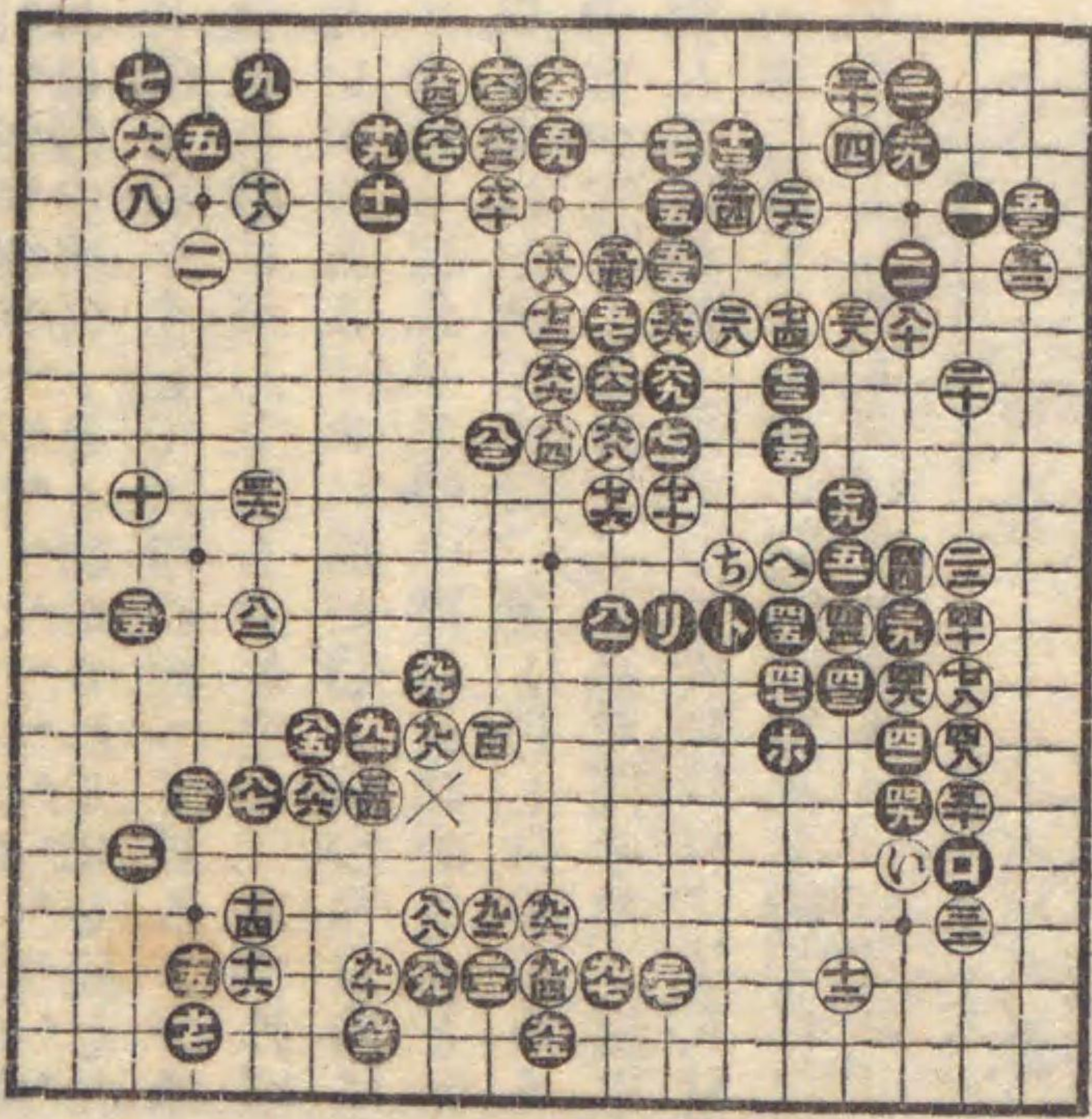
(天保十四年八月二十三日)

第二圖 手百二



【五四】
い。然るに譜の如く引かれた結果は餘程黒の方が悪い。黒は斜に飛び白に斜走したる時黒×印に飛ぶも亦た一策である。黒は左に懸粘ぎたい。左すれば白

第一圖 劫



白である。一見明ことは此の場合、白に尖る。この頂けを防ぐが最も肝要の手段である。黒は単に白に引き白に引かば黒に尖るで居る方が宜

▲黒平凡無事の負け

掛る手を封じたのである。若しも黒へ懸らば白、黒、白、黒、黒となつた時白亦たと所謂兩懸けにして黒の位を低

白の方も固まる代りに黒の方も亦た厚くなると同時に以下の三子が稍と深間に陥るから斯く打つても亦た一策たるを失はぬのである。併し其の利害得失は容易に断言することは出来ない。黒は曲つて自己の陣立を厚くするに若くはない。第二、白と黒の交換は黒の損である。何故に備へぬのであらうか、左すれば白は置かれて殺されて了ふから杯に約へて居る暇はないのである。然るに黒が此の好機を逸して竟に手を抜かれと固めらるゝに至つては最早や黒に勝算はない。要するに本局は極めて無事な碁で黒は平凡に負けて了つた。

碁聖秀策百番碁(四)

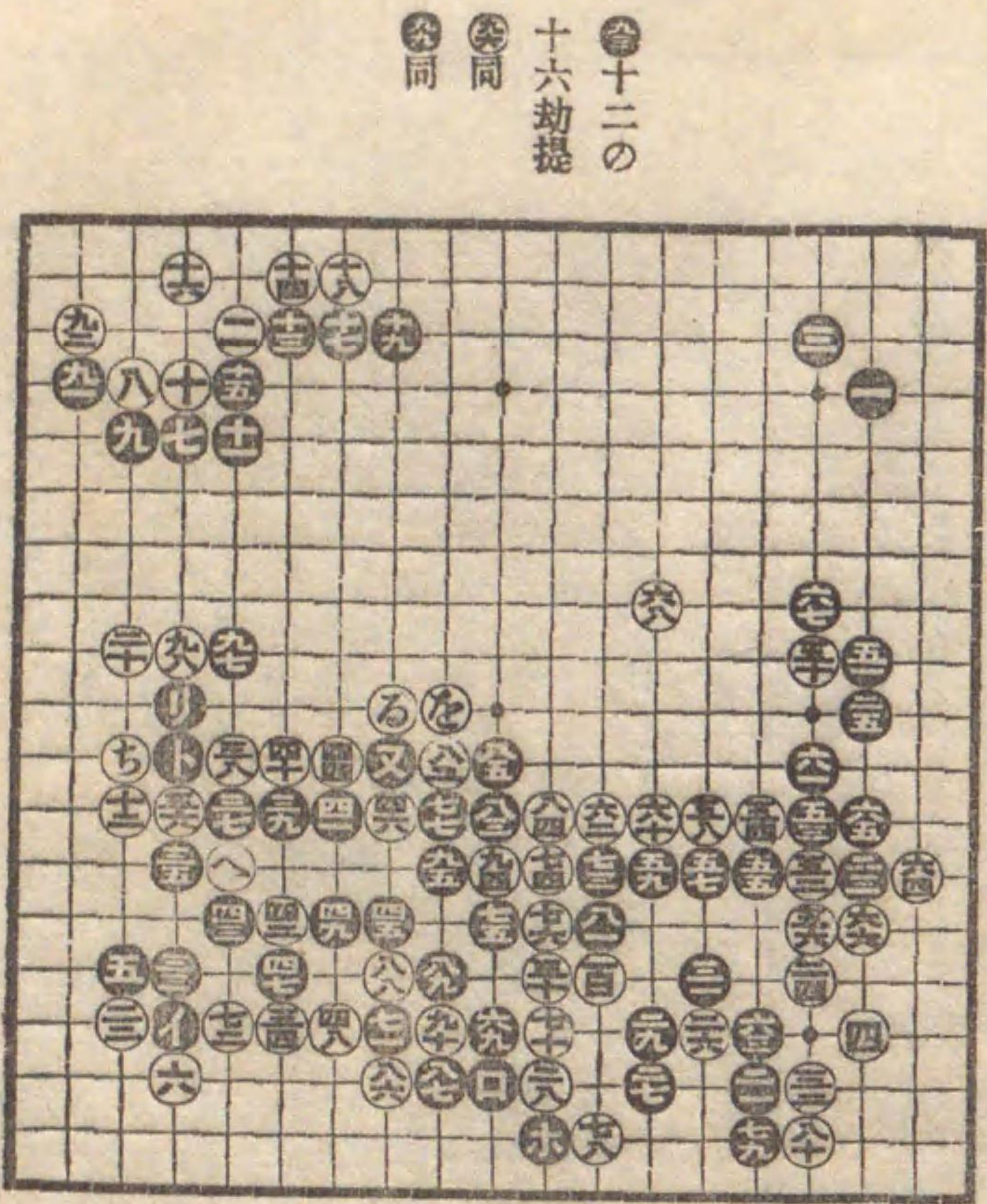
先番四段安田秀策

四段眞井徳次郎(中押勝)

(弘化元年五月二十三日)

▲自己の地盤に映ひす

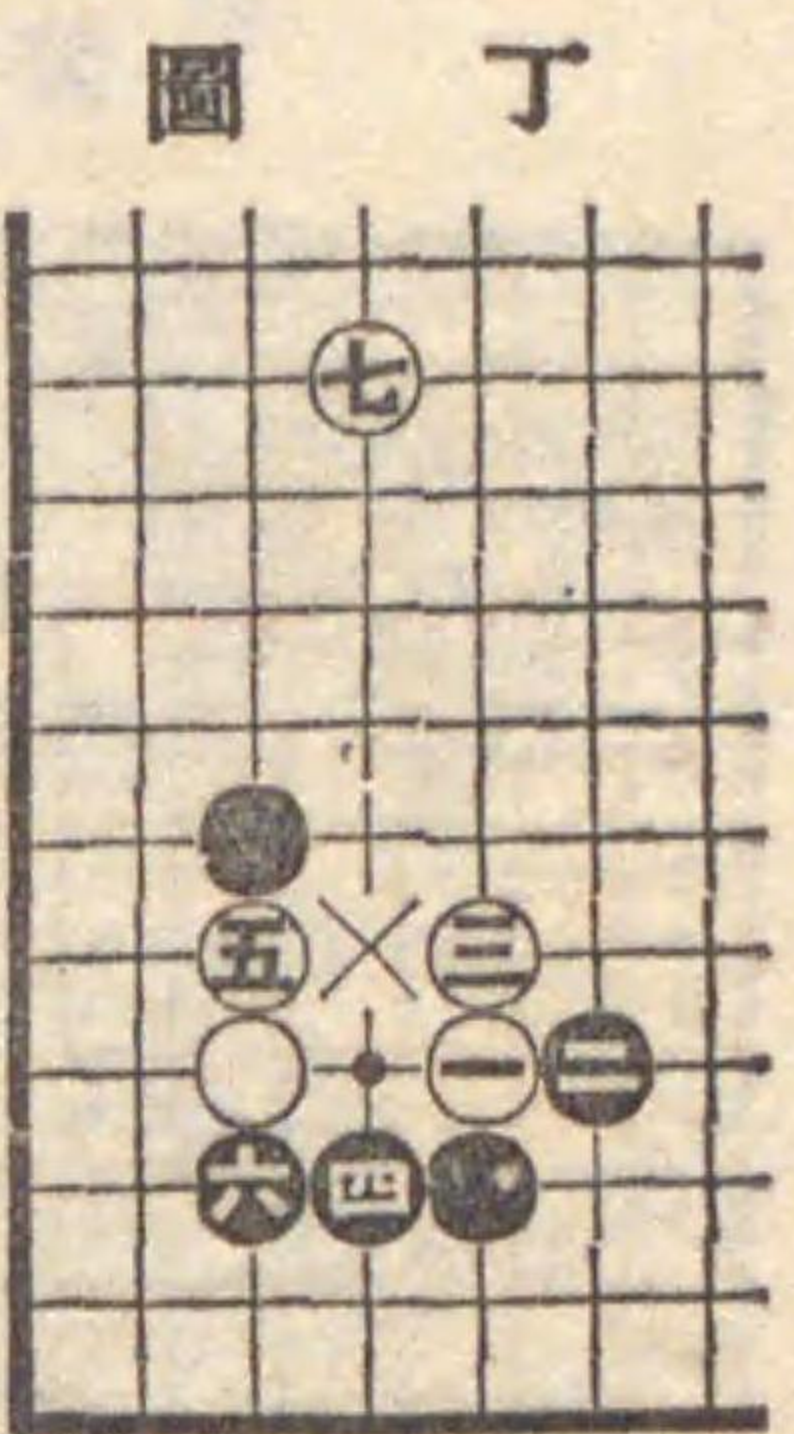
ける手段もあるが、左すればに縛込んで活きられて了ふ。是れは一得一失で、さう打つて悪いと云ふこともないが、併し白がと打つて手を抜いたのは圖の如く打たうと云ふ趣向である。の夾みは如何なものか、へ拆くこともあるが左



すれば白にへ拆かれることは眼に見えて居る。或はへ掛けられはせぬかと謂はんか、併し左側へ三間拆きの時

▲決勝點

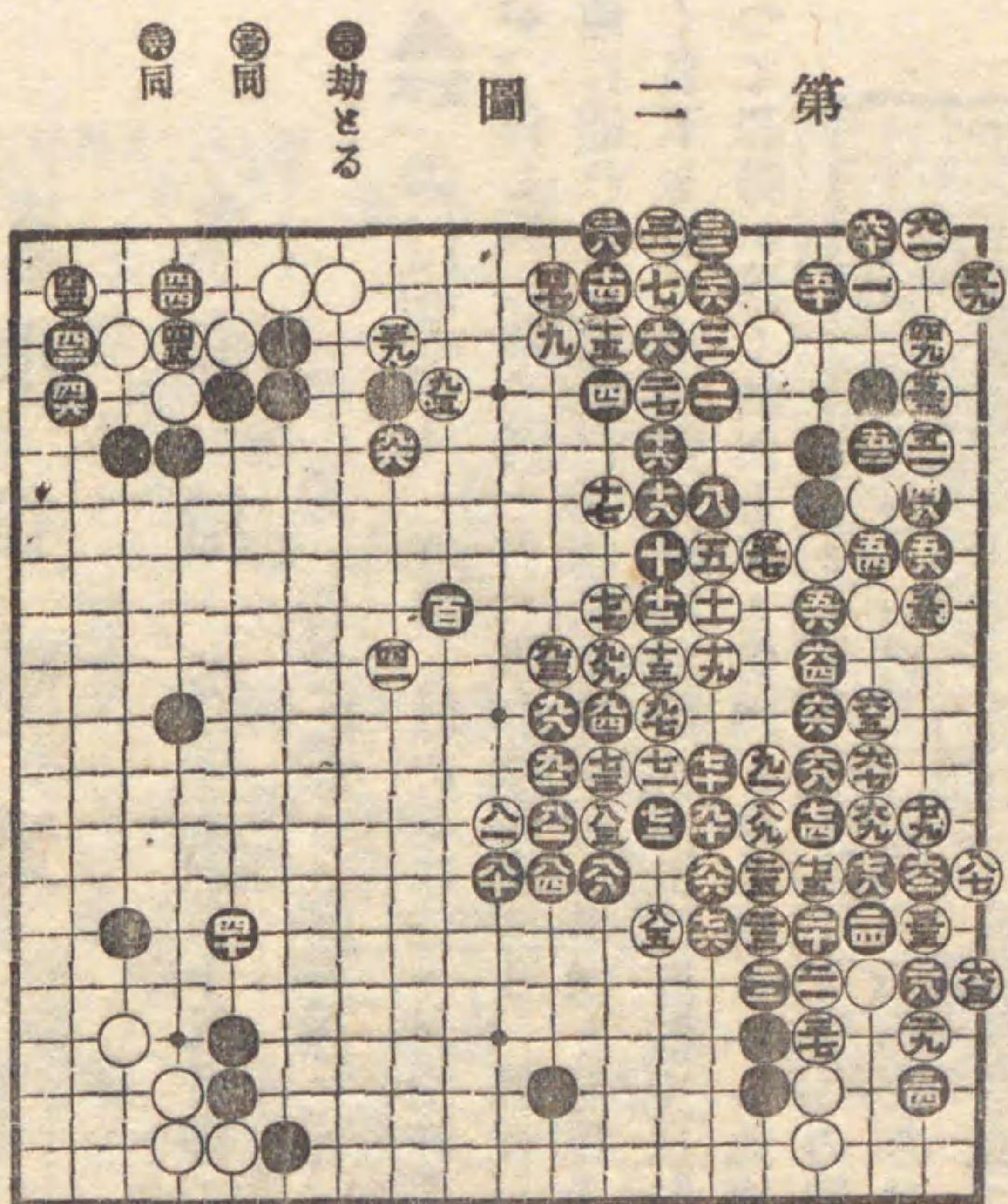
の手で兎も角もに切り而して含みて打つとも亦た一策であらう。但しに縛れた時白若しに取らずして下らば黒は無論に掛粘いで宜い。然るにと打ちと下られたのは蓋し意外であらう。今に互る劫を含んでに約へるも亦一策と云つたのは此處だ。若し



て丁圖の如く交換して七と打つ杯も一策であらう。左もなくば×印へ尖んで居る方が優つて居る。然るに黒に本圖と備へらるゝに至つては最早や戦局の形勢定まる。如何に神算奇謀を運らすとも頽勢を挽回することは容易の業でない。十五目の敗因は此兩階の作戦計畫の非なるに基くのである。

大勢は既に定まつて居るのだから互角の力量では到底挽回の望みはない。

▲第二 大勢既に定まる ①は甚だ低い手である。左邊より下邊へ掛けて黒の大模様が出来て居る場合であるから



其釣合ひを取るべく、⑤に飛ぶ方が宜い。⑥と劫に受けたのは意味がある。此場合⑥に粘ぐのは⑥の處を截る意味である。

なければならぬ。處が假に黒⑥に粘ぐとして白⑥に粘ぎ、黒⑥に截つた時白⑥の處を截られて凌がれる手段があるから黒は夫れを慮つて圖の如く⑥と劫に受けたのである。⑥は⑥に飛ぶか然らずんば⑥に斜走する方が宜い。何れにしても

碁聖秀策百番碁(七)

七段 太田 雄 藏

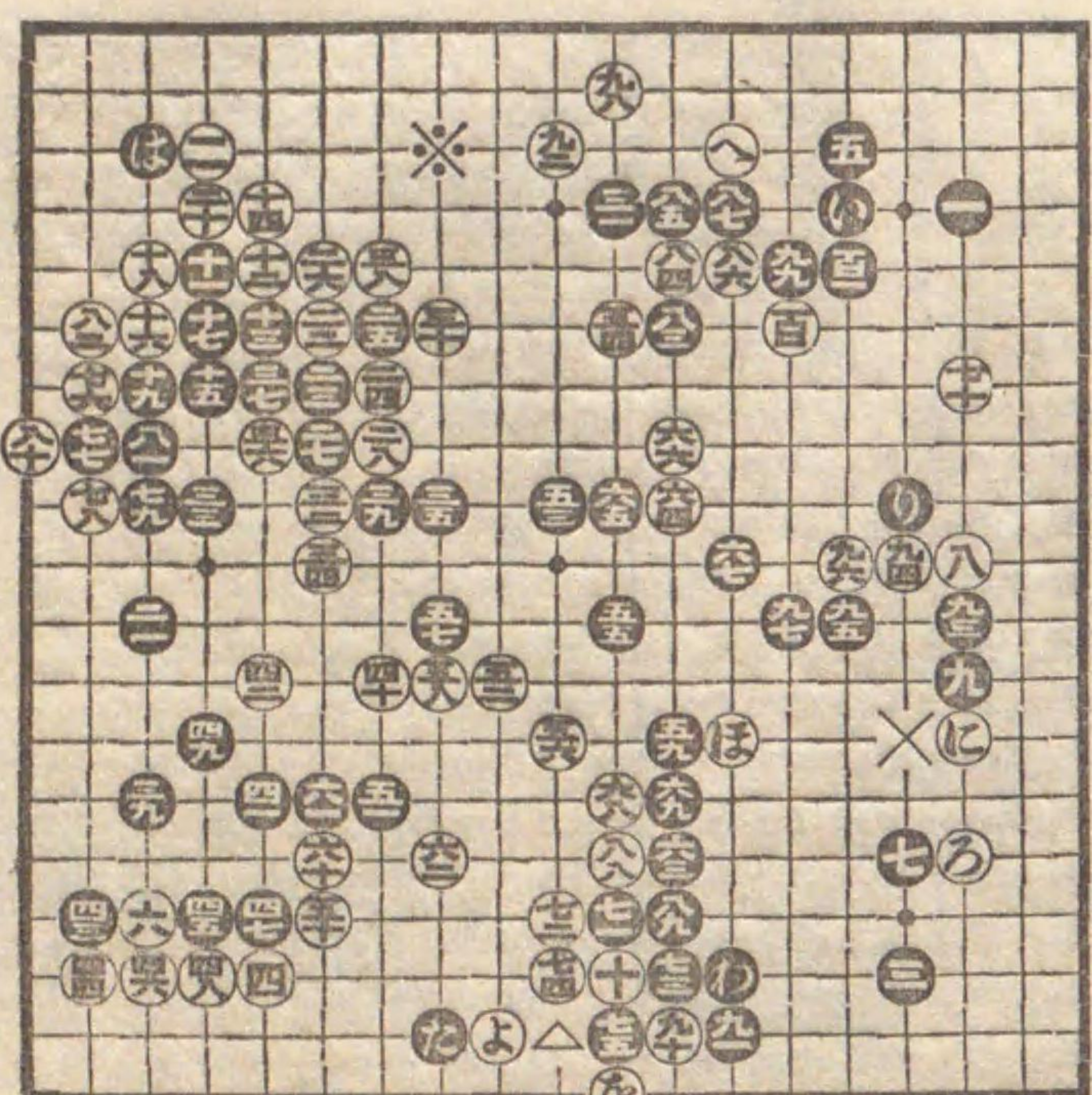
五段 安 田 秀 策 (先、三目勝)

(天保十四癸卯閏九月十一日)

▲第一 ①は古風の定石

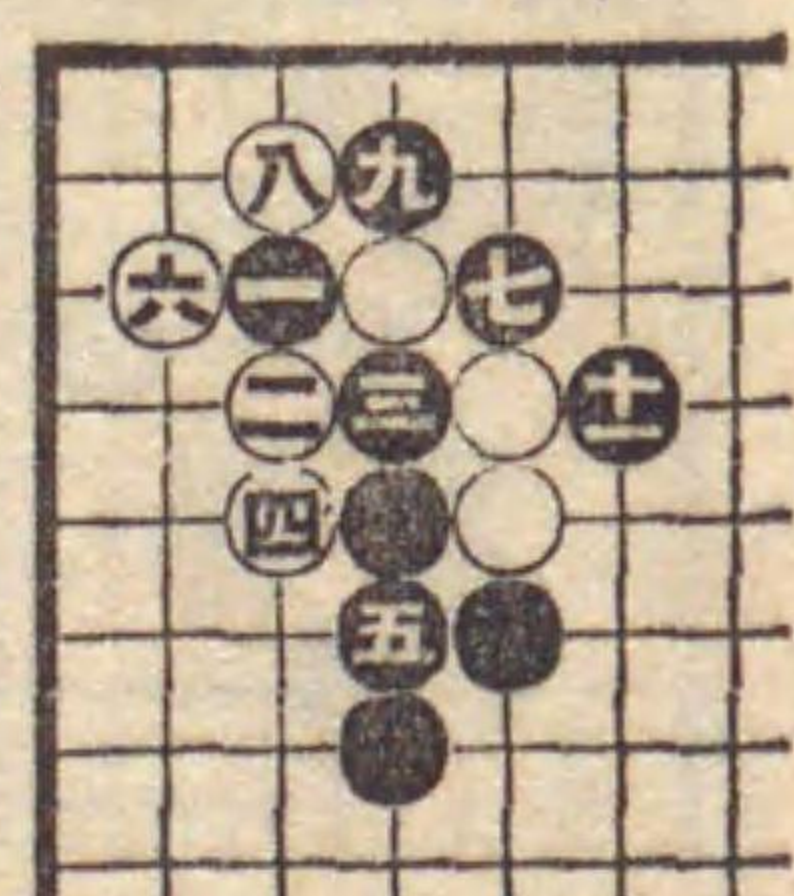
本圖の如く黒に⑤、⑦と兩締りをされたのは損である。④の手で、⑤に掛かるか或は⑥に掛かるか、孰れか一方に掛かるを普通としてあるが、蓋し趣向で打つたであらう。⑤は同じ事ならば⑥印に締る方が

第一圖 (勝目三黒) 碁下以圖 一 第



宜い。是れは毎度言ふた通り白が⑥印に掛つた時⑥に夾む手が釣合が好いからである。④は趣向でもあらうが、⑤に拆くが普通である。⑥、⑧は定石とは云ふものゝ古風で

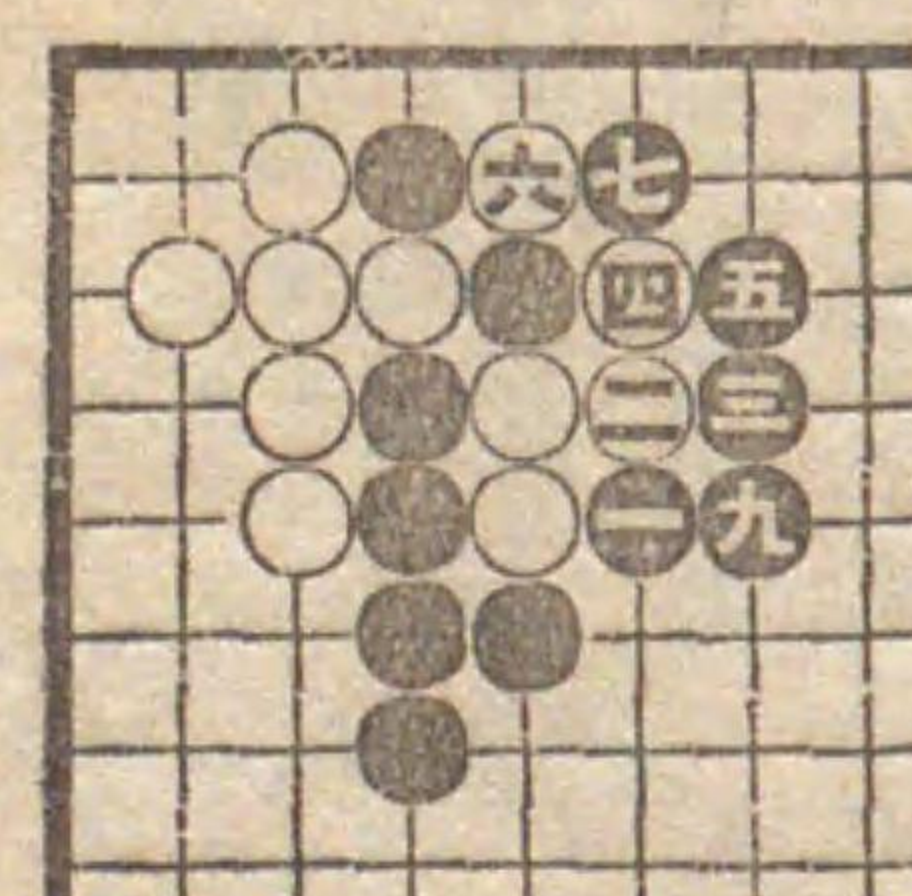
甲圖 ④⑤



ある。圖の如く③までの定石になつては黒の方は收まつて樂になる。因つて④の手で⑤に打つのが當時流行の手である。其時黒⑥印に頂ければ即ち甲圖の如くなるのが普通である。斯くて⑥

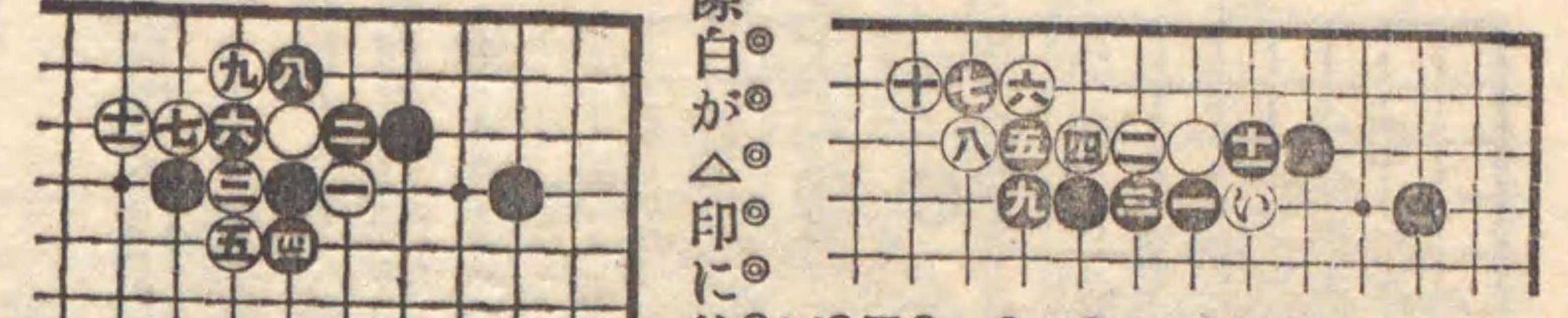
の手で第一圖×印に「してう」の當りを打つべく、左すれば黒は二目を取つて居なければならぬ。ソコで白⑥印に⑦の一子を約へ込むと云ふ手順になるのである。さうなつては白の方が割合ひがよい。勿論黒に於ては二目を「してう」に取らぬ打方もある。夫れは乙圖の如く打つのであるが、左すれば白が先手で⑥の處に拆くと云ふ手順になる。⑥以下⑥まで時機尙ほ早し、矢張り⑥に拆くが宜いと思ふ。⑥は如何であらうか。夫れが爲めに⑥と煽られて茲に手厚い封域を作られたのは白の不利であらう。此手で⑥印に飛んで形勢を張つては如何。蓋し黒は⑥に飛ぶ位のものであらう。ソコで白⑥に拆いて居る方がよくはあるまいか。⑥は厚い手ではあるが、併し此場合⑥、⑦と煽つた其の勢力を利用して、⑥に詰めて⑧の白を攻むるも亦た良策である。⑥と引き⑥と變つたのは甚だ面白くない。斯くては稍々黒地が固まる氣味がある。因つて⑥の手で上下の聯絡を保つやう、先づ⑥に覗き黒⑥に粘いだ時、⑥に拆いて居る方が、黒地の上の方が開放しなつて居る丈

乙圖 ④⑤



け面白くないか。⑥は約十五目位に當る手で、大きいけれども此の場合⑥に打込んで黒の應手を試すは確に一策である。左れば黒⑥に頂けずばなるまい。其の結果丙圖の如く打つて先手を取る手段もある。此手順中白⑥の手で

丙 丁 圖



①印杯へ縛ね出すは俗手である。参考の爲め其の成行を示せば丁圖の如くなる。斯うなつては先手は黒の手に歸するから第一圖△印に泳いで然る後或は①印に打つて白を窘める杯種々の手段がある。何れにしても白の方が宜くない。②の△印は辛い處である。實は白は△印に唯約へて居たいのである。其時黒はマサカ③に粘ぐ譯となつて、山々で、残る處、約へるとすれば、黒は左りに△印を打つて、必定向へず、是れも又辛い。然るに、白は、此れ已む。是れも、取つて、置いと、彼、來る。是れ、白の、取つて、置いと、勢、打つて、泳ぐ。譯、得、手、が、白、に、勝、算、の、な、い、基

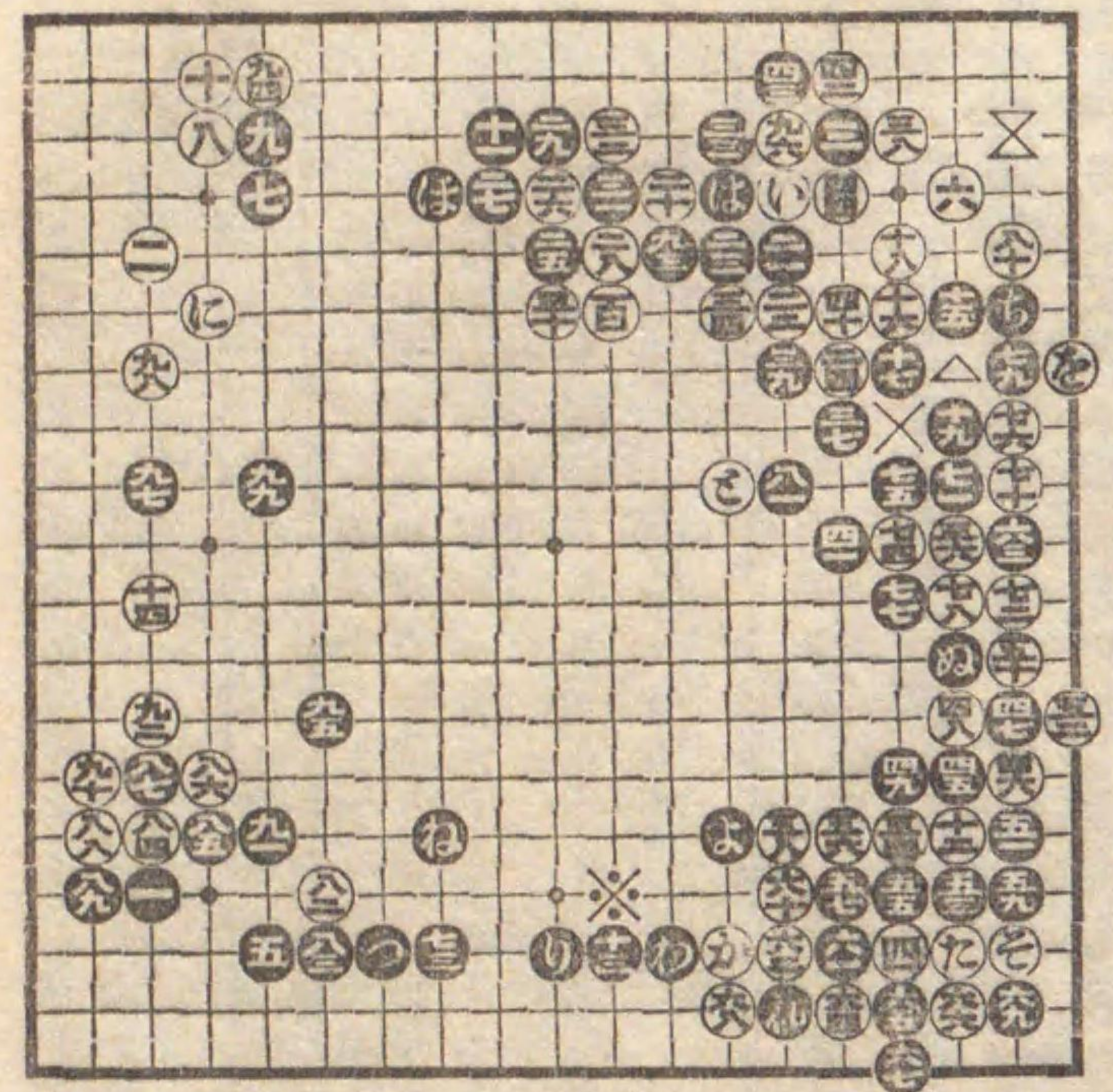


碁聖秀策百番碁(八)

七段 太田雄藏
 (先) 五段 安田秀策 策 策

(弘化元年申辰三月十三日)

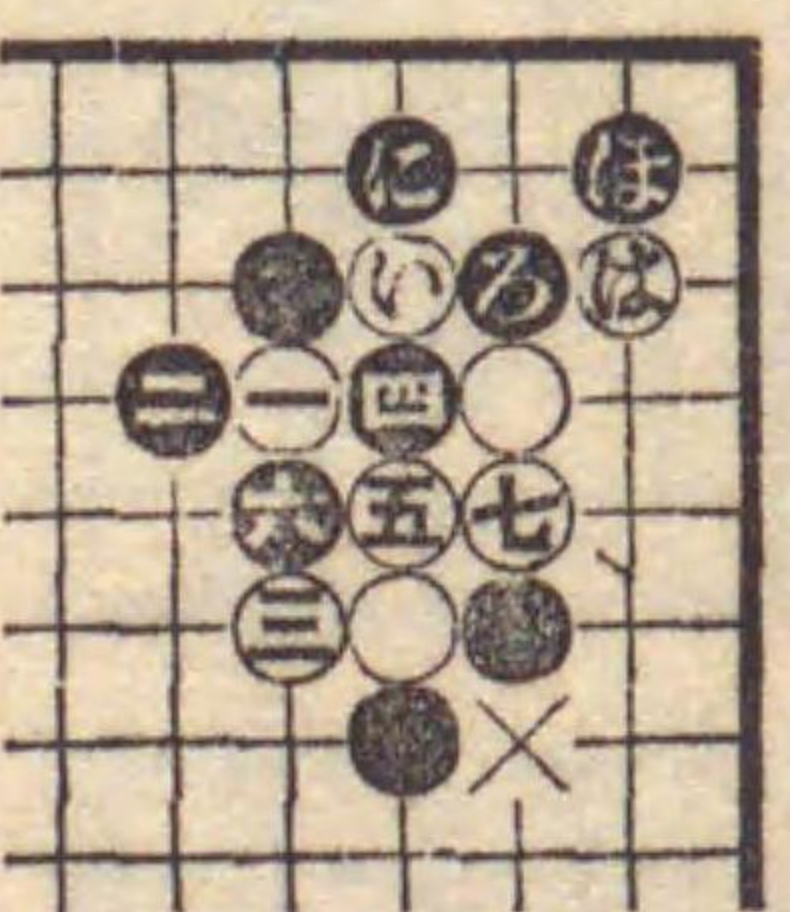
第一圖



▲第一圖に覗く趣向 「△」ノ拆キハ一得一失ナリ。敢て悪いと云ふ譯ではないが、左すれば白は△に尖むであらう。斯くて黒が若し手を抜かんか、白より忽ち①印へ懸

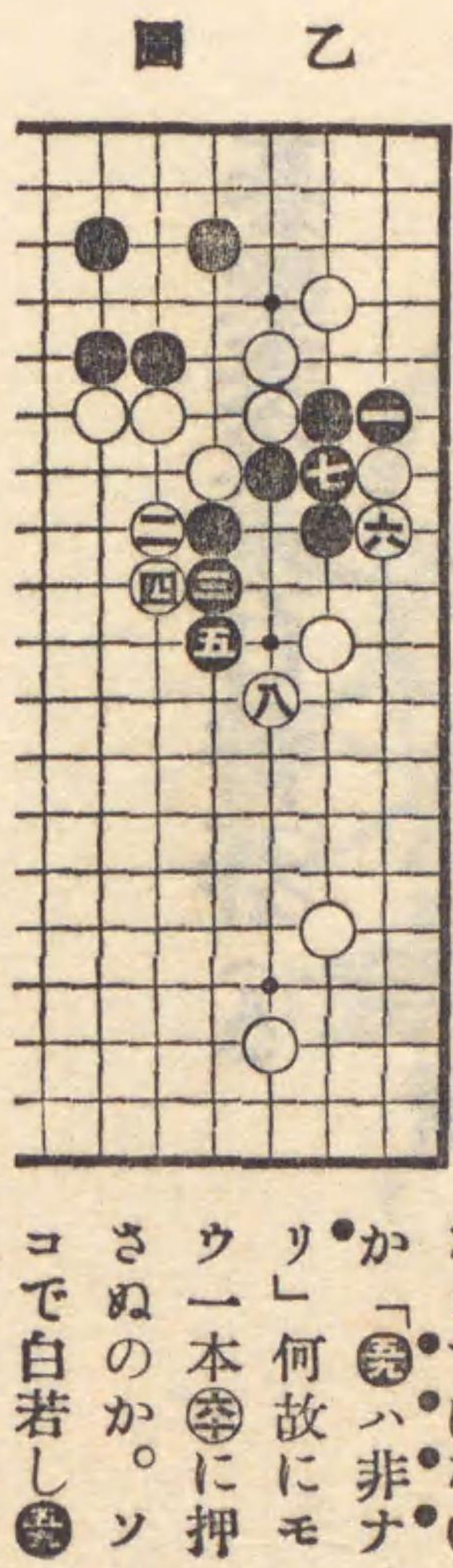
けられべく、ソコで黒②に飛ぶとあつては如何にも位が低くなるから、黒は多くの場合③に受けて居なければならぬ。即ち白に先手で④の尖みを利かされる不利がある。然ら

圖甲



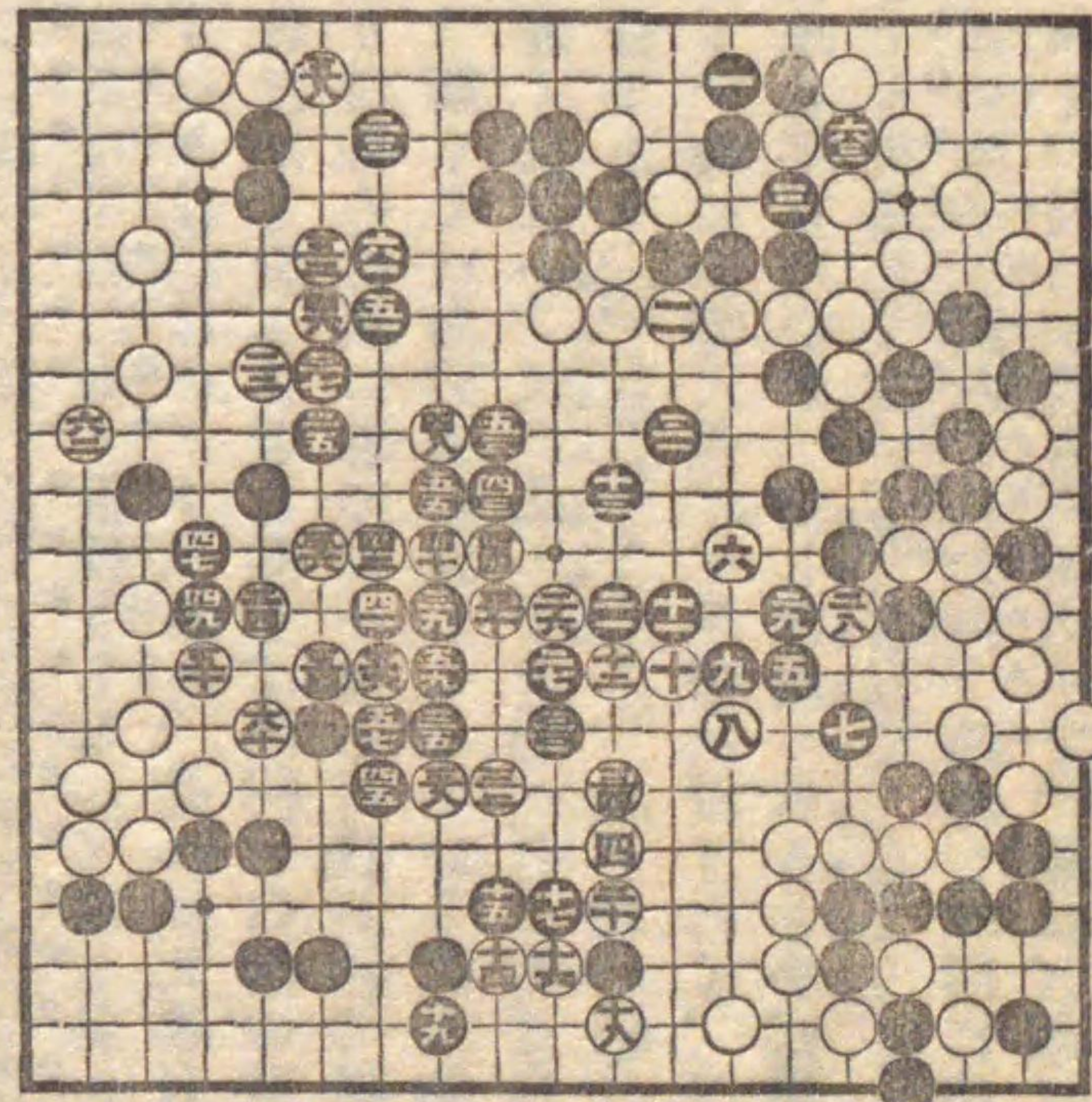
ば⑤の手で⑥に拆いたならばドウか。是れならば⑥の尖みは利かない。抜いても差支。其の代り白⑦印に、尖まば如何。黒はマサカ⑧印に圍つて居る譯にも行くまい。是れは如何にも因つて手を抜いて⑨の大場へ拆くとすれば、白が直ぐに遣るかドウかは解らないが、兎に角⑩へ打込まれる不利あるを免かれない。各々一得一失で、ドチラが宜いとも斷言は出来ないが、此場合⑪へ拆くも亦た一策である。「⑫ハ須ラク考慮ヲ要スベシ」。此手で⑬へ尖むのが普通である。左すれば今言つた通り⑭の懸けも利けば又⑮との釣合ひも甚だ好い。然るに⑯と締つた爲めに黒⑰、白⑱と交換するや、直ちに⑲と夾まれて、白は甚だ應手に窮して、⑳と頂けたのは兎も角も㉑一段ノ工夫ヲ要ス。黒に㉒と懸粘がれたのは面白くない。或は㉓の手で㉔に受けられても白の方が悪い。因つて㉕の手で㉖に頂けてはドウか。其の結果は甲圖の如く振變りとなつて凌ぎ易かるべく、圖中注意すべきは①印のアテである。是れは此場合當てぬ方が宜い。何故かと云ふに若し然らば黒①、白②の時黒は直ちに③に截り白④の時黒に⑤印に一目を打抜かれて⑥の緯ねを含まれる。斯くては白の方が宜しくないから圖の如く單に⑦に粘ぐに若くはない。又黒⑧の手で⑨へ行ければ白は×印に約へて充分である。「⑩ハ筋違ヒナリ」。此の場合⑪に打つのが手筋である。時に白⑫に飛ばさず黒⑬に押すべく、又白⑭印の挾間杯に來る手はないが、若し其處へ來るとせば黒は⑮、⑯とドコまでも突出して宜い。「⑰ハ氣拔ケノ手ナリ」。此手で⑱に覗いて黒の應手を試みては如何。黒若し△印に粘がば白又⑲に覗くべく、是れが抑も自慢の手で、黒は×印に粘ぐ外はある

まい。ソコで白印に掛けてはドウか。又黒△印に粘がすし
て井づ●に當て白印の時黒若し●の方から約へたらば白△印
に突込み黒×印に粘いた時●に曲つて●の一子を擒にすべ
し。斯かれば黒は蓋し●に頂ける位のものであらう。其儘棄
置いてビタリと※印に頂けるのが臨機の處置である。其時黒
若し●印へ引きもせば茲に「してう」の當りが出来る。因つて
白は踵を回へして●に引くが宜い。黒は●に縛ねる外なかる
べく、白●へ縛ね込まば如何。黒●に截らんか、白●に截つ
て次いで●印に●の黒を「してう」に擒にすべく、又黒●に截
らずして●に粘ぎもせば白●印に互つて前後に切斷すると云
ふ恐るべき手がある。若夫れ黒が此の魂膽を悟つて白が※印
に頂けた時●に逆進すれば白は又茲に趣向をすると云ふ計略
である。或は又黒△印にも粘がす●にも約へずして●印の方
から約へたらば則ち乙圖の如く△と尖むのが是れ又頗る洒落
れた手である。然るに●と尖み頂けた爲めに●、●と打たれ
ては最早や急に此黒を攻めることは出来ない。「●ハ一考ヲ
要ス」蓋し這は△印の置き互りを防ぐ爲めであらうが、若し
然らば●に覗く手もあり旁々餘り大きい處でないから暫く棄
置いて●に詰めるが宜い「●ハ良手ニ非ズ」此の場合●へ詰
めるに若くはない。左すれば白は●に備へるであらう。ソコ
で左邊に轉じて●へ詰めては如何。今度●の打込みが厳しく



なるではない
か「●ハ非ナ
リ」何故にモ
ウ一本●に押
さぬのか。ソ
コで白若し●

第 二 圖 百三十六手以下(市)



て、此方面が堅くなつた曉は次いで白は●に粘ぎ●に截つ
た時●印に約へて劫にする手段があるではないか「●ハ威服
セス」此處は●へ突當るのが形である。左すれば黒は●に備
へる外はあるまい。ソコで白●に打込む方が面白くはないか
「●考慮ヲ要ス」是れは●へ詰める方が宜い。白若し●へ打
込み來らば●印へ「ボウシ」に冠して戦ふ方が面白からう。要
するに此●は實は黒の一目勝に歸すべき●であつたか、●に
角斯く細基になつたのは第一●を最大原因として●の手も
亦た幾分の責任を負はねばなるまい。

〔六四〕

碁聖秀策百番碁(九)

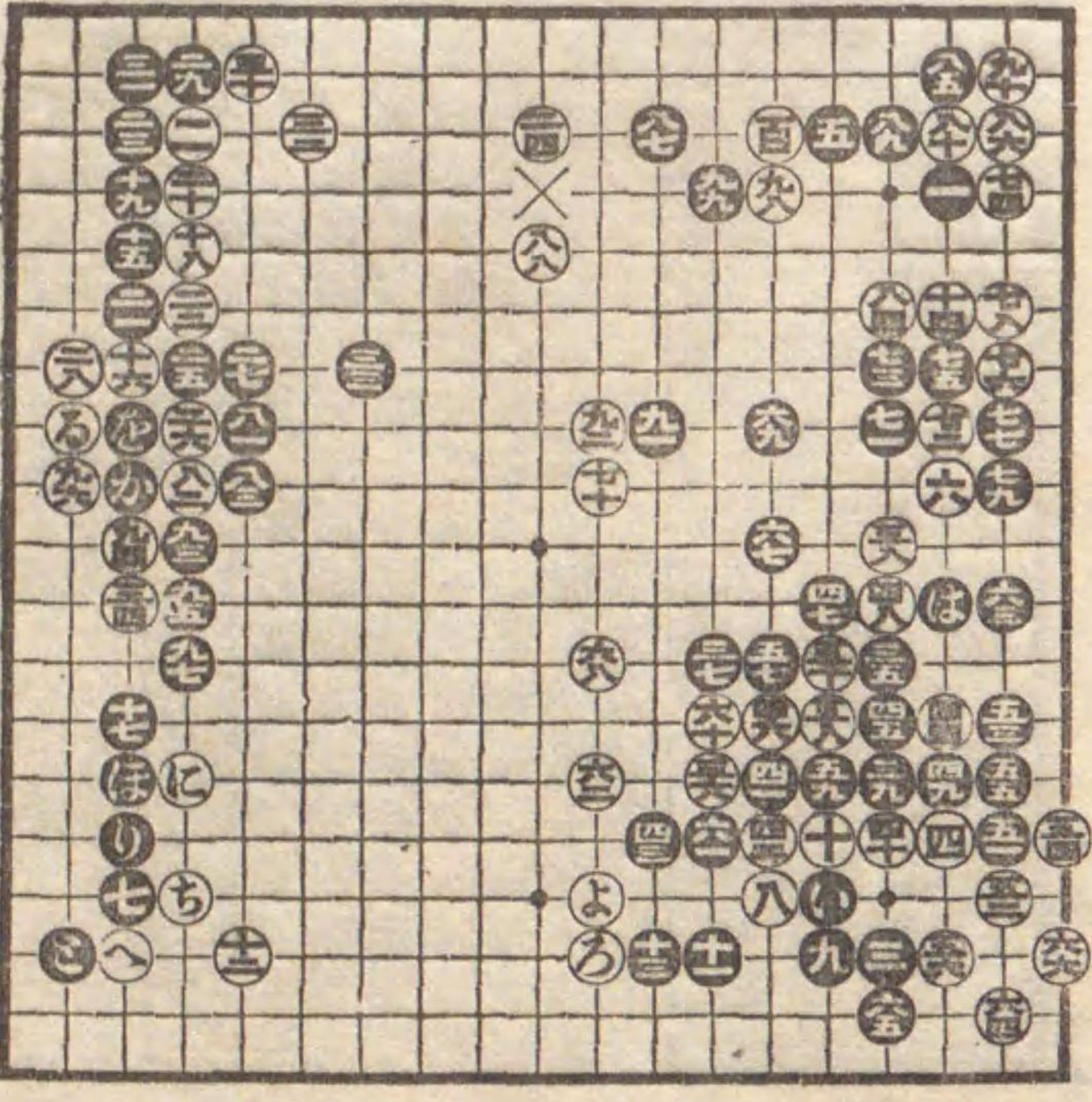
七段 安井算知

五段 安田秀策(先、中押勝)

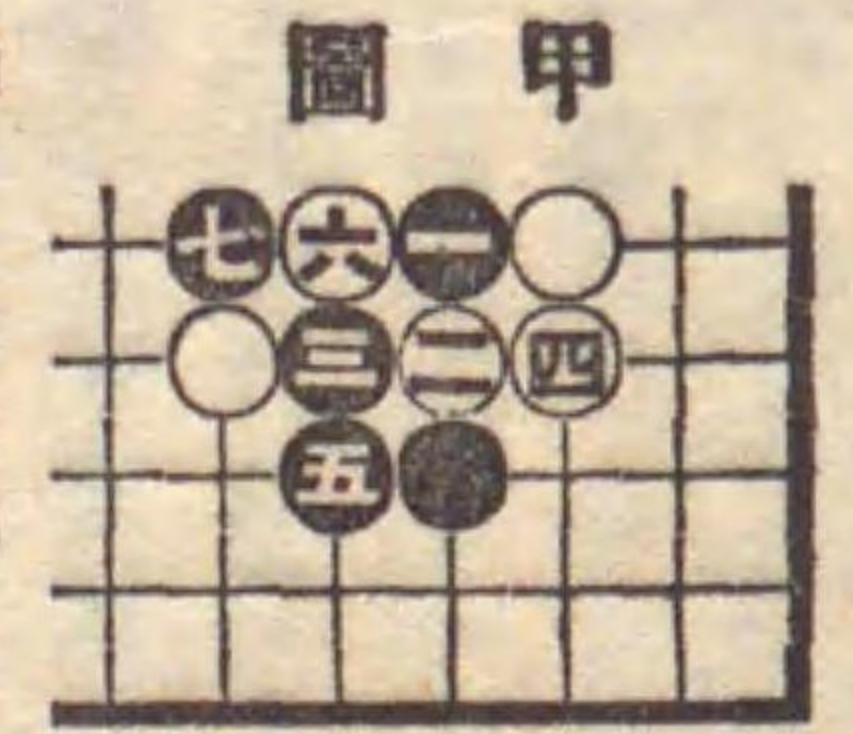
(天保十四年閏九月十四日)

▲第一●との詰め 「●ノ變化」是れは普通の手であ
るが、此の手で先づ●印に尖んで白が●に備へた時に●に打
つも亦た定石である「●ハ古風の定石ナリ」昔時は定石とし

第 一 圖



て能く行はれ
たものである
が、今日では
●へ頂けて甲
圖の如く打つ
方が宜いと云
ふ定論になつ
て居る。と云
ふのは●の白
が●に在れば
●と飛んで差
支ないが、路
緩んで居る丈



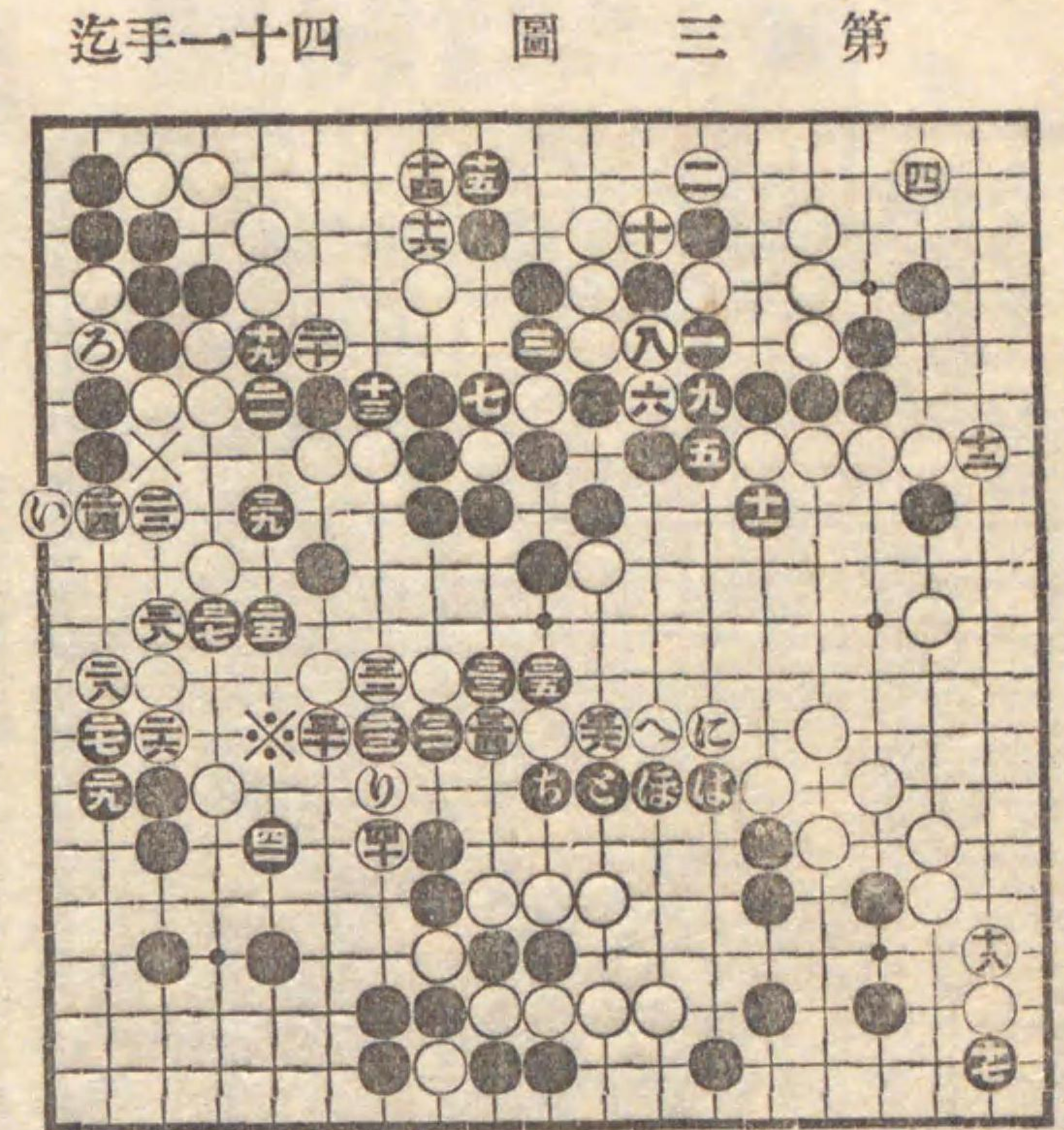
け働かれた姿である。加之ならず●と掛られ
た結果●印へ詰められると云ふ嫌な手が生れ
て來たので、ドウしても●と並んで居なけれ
ばならぬ事になつた。乃ち低い處へ幾手も掛
けたと云ふのは大變割合ひが悪い譯である。

●の手で△邊に締るのも大場であるが、さうすると●印へ打
込まれるから其の用心かた／＼圖の如く詰めたのである。●
機宜ニ適ス、此の隅丈けの定石とすれば●の手で●に掛粘ぐ
のが普通であるが、併し此の場合では左下隅には既に●の拆
きがあるから●に掛粘いた所が左側方面には最早や發展の餘
地が乏しい。且つ黒から×印邊に打たれると此の方面にも亦
た發展を妨げられる勘定になるから圖の如く●と拆いたのは
白の態度として斯くあるべき事である。併し●一つ手段があ
る。夫れは●の手で先づ白●、黒●、白●、黒●、白●、黒●
と交換し轉じて●に下る手段である。左すれば黒△、白●
●、白●、黒△、白△、黒●の時●に拆くも亦た一の趣向
である。其の利害如何と云へば白は●の一子を犠牲に供した
代りに黒を低く疑らしたから得、失を償つて餘りある形勢で
ある。●ノ尖ミハ如何、●と頂けて●に粘がせて△の一
目を患にし、さうして●と覗いたのは面白。斯くの如く黒
に働かれたのは必竟●の手に原因するのであるから此の手で
●の手筋を無くするやう●に打つ方が面白い。

▲第二●の白の見損じ 「●ハ見損ジナラン」黒は●の
手で●に當て居れば何でもない。其の時白●に當てんか、
黒●、白●、黒●と後ろから追撃する手あるに非ずや。又白
●に當てずして單に●へ縛ね込まんか、黒●に縛ね込むべく
是れ又手なしだ。蓋し白が△とグズンだのは黒若し手を抜け

〔六五〕

▲第二圖 〇の變化 第二圖「〇ハ如何」圖の如く〇までの結果は黒が悪。單に〇に飛んで居れば無事である。「〇ハ如何」の打込があるから〇の手で〇へ行ひ黒〇、〇白と尖んで〇の打込に備へる方が宜い。第三圖〇の手で〇に



約へて居れば活きである。夫は×印の約へが利いて居るからで、其時黒が〇杯に尖めば白〇に下つて〇の截りを狙ふ筋があるから逆も取れない。其代り黒に〇へ綽ねられ白〇、黒〇、白〇、黒〇、白〇、黒〇と下の白七目を擒にされる。夫れから〇の手で〇へ綽ね込んで二目を取れば黒に×印へ頂けて断ち截られて了ふ。兩方を一時に凌ぐ手段はないから投げたのは當然である。

第三圖 〇の變化 第二圖「〇ハ如何」圖の如く〇までの結果は黒が悪。單に〇に飛んで居れば無事である。「〇ハ如何」の打込があるから〇の手で〇へ行ひ黒〇、〇白と尖んで〇の打込に備へる方が宜い。第三圖〇の手で〇に

約へて居れば活きである。夫は×印の約へが利いて居るからで、其時黒が〇杯に尖めば白〇に下つて〇の截りを狙ふ筋があるから逆も取れない。其代り黒に〇へ綽ねられ白〇、黒〇、白〇、黒〇、白〇、黒〇と下の白七目を擒にされる。夫れから〇の手で〇へ綽ね込んで二目を取れば黒に×印へ頂けて断ち截られて了ふ。兩方を一時に凌ぐ手段はないから投げたのは當然である。

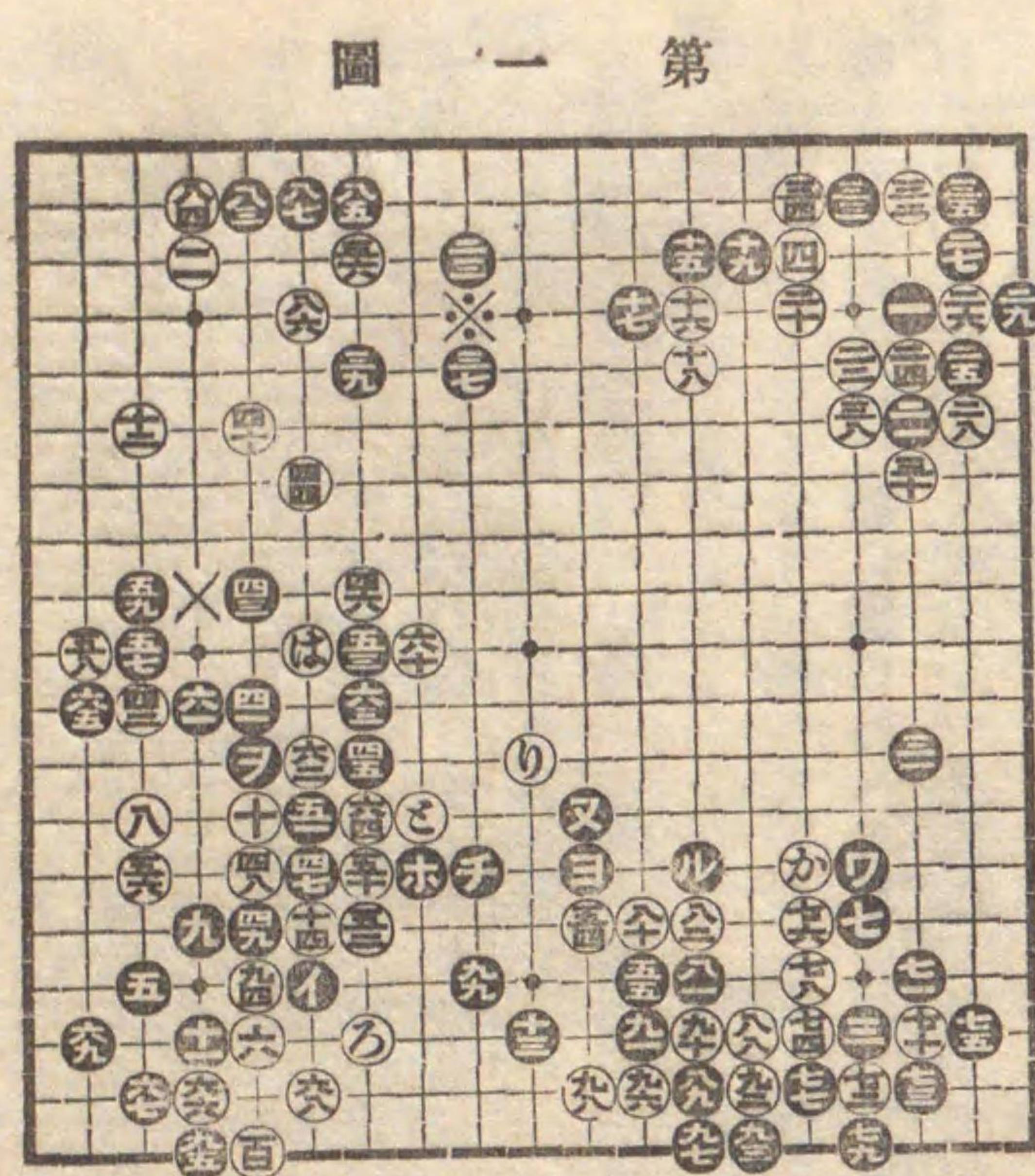
碁聖秀策白番碁(十三)

八段本因坊秀和

先安田秀策(六目勝)

(弘化三年十月二十三日)

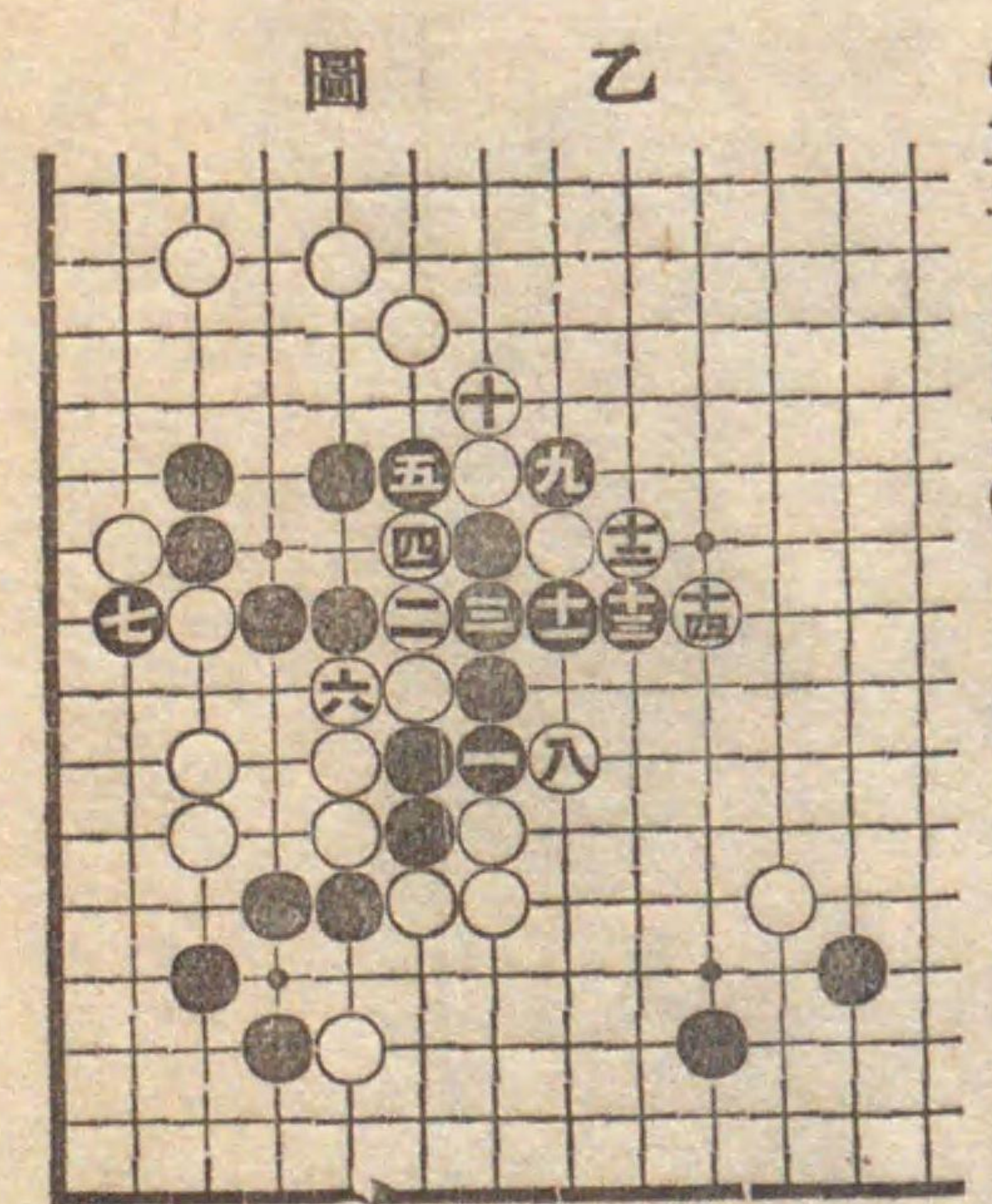
▲第一圖と分水嶺 「〇ハ如何」本圖の如く打つは即ち定石であるが、〇の手で〇に懸け、白〇に飛んだ時、白の將さに縮らんとしつゝある〇へ掛かるも亦た一の趣向である。其時白〇の手で×印に打つた碁もある。要するに黒が〇と打つたのは甲圖の如く〇と頂けて振變るの目的である。「〇ハ如何」是れは包圍と謂はんよりは若し之を棄置くと黒から〇へ打たれて益々勢力範圍を擴張されるから其の發動を



約へて居れば活きである。夫は×印の約へが利いて居るからで、其時黒が〇杯に尖めば白〇に下つて〇の截りを狙ふ筋があるから逆も取れない。其代り黒に〇へ綽ねられ白〇、黒〇、白〇、黒〇、白〇、黒〇と下の白七目を擒にされる。夫れから〇の手で〇へ綽ね込んで二目を取れば黒に×印へ頂けて断ち截られて了ふ。兩方を一時に凌ぐ手段はないから投げたのは當然である。



妨ぐる爲めに〇と打つたので、併し此の手で〇へ懸け黒〇、白〇、黒〇、白〇と大規模に構へる趣向もある。「〇ハ如何」までの形勢では確に黒の方が優勢である。此處白として誠に打場のない碁で、苦心慘憺の餘り、〇と追隨して〇印の覗きを狙つたのであらう。〇、大膽不敵の頂越し。随分思ひ切つた手である。何故かと云ふに白若し〇の手で〇へ曲らば黒〇、白〇、黒〇、白〇、黒〇、白〇となつて居る。〇、〇の三子を敵に與へて〇に打つか或は〇邊に構ふかは分らないが、兎に角早く戦局を確定しやうと云ふ策戦で随分思ひ切つた頂越しである。白もさう遣られては到底勝算がないと目算したから圖の如く〇と綽ねたのであらう。尙ほ〇の手で〇に飛び、白〇に添ふた時黒〇に突當つて居るも好い形であるが、軽く〇に飛ぶも亦た趣向であらう。夫れでも矢張り黒の方が優勢である。初心者の注意までに〇、〇の二子は白が〇印に覗いてからでなくては之を切離すことは出来ない。夫れから〇の粘ぎであるが、是れ又參考の爲めに〇に粘いだらばドウかと云ふに、若し然らば乙圖の如くなつて外部の黒全隊を擒にされる。夫故に圖の如く一目を棄て〇と振變られた結



妨ぐる爲めに〇と打つたので、併し此の手で〇へ懸け黒〇、白〇、黒〇、白〇と大規模に構へる趣向もある。「〇ハ如何」までの形勢では確に黒の方が優勢である。此處白として誠に打場のない碁で、苦心慘憺の餘り、〇と追隨して〇印の覗きを狙つたのであらう。〇、大膽不敵の頂越し。随分思ひ切つた手である。何故かと云ふに白若し〇の手で〇へ曲らば黒〇、白〇、黒〇、白〇、黒〇、白〇となつて居る。〇、〇の三子を敵に與へて〇に打つか或は〇邊に構ふかは分らないが、兎に角早く戦局を確定しやうと云ふ策戦で随分思ひ切つた頂越しである。白もさう遣られては到底勝算がないと目算したから圖の如く〇と綽ねたのであらう。尙ほ〇の手で〇に飛び、白〇に添ふた時黒〇に突當つて居るも好い形であるが、軽く〇に飛ぶも亦た趣向であらう。夫れでも矢張り黒の方が優勢である。初心者の注意までに〇、〇の二子は白が〇印に覗いてからでなくては之を切離すことは出来ない。夫れから〇の粘ぎであるが、是れ又參考の爲めに〇に粘いだらばドウかと云ふに、若し然らば乙圖の如くなつて外部の黒全隊を擒にされる。夫故に圖の如く一目を棄て〇と振變られた結

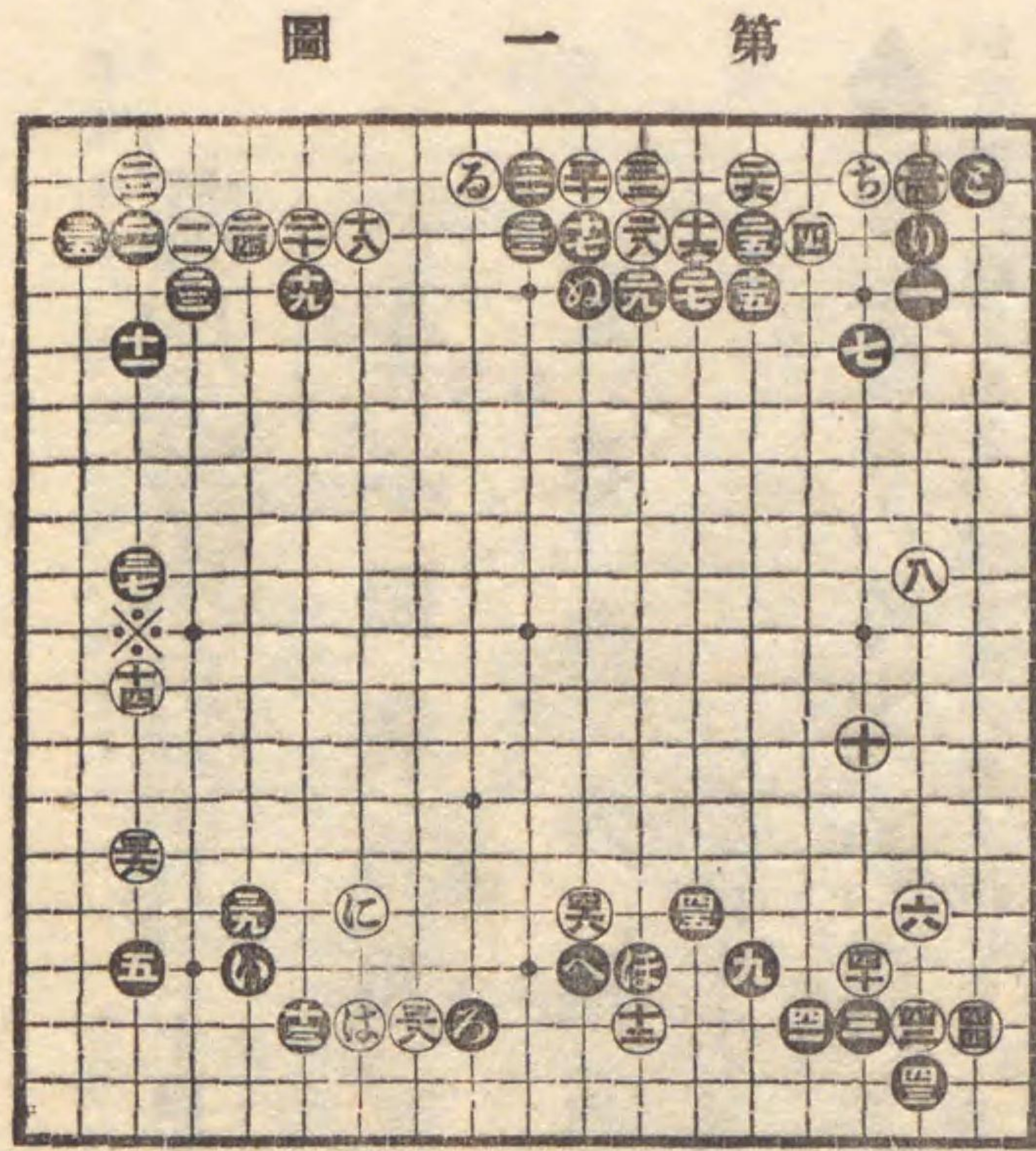
碁聖秀策白番碁 (十五)

八段本因坊秀和

先碁聖秀策 (三目勝)

(嘉永四年十月二十八日打掛
同 五年三月二十五日終局)

▲第一 黒の大疑問 「黒の變化」圖の如く締めるのは普通であるが、此手で高く締める趣向もある。左すれば今度の詰めが最急の大場となるから白は何とか處置をしなければならぬ。假に白へ一ぱいに詰めるとせば黒は直ちに打込むべく、白へ飛び出せば黒に頂けるか、に引ッ掛けるか、兎に角此處で白を攻立てるのである。又白へ詰めずして、二間に拆くとすれば黒は手を抜いて※印邊へ拆くのである。其の何れに出づるかは當局其人の趣向である。

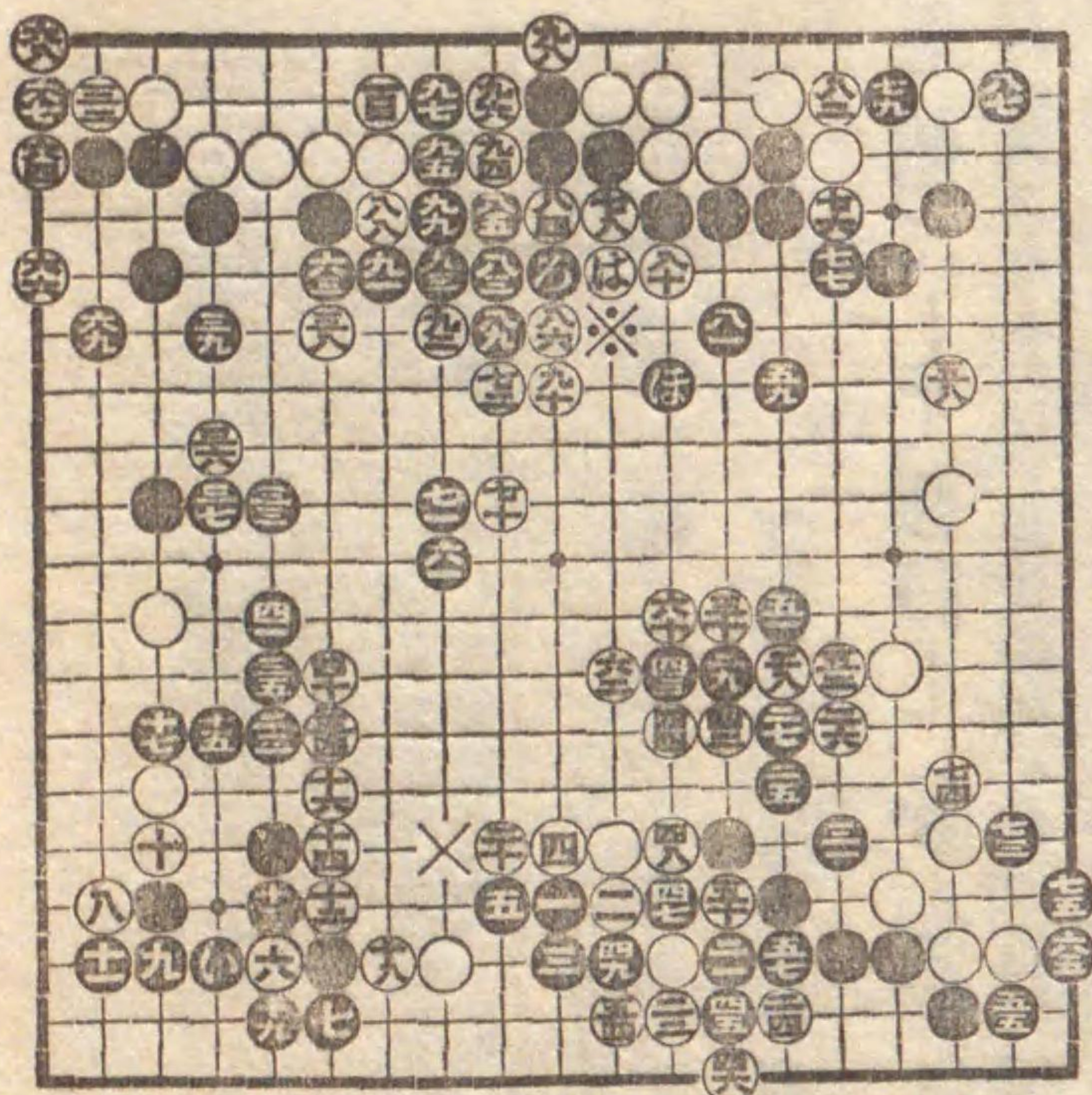


此處で白を攻立てるのである。又白へ詰めずして、二間に拆くとすれば黒は手を抜いて※印邊へ拆くのである。其の何れに出づるかは當局其人の趣向である。

「白ハ如何」圖の如く黒以下と打つて後にへ突出さず、單にへ押し來られると白の位が低くなつて了ふから此際普通の如くを押す方が宜いと思ふ。「黒の大疑問」は翌年三月二十二日打掛の際、並べる時には「幾手で打掛けになつて居たかは分らぬが、圖の如く黒が突出したやうに並べて了つた、所が段々打つて居る中に昨年十月二十八日打掛の際には黒、白の交換がなくて單に黒以下、白までの形になつて居たと云ふことに氣が附かれたさうだとは故人秀策さんの話であつた。左もあるべき筈である。圖の如く突出があつてと約へられて居ると黒に頂け白に引いた時黒の突當りが利かない。然るに、の交換がなければ黒、白、黒と突當つた時白が手を抜くと黒からへ置かれて殺されて了ふからドウしても手を抜くことが出来ない、に粘るとか、に打つとか、兎に角活きて居らねばならぬ、此の突當りの利くと利かぬとは非常な損得が違ふのであるから、の突出しはなかつたと云ふのが事實であらうと思はれる。殊に嘉永に入つてから秀策さんは非常に碁が強くなつて來たのだから、尙ほ念の爲め一言注意して置きたいのは、左隅に於ける白、黒以下を無きものとして、單に右隅丈に就て云へば、黒の突出しがあれば白は圖の如くまでの手順を運んで宜いのであるが、此のの突出しをなければ以下黒が二段綽ねをした時に白へ粘がすしてを截り、黒に粘いだ時白の、一子を抱え黒と振變りになるのが普通である。併し此の場合では假令黒の突出しがないにしても白は今云つたやうな振變りに出ることには出來ない、何故かと云ふに一方に以下、の低い土手があつて此れ被れ相待つて疑つた形になつて了ふからである。斯う

〔七六〕

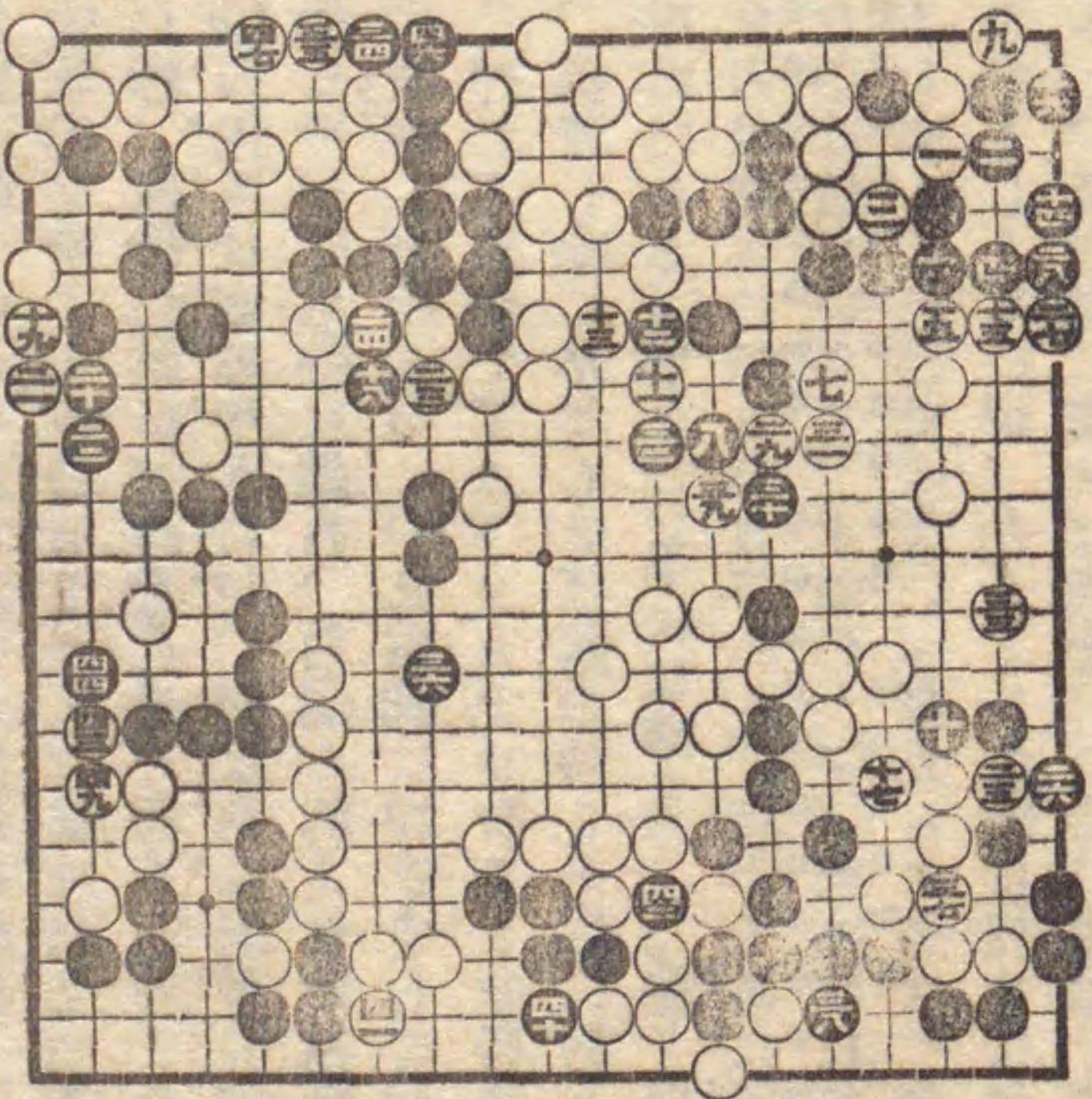
第二 圖二 劫と



を截れば黒に曲るべく、白※印に粘いだ時黒に一子を打抜いて活きる手があら

云ふ詰めの處であるから此場合黒がと突出しての突當りを失ふ譯がない。云ふことは明に推測される以下白までの形勢を見ると黒の損失が少からぬので殆ど釣合つて來た碁になつた。
▲第二 黒の英斷 「黒の深慮」此處で秀策さんも大いに考へたであらう。奮勵一番と敵陣を衝いて行つたのは慎重熟慮、神算定まつた結果と推測される。「の變化」此手でへ突當ると白、黒、白×印と打つ筋がある。夫故に黒はと下つたのであらう。黒までの結果を見ると白地を荒らされた上に黒地が出來さうになつて來たから白は何とか趣向をせねばならぬ。乃ち、と強襲を試みて振替る手段に出たのは頗る巧妙なる手段であつた。の持込みもヒドイがと取切られたも随分ヒドイ「黒の變化」此手でに突出し白の時黒に尖みを利かせる手がある。ソコで白

第三 圖三 劫と



白に截る能はずしに粘がねばならぬ。即ち黒に尖みを利用させる文け大分得に

▲第三 非凡の手腕 「の劫」此劫には黒が勝つたけれども此の變は殆ど損益がないと云つて宜い。ドチラにしても白の負けたることは明白である。の損失をしたに拘はらず勝を全うした手腕は非凡と謂はねばならぬ。

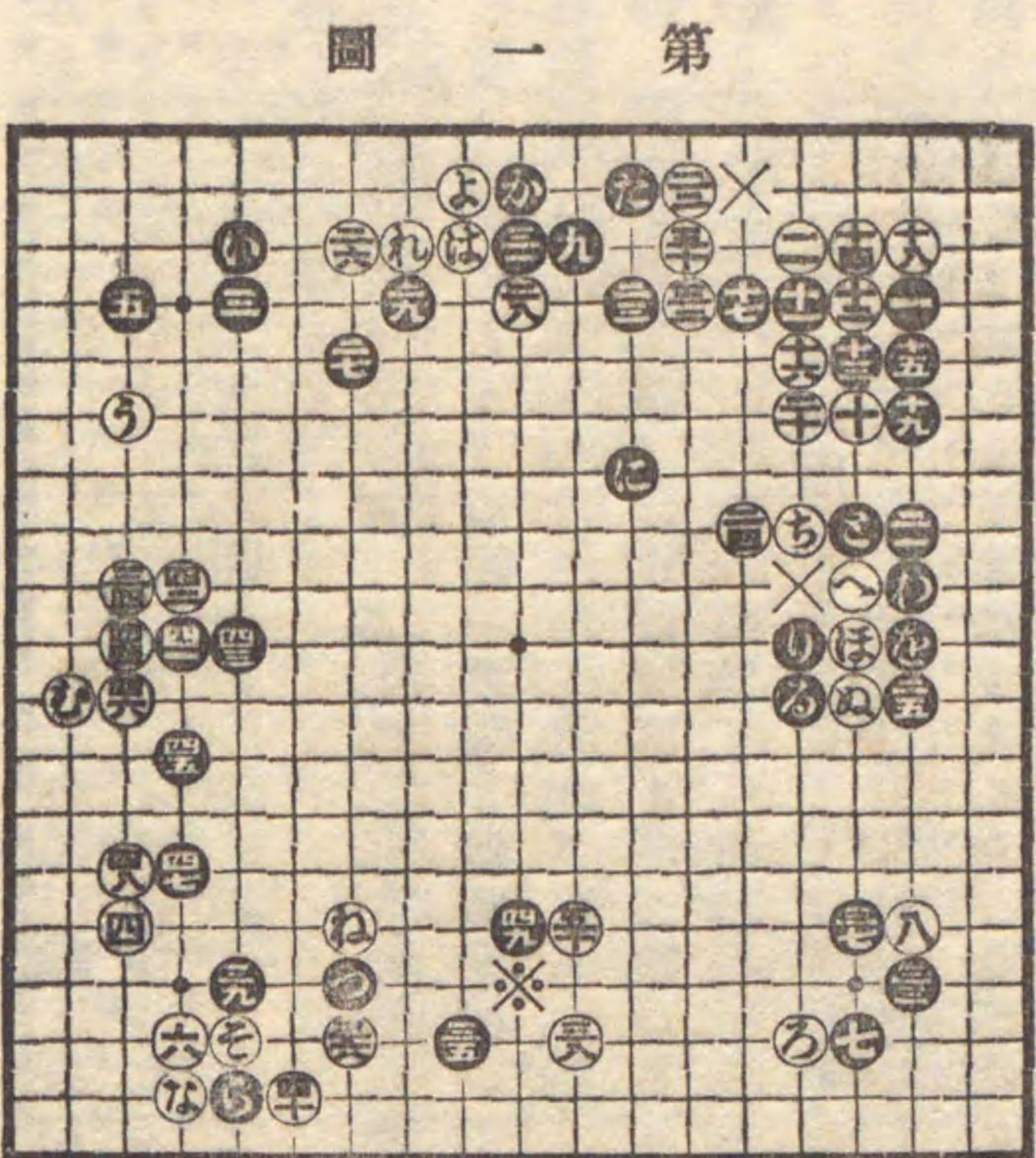
碁聖秀策百番碁(十六)

六段井上秀徹

先々先番碁聖秀策(十一目勝)

(弘化三年丙午十月十七日)

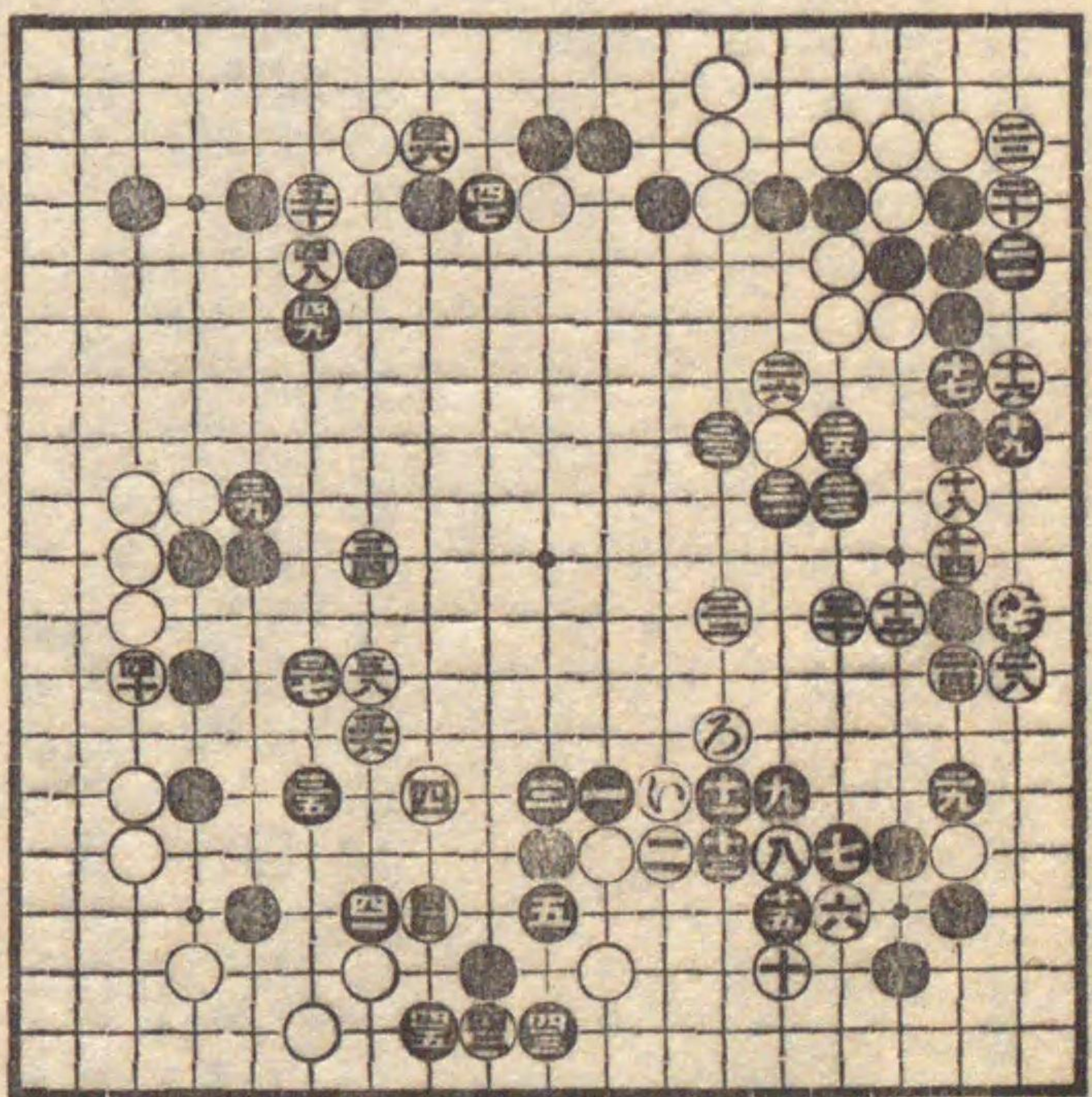
▲第一、俗にして面白し「○ハ變化」圖の如く打つも亦た一策であるが併し普通印に打つのが一番釣合の好い布石である「○ハ趣向」でもあらうが、斯くては紛れなく黒に先着の利益を留保されるから碁を廣くする意味に於て



第一圖

に據るか、左もなくばはに拆くのが普通である「○ハ變化」圖の如く飛ぶのも普通であるが、此の場合へ飛ぶ手段もある。其の時白若し(○)に打たんか黒×印の挟間を衝くべ

第二圖

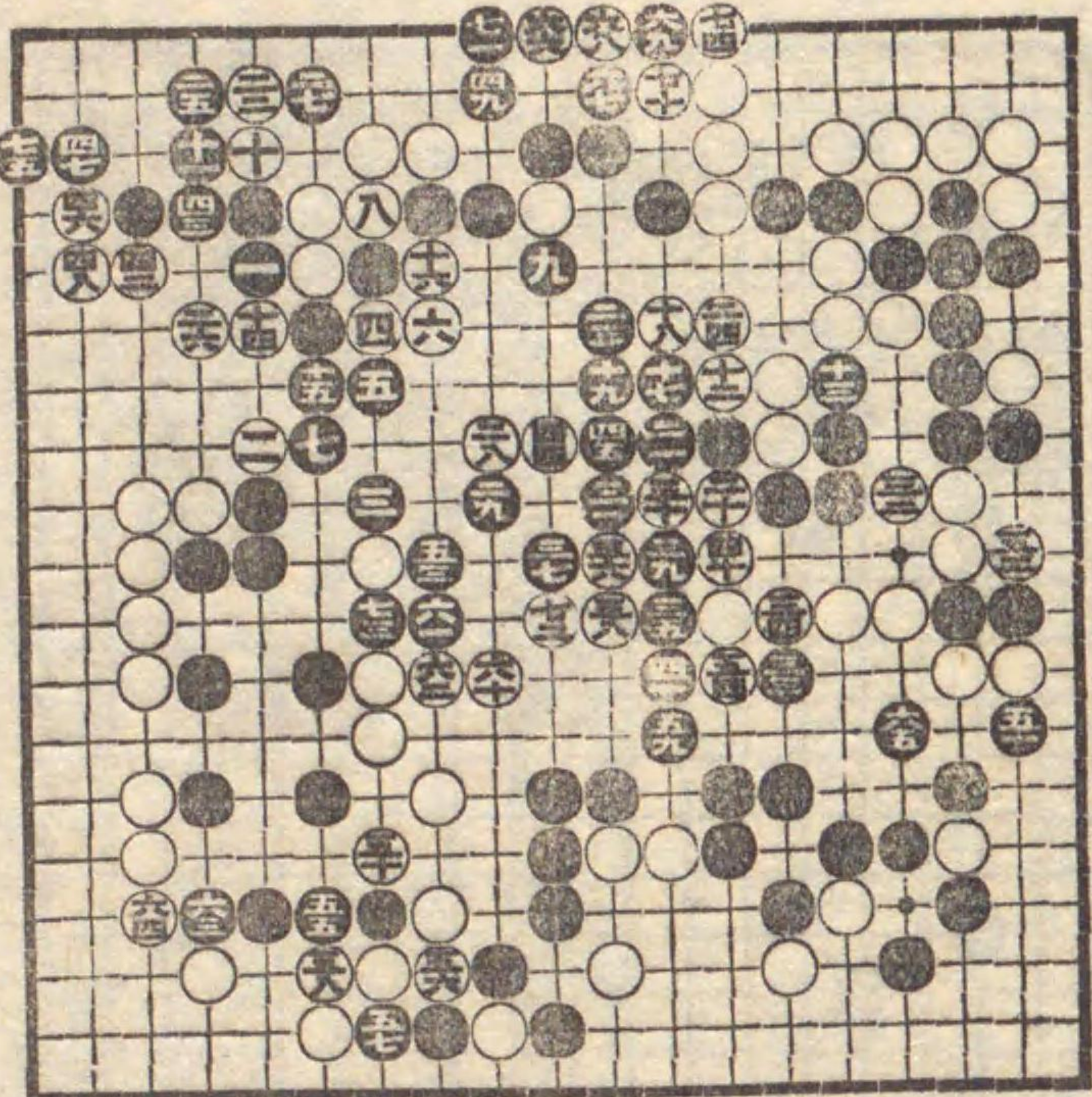


(七八)

く、白(○)ならば黒(●)に截つて戦ふべきである。卒頭一步を進めて云へば其の時白(○)に截らば黒(●)、白(○)、黒(●)と趕すべきである。ドウ變化しても黒の不利に歸する筈はない。

「○ハ如何」(○)と冠せられた爲めに白甚だ窮屈な姿である。單に(○)の急處を衝くのが普通である。或は白先づ(○)に打ち、黒(●)、白(○)、黒(●)に粘いた時(○)の處を衝く趣向もある「○ハ手段」(○)の尖みは俗のやうだが、實は白は應手に困つた、(○)の手で(○)に押せば黒(●)に縛れ、白(○)に約えた時黒(●)に掛粘いで×印の頂越しを狙ふべく、又白(○)に押さずして(○)に押せば黒(●)に押し截つて了ふ。ソコで止むことを得ず(○)と並んだので、黒若し(○)に粘ぎもせば其の時(○)に約え付けやうと云ふ手段である。黒も其の手には乗らない。(○)と押して二目を棄てたのは當さに然るべきである。斯くて黒に(○)と尖み頂けられたのは殿しい手で、本局の大勢は此時既に定まる所ありと云ふも決して過言ではない「○ハ止ムヲ得ズ」如何にも姑息な手で好ましくないが、左りとして白(○)に押せば黒(●)へ頂けられるし、又白(○)に飛べば黒(●)、白(○)、黒(●)と斷ち截られ

第三圖 止手五十七



る「○ハ如何」此の場合×印に尖む手段もある。其の時黒(●)に約えたらば白(○)へ二間に拆いて居る方が面白くはないか。然るに策筈に出でずして(○)と煽られるに至つては大勢愈々確定の姿である。

▲第二、黒、平穩に勝つ「○ハ如何」斯くて(○)と行ひ

られては窮屈になるから(○)に曲るが本手であらう「○ハ如何」勝敗は兎も角も軽く(○)に斜走する方が捌き宜い。(○)の手で(○)に約すれば黒は唯(○)に下つて居るから逆も右邊の黒を取る杯いふ譯には行かぬ「○ハ如何」單に(○)に打つて白を薄くして置く方が味がありはせぬか。要するに本局は白の趣向奇抜ならずして尋常に黒の勝ちに歸した碁である。

て了ふから止むことを得ず、(○)と尖んだであらう。「○ハ如何」(○)に斜走するのが普通である。然るに圖の如く曲つて(○)、(○)と打つて低くされては白の形勢益々不利であ

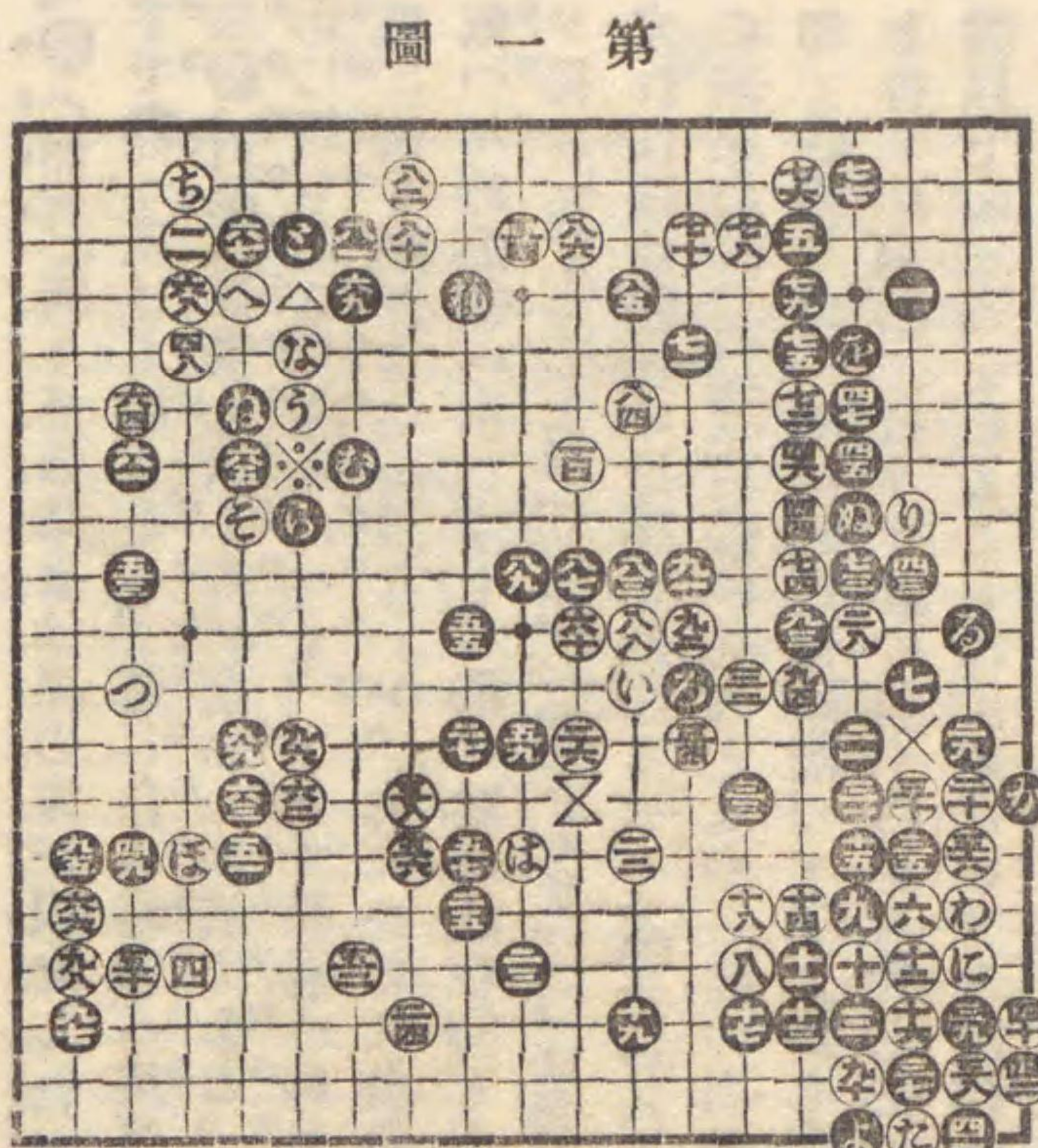
碁聖秀策百番碁(十八)

六段井上秀徹

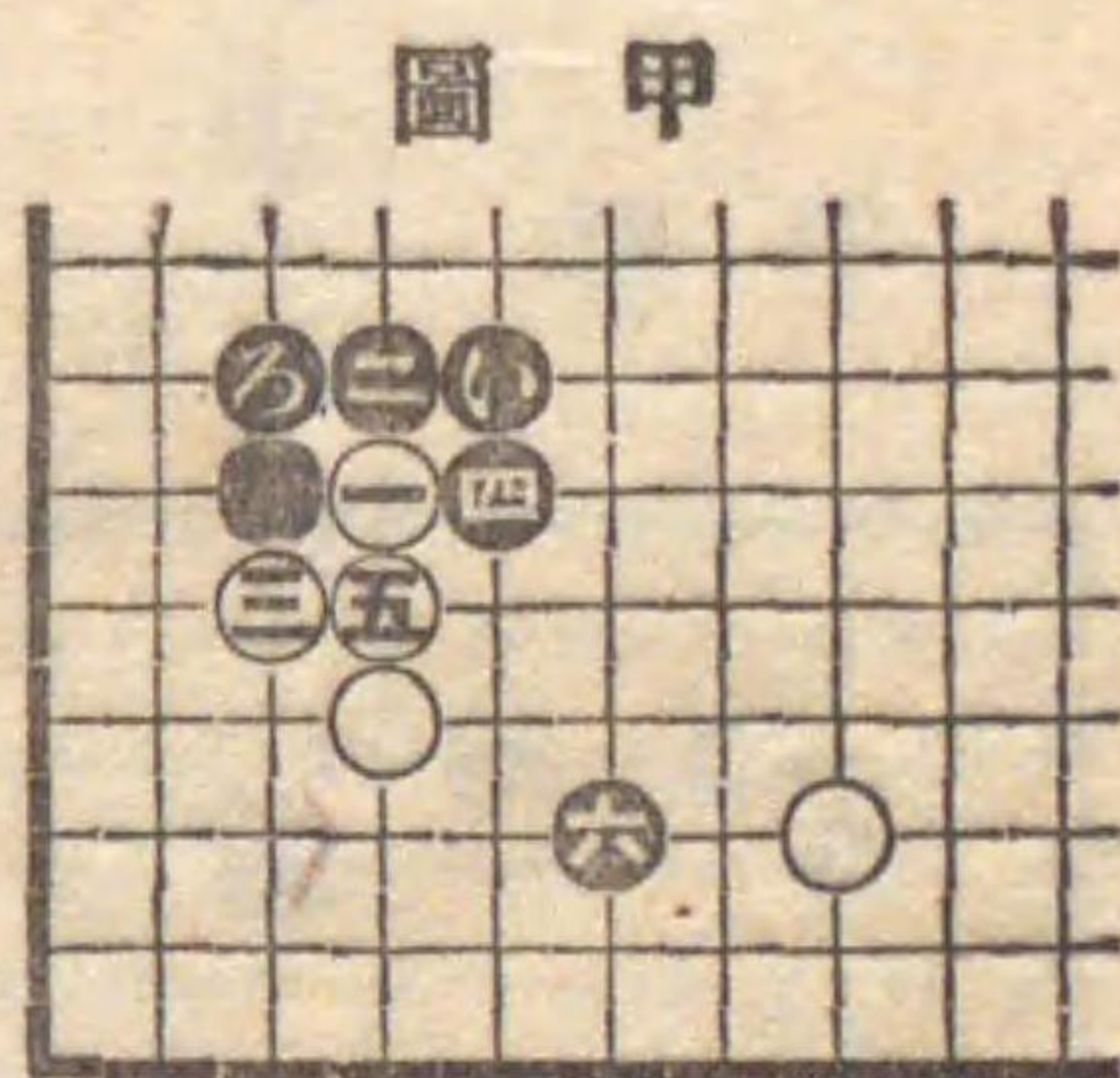
先番碁 聖秀策(十目勝)

(弘化三年十二月晦日)

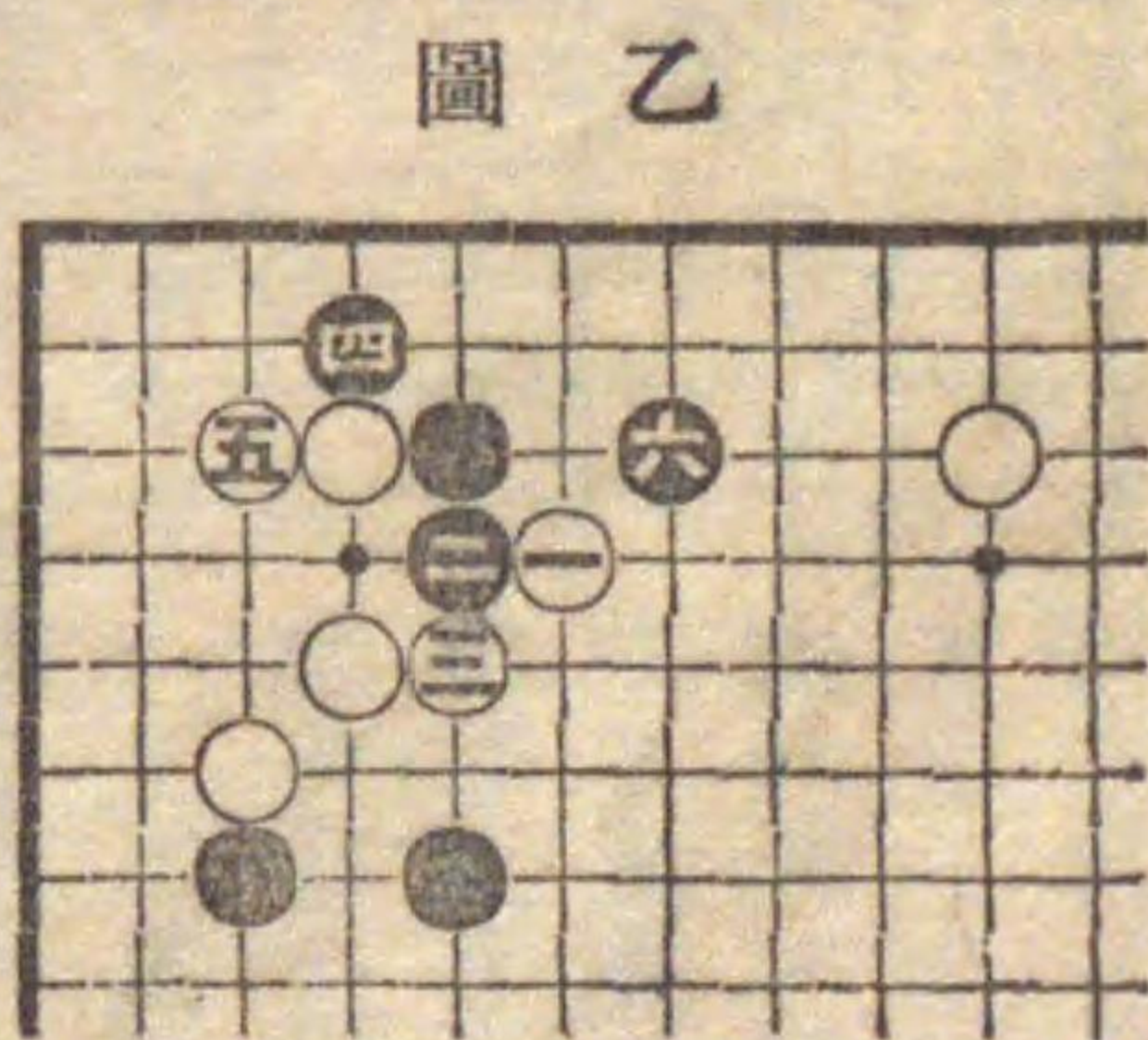
▲第一黒の隠謀 「白普通ニ非ズ」四の手で五に掛るか、六に掛るのが普通である。圖の如く黒に五と締られ斯くて白六と掛つた時恰も好し黒に七と挟まれて好姿勢を得られたのは白の不利である。「参ハ形ニ非ズ」蓋し趣向であらうが何だか變な形で、此の場合の印に飛ぶのが本形である。「黒ノ着點」三の手で、自分は△印に頂げる味を含んで、印に打ちたい。四に打つのが形のやうにも見えるが、左すれば白にはに備えられて形を整えられるから面白くない。「ハ如何」評者は單に四に飛んで居る方が宜いと何する。ナゼかと



つのが形のやうにも見えるが、左すれば白にはに備えられて形を整えられるから面白くない。「ハ如何」評者は單に四に飛んで居る方が宜いと何する。ナゼかと



云ふに中の方は機を見ては打つて白を威嚇する筋がある。然るに内側から打ちと交換して味を消して了つたのは惜しい。換

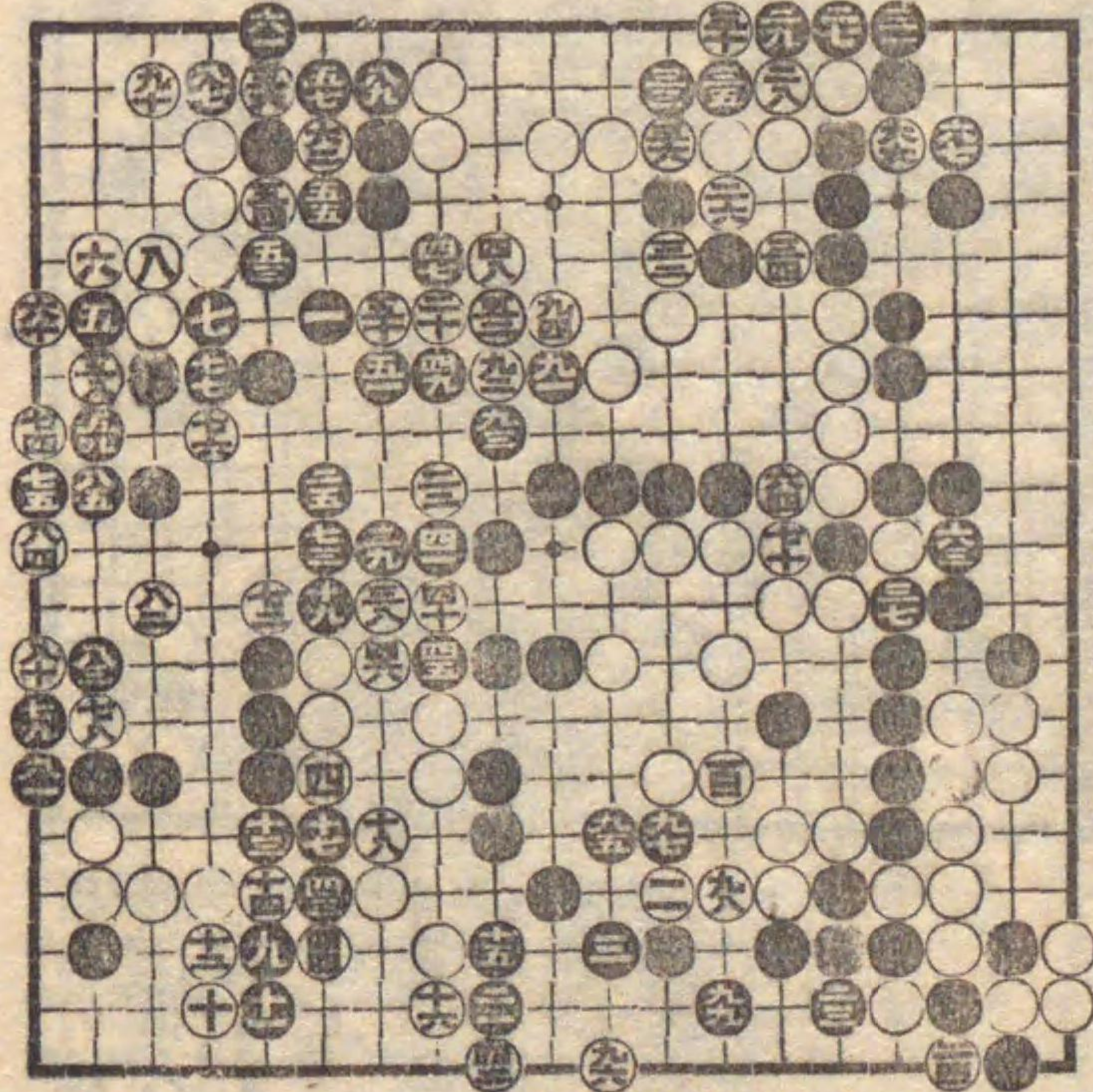


(八二)

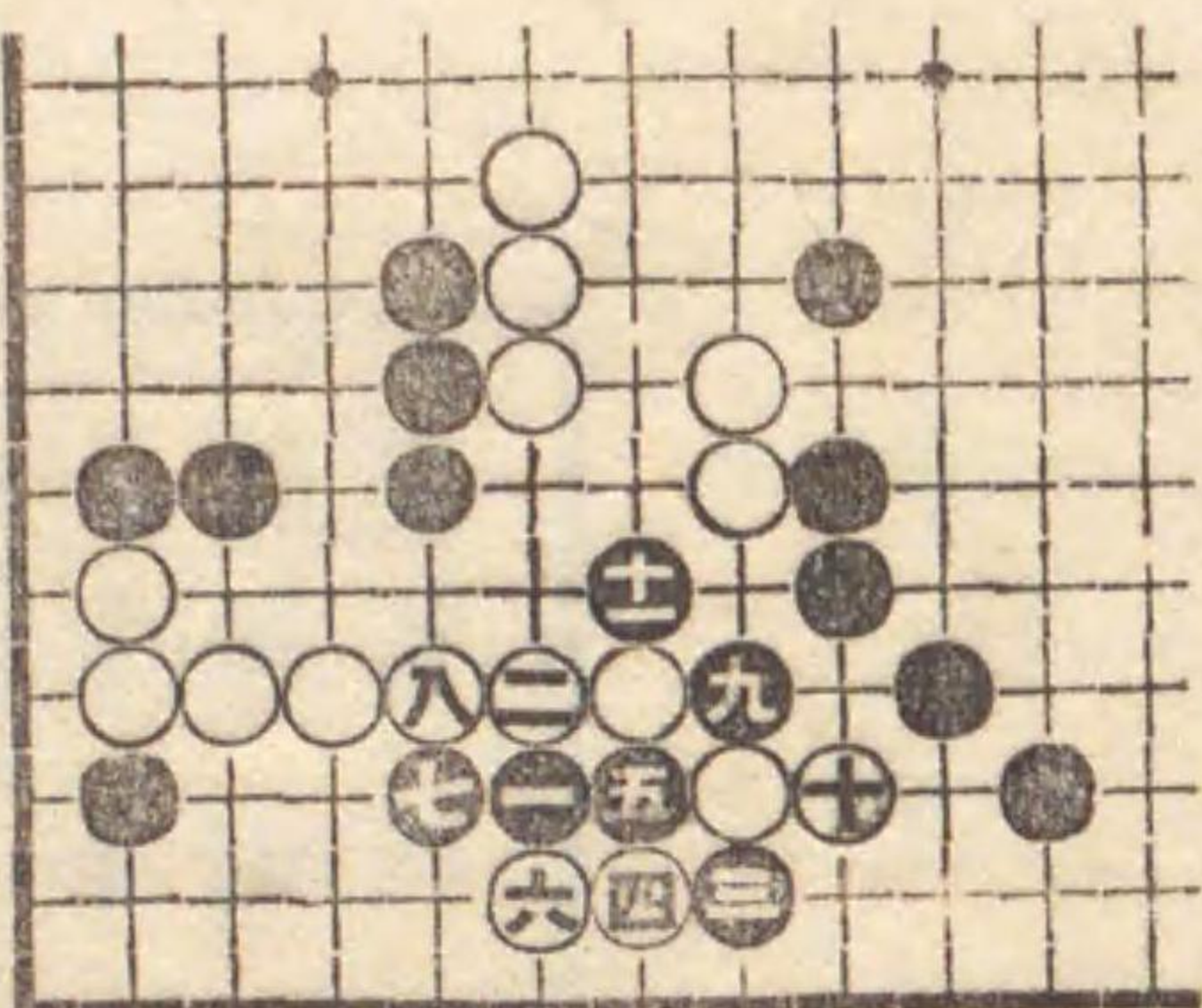
圖一第

圖二第

十五の三劫提
同
四の十粘
同
十五の三劫提
同
二目粘

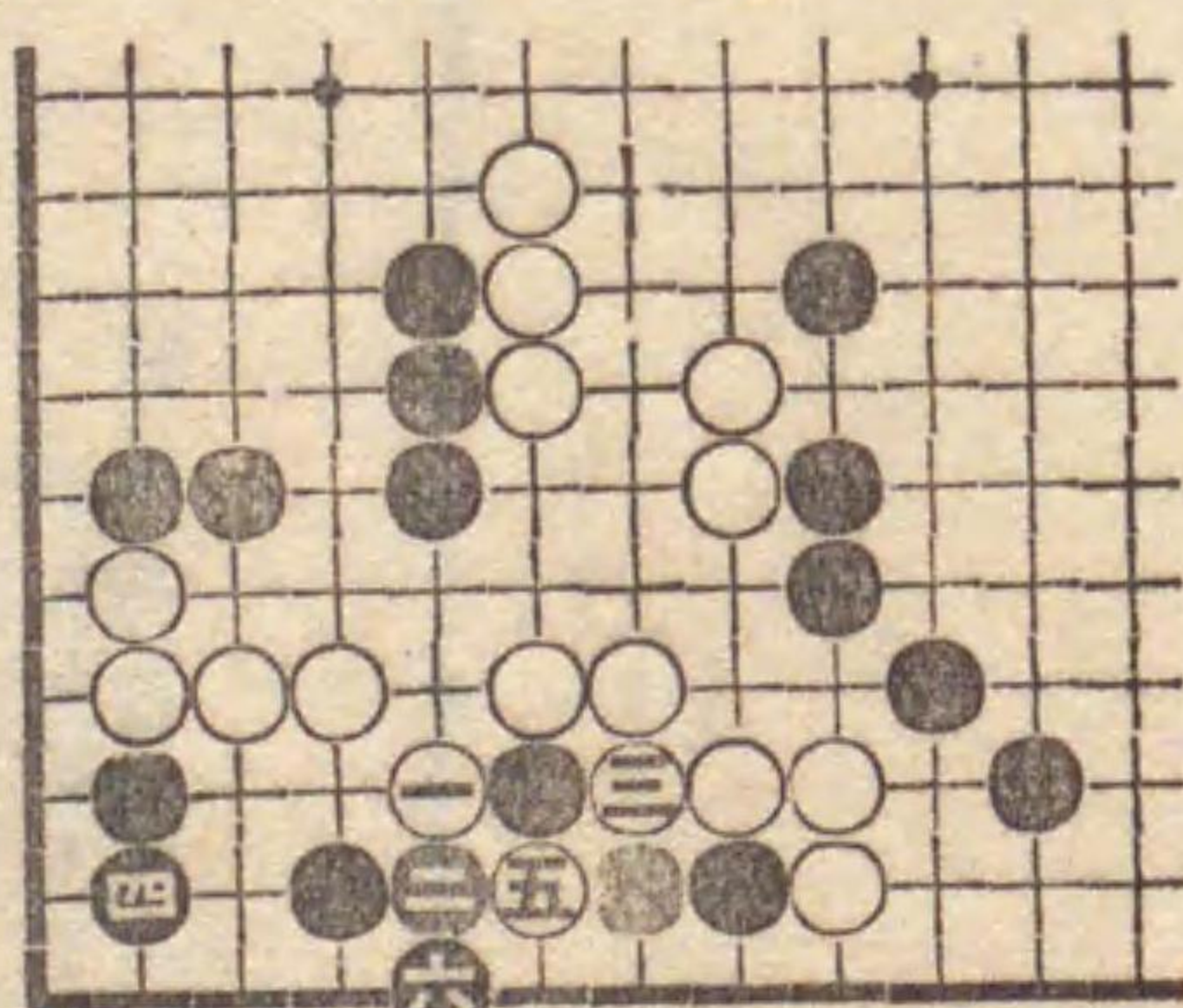


圖丙



ら白は圖の如く打たれたであらう「参」ノ變化」四の手で普通の如く△に約えると黒、白、黒、黒となるべく、又白△に約えずして△に掛ける手もあるが、左すれば乙圖の如く△と飛んで下で活きられて了ふ。故に白は單に△と粘いだであらう「参」ハ如何」此の手で△

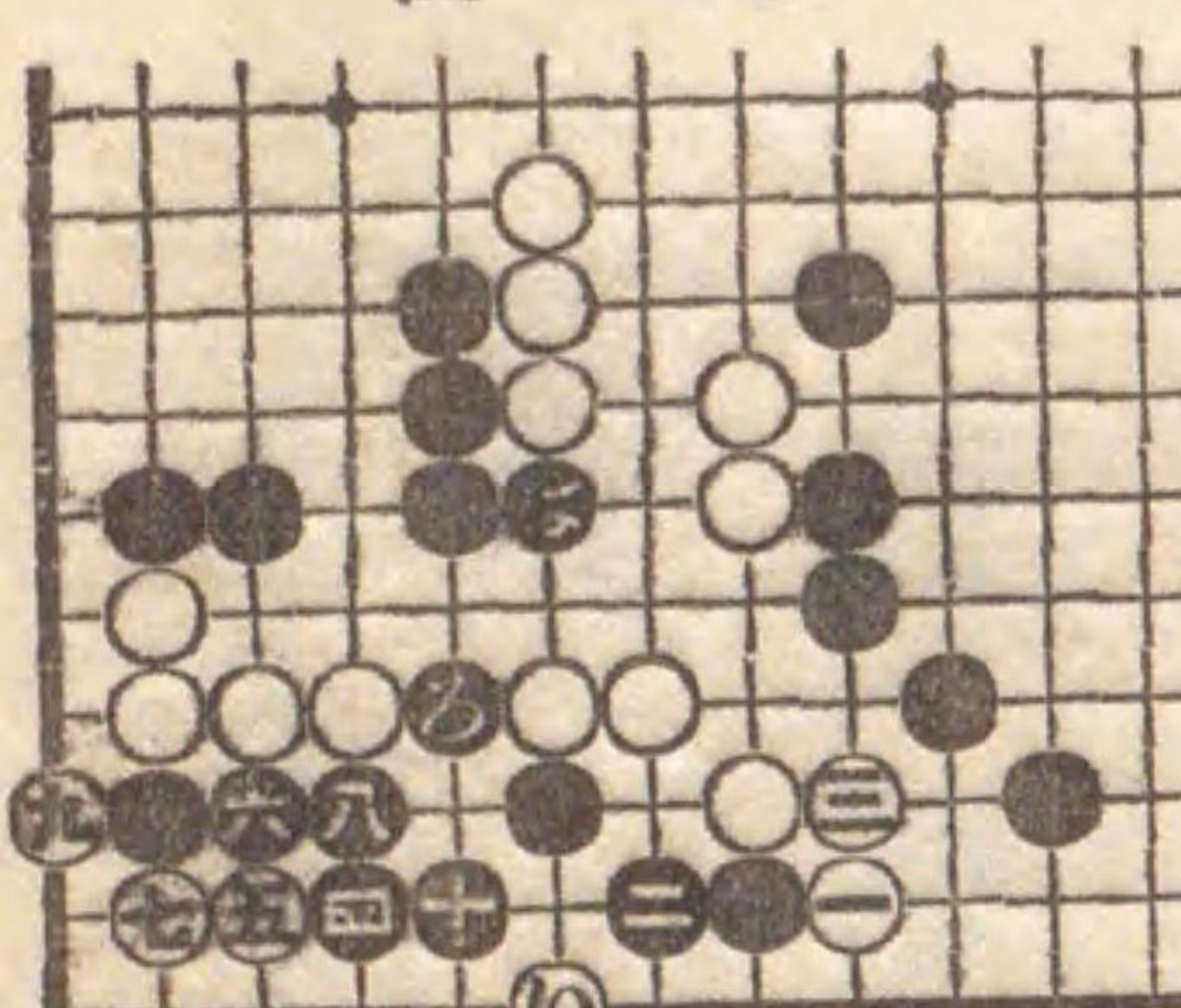
圖癸



いで差支へない。「参」ノ狙ヒ」是れは△に突んで△の截りを狙ひ、因つて△以下隅の白を劫にし、やうと云ふ隠謀を含んで居る手だから油断はならぬ。

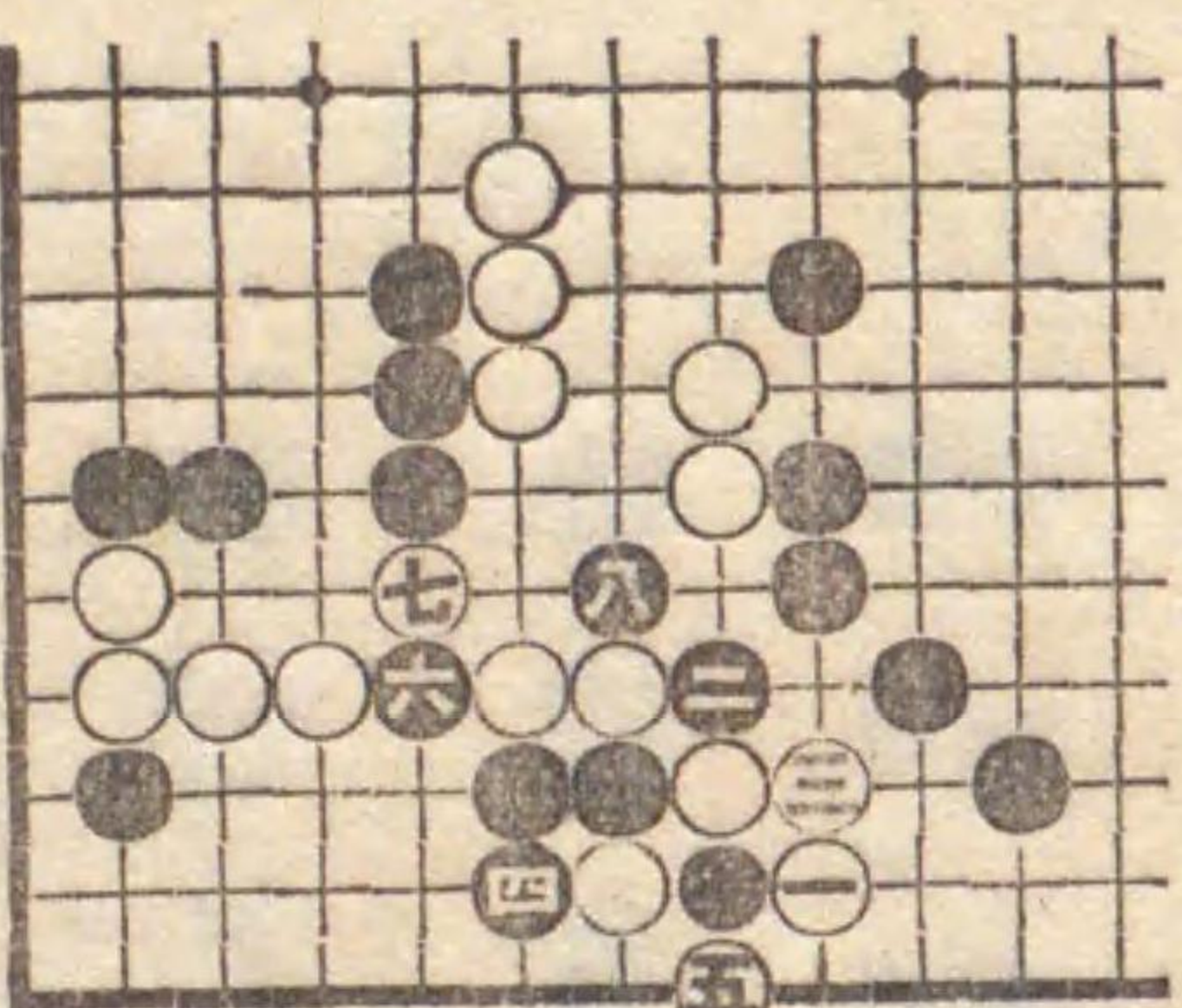
▲第二白の遠慮「白四ノ遠慮」四の手で△に行きたいやうであるが、さうすると黒から△に打込まれる。其の結果は白の打ち方に依つて甲乙二圖の如く上下を切り離す手段もあり、又丙圖の如く△と打ち白△の時△に眺ね込んで劫にする手もあり、又黒△の手で△に曲る手もある。或は丁圖の如く隅で活きて了ふ手杯、種々手段の存する所だから白△と隠忍したであらう。「白△以下△見損ヅカ」是れは全く持込みだ。△の手で單に劫を取つて居たならば四

圖戊

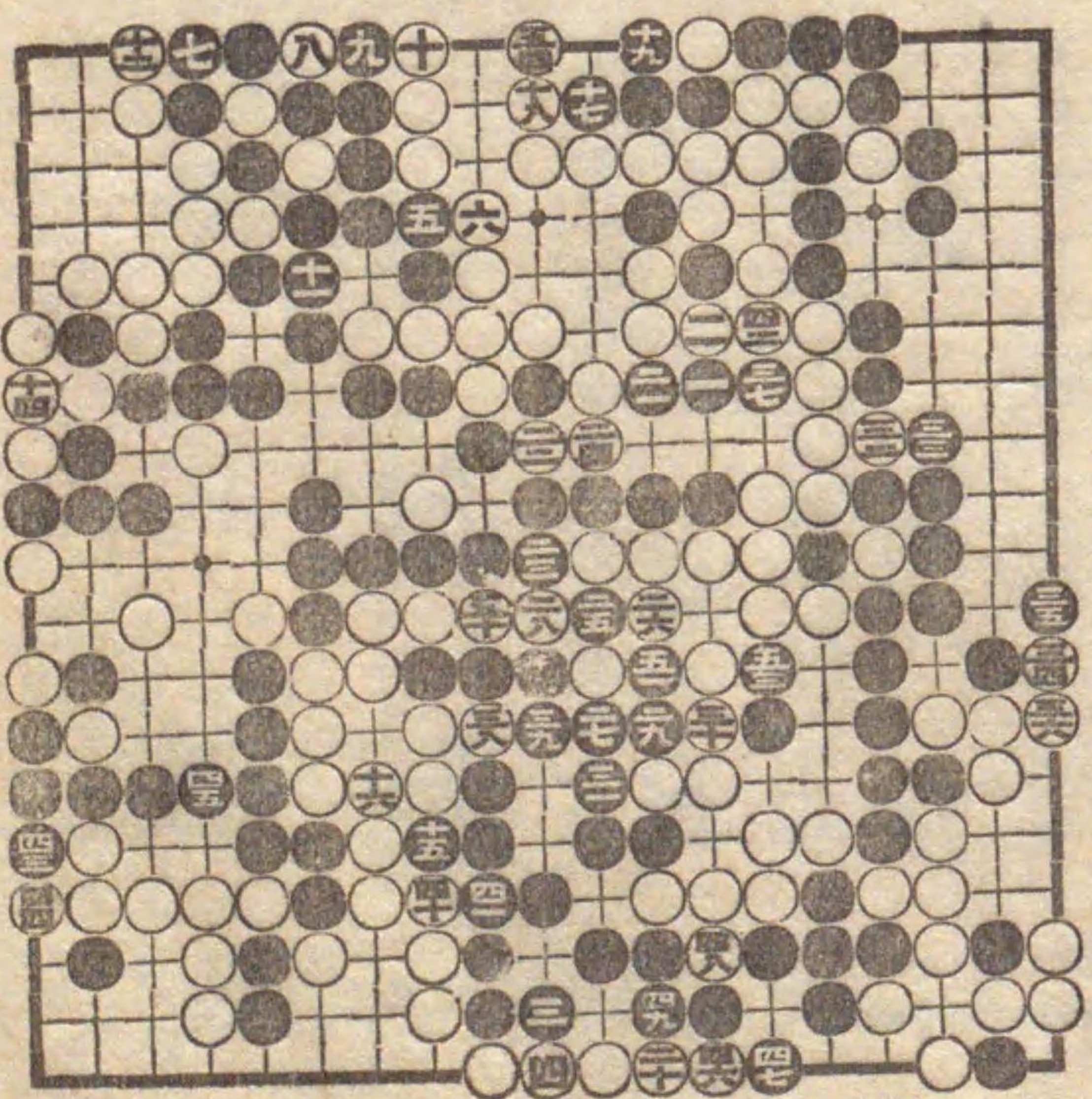


に突込んで△の一子を取る暇みが利いて居ればこそ活きがあるので、前述の如く△に掛粘がれて△印の突込みが利かなくなつては一大事だ。併し圖のやうに△と押して此處の味を消したのには遺憾である。此の手で△印に飛べて見たい。其の時黒若し△に飛べば白△に締ねて△の打込みを狙ふべく又△に行ければ白△に打つべく、或は黒△に行びすして△に締ねれば白△、黒△の時白△に粘

圖丁



圖三第
粘目三
粘一十の九



目位の負けで済んだであらう。

(八三)

245
7

大正六年三月初五日初版印刷
大正六年三月十日初版發行
大正十年三月廿日再版發行
大正十二年四月十日三版發行

御秘藏碁戰

定價金壹圓

編講
輯評
者兼

本因坊秀哉

發行者

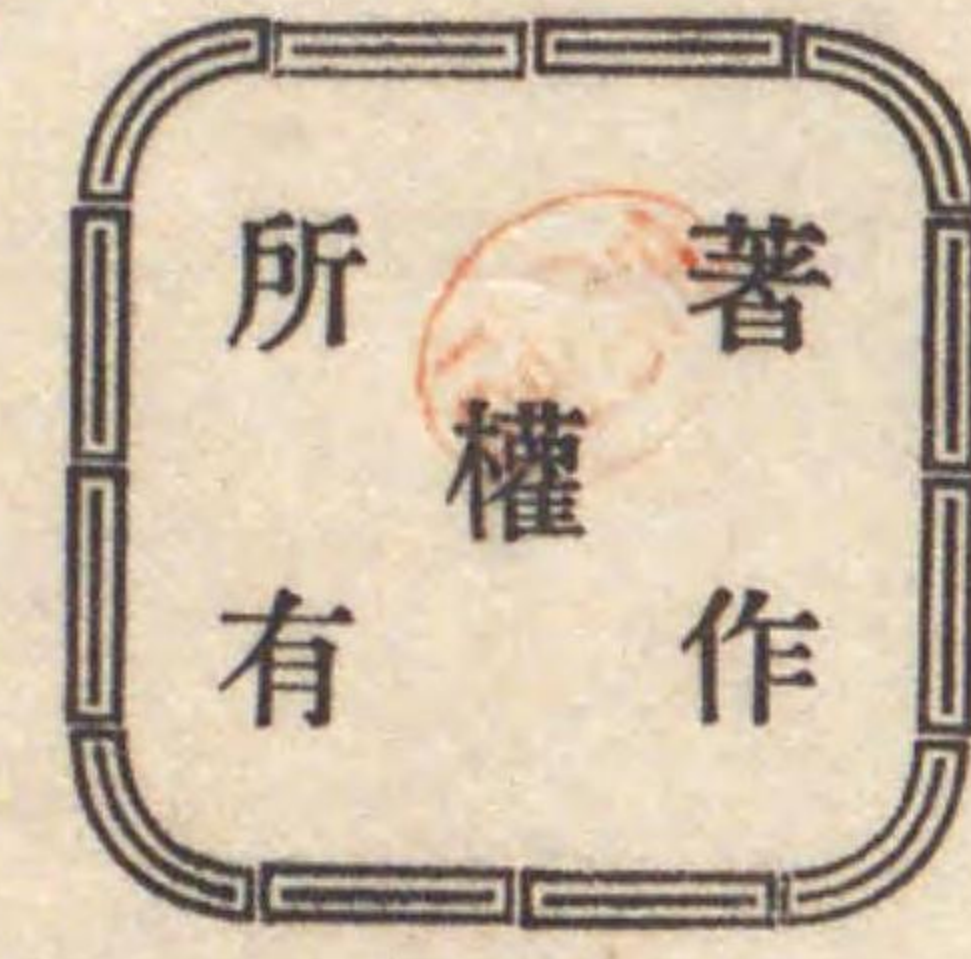
濱井松之助

發行者

武居勝治

印刷者

高橋赤次郎



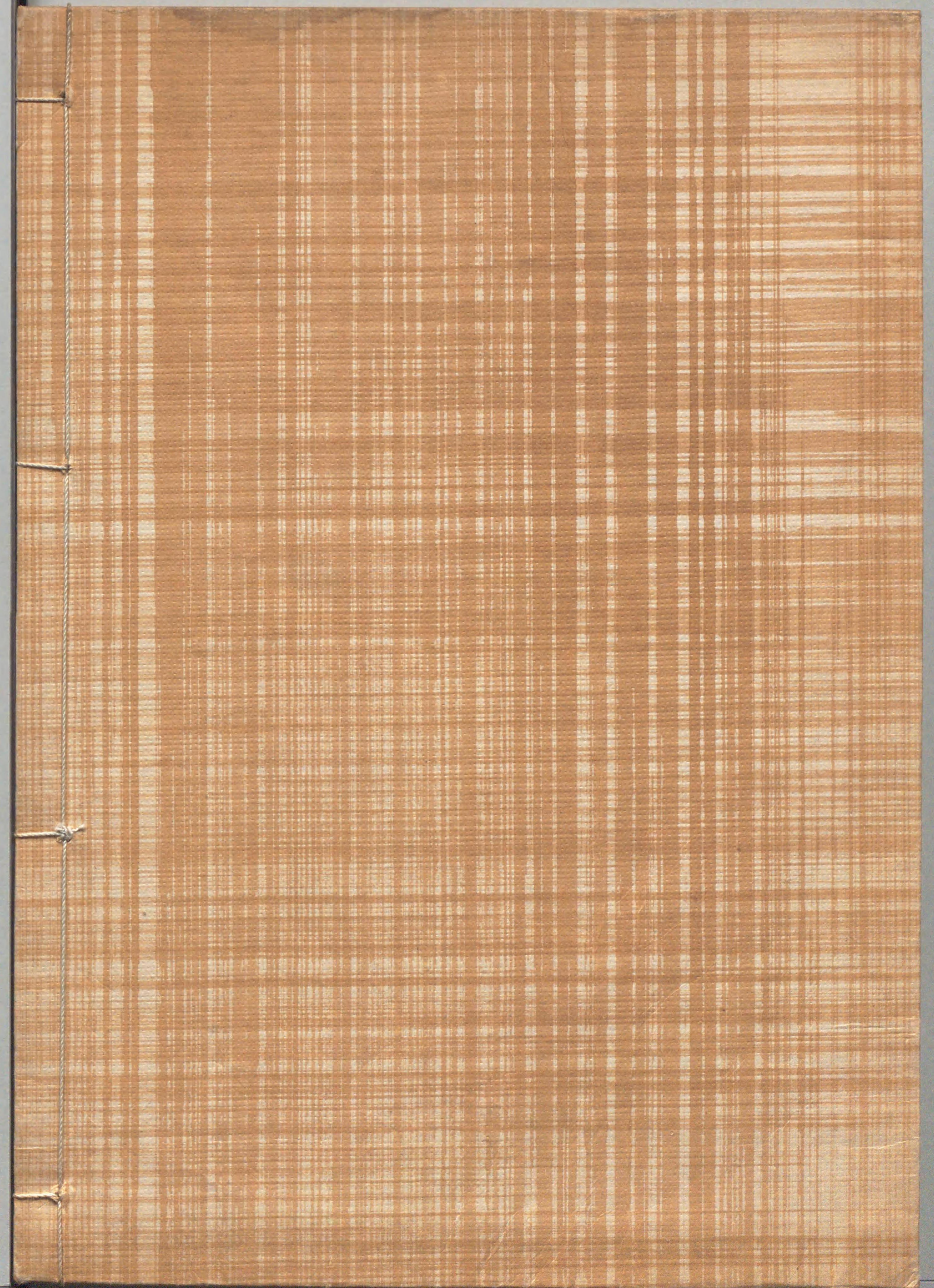
東京市日本橋區北鞘町十番地
振替東京一三七七五番

大阪屋號

東京市神田區南神保町九番地
振替東京二七七二二三番

模範棋書發行所斯文館

發行所



舊幕府
御秘藏
碁戰

795
H633k2



00617194

5.
3k2